
僕のたび 第1章 -I go alone-

城間 奇成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のたび 第1章 - I go alone -

【Nコード】

N5651C

【作者名】

城間 奇成

【あらすじ】

数世紀後、機械の国と魔法の国が戦争している時代15の少年は、5年間、徴兵で戦場に行かなければならない。だが逃げることは許されている。ある村では、逃げることを「旅人」いった。そして、機械側ののどかな町に住むその男の子は、今日旅たつ。

1部 「サイレント・ヒル 魔女のいた村」 序幕 「旅立ちの日」

はじめに

数世紀後、機械と魔法の両方が解明された時代

この二つの考え方は、魔法が使えないが機械による電磁波に強い人、また、電磁波に弱いが己の気を高めて魔法が使える人、人々はそのどちらか一方に分けられた。その中で二つの血を持つ男の子がいた。そういるはずのない、禁忌の子・・・しかしその男の子は、どちらの力がある。しかし、どちらも半分の力しかなかった。

そして、機械側ののどかな町に住むその男の子は、今日旅たつ。

序章 旅の始まり

冬が終わりを告げた頃、遠く東の空が、明るくなりだした頃、僕は、旅の支度をした。

今日は、15歳の誕生日、昔なら祝いの日だ。

しかし今の時代は、大人になるためには、15から20までこの国も軍の徴兵となり、戦争に出ないといけない。しかもこの戦争の生還率は、いつも75%以下（噂） ぼくならまず生き残れない。

そこで、この5年間逃げることにした。俗に言う脱走兵だ。しかし、このことは珍しくない、なぜなら、駆りだされる人の内4割もが、脱走するからである。国も逃げ切れればそれでいいとされているが、捕まれば即、戦場行きだ。

しかし実際、戦場から逃げる人もいれば、旅をすることに疲れて、自ら戦場に行くことも多いと聞いている。

「さて準備が整った」

下の方から母さんの声が聞こえた。

「ご飯よ早く来なさいー」

下に行くと、暖かい朝食が並べられていた。

今日が最後のここでの朝ごはんかなー。心の中で本当にそうおも

った。

「早く食べなさい。さもないといと、戦場行きになるわよ」

そうだ、午後になると軍の人がきて戦場だ、だからその前に家を出て行かないといけない。また逃げ出した人を追いかけることはしない。だが町の近くにいとすぐに見つかる。そのために、だから遠くへ逃げないといけない。またどの家庭も家に子供を隠すことはしない。なぜなら、子供にとって良くないと知ってのことだから・

テレビでは、

「我が軍は、現在、魔法軍に奇襲をしましたが、失敗。それにより、部隊のうち死傷者が出た模様です」

「また失敗、成功しないはよねー」

母さんがふてくされる。すると父さんが、

「しかたないさ・・・あ！そうだ」

いきなりそういうと自分の部屋に行ってしまった。

この世界では、思想が二つに分かれる。それは、文化革命からはじまった機械により発展する考え方の機械理論、それとは逆に人間に秘められた力＝魔法を使い発展しようとする、魔法理論。またこれは、かなり昔からあったらしいが・・・そしていまから約300年前この二つ理論の違いから戦争が起き、今にいたるわけだが、やけに長いよなー。ちなみにこの村は、機械論である。

「ごちそうさま。さて行くか、のんびりしていたら、行きづらくなるし、兵隊さんがくるし。」

そう言っつて、食器を片した。すると父さんが、

「はいこれ、丸腰じゃ危ないから」

父さんの手から、剣より小さくナイフより大きい小刀を僕に渡した。ぼくは、これをナイフと呼んだ。

「はいこれって、ナイフをおこずかい、てな感じでわたすか？ 普通」

「じゃあ、なんて言えばいいのだ？」

「それはー」

「そうだろ、だからこれでいいわけだ」

一人そう納得すると外に出た。今度は母さんが、

「これを着ていきなさい」

そう言つて優しく、青いフープと丈夫な手袋、それに茶色い三角帽を渡した。

「三角帽なんて被っていたら、魔法使いだと思われるよ」

「人気のないところを通るのだからだから問題ないよ！ それにこの町の人々は、みんな知っているみたいだけど」

「だけど・・・」

「これは、毎晩こつこつ作ったものなのだよ・さあ、早く着て行った行つた」

そう押されながら、僕は、この家を後にした。

外には、父さんが言いふらしたのか近所の人たちが集まっていた。

この町では、戦場に行くものや、旅立つものを見送ることが慣わしだった。

いつもいろいろ教えてくれた、隣家に住むおじさん。よくおすそ分けしてくれた、おばさん。もう見送りを終えて帰り待つ人たちなどこの町に住む半分の人達が見送りにきてくれた。その中から「すぐに帰ってくるなよ」

や、

「迷子になって兵隊になるなよ」

など、はやしながら僕を見送ってくれた。

僕は、町を出るついでに学校によることにした。そこには、先生が校門に立っていた。

「何しに来た？」

「そういう先生も非番なのに要るじゃないですか」

「ふん、成績では、下の方にいた、おまえもとうとう旅立ちの日か」

「先生も人が悪いですね。わざわざ、その日に言わなくてもいいのに」

「わざわざ、学校に来る必要ないじゃないのか？」

「最後にお礼を言いに。」

「みんなおなじことを言うな。ところで帰ってきたら、何をするか決まっているのか？」

「それを探すために旅をするのでは、ないのですか！」

「そうだな、あとこれ」

「そっぴいながら、小さい袋を手渡してくれた。」

「なんですかこれ？」

「胃薬、傷薬、痛み止め、風邪薬などだ、これから役に立つはずだ」
先生が自分で調薬している薬は、市販の風邪薬よりはるかに効果があった。そのせいで、先生は、魔法使いではないかと噂になったくらいだった。

「ありがとうございます！」

深くおじぎして、学校を後にして、行こうとした。最後に先生が、
「最後に生きて帰れよ、魔物に気をつけろよ。この辺は、熊が出るというし、じゃあな。」

この世界も魔物は、それぞれの国々が、家畜に遺伝子操作して、生命、繁殖力が高く、肉がおいしい、などを目的にしていたが、そのうちそれが、エスカレートしてしまった。

その結果、裏では、軍事用として作られたものもあった。また、一部の軍の研究施設から、全ての実験体を逃げ出したことがあった。その逃げた生命体は、攻撃的で知能がよく、雑食でたいていの毒には死なず、繁殖力もあったため、瞬間に増えた、最初は、人間も駆逐しようとしていたが、予想以上の攻撃性と繁殖力により、手を焼いているうちに、たいていの動物が、食べ尽くされ、滅んだといわれている。そして、今存在しているのは、知能のある人間と人間によって作られた生命体の魔物になってしまった。またこのことは、自国のせいにはせず、考えかたの違う国のせいだと、互いに報道した。またこのことは、学校でも家でもあたりまえのことになってしまった。

「後あの薬は、おまえの母親から聞いたものなのだよ」

「え！」

一瞬自分の耳を疑った、真相を確かめようと思ったが、後ろ向きに先生は手を振りながら帰ってしまったので、仕方なくこのまま旅たつことにした。

このまま町を出ようとしたとき、ふと聞き覚えの在る声がした。振り返ると友達の卓也がいた。

「見送るか？」

「おまえのな」

「あつという間だったよな」

この町に唯一在るランドマークともいえる。時計台を見た。

「あと30分だな」

「ああ、そういえばタクも3日後、旅発つのだっけ？」

「そうだよ、戦場じゃ生き残れないからね」

二人は昔からどうも機械に苦手で、成績が悪かった、また誕生日も近かったのか、気も合い仲が良かった。

「お兄ちゃーーん」

突然僕を呼んだ気がした。

「妹君のおでしたな」

「あいつ授業どうしたのかな？」

「さあ？」

「おい授業は、どうしたんだよ？」

強く言ってみたものの、いつもの様に笑いながら、悪びれることなく

「抜け出した！」

「あのな」

妹はいつもこんな感じだった。

「あとこれ」

そう言つと、僕に綺麗なお守りをくれた。

「なにこれ？」

「お守り お誕生日だから」

「今日旅立ちなんだけど」

「だからお守りに」

「ありがとう・・・」

「これから寂しくなるな」

妹は、寂しそうにつぶやいた。

「そんなこと言うなよ」

「大丈夫だよ、寂しくなったらお兄ちゃんが遊んであげる」

「3日だけな・・・」

「うるせえな」

「あははは、じゃあ学校に戻るね！」

元気に帰るのを見送りながら

「いいよな」

「生きて帰ってきてても、貴様にはやらん」

「何むきになっていているんだよ だけど、女はいいよな戦争に行かないですむんだからな」

「ああ」

また時計台を見ると間のなく12時になろうとしていた。

「やべ、早くいかねえと」

「そうだな」

「じゃあな」

「ああ」

いざという時は、まともな話が出来ないって、本当なんだな。そう思いながら、町を出た。

「あと、いつも早く行こうと思うのに、なんでこうぎりぎりになっちゃうんだろう？ はあはあ・・・そうだ、最後に・・・」

町を一望できる高台に來ると、こことは、反対のほうから軍の車が町にはいつて來た。

「やば、見つからないようにと。」

軍は、家に着くなり、いきなり家に上がりこんだ。そしていないと知ると、最近の顔写真をもらうと、すぐに町を後にした。その光景を見ていた別の村人が、「あれが軍の仕事なのかい」といいながら僕の逃亡生活が、はじまり、僕の旅がはじまる。

1部 「サイレント・ヒル 魔女のいた村」 序幕 「旅立ちの日」 (後書き)

3年前から書いている作品の冒頭です。

1部より 第1幕 「とりあえず北へ」 (前書き)

前の1部から3部を分けただけです。

1部より 第1幕 「とりあえず北へ」

1部、とりあえず北へ

数時間後

「これから、旅とゆうより、サバイバルか・・・ さて、とりあえず地図にない町に行くとするか！ 軍に捕まる危険性もないし、それに、近い・・・その前に日が暮れる前にテントの用意をしておかないと」

今の時代、学校では、すぐに戦場に行って困らないようにサバイバルの知識や心得や実戦的なことも教えるので、家出のようにすぐに帰るような人は、まずいない。

地図にない町は、以前から行きたいと思っていたが、魔物によって滅んだ町で、まだ魔物がいるから親からも先生も他の親からも、「行つてはいけない」と聞かされていたし、行く機会もなかった。

場所は、住んでいた町から北へ14キロ、普通なら半日でつくが、車もないし、最短距離の公道を通れば、軍に見つかる可能性が高くなる。そこで公道と平行して歩かないといけない、そのため早くてもまる1日はかかる。しかし、昼に村を出たのもう日が傾いていた。

「最近、鍛えていなかったらすぐにバテたかな？ 太陽が傾いてきたかな、そろそろテントでも敷くか日が沈んでの行動は危険というし」

さて、明日には町にはつくかな？

夜

一人テントの中で、明日の計画を考える。

町につくまで危険といえば、魔物をどうしようかなー？ 公道には、シールドなどで安全なだけだなー、まったく、魔法国の欲望のせいで、こんな、めんどくさいことに・・・まあ仕方ないか、今日はもう寝よ。

国道のシールドは、一般道に魔物が入り込んで、魔物と車が、衝突事故を起こさないようにするための防壁のこと、また絶えず防いでいるのではなく、近くに魔物が、近づいた時のみに電撃で、追い払うもので、人には、反応しないらしい。

などと、考えているうちに寝ていて、きづけば朝になっていた。

2日目朝

「はぁあ、よく寝た・・・結局、何もうかばなかったな・・・でも、今日にはつくかな、地図になく北に在る町、サイレント・ヒル」

父からもらった刀を腰に挿し、紺色のジャケットの上に青いフーブをはおり、三角帽をして、荷物をまとめて

「さて、準備が整った」

日が昇り始めて、暗く寒い森が、しだいに明るく暖かくなりだした。

歩き出して数十分後、目の前に魔物を見つけた。

「あれは確か、大熊、気が荒く、子のためなら命さえも捨てる。あの大きさはたぶん子供だな。しめた、親の気配がしない・・・毛皮はまちで高く売れるし、なんせ肉がかなりおいしい！」

息を潜めても小熊が、何かを探している音しかない。親とはぐれたのだろうか・・・そんなことなど、どうでもいい。荷物を置き腰にあるナイフを抜き、振り上げいつでも切れる構えを取った。

「さて」

飛んでナイフを降り下げようとしたとき、急に小熊も1メートル先に飛んだため、きりそこねバランスを失ってしまい転んだ。

「くそ！今度こそ」

小熊は、最初から襲われている事を知っているかのように飛んだ。
「こいつ完全になめているな・・・なら・・・人間をなめるなよ・・・」

しばらく、熊と人間が、対峙した。そして、

「わぁーーーーー!!!!!!」

大声を叫んだ、そうしたら、案の定、熊が驚いてしてしまい立ち尽くしてしまった。

そのすきに、くまに飛び込んだ。

人間様の勝ちだ、と確信したとき、

「ぐうおおおおおー！ー！ー！ー！ー！」

後ろからの風圧により、軌道がずれ、また転んだ……

「いててて」

今の声の主は、同業者ではない、間違えなくこいつの親、人々が魔物というもの……

恐る恐る振り返るとそこには、3メートルは裕に超えている、大熊、

「やっぱり怒っているよな……」

前を向くと、さっきの小熊は、気絶か死んだ振りしているのか、まったく動かない。

「こいつー」

魔物である大熊に、勝つためには、殺人兵器か、一流の剣士ではなければまず勝てない、とっさに下に置いたかばんを持ち、一目散に逃げた。

「ここで死ねるかー」

自分の声とは別にとてつもない地響きが聞こえる。荷物を捨てれば、身軽になり逃げやすいが、今の彼には、そんな余裕なんてない。「誰か助けてくれー！ーアッ！ー！」

気の根っこに足を引っ掛けて、またまた転んだ。

「いつてー」

しかし、転んでいても熊に殺されるだけ、痛いのを我慢して、また走り始めた。

そのうち、道先の一部が、木がないことに気が付いた。

「はあはあ……しめた、国道だ。シールドで……あいつを」

国道にて

主人公が、熊から逃げる少し前、国道を一台の軍用車が、走っていた。そこには二人の兵士らしい人がいた。

「ほんとついていないよなー。せつかくお兄様がかわいい弟のお迎えに行つたのに旅に出てるし、それに、誰かさんのせいでなー」

一人の兵士がぼやく、

「うるさい！」

もう一人の兵士が言う。

「新兵は、逃亡するし、どこかの天才整備士がさ、エンジンが壊れたと言い出して、解体シヨウの始めちゃうしさー」

「うるさい！次ぎ言つたら道に放り出すぞ」

怒りながら言っていたが、懲りずに

「シヨ一のせいで丸一日、まったく何もない村で過ごすことになつたしな。そして、何時間ものんびりしていたら。妹君に“ガス欠だ”と指摘して、やっと気が付いたものーほんと・・・」

運転していた兵士が、切れたのかいきなり、隣にいた奴の胸倉をつかんだ。

「今度言ってみろ、本当に道に落とすぞ。」

「ハンドル、ハンドル」

車のハンドルを放したので、蛇行運転するようになった。

運転しいたほうが、すかさずハンドルをもつ。

「アブねー・・・って人？」

あせつてハンドルを切ってしまったために車は、大きく道をそれで、何かにぶつかった。

「いてて・・・」

横転した車から何とかはいずり出る。どうやら、車は、大きく道をそれで、シールドを出て、そして大熊にぶつかったらしい。

「まずい・・・もしかして」

「よっこらつしょ・・・何にぶつかった？」

もう一人も出てきた。

「あれ、見てみなよ。大熊だ。」

「ほんとうだ。ここに、いるなんて、めずらしいね。」

「おそらく、さっきのやつはこいつから逃げていたんだな。」

「さて、」

「さて、」

「今さっき、脱走兵が通りました。また、死んだ、大熊がいます。あなたなら、どちらをとりますか？」

「そりゃ、町で高く売れる。熊だな」

「だな」

そういうと二人は、死んでいる（実は気絶しているだけ）熊を、車の後部トランクに乗せようとした。

「キューー」

大熊が思っていたよりも大きく車に乗せようとしていると、後ろから、かわいらしい泣き声がした。

「小熊だな」

「こいつの子供だろうね。追いかけたのか息が荒い。」

「こいつも町に持っていったって売るか？」

「そうだね」

二人は腰から護身用の大型ナイフを取り出し構えた。

「さて、いくか」

「ぐうおおおおー」

二人はその大声に前のめりに転んだ。振り返ると死んだはずの大熊が生き返り仁王立ちしていた。

「そうか、シールドの電撃でただ気絶していただけなのか・・・それを子供の・・・」

「そんなのんきに状況解析してられるか」

熊は、前に倒れて爪で、二人を引き裂こうとした。そこで二人はすかさず前転をして、回避した。

「命が危ないと何でもできるものだ」

「のんきにいつてられるかー」

熊はさらに横に爪を振り、倒れていた車に当たった。車は1回転

しさらに回って元の状態に戻った。爪で屋根の一部が削れたのを除いて、

「どうする」

「どうするもこうするもない」

「ああ」

二人は二手に分かれ、熊を前後から挟む形になった。

ちなみにこの兄弟が戦場でツインズキラと呼ばれるのは、また別の話。二人はすかさず、煙幕を手に取り、熊に投げつけた。

「さんじゅうろっけいにげるにしかず」

そう言い放つとすかさず、二人は車に飛び乗った。

「とばすぞーー」

もはや、オープンカー状態の車は、全速力で元来た道に戻っていた。

そんなことを知るはずもない僕は公道を全速力で走っていた。それから、昼くらいになってようやく走るのをとめた。

「まったく、命が危ないと何でもできるものだ。ふうー」

背負っていた、かばんをおろし、水を一口飲んだ。そのあと、コンパス、時計、地図を出し、太陽の位置を考えながら今の場所を求めた。しかしなかなか求められないでいると、近くにあった、公道シールドのエネルギー照射用支柱に現在地の緯度経度が、細かく書いてあることに気がつき、疲れがどつと出た。

どうやら町まで、ここから、まっすぐ500メートルぐらい離れているところまで来たことがわかった。

「やっと、町に着く」

昼を町で取ると決め、町までまっすぐ向かった。

1部より 第2幕 「地図にない町」 (前書き)

前の1部から3部を分けただけです。

1部より 第2幕 「地図にない町」

2部、地図にない町

村が見えた。

思っていたよりも大きく活気があった。確かに実在した。地図にない町
ぐう

お腹がなった、熊に襲われて朝から何も食べずにここまで来たから当然の結果だ。

「とりあえずなんか食べよう。おいしそうな店で」

それが今の感想だった。お金は、いつも身につけていたから食べられないことはない

「村人に聞くことが賢明かな」

学校でもし戦場で孤立して道に迷って、食料がなくなったときにどこかの村にたどり着くことができたのならば、村人に助けてもらいなさいと言っていたな。

村の手前に丘に沿って畑が広がり、畑を見回りにしているおじさんがいた。僕は、勇気を出して

「すいません。この村に宿はありますか？」

「・・・・・・」

聞こえなかったかな？

もう一度、前よりも大きな声を出して、

「この辺に泊まれそうな宿舎ありませんか？」

しかし農夫は、まるで聞こえなかったように腰あげて自分の家にむかってしまった。

聞こえないのか無視をしたのか知らないが、今の僕が村に行かないで、次の村に行く気力がなく、ただご飯が食べたかった。しかたがなく、村に入ることにした。

「ナニカキタ」

“？”声

「まあいいや」

村は、僕がいた村と同じでかなり昔に開発された、自己発電装置でライフラインを整えて、食糧のほとんどを周辺に田植えをし、たまに商人が入り出して、村々個別で自立した生活をしていた。僕が村にいたころは、昔ここに村があったと聞いていたがそれがまったくの嘘であることがわかった。

僕は、村を見て回りながら

「ここには、たいした特産品はなさそうだ。別にいり物もなければ買うものもないか・・・」

そういえば、旅の醍醐味は町の食べ物、食材や味付けが違うためその町に行かないと食べられ ないものがたくさんある。路銀稼ぎに集中しすぎて忘れそうになった。飯を聞くなら、村人、すかさず聞いたら教えてくれそうな人を探して、聞いてみることにした。

「すみません。このへんにおしそう・・・」

「・・・」

村人は、無視して何も言わずたすたと歩き去ってしまった。

嫌われているのかな？そう思ったが、別の人に尋ねてみることにした。2、3人に聞いてみたけれどもどれも、振り向きもせず歩き去ってしまった。

冷たいな

立ち尽くしている訳にもいかず。適当な食べ物屋を探すことにした。そういえば、誰かが「大衆向けの店より、小さな店のほうが今までに食べたことが無いものが食べられるかも知れない。しかし、おいしいかどうかは、責任取れないけど」そんなことを思い出して、僕は、小さな食堂へ入った。大衆向けの大きな店は無かったが・・・ガラガラ

しかし店に入れども店員の誰も、僕に対して何も言わなかった。

仕方がないのでカウンター席に座りぼうしをはずし、水を空のコップに入れ、メニューから適当選ぶことにした。すると別の人が入ってきて、

「いらっしやいませー」

「よお」

新たにお客が僕の二つ隣に座った。

「今日は何にしようかー」

上機嫌にメニューから選び始めた。

「今日は機嫌がいいねーどうしたの」

僕のすぐ隣に座っていた客が話し始めた。

「あー、商人がさ、いつもより高く稲を買ってくれたんだよ」

「そりゃーどうして」

「何が何で隣町に魔物が現れて、畑がやられたらしいよ」

「たいへんだなー」

「他人事に言うなよ」

「はい、お冷、今日は何にする？」

ええ、ちよつとまでよ、この店員は、僕にはお冷、置かなかったよ。

「そうだね、今日贅沢に・・・」

「お客さんは、いつも贅沢なときしか来ないだろ」

「あははは・・・」

店にいたすべての客が笑った。僕を除いて、それに、店に入ったとき、誰も「いらっしやいませー」と言わなかった、でも、2つ隣の人は、ドアを開けただけで、まして店に入るとき誰が入るかわからないまま言った。

「そうだね・・・うん、じゃ店長のお勧めで」

「またそれ、ならスタミナ定食ね」

「うん、それお願い」

「あいよー」

すかさず

「ぼくもおなじで・・・」
「がらがら」

「いらつしゃーい」

別の男がさらに入った。

「いつもので」

「あいよー」

その男は、2つ隣にいる男のさらに奥に座った。
おかしい。

「ハイ、スタミナ定食お待ち」

「オウ、早いね」

「さりや、常連さんだからね」

「あの僕もスタミナ定食で」

「じゃ俺のも早く作ってくれよ」

今入ってきた男が店長をせかした。

「そんな殺生な」

「お金持っているんだけどな」

「あははははははは」

「ッ!!」

僕はここにはいない？

急に気分が悪くなり、すかさず僕は、荷物を手に取り外に出た。

「はあはあ、何だはあはあ、この町は・・・」

村の中心に噴水があった、僕は、そこに腰掛、携帯食を食べた。

普通なら不安で食べられないのだろうが、朝から食べていないので、昨日食べたときよりもおいしかった。

だがおかしい、さつきから町の誰でもが見える場所に座っているにもかかわらず、誰も振り向きもしない。本当に気分が悪い。まるで僕が、ここにいない三田にでも店にあけるときちゃんとあけたし、それに村人から僕が見えないみたいに外部拒絶し、孤立して生きる。それが地図にない町の由来だろう。

「とんでもない町に来てしまったな」だからみんなが行くなと言っ

たのか」

家を出てから独り言が増えたな。でも、宿舎に行つて、明日にでもこの町を出よう。しかし、この村を一周したとき寄宿舎らしきところはなかった。

「マジかよ、また野宿かよ」

荷物を持つて、この村を出ることにした。

「さて、行くか」

「待つて」

声がしたので思わず振りかえると、僕より少し年上の女の子がいた。しかし、この村で僕を見えている人はいない。

以降、もしこれが別の人に見えていたら滑稽だろう。

「そのマント羽織っている人」

この村でマントは、僕以外にいるのか、村の門を目指した。

「むしすんなあ」

いきなり後ろから突き飛ばされた。そして前のめりに転んだ。今までに後ろから軽くだたかれることはあるけれども、みず知らぬ人に後ろから突き飛ばされたことは、まずないと思った。

「なにする。いきなり突き飛ばして」

「あつはははつ、無視するのが悪い。その旅人」

「僕が見えるのか？」

「なに言っているんだ」

どうやらこの女の子、いやの女は常識を知らないらしい。

「その旅人、どこから来た？」

「エーと、方角から、すぐあっちに村からだ」

南の方角をさした。

「へえー、海の町から、かなり遠かったでしょう」

僕の村には、海とは、かなり離れている。それに海のある村までは、商人の足で5日かかると聞いたことがある。

「たぶんそれは、僕の村ではないな。その手前・・・ここから1日ぐ

らいで僕の村に着くよ」

「ふうん、私は、今までこの村が出たことにいから」と、陽気に笑った。

なるほど、周辺の町を知らないとすれば、箱入り娘か……

「ところで何で旅をしているの？」

「旅行したくて」

「ぶあははは、そんな理由でこんな村に来るかよ」

「うそだよ。徴兵制から逃げるため」

「なるほど、だからみんな君を避けるわけね」

「どうして？」

「だって、男はみんな戦争に行くもんでしょう。学校で教わらなかった」

僕は、てつきり戦争に行くことは自由だと思っていただけに驚きを隠せなかった。

「君の村は変わっているね、それに君の村から何人の脱獄兵がいるの？」

「脱獄兵って」

脱獄じゃないというと思ったけど、本当のことだからいいわけするのをやめた。

「何人いるの？」

「少ないよ」

確かにここ最近、10年以内に脱走した人は、僕以外聞いたことがない。

「じゃ何故君は、普通の人みたいに軍人にならなかったの？怖いから？」

少し腹にたった。

「僕は、遠くに行きたいから……それに他の町にもいつてみたいし」本音だった。

「戦場もここから遠いよ。やっぱ怖いから？」

「自分の力で遠くに行きたい。それに旅も道野途中に何が出るかわ

からない。」

「へえ、君の村では、脱走のことを旅というんだ？」

「うらやましいと、小声でいった。だけど僕には聞こえなかった。」

「そうだよ、それにこの村に来る途中大熊に襲われて荷物の半分をなくした」

「大変ね」

「もし、運が悪かったら今頃熊の餌だったよ。軍に行っていたら、こんな経験をしないですんだのに」

今思うと、荷物を半分落としたことは、痛いことだった。今の自分の力で、補給無しで

次の村に向かうことは、無謀にも思えた。

今の所持品：地図とコンパスとお金、2、3日どんなに頑張っても日分の携帯食と父からもらった剣だけだ。

考え込んでいると、彼女もなにか考えていた。

「なにかがおかしいと思えば、荷物が少ないのね。」

「必要最低限のものは、持っているから、隣町に行けないことはないよ。それになんかこ

の町にはいづらいし、じゃあね」

自分の気持ちが伝わったみたいなのでこのむらから出ることにした。

「ちょっと待って、せっかくこの村に泊まっていきなさいよ」

いい話だが、腑に落ちないことがあった。

「いいよ。迷惑になりそうだから」

「いいのよ。せっかくこの村に来たのに何もしないで追い返せないよ」

「いいや、僕みたいな軍に行かないやつが泊めるなんて、君の家族に迷惑じゃないの？」

「大丈夫」

自信満々に答えた。

「なぜ？」

ついさっきまで村からいないようにされ続けたので不安だった。

「村長の娘だから」

はつきり言い切った。

「え、本当に」

「本当よ」

さつきから、箱入り娘な感じで、見ず知らずの人にずかずか話している感じからただ者ではないと思っていたが、村長の娘とは思ってもなかった。

「村長の家に行くのはなおさらまずいって」

でも娘は、もの動じることはなかった。

「大丈夫だからついてきて、いい案がある。後私の名前は、ラサよろしくね。」

「え？ええっ」

自分の名前を言うなり僕の腕を引くなり歩き始めた。

「どこに行くの？」

「私の家よ。ところであなたの名前は？」

「？・・僕のな・なまえ・・は、あ、あれええと・・・・・」

「あなた名前よ」

なんかおかしい

「なまえなんだったけ？」

「名前を思い出せないなんて、荷物を落としたり、君は、なんかおかしいね」

ラサは、笑った。

確かにおかしい。自分の名前を忘れてしまうなんておかしい。

「でもたまにいるんだよねーこの村に来て名前を忘れるやつ。別に珍しくないんだけどね」

村を出ていった後どうなったかわからないけど、付け加えた。

あ、あれ本当に名前を思い出せない。どうしよう、どうすればいいんだろう。

「本当に名前を思い出せないの？」

歩くのをやめて、僕をのぞきこむように見た。

コクコク

僕は、首を縦に振るしか出来なかった。

「しかたない。もし名前を思い出せなくなったとき、どうすればいいか知っている？」

「知らない。」

首を横に振った。

「別の名前を付ければいい」

「ええ？」

正直驚いた。

「これから君の名前は、リュウキ、よろしくね」

「よろしく」

そういうと、また僕の腕を引つ張りながら歩き出した。

リュウキ・・・聞き覚えがあつて、心頼もしく、優しくしてくれた人・・・だけと思い出せない。本当にどうなっちゃんだろう。と、考えているうちに村長の家に着いた。やはり周りの家に比べて大きく歴史がある作りだった。

「いいこれから君は、リュウキだからしっかり私の話に合わせてね。じゃないと村から追いつ出すことになるよ」

「わかった」

コクと、首を縦に振った。

僕は、リュウキリュウキ・・・と何度も自分に言い聞かせながら二人で家に入ろうとしたとき

「ちよつと待って、いきなり家に上がるのも何だから先にお父さんに話してくる」

僕は、またコクコクと首を縦に振った。そして、門の外で待たされた。今の時間は、午後の3時ごろだろうか？時計を持ってないから、確認のしようがなかった。

それから数時間待たされた。（実際は2、30分）そのあいだ村人

は、誰ひとりも僕に視線をむけず通り過ぎていった。本当に見えていないようにしかし、この村に入ってから当たり前だったので別に珍しく感じなかった。

家からラサが出て来た。

「OKだつて、だけど家には、空き部屋がないから、村はずれにある空き家を使つて」

「ありがとう。助かつた」

「ごめんね。家に泊めてあげると期待させてしまつて」

「そんなことないよ。雨梅雨防げるだけで十分だよ」

「家は、こつちよ」

そういうと、空き家まで連れていつてくれた。空き家は、古くなくつい最近まで人が住んでいた感じだった。

「ここが空き家よ、期間は、四日そのあいだ自由に使つていいから、そして、そのあいだ魔狩りをお願いするね・・・あと」

「魔狩りつて何？」

聞いたことがない言葉だ。

「あなたの村では、魔狩りをしないの？」

「したこともないし、聞いたこともない」

ラサは、呆れた感じでいった。

「あなたの村は、本当に平和なのね」

「・・・・・・」

「仕方がない。この村の北に昔コンクリートジャングルと呼ばれた遺跡があるの」

「へえ」

地図にない町は、その町かもしれないな

「今は、魔物すみかになっているんだけど、たまに村の作物を襲いに来るの」

「なるほど、魔物は、繁殖率がいいからその数調節をするわけ」

「そうよ。だけどそれだけじゃないの。この村のライフラインは、ほとんどその遺跡にあるの」

「じゃ何故この村は、遺跡の魔物を追い出して、そこに住まないの？」

「出来ればもうやって、昔みたいにコンクリートジャングルにいるよ。だけど」

「だけど？」

「昔からこの国は、大きな戦争をしているでしょ」

「機魔戦争？」

「魔法軍の最初の一撃で壊滅したの」

「……」

「始めビルが倒れた。そして、地下からおびただしい魔物が出て来た……始めは、村人が力を合わせて戦った。だけど次第に魔物も強くなり始めて……みんな村から出ていった」

「知らなかった」

「そうね。村を捨てた人は、魔物が怖いから自分の生まれ育った村を捨てました。何て言う人、いないもんね」

「そつえば、僕の村では、魔物が出てくるからここに来てはいけない。て言われた。」

「確かに魔物が出るからといって、人が住んでいないわけじゃないし」

「確かにでも子供が、この町に来るのに魔物に襲わずに通ることは難しい。」

「まあ、村によって教えかたが違うから。自分の教わった歴史が正しいなんてわからないね」

「魔狩りには、いつ出発するの？」

「今からよ」

「えっ？」

日が傾きだし、もう午後の4時頃だろうか

「今から行って大丈夫なの？もう夕暮れだけど？」

「ええ、大丈夫よ。私も一緒に行くし、なりよりも大獣（大型かつ凶暴な魔物）は、今いないし」

「そうなの」

朝に会った大熊が頭から離れない。

「地元民を信じられないわけ？」

「そうじゃないけど」

いくらラサが安全だといっても不安だった。

「あなたは、脱走兵なのそのあなたをこの村に泊めさせてあげるのだからしっかりと働かないと困るのよ」

「わかった」

ラサは、何もしようとしない僕に腹を立てていた。また、せっかく泊めさせてれたのだから恩を返さないといけないそんな気がした。

「私も準備があるから家に戻るね。準備がおわったら」

話しながら僕を外に出した。

「君が来た方向から北にある・・・あっちの方で待っていて、わかった？」

コクコク、首を縦に振った。

「あとはー村人には、話し掛けないように」

「なんで？」

「この村人は、さっき話した、村を捨てなかった。だからあなたを村から逃げた腰ぬけと思っている。だからさっきあたたかもないようにあしらわれたのよ」

「なるほど」

「だからあまり私以外の村人と話させいで」

「悲しいな」

「大丈夫、明日から大丈夫よ」

「どうして？」

「いい案があるから」

「わかった・・・それと」

「何？」

「何でラサさんだけ、僕に話しかけてくれたの？」

「村長の娘だから」

そう言うのと笑いながら家に帰っていった。

「集合場所は？」

ラサは、振り返って向かいの家を指しながら言った。

「向こうの門でまた会いましょう。」

「わかった」

「すぐに来てね。日が暮れたらまずいから」

「わかった」といったときには、ラサは、角を曲がりもう見えなかった。

「元気すぎる」

僕は、そう口から漏れた。そして家に入った。

家は、綺麗にかたずいていた。しかし

「何もない。なさすぎる。」

他の部屋も見したが、ベッドと机を除いて食器や家電等が見当たらなかった。

「なんで空き家なのか聞くべきだったな」

失敗だと思ったがすぐにラサとの約束を思いだし、準備に入っただが、家に置いとくものは、帽子以外なかった。そこで空き家のリビングらしき部屋にある机の上に帽子を置いてそのまま家を出た。門までの道のりは、難しくなくすぐに着いた。ラサより早く着いた。数分もしないうちにラサが走って来た。

「ハアハア・・・待った？」

「いや、今来たばかり」

数分だから嘘ではない。

「準備が早いね」

「必要最低限以外のものは、落とした。」

「帽子は？」

「おいてきた」

「大切なものじゃなかったの？」

「言いや、いつもの複服装の方が動きやすいと思うから」
「なるほど。じゃ行きましようか」

「うん」

そついうと僕とラサは、門を出た。

目的地に着くまで、魔狩りのことについて聞いた。

昔近くに大きな町があった。ほとんどの建物が今では考えられないほど高くそびえていた。しかし、魔法を使う国との戦争が始まると特殊な砲撃が飛来していくつかのビルを壊した。幸い古く廃墟のビルだったので誰も怪我をせずにすんだ。しかし砲弾から、魔物が発生した。始め魔物は、破壊力が弱く特に心配がないとされ放置されて来た。だが魔物は、魔力の力でひそかにおびたらしい数まで増殖、さらに知能まで備え付けていたので巧みに町の農場を食い散らかした。さすがに放置できなくなったので当時住んでいた町人で駆除することにした。だが、一部の魔物は、大きくなりかつ凶暴になっていった。次第に人と魔物のイタチごっこが始まった。

その時はよかった。なぜなら、魔物を狩るために多くの人がでは入りし、国からの援助も最大のものになり、戦争が始まる前くらいまで復興した。しかし、戦争が長引くに連れて国の支援が無くなり、衰退するようになった。多くの人が村から出ていった。だから男は、戦場に行き強くなつて帰り、村のために戦う。だから、15を過ぎた男は、20まで帰つてはいけない。と、ラサは、教えてくれた。僕は、ここに長居をしはていけないようだ。

「ここよ」

ラサは、あるビルの前に止まった。そのビルの上層部は、崩れて今では、何回建てなのかわからなかった。

「ここは何があったの？」

「わからない。でもここは、魔物の子供の遊び場になっているの。

親は、ほとんどいないからちょうどいい練習場よ」

「なるほど」

子供狩りなんて残酷な・・・明らかにおかしいイメージだが、魔物を駆除するに弱い子供を狙うことは、妥当かもしれない。だから口

にするのをやめた。

「あつ、そうだ子供だからって気を抜かないこといい」

僕は、首を縦に振った。

「そうならいいけど」

そういうと仲に入っていった。

「キューイ、キューイ」

変な泣き声が、上からした。上を見ると目の大きなかわいい魔物（30センチぐらいのトカゲ）がこつちを見ながら鳴いていた。

「かわいい」

魔物について何も聞いていないので、目の前にいる動物を魔物とは思わなかった。

「何していんの？早く来なさい」

ラサの声がしたので急いで追いかけた。魔物は、その間も鳴き続けた。

「のんびりしていたら置いていくぞ」

「ごめん。今行く」

一瞬ラサを見失ったがすぐ見つけることが出来た。階段を上っていったので急いで追いかけた。

僕も階段をのぼろうとした途端、ラサが急に下りて来た。

「逃げるよ！」

「え？」

そして、僕の横を走りながらとおり抜けてビルから出た。僕もラサを追いつけることにした。

「なんで？」

「キューイで聞こえたでしょう。あれは、子供が親に近いときに鳴くの」

ビルを出るとラサが待っていた。気がつくと周りには、大小様々なトカゲで囲まれていた。ほとんどが四這に這っているが中には二本足で立っているものもいた。

「こいつらよ。」

ラサが言った。

すると二本足で立っているトカゲみたいな魔物が、こちらに歩み寄って来た。

「きみか。いつもこのビルで私の大事な息子達を殺しているのは」
声からして、女性だろう。

「そうよ。私よ。私の村に居座り続けて」

強い口調で言い返した。

「昔のことでしょ？それにあなたが生まれた頃には、もうこの村私たちのものよ。私たちがこの村を統治しているの」

「うそだ。おまえたちが勝手に支配しているだけだ。」

「クツクツクツ・・・」

女のトカゲが笑い出した。

「何がおかしい。」

「よく考えれば、昔私たちがしたことをおまえは今やろうとした。
所詮おまえと私たちは、同族さ」

「何を？」

「子殺しさ。私たちは、おまえ達を減らすために確実な学校を襲った。またここは、学校だね。よく貴様に放課後に残った子供がよく殺された」

「うそ・・・」

ここに来るまで強気だった。ラサが怯んでいた。

「そこにいるおまえ！」

「ボ、ボク？」

「おまえ以外だれがいるんだ！？おまえには、悪いがここでこの女と一緒に死んでもらう」

「なぜ？子供を殺したのは私でしょう？」

ラサが入った。

「おまえらは、今からここに入って子供達を殺そうとした。同罪だ」
「どうしよう。この数では助からない」

ラサが震えていた。

「大丈夫！」

僕は、ラサの手を持って行つた。

女のトカゲが、大きく口を開けた。

「みなものかかれ」

すると周りにいたとかげたちが急に襲い掛かった。

すかさず僕は、ナイフを取り戦うことにした。生きるために

「うお――――」

今までにないほどに体が動いた。

1メートルぐらいの四這のトカゲが先に襲い掛かった。ナイフを大きく振り回し、トカゲの牙より僕のナイフが勝った。次に三体がきた。剣より小さいため振りやすく、鮮やかに魔物を倒していった。

10体ぐらい倒したところで急に周りにいたトカゲが引いた。

「おまえ強いな。さすがに一人の人間に多勢で襲うのもなんだ・・・」

「

女トカゲが言った。そして手でなにかを合図した。

「ナイト601、602、603行け」

そういうと2体の2メートルをゆうに越える直立したトカゲが来た。しかも、手には斧みたいなものを持っていた。

「魔物が武器を持っている・・・」

そういえばこの魔物は、高度な知識を持っているとラサがいつていたことを思い出していたら目の前にいた2体のうち、1体が消えていた。急に暗くなつたので本能で後ろに飛んだ。

ガスツと鈍い音を立てながら大トカゲが降つて来た。

「ッ」

僕がかわしたと同時に1体の獣が、目の前から突進して来た、大きく斧を振りかざしたのが見えたのでさらに一步後ろに動いた。

シュと斧と一緒に風が通り過ぎていった。

もし今の両方をまともに喰らっていたらどうなっていただろうか考えるだけでも血がひいた。

ガスツと背中になにか感触がした。

「いたい」

後ろからくるトカゲには予想外だ。意識がもうろうつになりながら前から来る斧にまともに喰らった。最初に飛んだ大トカゲが、地面に着地した後今度は、横振りで僕の腹に向かって振った。

そして、突進して来たとトカゲが、斧を頭から振り落とした。

「すごい、コンビネーションだ・・・」

僕の頭は、戦っている最中に変なことを考えているきがした。だが体は、顔面からくらいもう立っていることが難しいぐらいに意識がとうのいた。

おそらく後ろから来るトカゲでもう終わりだ・・・

僕は、倒れた。気絶ではない。死んだ振りをすればたすかるかな・

・

「このやろっ」

目の前を強力な火が通り過ぎていった。トカゲ達は、火だるまになりながら暴れた。

「こっちに来て」

ラサが叫んだ。僕は、すぐに立ち上がりラサを見た。ラサは、腰にあった、大口径の銃を真上に構えて打った。弾は、2、30メートルまで飛び赤い煙を出しながら落ちて来た。

「救難信号？」

思わず僕とトカゲ達は、弾を見ていた。

「何見ていんの？早く来て」

僕は、我に帰りラサの元へ走り出した。トカゲ達もラサの元に集まり出した。

「いったんビルへ・・・頭を思いっきり下げて」

ラサが眩しく光だした。

「魔法・・・やばい」

光が、広範囲系の魔法だとわかり思いっきり頭を下げた。周りに物凄い炎が通りすぎた。さっき僕をトカゲから助けた炎に比べて弱い。が周りにいたとかゲには、充分な威力があった。

炎が過ぎてすぐに頭を上げ周りを見回すと多くのトカゲがやけどをしていた。ラサも今にも倒れそうにふらふらしていた。魔法は、元々戦争している敵国が生み出した兵器で特殊な物質に自分の力を送り使うことが出来る。それに対してこの国は、実弾を使う昔からある兵器を使う。実弾の兵器は、誰にでも教われれば使うこと出来る。だが魔法を使うには、自分の力を放出するために訓練が必要。しかもそのためには、才能も必要としときには自分のコンディションで威力に影響される。かといって、実弾も弾が切れれば使えないが、魔法は、気持ち次第で弾切れがしないこともある。つまりこの国で魔法を使うことはタブー視されている。

僕は、ラサの元まで走りながらラサを抱えてビルに入った。そして階段を上がった。三階のところまで上がると部屋に入った。ラサもようやく自力で立てるようになった。

「大丈夫？」

「ええ」

言葉に力がない。魔法の威力に寄るのだが全体に高威力の魔法を使うと人によっては、自分の力を使い果たし最悪死ぬこともあると聞いたことがある。

みづかな人に聞いたのだがそれが誰だかは、思い出せない。

窓から外を見下ろすと女トカゲが仲間に命令しながら入るのを見た。辺りのトカゲもまだ姿が見えない。

「ラサ、これも危ない」

「そのようね。今の魔法は、威力が弱いし、まともに喰らってもザコでも、まだ生きているでしょうね。・・・上に行きましょう。」

「魔法使えるんだね」

「めずらしい？」

「いいや。さっきの大口径の銃は？」

部屋を出て階段に向かった。

「大口径？」

「空に向けてなんか花火みたいなやつ」

「救難信号よ・・・村の人が気付けばみんなで助けてくれる」

「ここに来るのは、どれくらいかかりそう？」

「気がつくのに時間がかかるけど準備を合わせて3、40分ぐらいかな」

「じゃそれまで生きていないと・・・」

階段の下から大トカゲがいた。

「幸い、このタイプのトカゲ大声が出ないから仲間を集まることはないよ」

「でも倒さないと前に進まないか」

大トカゲは弱かった。それからひたすら上を目指した。途中何度か足の早いトカゲに追い付いたが、すべて倒した。それでも上を目指した。

「ハアハア・・・ラサも手伝ってよ」

「無理言わないでさっきの魔法で体力使い切っちゃたんだから」

「ところでこのビルは、何回建て」

「細かいところまでは、わからないけどこのタイプは、50階ね。」

「今は、ハアハア・・・」

階段の踊り場を見ると21、22とかいてあった。

「21階かこんなに階段をのぼったことなんてないよ。」

「？君の村には、高い建物で何階くらい？」

「高くても学校の4階かな」

「じゃこんなに階段をのぼるのは、始めてだね」

「そうだね。20階なんて初めてだよ」

「そうじゃついて来て」

ラサは、僕の袖を引っ張りながら部屋に入った。

「こんなところにいて、魔物が来ないの？」

「大丈夫あいつらは、以外と体力ない上に臆病だからすぐには、来ないよ。」

「そうならいいけど」

部屋の窓の前でラサは立ち止まった。

「みて」

目の前には、綺麗な夕日が見えた。ちょうど向かいのビルが崩れていて景色を遮るものは何もなかった。

「綺麗」

「でしよう。君のことだから見たことがないかなと思って」

ビルは、古くから放置されて電気も通っていないくて汚かったけどその時見た景色が頭に刻み込まれた。

「じゃ降りよつか」

「えっ!？」

「えっ、じゃないでしよう。えっじゃ」

「だって逃げるためにここまで・・・」

「だっていつまでもここに隠れていたら、せつかくみんなが助けに来てても私たちを見つけられなければ助けしてくれないよ」

ラサは、笑いながら答えた。

「大丈夫だって、ここから助けに来た村人が見えたから。」

「本当に」

僕が、窓の下を覗こうとすると、また、僕の袖を引っ張った。

廊下の外に出るとなんかただならぬ気配がした。

ヒタ、ヒタ足音がした。トカゲではない独特な何かが近づいている。日が沈み廊下が暗く見えないので凝視していると、ラサが小声で話しかけて来た。

「戻るよ」

すぐに出たばかりの部屋に戻り、ラサの指示で隠れた。

何かは、部屋の前で止まった。僕は、恐怖のあまり目を閉じた。そしてまた、歩き出した。

しばらくして、肩を叩かれた。今で僕は、声を出して跳びはねた。

「キャ」

「クスクス、驚きすぎ」

上を見上げるとラサがいた。物凄い汗をかいた。しかも到底敵わない恐怖があった。

「今のは、なに？」

「あいつよ。この村を壊滅させた張本人は」

ラサは、冷たく言った。

「今すぐに降りないほうがいい。あれがこのビルを出ることが確認出来るまで」

「……………」

「疲れたてるみたいね」

「今日は、いろいろあったから」

「そうね。ところでさっき怪我したでしょう。見せて直してあげるから。」

そういうと僕の服を脱し始めた。抵抗したが、疲れていてすぐに力負けした。

「あれ？」

血の跡やアザが少しあったがたいして怪我をしていなかった。

「さっき血が出るぐらい戦ったのにどうして……………」

「ああ、あの時なんかフリースを思い出してそれをいってみたら怪我が直った。」

嘘ではない。本当だ。と小声でいった。

「そんなはずがない。なんか首飾りを付けているでしょ？」

「そういえば……………」

僕は、胸元から首飾り取ろうとすると急にラサが服を脱がしてそれを取った。

「何するの？」

僕は、服が顔を隠すほどめくられた。バランスをとりながら転ばないように乱れた服をもとにした。やっと元に戻ったとき、ラサは、それに夢中で見ていた。

「これ誰からもらったの？」

今までにないほど興奮していた。

「……………思い出せない。……………これは、大切なもの」

「知らないの？これは、国内所持禁止物よ」

「そうなんだ」

「それにこのタイプは、誰でもどこでもどんな魔法でも使うことが出来る。汎用型魔攻石、しかもかなりのエネルギーを蓄えているから体力がなくてもつかえるのよ」

「へえ」

「ねえ、これちょうだい。」

母さんの顔が浮かんた。

「ダメ」

「何だよ。多分あなたが持っていても使いこなすことが出来ないはずよ。どうせこれは、道端で拾ったのでしょ？」

「駄目」

「どうして？」

「これは、僕が10才の時にもらった大切なものだから」

「なら仕方がないね」

「すごい残念な顔をした。」

「……あれ、もしかして記憶が思い出した？」

暗くなったとたん急に明るい顔をした。

「うーん。名前が思い出せない。お母さんの」

「あなたよ」

ラサが僕の頭を殴った。

「……ごめん、思い出せない」

「ガク……残念。そろそろ下に行きましょうか」

スクツと立ち上がり部屋を出ていった。小声で

「強く殴りすぎたかな？」

「なんかいった？」

「何も！」

ラサが部屋を出ていったあと

「怒らせちゃたかな？」

僕もラサを追いかけた。階段を下りながらしたから酷く鉄臭い臭いがした。

「上る時こんなに臭かった？」

「なんか言った!？」

「いや何でも」

確かにラサが怒っていた。

大分降りた。階段を見ると3、4階とあったから3階だろう。壁がべつとり何かで濡れていた。日が沈みかけているのか暗くそれが何なのか全くわからない。

ボスッ、何かにぶつかった。

「ごめん」

「この先に何かいる・・・」

ラサが固まっていた。耳をすますと何か音がした。

ドス、ガス、ボキッその音は、近くで何かを落したり砕いたり、気味の悪い音がした。時たまミューミューと喚く音がした。魔物がまだ下にいた。僕は、ラサを抜いて音のする3階から1階までのエントランスを物影からこっそりとのぞいてみた。見るも無残な光景が見えた。

トカゲと魔物が戦っていた。魔物は、今まで見たことがない、凶暴そうで角が生えてどす黒い皮の・・・まさに鬼と表現することが適切かもしれない。

戦いといっても一方的だ。逃げ回るトカゲを追い回して、ひたすらに食べていた。そこらじゅうに残骸が落ちていた。床は、血の海だ。後ろからラサが、

「あんなに進化したんだ。」

と、ぽつりと言った。

「始めの頃は、子供のトカゲにも勝てなかったのに・・・」

「あれは、何て言うの？」

「さあ？」

「名前を知らないわけないでしょう。あいつに村を滅ぼされたんだから」

「ないわよ。」

「？」

「あれは、日に日に進化するのだからいちいち名前なんか付けてられない。」

「……………」

「でも」

「！」

「あえて名前をいうなら、鬼ね」

「鬼？」

「今ここの地名は、鬼ヶ島にちなんで鬼ヶ谷」

「鬼ヶ谷……………」

「そして私たちは、鬼を退治するために来た桃太郎」

「……………」

「でもそんな簡単には、いかないみたい」

一体の鬼がこちらを見た。僕とラサは、その鬼に気がずいてすぐに伏せた。

「危なかった」

「そうねでも私たちここに来るのが早過ぎたみたい。だからといってここにのんびりしていたら助けに来た村人を危険にさらしてしまう……………」

「村人思いだね。」

「そうよ。だって私は、村長の娘ですもの」

その気持ちが嘘かまことかは、さておき、この状態をどう打開するべきか。真剣に考える必要があった。

真っ正面に鬼に挑んでも勝てる見込みがない。だからと村人に助けを呼んでも助かるとは、限らない。逆に自分の位置が鬼にばれて無事はでいられなくなる。

逆に村人に鬼の存在を教えないとここにいる鬼達が今いるトカゲを食べ尽くして外に出て村人を襲いかねない。

ドンと鈍い音がした。二足歩行しているトカゲ達と鬼達が死闘を始めた。その結果ビルの一階部分の壁や柱が壊れたり砕いたりしてい

た。

ドーン、ビルが揺れた。まるで食い殺すことを楽しんでいるように見える、鬼と仲間を必死で守るトカゲの死闘がどんどんひどくなつた。

ふと廊下の上を見ると、一体の鬼が天井にへばり付きながら不思議そうにこちらを見ていた。おそらく食べられるかどうか考えているのだろうか……

ドーン、また、ビルが揺れた。

ラサは、まだ上に

「ねえ」

「何よ」

「上……」

「上がどうしたのよ。」

「お、お、わわ」

恐怖感でろれつが回らない。ラサが上を見た。

ガンまた揺れた。鬼が天井から手を離してこちらに飛んできると同時に僕は、ラサの手を握り逃げた。鬼も追いかけてきた。

真つすぐに吹き抜けに沿って廊下を走り、突き当たりを右に曲がった。最初は、10

メートルあつた間隔も見見る縮まった。

もう駄目だ。

ガス、音がした途端に後ろから追われている気配が消えた。止まって後ろを振り返ると、転んでいる鬼がいた。

鬼は、スクツと立ち上がりとても痛そうな目でこちらを見た。そして叫びながらまた追い掛けた。

もう逃げてもすぐに追い付かれる。立ち止まったでも恐怖で動けないわけではない。

「いける！」

鬼が飛び掛かって来た。腰を落としながら交わしつつナイフで切り掛かった。

ザクツ、見事体に当たった。鬼は、着地に失敗しながらナイフで腹を切られて、のたうちまわった。

鬼は、見た目が怖いが別に体が強くはなかった。むしろ柔らかかった。

鬼が暴れるため床にひびが入り下に抜けた。

「落ちちゃった・・・」

「すごい・・・鬼に戦うなんて」

ラサは、すごく驚いていた。

「そうかな。鬼も見た目が怖いけど別に強くないみたい。」

「でもすごいよ。鬼に戦おうとするなんて」

体が勝手に動いただけで少し照れた。

一階のほうを見るとトカゲ達が鬼に対して有利に戦っていた。しかしよく見ると下の大乱闘でビル全体にひびがはいり、今にも一階から崩れそうにだった。

「ねえ、ラサ」

「何？」

「このビルの耐久年数では、もしかして過ぎてる？」

「当然よ。細かい数字は、わからないけどもう2、30年は、過ぎているはずよ。だってこの辺の建物は、歴史があるからみんな遺跡ビルと呼んでいるよ」

「じゃーいつ崩れてもおかしくないわけだね。」

「まー言ってみれば、そうだね」

ガタガタとビルが揺れ出した。

僕は、エントランスに向かって大声で

「トカゲ達、よく聞けー・・・！」

戦いがやんだ。

「もうじきでこのビルが崩れる・・・！」

すべての魔物がこちらを見た。

「早く逃げないとビルの下敷きになるぞ・・・」

トカゲ達は、我に帰り我先に出口を目指した。鬼は、一斉にこちら

を目指して群がり始めた。

「バカーこれからどうするの？おかげで鬼に囲まれるじゃないの責任をとってよ」

ビルの揺れが次第に多くなり出した。もう数分でビルが持たなくなつた。

「バカー」

ラサの声が次第に弱くなつて来た。

「大丈夫、何とかする」

「どうやって」

「こつやつて!!」

鬼が集まる中、僕は力無くうなだれたラサを抱き抱えて、

「ワレにツバサを！」

胸にある首飾りを蒼く輝きながら、僕の背中からとても大きい白い羽が生えた。

「目を閉じて！ゆくぞー！」

羽を大きくはばたかせ、体が軽くなり足に力を込めて飛んだ。すぐにいたところが鬼の大群になった。

そして、廊下が鬼の重さにたえきれなくなり、とうとう崩れ始めた。

僕とラサは、かなり早い速度でエントランスを滑空した。下では、トカゲ達が出口へ目掛けてパニック状態だ。

少しづつビルが崩れ出した。

「すごい、飛んでる。」

「目を閉じて」

目の前に窓が見えた。今になって方向転換なんて出来そうにない。

バッシャン、ガラスに頭から突っ込んだ。正確にいうと腕で抱いてるラサが先にガラスにぶつかった。・・・後が怖かった。

妹が崖に生えている木に登っていた。

「ねえ、それ以上のぼるのを止そうよ。」

「大丈夫だつてお兄ちゃん、早くおいでよ。」

「そんなことしたらお母さんに言い付けるよ」

「何いつてるの - お兄ちゃんだつてお母さんの大事なブレスレットを付けているに」

「わかつたよ」

「はやくーはやくー」

「せかさないでよ」

登きるとついさつき見た。夕日が見えた。

「すごいでしょここ私のお気に入りな場所なんだ」

「キレ -」

僕たちは、日が沈み切るまで見ていた。

「じゃ降りよつか。」

急に強烈な風邪が吹いた。

「きゃ - -」

妹が風で木の枝からぶら下がりになった。

「あぶない。」

「キヤー落ちるよ -」

妹の手を掴んだけど僕の力では、到底持ち上がらない。

「タスケテ -」

叫ぶが、近くに人がいないからすぐには助けてくれなさそうだ。

「うつ、重い、離してたまるか -」

少し持ち上がった。

「お兄ちゃん」

泣きながら見てる。

「うあ -」

また風が吹いた。それもさつきより強い。僕は、バランスを崩して一緒に落ちた。

「おちる -」

僕は、妹たぐりよせきゅっと抱き寄せた。

「僕に羽を - -」

ブレスレットが光背中から羽が生えた。羽が生えたおかげで落ちる速度がゆっくりになった。生えたばかりの羽でも、思う通りに飛べた。でも地面まで後少しのところまで羽が消えた。

「・・・に・・・ん、お・い・・・ん、お・ちゃん、おきてよ・・・」

「

誰かが、僕を呼んでる。聞いたことある懐かし声・・・

前にも同じことをしたことを思い出した。今なら自分の記憶を思い出せるそんな気がした。

ガスッ、

「うまく着地できた。」

「成功に浸ることが出来なさそうよ。」

「えっ？」

僕たちは、ビルを出てすぐのところに着地した。ビルが轟音と共に崩れ出したので、すぐに走り廃屋の裏に隠れた。白い埃で目の前見えなくなった。

ゲホッゲホッ、埃がひどい、おまけに日が沈んで辺りも暗くなかった。

「と・こ・ろ・で何であんな魔法が使えたのにすぐに使おうとしなかったのよ。もっと早く使えばあんな危険な目に会う必要もなかったのに」

ラサは、僕の襟を掴みそれを前後に揺らした。

「叫ぶ前に急に思い出したんだよ。幼い頃に使ったことを」

「それにトカゲ達を何故助けたの？」

「だって見殺しにすることは、出来なかった」

「あなたは、本当に馬鹿ね！」

ラサが、手を放した。今にも泣きそうな目で見ていた。

「ごめん・・・」

それから僕たちは、埃が納まるまでここに止まることにした。しかしなかなかおさまりそうにないから手探りで村に帰ることにした。

煙を抜けたとき、一匹のトカゲがいた。あの女トカゲだった。

「さっきのケガは、大丈夫か？」

「何のようだ？」

僕が言うより先にラサが言った。

「お前には、関係ない。用があるのは、その隣にいるやつだ。」

辺りを見回す。他のやつがいない。今やつを倒すべきか？ だけど今の僕が、敵の大將を

倒すことが出来るのだろうか？

「その男、なぜ助けた！？」

「僕の事か？」

「ハハハ、おまえ以外誰がいる？ あの時私たちを見捨てれば、私たちは、全滅した。なの

におまえは、私たちを助けた！ どうしてだ！！」

「僕は・・・僕は、おまえ達を放つとけなかった。だから逃げるようにした。」

「それだけの理由か？」

「そうだ！」

「もしかしたらまだ私の仲間がおまえを追って殺そうとしているかもしれないのか？」

「・・・・・・」

「まだおまえ達は、私たちを殺さない。もしそうならもう死んでいく。」

ラサが、話に入り込んで来た。

「そうだな。今回は、生かしといてやる。」

急に煙が消えた。周りには、多くのトカゲ達がいて女トカゲを見守っていた。数は最初に囲まれた時よりも少なかった。もし女トカゲに戦いを挑んでいたら、今生きているかどうかわからない。

「ふー助かった。」

日が沈み完全に暗かった。

「オーイ、大丈夫か？」

近くから声がした。それは、明らかに人の声だった。

見えるぐらい近ずくと明らかに村人だった。

「驚いたよ。救難信号が見えたから急いで着たのにビルの周りにたくさんトカゲがいたから、近づけなかったよ。それになんだいきなりビルが崩れてさ、怪我しなかったか？」

ひどく訛りのある言葉だ。おそらく山奥からこの村へ狩りをしに来た人だろうか。

「大丈夫よ。助けに来てくれてありがとう」

ラサの声が、急に気品のある声になった。

「ところでーさっきまでトカゲ達に囲まれていたけど大丈夫だったか？それに一人で」

「ええ、この子のおかげでケガせずにすみえました。」

「？」

「この子よ」

ラサが僕に指で指した。村人もこちらを向いたので一様頭を下げた。すると村人の態度が急に変わった。

「おまえか。村長の娘をたぶらかして、こんな危ないところに連れて来たのは。もしこの子になんかあったらおまえ責任とれんのか。」

「いや、僕が連れて来たのでは」

「ごめんね、じい・私がここまで連れて来たの」

ラサがかばった(?)

「ほんとかーでもなぜこんなところに」

「だって今日は、祭の日でしょう。だから、トカゲの新鮮な肉を採ろうと思ってだから」

「本当なのか？」

「ええだって彼のおかげでさっき、トカゲ達に囲まれた時に彼のおかげでみんな逃げていたもの、じいもさっき見たでしょう。」

「まあーそうだが。ところで君！」

「ハ、ハイ」

「見た感じ15才だが、戦争は、どうしたもしかして、逃げ出した

のか。そうならば脱獄

兵じゃないのか？」

「僕は、……」

脱獄兵じゃない。と言おうとしたが喉まできていうのをやめた。

「この子はね、まだ15才じゃないの。だから旅をしているのだった。もし戦場にいったら

他の町に行く機会なんてないじゃない。」

「そうだがー学校は？まさかサボっているわけないよな。」

僕は、首を横に振った。

「だってまだ冬休みなわけないだろ。」

「何言ってるの？彼の町では、彼みたいに旅で学校を休むことは、認められているのよ。ねっ」

首を縦に振った。

「本当かーなんか嘘をついてる気がするけど。」

「そんな事ないよ。」

「まあ、ラサを救ったのが本当なら今の嘘でも村を出ていかせるわけには行かないしなー仕方ない。おいでそこの若物」

向きを変え、息をおもいつきり吸い、

「皆の者、ラサの安全が確認できた――！トカゲの肉を持って村に帰るぞ――」

大声が周囲にこだました。するとまわりからそろそろ人が集まり始めた。

「こんなに隠れていたとは」

集まったのは、みんな強そうで50人くらいいた。

「私たちの得意技は、待ち伏せなのだから隠れることは、得意のよ」

「そうだよー来てみたのはよかったけどーあんなにトカゲがいたかなかなか近づくできなかったー。そしたらーみんな引いて中からお前達が二人だけいたからーおれが畏かなと思ったよー」

「ご迷惑かけました。」

「そんな私たちは、あなたのためならーどんなところでも行きま

すよ」

ツンツン、僕が軽くラサの肩を叩いた。

「お祭りっていったけど何の祭なの？」

笑顔で

「あなたの祭よ。歓迎するためにだから肉を取るため来たのよ」

僕の村でも祭があるけど、僕のために祭をした事がなくうれしくなった。

村人の肩を見るとぐったりもしくは死んでるトカゲがのっていた。それもみんな子供

だった。

「あれを食べるのか・・・」

小声で誰も聞こえないようにぼくは、言った。

1部より 第3幕 「別れ祭」(前書き)

3部目です。

1部より 第3幕 「別れ祭」

3部、別れ祭り

村が見えて来た。

「もし僕だつたら鬼が怖いから引越ししているな」

「なんか言つた？」

ラサに聞こえた。でも聞かれたくないから

「今日は、いろんな事があつたから疲れたな」と

「何いつてんのこれからよ。だって今日は、祭よ！」

「そうだっけ……」

今日は、本当に疲れる気がした。

村に帰つて来た、昼に来た時は、ごく普通の村だつたがいまは、

祭一色で賑わつていた。

近くに見たことがない魔物がいるにも関わらずまるでそんな事がな
いように生活していた。

「僕は、村に戻ったら何をすればいい？」

「家で寝てていいよ。」

「でも祭だから何もしないわけには」

「何もしなくていいから」

「でも……」

ラサは、僕の耳元で

「だからあんたは、旅人でしょ！あまりこの村で歩き回るとわたし
が迷惑なの だから家でじっとしてて！わかつた！？」

「わかつた」

僕がこの村にいることが行けないことだと思った。

「あなたの家までわかる？」

「わかる」

「じゃ私が呼びに行くまで家の中でじっとしてて、後早めに汗を取
つておいて、今夜は遅くなるから、あと家にあるものは、勝手に使

「つていいよ」

「えっ勝手に使うなんて・・・」

「大丈夫、すんでいた人なんてもういないし」

「でも・・・」

「大丈夫だって、それに荷物がないから着替えなんてないでしょ。

それにお風呂にも入っていないから臭いでしょ」

「うっ」

僕は、首を縦に振った。

「じゃあね、リュウキ」

ラサと手を振ったので僕も手を振りながら別れた。

家に着いた。埃で汚れていたがしっかりした作りの家と家具が残っていた。それによく探すと服もあった。電気も水も止まっていなかった。

一通り見た後僕は、ラサに言われたとおり、シャワーで汗と今までの汚れを落とした。当然のことかもしれないが、家から出て一度も体を洗っていなかった。

「ニオイしたかな？」

自分の臭いが、以外と気がつかないものだった。

バスツ、服をこの家にあつた物を借りた。たまたま同じサイズがあつた。そして、ベッドに寝転んだ。

埃が部屋全体舞った。

換気しなきゃでも窓を開ける体力がもうない。あと、日記を付けなきゃ・・・カバン・・・あることに気付いた。そういえば、カバンは、熊に襲われてからなくなしたんじゃない。この村にはいるまでしっかり持っていた。一体どこで落としたんだろう。

記憶をのぼる。もし、カバンを見つけることが出来たのならば、名前を思い出すことが出来る。当然僕の名前は、リュウキではない。食べ物屋に入るまで持っていた。それから携帯食を食べてラサに声をかけられて・・・記憶があいまいに・・・結論、村の中心に落とした。もしくは、誰かに拾われた、盗まれた・・・後者だっ

たら、どうしよう・・・探さなきゃ、でもラサが家を出るなら・・・
・まだこの村に3日いられる。それまでに探そう。

探すのは、身の回りから、

「まずこれから」

大きなナイフを取り出し、名前がないか探した。鞘に名前らしき傷があつた。

リュウキ
竜騎

「あほらしい」

これにくれた人とリュウキにどんな関係があるのか分からない。
くだらない！

ナイフを横に起きそのまま寝た。

それからどれくらい寝ていたのかわからない。

ガンガン、音がする。ガンガン、ガンガンなにかを叩いている音がする。外は、日が沈んでだいぶ暗くなっていた。

「夜か」

また、眠ることにした。しばらくして、バンッバンッ、今度は、
ガラスを叩く音がした

・・・ガラガラ、ドスドスドス・・・音がやんだ。
グワンッ、ベッドが傾いて僕は、ベッドからずれ落ちた。

「いつまで寝てる。ネボスケ」

ラサがいた。どうやらなかなか起きない僕に家に入って、ベッドを倒した。後で考えるとよく男が寝てるベッドごと倒すことが出来たのか驚くほどだ。

だが寝起きの頭だとそこまで考えられない。

「何するの」

「祭よ早く行かないと」

「でも家に入ってまで」

「この村で家に鍵をかけるなんてそういないよ。」

「・・・」

「服は、着替えたみたいね」

「ちょうどいいサイズがあったから、それに着替えを入れている荷物を無くした」

「そうだったね。じゃ行こうか」

ラサは、僕の手をとり力いっぱい引っぱった。

「ナイフが・・・」

「祭なんだから武器なんていらないよ！」

それもそうだなと思い、そのまま家を出た。ベッドは、倒れたままだった。

村を駆け足で通り過ぎていった。ほとんどの人が祭にいったので、人気がいないほど静かだった。しかし、段々騒がしくなり出した。

祭は、村のはずれにある広場でおこなわれた。広場の中心に焚火をし、まわりを村人で囲んだ。

今言うのも恥ずかしいが、祭は、ぼくのためではなく、これから戦場にいく人のためにするらしい。そのため僕みたいな旅をしている人は、この村にはなじめないようだ。

そして、旅に出るのは、僕と同じ歳だ。

「えゝみなさん御集まり頂きありがとうございます。このたび、私の倅が明日15になります。」

祭は、ちょうど始まり急に静かになっていた。その時に僕とラサが騒がしくついたのでなんだか罰の悪い形となった。

「じゃ適当に遊んでいてよ。私は、向こうにいるから」

ラサは、ひときは偉そうな人が座っている席をさした。おそらく村長だろう。

「わかった」

「じゃまた後で」

軽く手を上げて向こうに走っていた。

「みなさんのおちからで明日から旅立ちます。私は、このことを本当に誇らしく思います。」

長い説明が始まりそうだ。

「昔、この村に魔物が襲い多大な被害がありました。だが今私たちは、ここの地で繁栄しています。……」

意識がとうのいていく。

「では、みなさんよろしいでしょうか？カンパーイ」

目が覚めた。どうやら寝てしまっただけ。周りを見るとみんなコップを持っていた。

僕は、僕だけコップを持っていなかったで慌ててもらうことにした。沢山コップを持っている子供がいたのでその子からもらうことにした。

コップを飲んでみると苦かったけど体温かくなつた。

始まると6才くらいの巫女さんが明日旅立つ少年におはらいをし、それから、子供達が次々に出し物をした。それらが終わると子供達が、それぞれの家に帰っていった。そして、今度は、大人達が歌を歌ったり、歌に合わせて踊り出した。

時間は、もう9時だろうか……

「楽しんでる？」

陽気にラサが話しかけてきた。

しかし僕は、祭りたい好きではなかった。

「うん、僕の村には、こんな祭はないから」

僕は、この祭が好きではなかった、何故なら僕は、徴兵から逃げているのだからこれから軍に入る人に顔を向けることが出来なかった。

「なによ気が沈んだような顔をして」

「そうかな」

今の自分の気持ち顔に出ていることに驚いた。

「そうよ。」

「村長の隣にいないでいいの？」

「大丈夫、みんなお酒を飲んでいるから、それにリュウキの事を村長に伝えといてあげたから」

「……ありがと、それにしても祭の手伝いを子供達がしている

んだね」

「そうよ。祭の進行は、この村の14才まで子供達が準備しているの、でも夜遅くは、15才以上の役割なの」

「ラサは、行かなくていいの私は、今日肉を取りに行ったでしょ」

「・・・・・・そうだったね」

まだ祭に来てなにも食べていなかった。肉も含めて

「ここは、収穫祭とかしないからみんなこの祭に力を入れるのよ。それに見て」

娘は、今日の祭の主人公の母親を指で指した。

「楽しそうに笑っているでしょう。」

母親は、息子の隣で嬉しそうに笑っていた。

「息子を誇りに思っているから・・・・・・」

もし僕も戦場にいったのならば、母さんは、僕を誇りに思ったのだろうか？

「本当は、泣いているのよ」

「・・・・・・」

「戦場に出て人を傷付けて喜ぶ親がどこにいるの？それに死ぬこともあるのに・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・ないらしい」

「？」

何かを言ってみたのだが、うまく聞き取れなかった。

「彼ね。家に近くて、その時私の年齢に近い友達がいなかったからよく遊んでね」

幼なじみかな

「友達を作らなかつたわけじゃないよ！昔ここに鬼が襲ったの、運悪く大人達が畑仕事でいなかったから、村には、ケガや病気で動けない人と子供達しかいなかった。それで・・・・・・」

「その時ラサは？」

「私は、あの時たまたま襲った後にこの村に来たの」

「この村に来る前は」

「孤児よ。戦争の・・・その時たまたま村長の娘に似ていたから村長の家に引きとられたの」

「・・・・・・・・」

「気を落とさなくていいよ。せつかくの祭なんだから！」

バンッ、僕の背中を叩いた。気が遠のきそうになっていく気がした。「どうしたの？さっきからボーッとしているけど。」

「何故か眠い。さっきあんなに寝たのに・・・・」

「そのコップどうしたの？」

「さっき、もらった。」

「まさか」

そう言うトラサは、僕からコップを奪って匂いを嗅いだ。

「これ、酒よ。それにまだリユウキは、未成年じゃない。」

「そうなんだ。」

だいぶ前に親から「俺は、お酒が弱いからおまえも俺の血を受け継いで弱いはずだ。だからあまり飲むなよ」と言われたっけ・・・・

「・・・・・・・・聞いてる？ねえ！！」

「な、何？」

「お酒飲んで大丈夫！？」

「大丈夫だけど」

「頭痛とか吐き気とかない？」

ラサは、かなり焦っているようだった。でも僕は、頭痛も吐き気もなかった。

「ないよ」

ラサは、安心した面持ちで

「よかったゝあなたは、お酒に強いかもしれないね」

「そうかな？ところであの家は、持ち主はどうなったの」

「あの家？」

「僕が泊まっている家のこと・・・」

「あ、あれね」

「まさか曰くつきじゃないよね」

あんなきれいに家具だけが残されているに住むなんて気味が悪い。たぶん昔にあのいえに住んでいた家族に何かあったに違いないと思つた

「あーあの家の事、まっ家具があのままだと普通驚くよね。」

「男物の服もあるし」

「あの家にはね。昔、3人の家族がいたのよ」

青ざめた。予想通りの気がした。僕と同じ年の子供と大人物の服があつたからだ。また、食器など3人分あつた。

「夫婦とその子供でね。子供は、魔物に食われてそれっきり、夫も復讐に遺跡へ行ったきり帰ってこなくなってしまった……」

「奥さんは？夫の後を追っていなくなつた？」

「それはないよ。」

「え？」

「だつてそこにいるよ」

「そんな！」

「あそこで今の夫と楽しく話している。」

「今の！？」

「子供も4人いる」

「4人も！」

「長男と三つ子の姉妹」

「三つ子！」

「驚きすぎ」

「だつて、夫が死んだかどうかわからないのに」

「死体が出てきた。たしか、骨の一部しか発見できなかったから、鬼に食われたと断定」

「おに？」

「さつき遺跡であつたでしょう」

「……」

「そして奥さんは、新しいだんなを見付けて再婚、子供がそろそろ

生まれてハッピーエンド」

「歳は？」

「デリカシーがないね。女性に歳を聞くなんて禁句よ」

「・・・・・・・・」

「三つ子は、村中が驚いたね」

「普通、未亡人で子供が先立たれていると結婚しないと思うけど」

「現実には小説より奇ナリ」

「？」

「現実には、思っているようにはならないのよ。人って結構単純よ」

「・・・・・・・・」

「話を戻すわ。そして再婚して、自分の服だけもって嫁いだ。だと写真とかほかのものは、昔の記憶が思い出すからそのままにした。そしてあの家は、まだ残って今に至る。」

「そこでなんで僕が使っているの？」

「あの建物は、奥さんが所有を放棄したの、壊すのも面倒だからいちよう村共有の物になった。そして、改装するにもお金がかかるから、あのまんま、であなたが来た。どうせ使わないから泊まるにはちょうどいいと思って、それに使わないより使ったほうがいいですよ。わかった？」

「わかったけどー」

「わかったけど、理解できない？なら聞いてみる？」

僕は、首を横に振った。

「そういうこと。」

祭りがどんどん騒がしくなった。楽しくなってきたが、僕の心は、曇っていた。それを察したのかラサは

「そうよ。そうだまだ、コウに挨拶をしていないでしょ。」

「コウ？」

「あゝまだそれも言っていなかったね。今日の祭のメインよ。さっき話していた、あれ」

そう言うトラサは、ひときは目立つ席をさした。どうやら明日戦場

にいく、少年のことらしい。

「僕みたいな旅人が行っているの？」

「大丈夫よ。だって今日の祭に使っている肉は、あなたのおかげだよ。ホラいくよ。」

僕は、ラサに引つ張られてコウに会いに行くことになった。祭の舞台に上がるとき少し

恥ずかしかったけどラサと一緒にだから安心した。

「似合っているよ。コウ・・・」

コウと呼ばれた男は、軍服をきていたがまだ幼く見えた。

「ありがとう、ネエさん。隣にいる方は？」

コウは、見た目とは違って大人びいた声をしていた。

「旅人よ」

「戦場には、行かれなかったんですか？」

「ぼ、僕の村では、っ！！」

ガスツラサに足をおもいつきり踏まれた。

「この子は、まだ14才だからまだ戦場には行ってないだって」

「なら学校には？」

「学校は、特別に休んでいるんだって、15になったら自由に旅なんて出来ないでしょ。」

だから今のうちにあっちこっち旅をするんだって」

「そうなんですか。大変ですね」

コクコク、首を縦に振った。正直話しているよりもラサに踏まれた足が痛かった。

「いつまでこの村にいられるのですか？」

「あさってまで」

ラサの話だと後今日含めて4日、村にいられると聞いた。

「そうですか、この村にはなにもないですがゆっくりしていいってくださーいね。」

どうやらコウには、僕がまだ14才だと本当に信じたらしい。そしてコウの精神は、僕より年上だと思う・・・

明日旅立つコウに挨拶が終わったので僕たちが立ち去ろうとした

「あ、そうだ。」

コウが急に呼んだ。

「後この辺は、おいしい肉が手に入りますよ。なんだか知っていますか？」

手の上につている肉をさした。見覚えがあった。

「この肉とてもおいしいんですよ」

食べてないがわかった。

「トカゲでしょ」

「知っていたんですか。もう食べましたか？」

「いえまだ食べてないですよ」

「食べていないのに？」

どうやら僕は、コウと話していると疲れるようなのですぐにでも帰ることにした。

「どこ行くの！」

ラサに腕を掴まれて帰るのを止められた。

「この子すごいよ。だって今日祭用の肉を取りに行くとき、トカゲに囲まれたとき助けてくれたんだよ」

「本当ですか？」

「ええあなたが食べているその肉も彼がいなければ食べられなかったよ。」

「そういえば、さっき救難信号が確認されて村の人達が遺跡に向かったといっていましたがあなたでしたか。」

たしかに村じゅうの男達全員が集まっていた感じがあった。

「あのときは、仕方がなかった。」

「いくら危険なところでの作業でも仮にもあなたも、村長の娘ですよ。場をわきまえなきゃ」

「わかつているわよ！！」

怒ってどこかに行ってしまった。

「あっ」

追いかけようとしたが、舞台の下で踊っている人込みの中に入ってどこに行ったかわからなくなってしまった。

「すいませんね、旅人さん。ネエさんは、いつまでたってもかわらないんですよ。」

「昔から？」

「ええ、そうです。危ないことでもすぐに首を突っ込みたくなるし、それにいつも私を誘うのです。おかげで何度も危ない思いをしたことか」

「・・・・・・・・」

今日遺跡であつたことが頭によぎる。

「後ネエさんは、この村に来る前一人で旅をしていたそうですよ」

「魔物がこの村を襲った後？」

コウは、驚いた顔を見た。

「この村に詳しいですね。誰に聞きましたか？」

「ラサさんに」

「そうですか、ネエさんがあなたに言うから多分あなたのことを信賴しているんですね」

「（遺跡であんなことがあればね・・・）」

「何かいいましたか？」

小声で言ってしまったらしい。

「いえなんでも」

「そうだ、名前を聞いていなかった。あなたの名前は？」

（リュウキ）というべきか言わないべきか、でも言わないとかえって怪しまれるな

「名前は？」

再度聞かれた。忘れたと言ったらかえって怪しまれる。

「リュウキ」

「私は、カミナカ コウキです。字は、読み方を変えるとウエナカ・・・・わかりにくいから下に書きますね。」

コウキがいうと地面に名前を書いた。

上中 幸樹

「幸ある樹・・・いい名前ですね」

「ありがとうございます。そういえばリュウキさんの名前は、何と書くのですか？」

しまった。そのことまで考えてない・・・

「漢字は使わなくてカタカナです」

とつさに嘘をついた。名前自体嘘だが

「そうですか。あなたの村では名前に漢字を使わないでカタカナを使うのですか」

「いえ、僕だけ特別で」

「いい名前は何歳でしたっけ？」

「15・・・いや、14です」

「そうでしたね。すいませんねさっき聞いたのにまた聞いてしまつて」

あぶないあぶない。このままコウと話していたらいつか、僕が脱獄兵だといつてしまいそうだ。

「ハハハ、よくあることですよ。」

「ところであなたは、本当に徴兵前ですか？」

「ええ、まだ14ですから。」

今気付いたことがある。嘘をつき続けることがこんなに難しいことなんて・・・

「まあ、あなたが実は、15のことは、みんな薄々気付いているみたいですけど」

「・・・」

脱走兵のことがばれたらどうしよう・・・

僕は、ただそれだけを考えていた。

「リュウキが脱走兵だとしても、そうでなくても、あなたは、今の村のゲストよ」

後ろから声がした。

振り返るとラサがいた。

「オーイ、コウキいつまで話しているんだ。出番だよ。あ、村人さんゆつくりしていつて」

ラサがコウキの父さんを連れて来た。お酒を飲んでいるせいか、頬つぺたの辺りが赤く染まっていた。

「しかし、さつきは驚いたよ。救難信号があつたから駆け付けてみたら煙の中からトカゲ達が出て来て、それからおまえさんが出て来てさーてつきり食われた残骸かと思ったよ。」

「お父さん、出番は何？」

「アー肝心ことを忘れるところだった」

暢気な人だなと思った。

「明日から戦場だからその前にほら、あれまい」

「武舞？」

「そ、それおまえ武舞が得意だろ。最後に見せてくれよ。」

「うーん」

悩んでいるようだ。僕なら最後だから見せるのに……

「武舞？」

「この村に伝わる戦いの前にする舞のことよ」

「ほらラサさんに会えるのも今日が最後だろ」

「5年後にまた会える。」

「5年間も会えないだろ。それに旅人さんも来ていることだし、ネ

エ旅人さんあなたも見たいよね」

「ええ……」

いきなり話をふられたので思わず言ってしまった。

「仕方がないか……」

このお父さんどこかで見たと思ったら、この村に入って初めて入った食べ物屋さんの店主だ。

コウは、渋々立ち上がると前に進み舞台に上がった。すると急に静かになった。

お辞儀をして腰にある剣を抜いてかまえた。

トン、スツ、剣で風を突いた。トットン、サツ、あたかも敵がいる

ように剣を振った。

僕の村で見たことがある。空手で言うなら演技の「型」というものだろうか・・・ただその武舞は、綺麗でかっこよかった。

そして、お辞儀をして終わった。

「ふー終わった。」

コウの演目が終わって帰ってきた。ラサに話を聞くと、この武舞はもとから祭りの項目で決まっていたが、祭り自体時間の厳しいものでないから遅くなってしまったと言う。

「かっこよかったよ」

ラサが小声でコウに言った。だが、コウには聞こえなかった。

「ところでリユウキさん、さっきあなたに聞きそびれたがあなたは、もしかして」

「お前いつもより上手くなったな」

いきなりコウの父親が話しに入ってきた。

「旅人さんは、何か考えがあつてこの村にきたんだからあまり困らしていけないよ。それに誰にも聴かれないことはたくさんあるんだ。」

「・・・・・・」

コウは、黙ってしまった。もちろん僕も何も言えないけど・・・

「コウ、他の人全員に挨拶した？」

「していないけど」

「じゃこれから行こう」

「だけど僕がこの場から離れるのは・・・」

「大丈夫、みんなお酒で酔っているから気にしていないよ。それにこのままだと挨拶も出

来ないまま別れる人もいるよ。」

「しかし・・・」

「行くよ！」

コウは、ラサに引っ張られてどこかに連れられてしまった。

「僕は・・・」

呼んだときは、もう遅く舞台に取り残された。

「ラサちゃんは、本当にアクティブだね。」

コウのお父さんが話して来た。お母さんは、どこかで話しているのか姿が見えない。舞台に僕とコウのお父さんだけが残された。

「初めて会ったときもこんな感じだったけど」と

といいながら舞台から下りてしまい。僕だけが舞台に取り残された。一人だけになりここにすることが恥ずかしくなり僕も下りた。

お酒を飲むわけに行かないし、眠くなったので家に帰ることにした。しかし、せっかくラサが祭に誘ったのに無断に帰ることは良くないと思い。ラサを探すことにした。

しかし広場を探してもラサとコウを探すことは出来なかった。祭は始め広場限定だったが今では村全体に広がっていた。今日来たばかりの僕には無理なことだ。

「どうしょ」

急にトイレに行きたくなった。僕は、トイレに行くことにした。公衆トイレは、広場から離れていたがわかりやすいところにあった。

迷わず行くことが出来たので前にも来たのかも・・・

用を足していると後ろから見覚えのある人がきた。コウのお父さんだ。だが気分が悪そうで顔色が悪かった。軽くこちらを見るなり急にトイレの個室入り、いやな音が聞こえた。しばらくして出て来た。だいぶ顔色が良くなっていた。

「大丈夫ですか？」

「えつと君はラサちゃんといた・・・」

「リュウキです」

「あーあー思い出した、見苦しいものを見せてしまったね」

「いえ、大丈夫ですか？」

「ダイジョウブ、ダイジョウブ、今スッキリしたから、君も経験ないの」

「は・・・」

おじさんは、酔っていた。

「そつかあ君は、まだ15だもんね」

「えついいえ僕は、まだ14でまだっ」

危ないところだった、このままうっかり僕が脱走兵だと言いつづになつた。

「いや、いいんだよ。村のほとんどの物が知っていることだよ」

「違います。僕は」

「何が違うんだ。」

「うッ」

「みんな知っているよ。君が脱走兵だと」

「・・・・・・」

もし、本当にばれていたらどうすればいい。村からにげるかでも逃げてもまだ鞆を見つけていない。どうすれば・・・

「おそらくラサちゃんになにかを言われたんだろう。」

「ラサさんには、何も」

「鞆忘れただろう」

「もしかして」

「ああ、村長の家にあるよ。君に悪いけど中も見せてもらったよ。」
「最悪だ・・・コウのお父さんを倒すかでも今の僕には、そんなことが出来ない。」

「その様子を見ると図星か・・・丸腰だろう変なことを考えるな」

「うかつだ。祭だからといってナイフを置いとくべきではなかった。ガタン」

「フイッ飲み過ぎた。全くトイレが多くなっちまう。よう今日の大將」

「ああどうも、今日は、せがれの旅立ちを祝って頂きありがとうございます。さいます。」

別の村人が入って来た。

「ここで立ち話をするのも何だ。場所をかえよう。」

コウのお父さんは、僕と一緒に村を出た。

「君は、近くの村から来た、脱走兵違うか？」

「聞いてどうする？」

「どうしようもないさ。だって君は、村長の娘の命の恩人だろう。それに君の活躍を見て追いついたりしないよ」

「……」

「なぜこの村に来たの？」

「僕は、旅の途中で一番近い村がここでまだ一度も来たことがないから来た。」

「じゃもしここに村がなければ来なかった。違うか？」

僕は、首を縦に降った。

「普通、満15歳になったら徴兵されて戦場に行かないのかな？」

「僕の村では、自由に決められます。」

「普通戦場に行くか、進学する以外ないと思うんだけどね」

「僕の村では、旅を選択することが出来ます。」

「将来苦しい思いをするかもしれないのに？」

「はい」

「旅か、なるほどだからラサは……」

「？」

「私は、君のことを勘違いしていたようだね」

「??」

「てつきり君は、国の諜報関係かと」

「違います。僕は、どこにでもいる旅人です。」

「私の息子も君の村で育っていたならハバな」

「？」

「少し長話になるけどいいかな？」

首を縦に降った。

「この村ではね、絶対に15の男を戦場に向かわせないといけないだよ。さもないと悪魔が来てしまうからね」

「悪魔？」

「君は、もう会っているはずだよ。近代遺跡で」

「あの旧コンクリートジャングルにいた。」

「そいつのことだよ。以前この村では、誰もが徴兵制に反対していた。だから誰も戦場には、行かなかった。」

今この村で考えられないほど反対考えがあった。人が人を殺すべきではないとそのため税金が上げられ政府の補助が止められてしまった。だが村人には、誇りがあった。この村には、人殺しが一人もいないと・・・しかし、そのかことを諦めざる自体が起きた。魔物の大量発生だ。そして、鬼の村襲撃事件だ。その結果多くの子供達を失った。そして今の村長が国に対し様々な補助を求めた。しかし国は、徴兵制に反対の村に補助出来ないといい。税率の引き上げを求めた。仕方が無く子供達を徴兵出した。その結果、税率が下がり災害見舞金が支払われ、そのおかげで村の防衛資金に回されて魔物に襲われなくなった。そして新しく大きな学校が出来た。今まで親達子供達を集めて交代で教えていた。だが新しい学校が出来て新しく先生も来た。始めはいいことづくしに思えた。しかしその考えもすぐ壊れた。それは、ある日に子供が言ったことである。「僕は、15になったら戦場にいつて強くなってこの村には帰り魔物を退治する」・・・

「と私の子供が誇り高くいうのですよ。」

「学校のせいで考え方が変わったのですか？」

信じたくなかった、学校のせいで村の考え方を変えてしまうことを僕は、学校のおかげ様々なことを知ることが出来た。そのおかげで旅をすることを決めたのだから

「話は、戻るけど実は、息子コウは、三男なんだ。5年前の出来事で兄弟がいなくなってしまうって」

「だけど戦場に行くことは」

「あの襲撃は、国が一つかんでいると思うんだよ。だから徴兵制を認めたとたん急に魔物が襲われなくなった。」

「じゃ何故この村を出ないんですか？」

「村に魔物を呼んでしまったことは、この村の大人達に原因があるんだよ。だから魔物を放置して村を出ていつては、いずれこの辺の

魔物が周辺の村を襲う。だからさ」

「・・・・・・・・」

何も言えなかった。

「だから君みたいな者を村に入れなくなかったんだよ。」

「じゃなんで僕を祭に・・・」

「ラサを助けたからさ」

「・・・・・・・・」

「暗い顔をするな。今日は、祭りなんだから祭に戻るよ」

考えていたら、先に帰ろうとしていた。

「は、はい」

複雑な気持ちで村に戻った。

村にはいるとすぐにコウとラサを見つけることが出来た。僕は、見つけるなりすぐに二人のもとへ走っていった。また見失わないように

「やっと会えた。」

本当の感想だった。

「えっ探してたの？」

「少し」

実際は、違うが

「それは、悪いことをしてしまったね。この村には、寝たきりの人がいるからその人に挨拶して回ったんだけど、君も連れていけば良かったかな？」

「いや、僕が君の挨拶周りについていくのは・・・・」

確かに村に関係のない僕がコウと一緒に挨拶周りをすることは、おかしい。とにかくラサに会えて安心した。今日一日本当にいろいろあった。疲れたので家に帰るために・・・

「いない」

用件を伝える前にラサとコウがどこかへと消えてしまった。

「しまった。」

また僕は、二人を探すことになった。それから僕は、村じゅうを探

さなければならぬ使命感につかれた。しかし、たえず移動している二人をやみくもに探すこと奇跡だよりだ。そこで祭の中心でひたすらに待つことにした。

祭の中心では多くの人が踊っていた。しかし多くの人が夫婦で踊り、当然だが10代同士で踊っている人はいない。当然のことだ。年頃の男はみんな戦場に行ってるから・・・

祭の舞台にコウがいることに気づいた。コウがここにいることは、挨拶回りも終わってラサも近くににいるわけだ。

「だーれだ？」

不意に景色が奪われた。聞いたことがある声、聞いたことがある人の手が目にあって見えない。こんな古典的なことをしようとする人は、一人しか浮かばない。

「ラサさん、やっとこれで家にー」

「アツタリーごめんねーおいていつて」

目を隠していた手は、僕の腕に変わり、祭りの中心部へと引っぱられた。

「僕は、もう」

「眠い意から帰るなんて言わせないよー」

かんがえている事がばれてる。それにラサの顔が少し赤らんでいる。どこかでお酒を飲んだのだろうか？

「さ、おどろ」

「僕は、踊ったことがないんだけど」

「きにしない、きにしない、」

僕は、ラサに両手を固定されてくるくるその場を回った、明らかにこれは踊りというものでない。ある程度回った後、ラサの様子が変わった。お酒飲んだ上にくるくる回ったので酔ったのだろうか？僕は、どうすればいいのかわからなく、舞台の上にいるコウを見たが、かわいそうな目でこちらを見ていた。

「どーこみてんの？浮気ものー」

「浮気もの??大丈夫なの？」

「ふつかーつ、今日は、踊り明かすわよー」

僕は、わかった。人によってのお酒の怖さを・・・

それから僕とラサは、周りを見おろしてみねで踊り続けた。そのときラサが「ハハハハハハ・・・」と笑い続けていた。あまりにも笑うもので僕もつられて笑いながら踊った。

途中おなかがいっぱいだったので、踊りをいったん止めて、祭りの外側にあつたお皿の上に適当に盛り付けられていた肉を食べた。おいしかった、途中でできがついた。これが、さつき会ったトカゲの肉であることを・・・空を見上げた、いつも自分の村で見ているよりも星の数が少ない。たぶんキャンプファイヤーの光が強すぎて星が見えないのか・・・!?

「また、ラサがいない。はー」

舞台の上を見た、コウとラサが見えた。僕には、彼女と呼べる人がいないため恋愛をしたことがない。だが、ラサがコウの事を好意を持っていることは、なんとなくわかることができた。僕は、ここにいていいのか？ふとそんな気がした。古い時計台を見るともう深夜12時を指していた。机の上にあるコップにジュースが入っている容器を注ぎそれを一気に飲み干し、帰ることを伝えにラサのところへと向かった。

「・・・に・・・ら・・・れ・・・?」

「な・・・を・・・だすの、これは、・・・だ」

「だって、・・・に行ったら・・・のよ?」

「大丈夫だ。・・・なぜとめる」

ラサとコウがなにかもめている。距離があつて何を話しているのかわからない。コウのお父さんが、舞台の近くで聞いていた。

「コウさんは、どうしたのですか?」

「よくあることだよ。邪魔してはいけないよ。」

そついうとコウのお父さんは、舞台から離れていった。

「バカ!!」

ラサが叫んだ。周りを見たがほかの人は、踊りと酒に夢中で気づいていない。このままにしておけないと思い。ラサの元へ急いだ。舞台に駆け上がるとラサが泣きながら舞台から降りていった。

「コウ！ラサさんに何を言っただんだ！」

コウは、わけがわからず啞然としていた。

「ラサさんが明日急に戦場に行くなといったんだ。だけど私は、村の掟だから仕方がないといったら・・・」

僕が啞然とした。ラサさんの気持ちがわかっていない。だけど僕が言うべきか？

「私は、何か間違っているのだろうか・・・」

不意にさつきコウのお父さんが言ったことを思い出した。徴兵制を断ると鬼が出ることを・・・

「何も間違っていないよ。なにも」

僕は、ここにいていいのだろうか？今頃鬼は・・・そんなことを考えるときではない。

「僕は、ラサさんを探してくる。」

「あ、はい」

コウは、本当にラサさんの気持ちがわかっていないようだ。教えてあげようか。いや今は、そんなことをしているときではない。

僕は、すぐに舞台を降りラサさんを探した。コウのお父さんが急に僕の腕をつかんだ。

「僕は、今すぐラサさんを探さない」と

「ありがとう」

「？」

「ラサちゃんならあっち丘の上に行ったよ。彼女のお気に入りのところだからね」

コウのお父さんが、村の裏にある丘を指した。サイレント・ヒル「ありがとうございます。」

「こちらこそありがとう。おかげでコウの気持ちが揺らぐことなくすみそだよ。」

「？」

「早く丘へ」

「はい！」

裏の丘へ走った。丘には、すぐに行くことができた。陸の頂上の木下にラサがいた。

「ハア、ハア、ラサさん」

「ハー君か、来たのは、てっきりコウが追ってくるか思っていたのになー」

「え？」

「泣きながら走れば、普通追いかけてくるもんでしょ。男の子はしまった、僕ではなくて本来コウがここに来るべきだった。」

「まあ、村人のことだから本当にコウが追いかけてもあの親ばかの親父が止めるけれどね」

「え？なんで」

「掟だから」

「知っててなんでコウの明日の気持ちを鈍らそうとしたの？」

「……………」

「……………」

沈黙が続く……まずいことを聞いちゃったかな？

「わたしーふられたのかな？こくはくしっぱーい」

「……………」

さつきから頭が痛い。考え過ぎかな？

「コウの本当の気持ちを知リたかつたのでいつか、君が来てくれたから……リュウキは、村を出たりしないよね」

「……………ない」

「ん？」

「僕は、旅人だからこの村にいられない。」

「そっか」

「みんな消えていくのよね。別の世界へと」

「コウは、5年後また会えるよ」

「5年後ねー、そういえば私の昔の話をしたっけ」

「いや」

戦場孤児としか聞いていない。

「私の村ではね。魔法でもなく機械でもない中立の村だったの、でも機械の国に急に攻められて地図から消えちゃった。」

「家族は・・・」

「墓の中よ。」

「・・・」

「でも、弟だけ奴隷で連れさられた。」

「じゃまだ生きているかも」

「無理よ。奴隷兵が特攻隊もしくは、金持ちのいいおもちゃにされてもついないよ。魔法も体力もろくになかったし」

「！もしかして、その弟の名前は、」

「リュウキよ。漢字は、いろいろあったから覚えてないけど」

ナイフに書いてあった名前、僕のお父さん、でも年の差が離れている。

「来てくれてありがとう」

顔が近づく、僕は、思わず顔を背けた。僕の頬に・・・

キスされた、初めて・・・

「村に戻るうか」

景色が揺らぐ。さっきお酒を飲んだからそれともいま・・・・・・意識が保てない。

バツサ、僕は、倒れた。ラサに覆いかぶさるように

「えーどうして、ねーどうしてこのタイミングで」

・・・・・・

それから僕は、ラサさんに方に腕を通おされながら家まで運びと翌朝散々聞かされた。

「男の子のくせいに」と・・・

1部より 第4幕 「トカゲの涙」

ドン、ドン、ドン何かをたたいている音がする。

目が覚めた。見たことない天井が見える。

「暖かい・・・」

布団の中にいることがわかった。ここはどこ？昨日丘の上で倒れて・・・それからどうやって・・・

しだいに目が覚めて頭が冴えていく・・・時計を見ると短針が7時を指していてとくに日が昇っていた。

ドンドンドン、何かが近づいてくる。何かがわかる。動かないとでも頭が痛い・・・

ガタン、部屋のドアが開いた。

「起きないと」小声で言った。

グワン空を待った様な気がした。

ドス、床に落ちた。ベッドの片方を持ち上げられ、転げ落ちた。

「いたたた」

「早く起きろ、この変態」

昨日と同じ気がする。ただ今日は、ラサが怒っていること

「昨日何かしたっけ？」

ラサの目が鋭くなり、ベッドの反対に周り思いつき足回した。ガッツ、勢いよくけられた。

「いたい」

「思い出した。」

「昨日お酒を飲んで倒れたことで運んでもらったこと？」

「それもよ。他に！」

キスされたことかな？それとも他に・・・

「えーとー」

ラサの顔が見る見る赤くなり、そして

「この変態がーーーー」

ガツツーン右ストレートが僕の左頬に炸裂した。昨日トカゲに食らったどんな技より強い。

意識が・・・遠のいていく・・・

「ねるなー」

続いて左ストレート、完全に目が覚めた。

「あー痛い」

昨日の記憶が少し飛んだ。

「行くよ！」

「どこへ？」

「そこまでぼけていると、本当に殺すよ」

「は、はい」

死の恐怖を感じた。とりあえずついて行くことにした。服は、昨日のまま寝てしまい、よれよれだけど仕方がない。父さんからもらったナイフを腰に差してか歩く髪を整えてた。

「早くして」

ラサにせかされたので細かいところを直さないで一緒に家を出た。今日ラサは、本当に機嫌が悪いみたいだ。

村の来るとき来た、入り口につれられた。多くの人がいた。

「この村には、どれくらいの人がいるの？」

「ざっと300人ほどよ」

「ふーん」

僕の村では、80人ほどだからこの村は、僕の村の3倍以上となるわけだがその300人全員がここに集まったきがした。昨日の祭りでは、暗くて遠くまで見えなかったが今日、晴れて見晴らしがいからか多く見える。やはり15以上20以下の男を見付けられなかった。

車が来た。軍用車・・・徴兵徴集用の

僕は、車が嫌いだ。村に車はなく自家用車という言葉がないそもそも村には燃料がない。たまに物資を運びに来るが、たいていは、徴兵のために来ることが多い。来るたびに人が減っていく・・・だ

から車は嫌いだ。それに排ガスもくさいから乗りたくもない。これが本当に徴兵をやめた原因かもしれない……

「今日の主役のお出ましたー」

誰かが叫んだ。みんなが見るほうを見るとコウがいた。軍服を身にまとい、畏怖堂々としながらこちらに車に近づいていく。そして、車に乗る寸前みんなのほうに向きを変えた。

「私、村上幸樹は、名前のとおり幸せの樹になるべく戦場に行き村の恥にならないように戦ってきます。みなさん今までありがとうございます。絶対に戻ってきます。」

車に乗るとすぐに車は、戦場へと走り去っていった。

「かつこよかった。」

ラサは、惚れ惚れしていた。

「そうかな？」

戦場に行き事を拒んだ僕は、戦場に行く行為がかつこいのかどうかわからないでいた。

「戦場に行かない人には、わからないよ」

冷たい目でこちらを見た。視線がいたい。

「さあ、これから狩りに行くよ」

「今から？まだ朝ごはん食べてないけど」

「働かざるもの食うべからず」

「だけど……」

「だけでもここのない」

「あつ、かばん返して」

「かばん？」

「昨日村に来たとき持っていたかばん」

「あーああれね」

「返して」

かばんが帰ってくれば、記憶が戻りそうだし、何より食料もあり、朝ごはんが食べられる。

「ダメ」

「なんで」

「かばんを返したら今にもこの村から出ていちゃうでしょう?」

「出で行かないから」

「やだ」

「じゃ村長に頼んで」

「無理だよ。かばんの件は、私に一任されているから私が持つているよ。」

「そんな・・・」

「ハイ、狩りにいくいく」

僕は、ラサに連れられて、昨日行つた、遺跡にまた入ることになった。

しかし遺跡では、トカゲすら見つけることが出来ず、何も収穫がないまま村に帰ることになった。

「はぁ - 疲れた。」

「何で昨日は、沢山いたのに今日にかぎっていないのよ - 」

その後おそめの朝食をラサが食べさせてくれた。あのトカゲの干物だったか・・・

御飯が食べ終わり一段落するとラサがまた遺跡に行こうと言い出した。断ろうとしたが、かばんを返さないと言うので行くことにした。

「コウ戦場で頑張っているかな」

「見送つて2時間しかしていないから車だと思つよ。」と言いつうになつたがラサの機嫌を損なうと思ひ言わないようにした。

また、遺跡へ目指した。

「今度こそ探してやる。」

後何回この道を通るのだろう・・・

「リュウキ聞いている」

「えっ?」

「ほら聞いてない。せつかく子に村でご飯食べさせてあげているの

だからしっかり働いてね」

「わかってる」

ラサは、狩りに意欲的だが僕は、人間になりそこなったようなトカゲそれも子供を殺すなどしたくなかった・・・

「見て誰かが来た」

ラサが指をさしたところに人が怪我をしているのかおぼつかない足取りで村に向かっていった。

「怪我してるね」

「そうだね」

見てすぐ怪我をしていることがわかった。

「どうすって」

ラサは、僕が聞く前に向かっていった。だが僕は、助けに行くことにためらった。軍服を着ていたからだ。

「大丈夫ですか？」

ラサは、相手のことをお構いなしに近づき助けようとした。

助けるべきか、それとも軍人から逃げるべきか・・・

「リュウキー早く来て」

見捨てるなんて出来ない。僕も倒れている人のところへ走った。

「どうしんですか」

どこかで見たことのある顔だった。

「まもの、魔物が襲ったんだ。」

「まもの？どんな」

「見た事がねえあんな鬼みtainな獰猛な・・・」

「ほかの仲間は、」

「わからねえ俺は、新兵を運んでいただけなのに」

「新兵って」

「すぐそこの村のだ」

僕たちがいた村をさした。

「・・・コウキ・・・もしかしてその新兵は、幸樹じゃないでしょうね」

ラサが軍人の胸ぐらをつかんだ。

「落ち着いて、相手はけが人だよ」

「そつだ確か名前がそつだ」

「・・・・・・」

「とりあえず町まで行こう。怪我しているみたいだし」

「うそだ・・・ありえない」

僕は、軍人さんを村まで運ぶために腕を僕の肩に乗せ連れて行くことにした。

「魔物が多かった。単に出くわしたんじゃないおそらく村の畑だ。ほつとけないからここに来たんだがな。」

「なぜそこまでして？」

「やつらは、車にぶつかって車を倒したてそのまま俺たちを無視していきやがった。そんなときは、新兵も元気だったんだけどな」

「じゃいつどこで別れたんですか？それにこんな怪我を」

「その後、鬼は来た道に村に向かっていることがわかったから走ってむらにもどることに、新兵のおかげで鬼より早く村にもどれそうだった、しかし今度は、変なトカゲに囲まれて」

「じゃ早く村に戻らないとラサ、村に戻ろう」

「・・・・・・」

「ラサさん！」

「・・・・・・」

「コウさんなら大丈夫だよ。トカゲなんかになんか・・・」

「早く行つて」

「えっ？」

「鬼たちが来た」

遺跡で見たときより、3倍近い数で押し寄せてきた。

「あんな数無茶だ」

「早くこのことを村に知らせなさい！！」

「でも」

「解っているわよ！こんな数を相手しろなんて！！でもさここで止

めないと村の準備が間に合わないからさ」

「・・・・・・」

「早く行つて!!」

「すぐ戻るから」

僕と軍人さんは、急いで村に戻ることにした。ラサは、僕たちが見えなくなるまで見守っていた。

「さーてやっと会えたね。久しぶり」

かばんから大きな剣を取り、鞘を投げ、鬼なかへ走りこんだ。

僕は、出来るだけ早く歩いた。村まで20分もかからない距離だ。

でもそれは、けが人を運んでないで一人で歩いてかかる・・・・間に合うか・・・・間に合え

ダーンツ、音がした。爆発もしくは花火みたいな、

「発光信号だ。急いで早く村に、うつ」

「大丈夫ですか？」

「ああ、誰かが鬼の大群に気がついただろう。うちの早く」
「はいっ」

「オーイ」

「ッ！」

人の声がした。声をしたほうを見ると狩人がいた。村のほうから聞こえたので村人だろう。

「鬼が近づいているが大丈夫だったか？」

村人が僕だとわかり来てくれた。

「ええ、でもこの人が」

運んでいる軍人を見た。

「大丈夫か？」

「なんとかな、でも魔物が近づいてるあれは、何だ？」

「人食い鬼だ。最近収穫の時期だからそれを狙って村に下りてくる。とりあえずあんたを村へ運ぼう。」

「助かる。」

軍人さんが礼を言った。狩人さんは、僕より力があり、僕が運ぶより早く運べそうだ。「ラサさんがまだ遺跡にいるので向かいに行きます。」

「ラサちゃんがなんで一緒じゃなかったのかい？」

「足止めすると言って遺跡のほうへだから迎えに行きます。」

「何だつて全くあの馬鹿は、思い上がって・・・」

「軍人さんをお願いします。」

「ヤツ待て」

「えっ？」

「今は、行くな。あぶないから」

「でも」

「でもない。ラサちゃんのことだおそらく何か考えがあるのだろう。それに今行くと間違いなく死ぬぞ。」

「だとしても」

「いいやいくな。今村には、沢山子供がいる今は、その子供達のために村を助けてくれわかったな」

「・・・はい」

僕は、ラサを助けに行くことをやめ、いったん村の防衛の手伝いをした。

村では、男達の勇ましい声がした。

「子供達を早く学校へ」

「家財をまとめたらいっただん学校へ」

「早くしろ」

狩人にすすめられ僕も学校に行くことにした。小さな学校だがここだけ作りがしっかりしてまさに要塞にうってつけた。

どこに行けばいいのかわからないので避難所の教室へ向かった。しかし避難所には、女性と子供しかいない。またラサさんを置いて自分だけ安全なところにいるのも気が引ける。そこで村の防衛の指令部みたいな職員室ところへいった。

ここに来たことはないが建物の作りが僕がいた村の学校と同じ作りになっていた。

そこでラサさんを助けに行きたいといったが案の定つまはじきされ校門の防衛に回された。

学校は、門一つしかなく周りをゆうに3メートルの高さのコンクリートで覆われていた。僕は、幼い頃からボールが外に行かないためだと聞いていたが防衛の要になることに気がついた。

ただ一つ気になることは、学校の門番が僕合わせて3人しかいないことだ。それが気になり門番に聞いてみると

「鬼は、たいてい畑に向かうからここを守る必要はあまりないけど万に一つがあるからね」

と笑っていた。

ダーン、ダーン、爆音がする。

「あれを見てごらん」

門番が指した。指すほうを見ると赤い煙が二つ見えた。

「一つ目は、適来襲だけでもう一つは、なんだ？」

横の人も「さあ？」と首を降った。

遠くに鬼が見えた。数は、ゆうに50を超える。いつ見ても気色悪い。

「来ました！」

「えっ畑は、向こうだけど・・・なんじゃありゃあれは、鬼じゃない！」

横の人も慌ててみる。

「ホントだ。しかもみんなこちらを目指してるぞ」

「おいボウズ早く畑にいつてみんなをこちらによこしてくれ」

「でも僕は、畑がどこにあるなんて知らないけど」

「あっちだよ。あの道を右に回って真っすぐ行けばある」

門番がさした。

「俺達は、早く本部に知らせてくる。早く行け」

「はっ、はい」

言われたとおり畑を指し走った。道を曲がると鬼がいた。周り道している暇はない。

ナイフを鞘から出して突っ切った。

鬼は、前にあったときと同じで動きは大振りでかわしやすくナイフ、一回振るだけで十分に倒れていった。僕は、鬼を倒すことが出来たが力の女性や子供だったら・・・考えたくなかった。だから倒した鬼には、目もくれず畑を指した。

学校から離れるに連れて鬼に出くわさなくなった。今回攻めて来た魔物は、すべて学校を狙ったのだろうか？それとも・・・畑が見えた。

畑の回りを鉄条で囲んでいた。

「開ける - 大変だ -」

見張りが僕のことに関心し鉄条網のバリケードが少し開いた。僕は、その中に駆け込んだ。

「おいどうした。息を切らすほど走って？」

「ハア、ハア、鬼が学校のほうへ、ハア、ハア」

「何だって？」

「それは、本当か？」

「守り手が少ないので早く来て下さい。」

「いやちよつと待てあれば陽動かもしれない。今みんなで行けば今年も畑が壊滅するぞ！」

聞いたことのある声、幸樹のお父さんだ。

「だとしても行かないわけには行かないだろ」

「でも今年も畑がダメになったら」

「なんで食料を狙わない」

「家族が・・・」

「見る、学校のほうから救難信号」

学校から赤い煙を出しながら落ちる弾見たいのが見える。

「こいつの言っていることは正しいんだ。」

少し混乱状態になった。

“ピーっ、こちら学校司令部！鬼がこちらに向かっているすぐに支援を

ワッ”

学校からの救難信号とスピーカーの悲鳴に似た声だ。混乱した。すぐにここを指揮している人が来た。たしか祭で村長と呼ばれていた人だ。

「全10班の内1から7班まで向かわせる。」

「そんなことしたらこの防衛が・・・」

「人がいて村が出来る。だからここを捨ててもみんなを守れ。早く行動！」

命令が伝わるとすぐに人々に動き始めた。僕は、ここでラサのことを村長に言うべきか迷っていた。しかしその前に村に戻って鬼退治の手助けをすることに決めた。

村へ向かおうとするメンバーに僕が入っていると後ろからコウのお父さんの声が聞こえた。

「君は、いくな」

「なぜですか今村では」

「今は行くな。学校が戦場になるんだぞ」

「わかっています。でも」

「ところでラサちゃんは？いま学校？」

「ラサさんは今森の中です。」

「え？もしかして置いてきたの？」

「けが人がいたから僕が運んでラサさんが足止めすると・・・」

パーン、左頬を叩かれた。痛い

「じゃまだラサは森で戦っているのか？」

「わかりません」

あの数の鬼だ。もしかしたら・・・

「バカ」

右頬に殴られ後ろにとんだ。

「痛い何するんですかー」

僕は、右頬をさすりながら立とうとした。

「おまえはよく女の子を一人にしてのこのこ帰れたな！」

「しかたがなかった」

「言い訳をするな」

殴られそうになり思わず目を伏せた。

しかし殴られなかった。別の人が助けてくれた。僕は、腰が力が抜けて立てなかった。

「ここで怒っても仕方がないだろ。今は、早く村に向かうべきだ。」

「そうだな」

「怒ることは、後回しだ今は村に早く行くべきだ。」

「わかった。状況は？」

「1〜5班がもう向かった。うちら7班もすぐに出発するから早く来い」

「了解。おいおまえは、ここにいろわかったな！」

僕には、拒否権がない。

「わかりました」

小声で言うと言えたのかはわからないけど村に向かっていった。

「運が悪いな。おまえは、嘘でもつけば良かったのに」

誰かが慰めてくれた。声の主は、村長だ。さっきの声が違ったのですぐにはわからなかった。

「ラサは、気が強いから一緒に担いでくれば良かったのに」

「……」

「鬼というのはトカゲではないのだろうか？」

「はい」

「……そうか、それで」

僕は、言っている意味がわからなかったので村長の顔を見上げた。

「昔になその鬼に襲われたのだよ。それからラサが来た。そのことはラサに聞いただろ？」

「はい」

「そのことでラサは、責任を感じているのだよ。自分が鬼を呼んで

しまったとだから鬼を退治したいと時々遺跡に入っては、救難信号だすんだよ。全くだ」

「けどなんで僕を呼び止めたのですか？」

「・・・それは、多分昔ラサがいた村に弟がいてな、もし生きていたらおまえと同じ年だろう。その面影が重なった・・・これ以上は、よそう」

「えっ？」

「ラサは、あまり自分のことを話さない。もし本当に聞きたいなら自分で聞きなさい。」

「わかりました」

「あなたは西門、向こうのの防衛をお願いします。もしあなたがいう鬼が来たのなら教えてくださね。まあそこは、遺跡と村から離れているので安全ですが念のためです」

村長の顔が優しくなった。

「はい」

「私は本陣に戻ります。日が暮れたらおそらく鬼も帰るでしょうそれからラサを探しますか。ラサのことだから多分遺跡で隠れているから安全でしょう。」

言葉では優しいことを言っていたが実際に聞いていると今にも助けに行きたい気持ちでいっぱいであった。

それから日が落ちるまで西門の前にいた。とうとう鬼は畑まで来なかった。

ヒューッ、夕日になるにつれ風が吹いた。また季節が2月だから木枯らしかな？と思っていたら、後ろで慌ただしくなった。

振り向くと黒い煙が見えた。

「火事か？」

「火事だ」

本陣が慌ただしくなる。

「一体誰が・・・」

本陣から一人駆け降りてく来た。

「大変だ。トカゲが西から畑に火を放ちやがった。消火を手伝ってくれ」

「わかりました」

畑に向かう直前後ろから気配がした。目の前にシルエット前に飛ぶガスツ、教えに来た男が倒れる。あいつはア

「トカゲ」

トカゲは、僕を倒そうと斧を持ち上げた。すかさずナイフを鞘から出しながら近づきトカゲの腕を切り落とした。

「ハアハア」

「ギヤー・ス」

腕を切り落とされた、トカゲは、呻き声を上げながら騒ぎ出した。当然のことだ。腕を切り落とされたのだから・・・

「ギヤー・」

トカゲは、怒りに任して歯を剥き出しにし噛み殺そうとした。

ザクツ・・・ガサツ、思わずナイフを持っている手を上げたとなんナイフの矛先がトカゲの喉を貫き脳にたっして絶命した。

「ハアハア」

ナイフの刃が20センチを越えていて助かった。もしこれが剣だったら間に合わないし刃が短ければ致命的な攻撃にならず死んでいたかもしれない。

ガサツカサカサ、カサカサササ、カサカサ、複数の足音がする。この時期ここで育てているものは冬小麦！品種改良の結果冬の間しか育たない。そしてその冬小麦は、今1メートルに成長しトカゲたちは、腰を落し走り本陣を目指していた。

「トカゲだ・たくさん来ているゾー」

本陣は、燃えている畑の消火で手が回らない。

「まずいな」

もしかしたらあの火災は、陽動かそれなら学校を目指したのは何だ？だがここで考えていても仕方がない。

ナイフを持ちながら僕は、本陣を目指すトカゲを追いかけた。今見えるだけでたくさんいる。みんな殺さないと行けないのか？

トカゲは、姿を隠すため畑を走るので早く走れないが畑の溝を走る僕は、容易に追い付くことが出来た。途中畑に入りトカゲに追い付きナイフで刺した。ガスツ倒れた。

思っていたより弱い。よく見ると大きさは、僕と同じくらいもしくは小さい。これが戦場に行っていたであろう自分に重なって見えた。「ハアハア・・・ここは戦場か？ハアハア」

呼吸が落ち着かない。まだまだ敵がいる。

「急がないと大変なことにハアハア・・・くそぉ」

残りのトカゲを追い掛ける。

ザクツ、タツタタタ、ザクツ、もう何体倒しただろうか？ここが戦場なら英雄かもしれない。ガツツ、ナイフの切れ味が悪い。刃が先を見ると赤い血がべつとりついていていた。

「刃を研がないといけないなあ」

！、目の前に僕ぐらいの大きさのトカゲが倒れている。もしかしたら本当は、僕と同じ歳かもしれない。殺したんだ、殺す殺される弱肉強食だから仕方がない？相手は、ハンマーや金づちなどの鈍器それに対してこっちは刃・・・

「割り切れ！」

自分に言い聞かせても拭い切れない気持ち・・・

門には、多くのトカゲが一斉にバリケード破り攻めて来た。

「あれが本陣！？だとしたらこいつらは」

周りには、トカゲの血で赤く染める。

ヒュ、ドサツ、

「ここにもか！」

後ろからトカゲが飛び乗って来た。重さに耐え切れられず倒れた。馬乗り状態にされ上に乗っているトカゲに首を閉められた。

「苦しい」

「キサマ・セイダ、キサマニコロサレタ」

苦しい助けて・・・

意識が遠のいていく見えるのは、トカゲの涙・・・泣いている？泣かれて当然のことをしたんだ。自然とナイフをもつ手に力がゆるむ・

「どうすればよかったんだろう？」

かろうじて声が出た。

「？」

首を絞めていた手がゆるむ。ゴホツゴホ、やっと息が出来て咳込んだ。

「ドウシテ」

シュツザクツ、急にトカゲが倒れた。僕は、起き上がり見るとトカゲは頭に矢が刺さっていた。

「泣いていたの？」

トカゲに話し掛けても返事がない。

「オーイ、大丈夫か立てるなら早く本陣へ」

さつき畑の火事を教えてくれた人だ。

「大丈夫ですか？」

「ああさつきは、油断したがもう大丈夫だ」
頭にこぶが出来ていた。

「早く本陣へトカゲの野郎火で誘導しやがって、あいつらになんも得なんかないのにそんなことを後回しで早く」

「はいっ」

落ちていた僕のナイフをと利血を拭き取って鞘にしまい本陣へ向かった。

畑は、かなり緩やかな坂に作られていてその一番高いところに本陣が築かれていた。

「そろそろ頭を下げたほうがいいぞ」

「えっ？」

ピュ-

「頭を下げる」

前から20本近い矢が頭の上を通り過ぎていった。

「よし走れ」

「みんな消火に向かったんじゃないんですか？」

「9班は、みんな矢なんだ。あと消火に8班と本陣の10班の半分が向かっている。そこで人集めに君を呼んだ。あと俺は、9班なんだ」

「学校に向かった人は？」

「連絡手段がないからわからないな。」

「そうですか」

本陣に着いた。本陣は、野外テントの簡単な作りになっていた。そして、弓矢の第二攻撃が始まった。

「参謀、命令通り西門の撤退完了しました。」

「それにしても、時間がかかったな」

「はっ途中トカゲの待ち伏せに合い。その殲滅に時間がかかりました。」

「わかった。もう下がって隊に復帰応戦しろ」

「ハイッ」

そういうと敬礼して自分のいたところへ帰っていった。

「監視部今の畑の被害状況は！」

「畑の1割7部を焼き今ほとんど消火完了しました。」

「そうか消火終わり次第本陣に引き上げさせろ」

「ハッ！」

「で君は、これからどうする。あまり強くは、見えないが」

参謀は、僕を見た。僕は、なんて答えればいいのかわからなかった。

「彼は何も問題ない。本陣の防衛に回すべきだ」

優しく力がある声、村長だ。

「貴様が7班も学校に向かわせるからこんな事態になったんだぞ。」

「仕方がない。人がいて村なのだから」

「だからといってこんな子供しかも旅人にも戦わせるのか」

「大丈夫彼は、ここに来るまでかなりのトカゲを倒した。それに学

校も頭のキレる参謀がいるから大丈夫だよ」

「だとしてもここはどうするんだ。ここの遺跡のほうが重要なんだぞ！」

「ここの遺跡？」

トントン

「ここのなだらかな丘に昔の遺跡があるんだよ。たしか地下水汲み上げ装置、トカゲは、それを狙って来るんだ。あれは、地下何百メートルも掘って水を探してくれるし壊れないからね」

後ろにいた人が教えてくれた。

「なるほどね」

「そんなことよりいかにここを守るかだ！」

村長と参謀は、犬猿のなからしい。

「まあ部下をたくさん送ってしまったことは仕方ない。やむえない。そこの餓鬼！」

「！！」

「戦場に行っていないだろ。」

ボン

「そついうおまえも行っていないだろ」

「・・・っ」

参謀は、何も言わず出ていった。

「ラサから君のことは聞いた。魔法が使えるらしいがここで魔法は使えないよ」

「！」

「畑が燃えたらしやれにならないからな、それとここを守る矢以外の人は、全員で6人しかいないからがんばって」

と笑いながら僕を送り出した。

テントを出ると弓矢の人達が絶え間無く矢を打ち出しとていた。周りを見回しても矢を持っていない人は、僕以外6人しかいなく。この人数で矢をうちもらしたトカゲを相手にすることは、無理だ。しかし、人手がないからしょうがないし、逃げるわけにも行かない。

僕は、決心して戦うことにした。

「来るぞ！」

弓兵が叫んだ。弓陣を飛び越え1体入って来た。敵を前にしたとたん急に体が固まった。あのナイフが真っ赤に染まることを思い出す。ザクツ、トカゲの首が飛んだ。

「何してんだ。ボサツとしていると死ぬぞ！！」

我に帰ったときには、立っていたトカゲは首がなく倒れていた。そして助けてくれた人の剣は、赤く染まっていた。

「戦え守りたい人がいるなら！」

守りたい人？そんな人この村にいるのか？

スツ、助けてくれた人は、僕のナイフを取りそれを僕に渡した。

「さあこれを取って戦え！」

僕は、ナイフをもつとそれは前に持った時よりも重かった。

「また来るぞ！おおすぎてまかなえない」

一体どれくらい来るかわからない。でも・・・戦う

トカゲたちは、狭い本陣の入口を目指しては行ってきた。ナイフを鞘にしまった。別に出しっぱなしにしていいたいときいつでも出せるからしまった。

もしかしたらくせかもしれないそんな気がした。

周りを見回すと本陣は、昔の砦にっている。全体を木かレンガにしたものでしっかり壁を作り出入口も狭く、簡単に侵入できないしかしこれがどれくらいも持つのかわからない。

「門を抑えろ」

弓兵がさけび

男達が門に集まり門を押さえる。僕も門が壊れないように押さえようとした。しかし押さえる前にトカゲ達の行進でこわれた。

「鬼は全部で100体ぐらいだ落ちていて対処すればどうにかなるぞ」

「100かよ」

弱気になるが戦わないわけには行かない。ナイフを鞘にからだして

戦う、ナイフを振り回すだけで敵は倒れた。相手が弱いだけではない単に盾も防具を着けていなかった。だが相手が弱くても数が多ければそんなことは関係なく体力が徐々に奪われた。

次第に単調した作業が僕の緊張感を無くした。油断した。後ろがおろそかになり石のハンマーで叩かれた。疲れと痛みで遅くなった体をトカゲ達は見逃さなかった。

頭、肩、腹、足・・・前進をハンマーで殴られた。トカゲ達も疲れ、ていて致命的な攻撃にはつながらない。周りの男達も手一杯で助けはくれない。風吹いている。顔面にハンマーが飛んで来た。もうこれが最後の一撃だ。

スッ、ハンマーが顔面すれすれで止まる。トカゲ達が一斉に遺跡方へ顔を向けた。するとそのトカゲ達がにげはじめた。

男達は、目的地寸前で逃げたトカゲに始め驚き顔を合わせて追いかけなかった。どうやら学校に向かった部隊が戻ってきたらしい。

僕は、自分の弱さを実感しながら意識が消えた・・・胸の青い光とともに

ハッと目が覚めた。起き上がろうとするが全身痛い。あれほどの攻撃を受けたが別に体は骨折などの怪我をしていなかった。ただ筋肉痛にいた痛みがあった。何とか上半身だけ上げると真っ白な部屋ここは病院で外はもうくらい。

ラサを助けに行かないと・・・そう思い起き上がることにした。今までにないくらい動いた感じた。何十キロ何百キロとは違ったような。

病室を出るとドアに面会拒絶と書いてある。いったいどれほどの攻撃を受けたのか思い出せない。しかし骨折もしてなかったことは良かった。

僕は、一度部屋にもどり支度をし病院を出ることにした。部屋を出て病院を出ようとした。しかし外には出られない、正面玄関が開かなかった。外はゆっくり明るくなる。待合室の時計を見ると朝方の

5時半、昨日からどれくらいの時間寝ていたのだろうか？

「後で迎えに来てよ」

ラサの言葉が頭をよぎる。すぐに行きたいと思うけどすぐに行けない。他の人に流されてばかりいる。本来どっちを優先するべきなのかわからない。このままでいいのか・・・

もう一度部屋に戻って日が昇ってから本当にラサを探しに行こう。

僕は、さっきまで寝ていた部屋に戻ることにした。だが自分は、どの部屋から来たのか覚えていない。

「本当にダメだな」

待合室の椅子に座った。目をつむり時がたつことを待つ。しかし12時間も寝た体はこれ以上求めない。もっと家で長く寝ていればすぐに眠ることが出来たかもしれないと無駄な贅沢を願った。しかしこれ以上ここにいることは無駄だと悟り。今すぐここを出ることにした。僕は、他に出られそうな扉を探した。

それから病院の中をぐるりと歩いた。しかしあるところで足が止まった。手術室の明かりがまだついていて。外では家族が心配な面持ちで待っていた。一晩中手術をして入るのかと疑問になった。すぐに手術中の明かりが消えた。医師が出て来て家族になにか小声で伝えた。

家族は、それを聞くなり泣き崩れた。その家族が誰だかわかった。コウの家族だ。

1部より 第5幕 「ほうふく」

それから医者には驚いた顔で僕を診察した。昨日あの畑の砦で怪我人が出ていいように待機していて物影に隠れながら袋だたきされている僕を見ていたからである。もう明らかにダメかと思っていたが診察してみるとかすり傷程度しかケガをしていなかった。しかし殴られ方が以上なのでいちよう入院していた。それから

「ハンマーで叩かれたのにこんなにケガをしていないなんて奇跡だ」と奇跡だを何度も繰り返した。だが僕がペンダントをしていたからケガをせずにすんだと気付かなかった。

それと昨日は別動部隊が遺跡を攻撃していてそのおかげでトカゲ達が引き上げたという。

複数の奇跡で助かった。医者に言うところらしい。

そして一通り診断して問題がないとわかるとそのまま退院した。治療費もなにも治療していないので取られなかった。ただ最後にコウが遺跡で発見してここに運ばれたがもう遅かったといわれた。

病院を出た僕は、村長の家に行くことにした。ラサを助けに行くため鞆を取りに行くわけだ。村長の家には、すぐ着き、ベルを鳴らした。

「えっ！本当に旅人さんかい？」

村長は、まるで久々家に来たように驚いた。当然だトカゲに殴られている所を見てその後倒れた僕を運んでくれたという。

僕は、村長に鞆を返してほしいと事象を話したが昨日の遠征と会合の結果、村のほとんどの男達でトカゲの巣を駆除することが決まりそれに参加してほしいといわれた。また、ラサも探すそうだ。僕は、

「はいわかりました。」

と受諾した。

そして正午頃借りている家に着いた。そこには、見知らぬ人がいて僕の服を干してくれた。最初わけがわからないでいた。

「旅人さんお帰りなさい。」

見知らぬ人が僕に声をかけて来た。見覚えある前のこの家の住人だ。
「ごめんなさいね勝手に干しちゃて」

「えあーありがとうございます。」

僕は、どう理解すればいいのかわからないでいた。ただ僕の服を洗ってもらい干してくれたので感謝の気持ちを伝えた。

「いいのよ。昨日村のために戦ってくれたのだから」

「ええまあ」

本当に活躍したかどうか知らないが・

「服は、昨日鬼が来る前に洗ったからもう乾いているけれど着る？」

今僕が着ている服は、借り物それにいつまでも借りているわけには
いかない。

「はい」

「そうわかった。じゃその服はあとで洗濯の所に置いといて洗つと
いてあげるから」

今着ている服まで頭が回らなかった。

「すみません。ありがとうございます。」

優しい人だとおもった。僕は、優しいおばさん言われたとおり始め
に来た服に着替えた。今まで来ていた服は、綺麗に折り畳んで古い
洗濯機の隣においといた。この村には、ずいしょに古く壊れな電化
製品がある。自動井戸掘削汲み上げ機にソーラー電灯、そして洗濯
機みな作られて何十年もしくは何百年するものばかりだ。本当に壊
れないから買い替えや故障もしない。そのため作る会社も直す技術
者が先にいなくなってしまう。まだ首都に伝統技術であるから問
題がないというけど・・・

ぐっ、お腹がなった。病院で朝ごはんを食べたがコウのことを聞
いてあまり食欲がわかなかった。家の中には、人が住んでいないか
ら食べ物がない。とりあえずポケットにあつた残りわずかな保存食
を食べた。一緒に洗われていたがたべた。借り物に服にしまってい
た財布とナイフを身にまとい、ラサ探しする村の集合場所へ出掛け

た。それから僕は、2度とこの家に戻ることはなかった。

村長に言われたとおり集合場所、祭の広場につくとたくさんの武装した男達がいた。

「村人よ。今こそ報復の時だ」

舞台の上に村長が声高らかにさけんだ。

「今まで鬼によって多くの被害が出た」

男達が黙って村長を見る。

「現に昨日鬼によって畑が燃やされ、とうとう非難場所である学校にも攻めて来た。我々

はこれを押し切った。だがこのままでいいのだろうか？そんなはずない！そうだろー！」

「そうだ」誰かが叫ぶ。

「先日に決めたとおりここに集まった義勇軍を組織し鬼らを駆除するぞ！いくぞー！！」

「オオオ……ッ！！！！」

広場にいた男達が一斉にいった。僕は、その声の圧力に潰されそうになった。そして、声が止み

「進軍！開始！！」

その声に合わせて班ごと遺跡に進軍を始めた。

周りを見回すかぎり、義勇軍というが村のハタチを越える男、よぼよぼのおじいちゃんや意気込んでいる若者と立つことが出来ない一部を除く全員が集まっていた。僕は、どこの班に入ればいいのかと迷っていると見知らぬおじさんが

「旅人さん、旅人さんあんたは、10班に入れ、そのほうがいいぞ」

といわれたので村長のいる10班に入ることになった。

ラサは、遺跡にいるのだろうかもしかしたらこの辺の森で隠れているか最悪まだ戦っているのだろうか。焦りと不安が入り乱れながら僕は、遺跡に目指した。

遺跡に着くまで前に来たときと変わりはない。まるで前日の鬼

の行進がないぐらい。

まるでラサと初めて遺跡に行くかの如く・・・
キューキュー

聞こえる。何かの泣き声、聞き覚えのある声・・・

タツタツ、ザクツ

男が森にはいり泣き声のするほうへ走って行き何かを刺した。トカゲの子供だ。

周りを見回しても仲間の気配がしない。

「危ないところでした。このまま放置していたら何しかすかわかりませんからね」

隣にいた村長がいった。刺されたトカゲはひっくり返って動かなかった。

「ここが戦場か」

「何かいいました？」

「いえ何も」

僕は、軽く会釈した。

遺跡に着いた。黒い煙が見える。トカゲが焚火でもしているのだろうか？でも火を使うのかな・・・

ヒャーダンツダンツ、発行信号赤二つ

「戦闘信号だ。総員戦闘用意！トカゲ達が来るぞ！」

まだ後方の10班では敵が見当たらないが先頭にいる1班が戦闘を始めたらしい。

「旅人さん昨日は、何体も倒したらいいしが油断はするなよ」

「ハイッ」

「よし進軍開始！！」

人間とトカゲの全面戦争が始まった。敵の数は聞いていないからわからない。だがここまで来て逃げるわけにも行かない。倒し続けるのみだ。ラサにまた会うために

ナイフを鞘からだし振り回し続ける。敵は、前回同様防水具というものを付けてない。

当たりさえすれば倒せた。

敵は、予想外奇襲を受け一斉にビルへと逃げ出した。思わず僕それを逃さないばかりに追い掛けた。ビルの中に入り階段を駆け上がるひどく肉が腐るニオイがする。鼻が曲がる思いだ。部屋からうめき声がかかるのでその部屋を覗いた。薄暗い部屋に怪我をして横たわっているトカゲ達だ。どれもが立つことも出来ないらしい。

「しまった」

周りに村の仲間がいない。ビルの中まで単独で来てしまったらしい。トカゲが僕の存在に気付き一層にうめきはじめた。このままでは敵が集まる。しかし幸にも一人も立てないようだ。今の僕なら行ける。行くしかない行け、

一体つつ確実にナイフで指していった。

我に帰ったとき、最後の一匹が命ごいをしていた。ナイフは赤い血でべつとりしていた。その時なぜか血でナイフの切れ味が悪いだろうなと思った。刺すとそれが致命的な攻撃になったのか死んでしまった。そして思い出した。あのトカゲは、昨日畑で殺したはずの一人だと、なぜなら傷が同じだった。

「ふう制圧完了と」

何となくどこかの映画で聞いたことがあるフレーズを言ってみた。虚しさだけがのこった。

「早くラサを探さない」と

ここには用がない。部屋を出ると小ぶりのトカゲがいた。トカゲは、僕に目もくれず部屋にはいつていった。手に比較的きれいな布をもっていたのでおそらく看護師かなとギヤース、ギヤース、なかに入ったトカゲが叫びはじめた。もしかしたら顔染みりでもいたかな

「やばい!!!」

ダダダツザクツ、ギヤー、トカゲの声が弱まっていく。

最後に殺した怪我したトカゲに重なるように倒れた。

「ハアハアハア危ない危ないこのまま泣かれていたら仲間がごまんと来るところだ。殺してよかった・・・」

殺した？倒した？どっちだ？待てよこのトカゲ達は、怪我をして
いたから戦えないよな。それを僕はどうした。もしこれが人間だつ
たら間違えなく僕は・・・でもここは、人ではなくトカゲだからで
だからこれは、でもやっていいのか？僕は軍人ではないからたとえ
軍法に違反でもかからない。だからといって今した行為は・・・気
にしちゃダメだ。今は、ラサを助けないと

僕は、小ぶりのトカゲが持つてきた布でナイフの血糊を拭き取り鞆
にしまった。
あの二人のトカゲの関係は、今ではわからない。後でラサを見つ
けてからトカゲ達のお墓を作ろう。そう思って僕は、ビルから出る
ことにした。

出る途中小型なトカゲが襲いかかってきた。ほとんどが子供のよう
に弱く難無く倒すことが出来た。

外に出ると状況が一変した。トカゲの主力体に押されていた。あの
女トカゲが人から奪った剣を振り回しながら次々と人間を切りそれ
に賛同する形でトカゲ達が辛うじて人間から奪った武器を持ち反撃
していた。魔物が人間の武器をもつという予想外な戦いをしていたげ
られることになった。まるで人と人の戦いのように。しかし村側が
押されていることは確かだ。ここまで来たのに逃げるわけには行か
ない。

またナイフを持ち直して敵陣に突っ込んだ。それと同時に村人も陣
形を組み直し反撃した。例えば動きが早く攻撃が強くなったとしても
使い慣れてない武器を使うことは、難しい。そのため動きが大きく
隙がでかい。それを見逃さないように
ザクツと切り倒した。またトカゲを倒し拭いたばかりの剣が赤く染
まった。

「くたばれーッ！！」

見えるかぎりの最後のトカゲを倒した。あの女トカゲが見当たらな
い。逃げた？

「オーイ旅人さ〜ん」

振り向くとそこには、村長がいた。

「いや君強いね、後ろから指揮をしてから本当に強いよ。まるで鬼人のような働きだよ」

僕は、額に大粒の汗をかいていた。

「運が良かっただけです」

「そんな運だけじゃないよ。現に君は、生き残れだから」

「えっ？」

「2班が壊滅したよ。あそこは、最初にトカゲ本隊に奇襲されたからね。生き残ったのは、9人中2人だけだ。その二人も腕を骨折した上に武器を奪われたらしい。だから村にいったん帰った。」

「二人だけですか？もし武器を持てない二人が森で伏兵にあつたら・

」

「彼等はもう戦えない。ここにいるだけ邪魔になるだけだよ。だから村に帰ってもらった。」

村長が冷たくいった。

「ところでラサは？」

「わからない。この鬼の領域を制圧しないかぎり探しようがない。」

」

「・・・」

「まあ君のおかげで大分片付いた。でもそれも長くは持たないかもな」

村長が遠くを見た。奥の遺跡から数え切れないぐらいの女トカゲを筆頭にこちらに向かっている。

「まだこんなにいるとは・・・」

「どうします？」

「ここまで来て尻尾を降って逃げられるかい？私は、戻ってもう一度陣を敷く旅人さんは、少しでも時間を稼いでくれ数は多いがさっきの精鋭とは違う。頼んだ」

村長は、後方に下がった。いくら弱いといえ数が多い昨日の悪夢がよみがえる。昨日は、ぎりぎり引き上げたが今日はそんなことは

ない。だから今度ばかりは．．

「弱気になっちゃダメだ。」

自分に言い聞かせる。目の前に多くのトカゲが集まる。周りの村人も陣を形成するために引き始めた。戦場ただ一人の越されている状態だ。しかし今だからこそ出来る技がある。

敵の第一陣が目の前まで来た。

「スウー舞え乱風！！」

声に合わせて胸のペンダントが光り、そして強風が起き地面の石や砂が舞始めた。ただなにもないところでやればただ強い風が吹くだけだが床に石や岩があればそれは凶器になる。しかもその凶器は、舞上げるときとそれが落ちるとの2回攻撃することができ、砂を巻き上げることによって相手の視界を塞いだ。

強風でトカゲ達は身構え前進することが出来なかった。

「焼き尽くせ爆風来ッ！！」

指で土埃を指しながら叫ぶと胸のペンダントがさらに明るく光った。バーンッ、しばらくして50メートル先で砂埃をさらに巻き上げる爆発が起きた。

砂埃のせいで見えなくなる。足音が聞こえない。進攻は止まったようだ。肉が焼けた二オイがする。一昨日食べたトカゲ焼きの二オイがした。やな感じた。これで進攻も止まると思い。村長のいる陣に向かうことにした。しかし後ろから複数の足音がする。トカゲ達はここまでは何がなんでも引き下がれないらしい。

「やむ得ないか．．」

体の向きを反転して再びあのフレーズを唱えた。

「焼き尽くせ爆風来ッ！！」

一度消えかけたペンダントがまた明るく光始めた。そしてまた爆風がおきた。爆発の勢いは、まるでダイナマイトでもほうり込んだ勢いがある。

これで引いてくれたらもう殺さなくてすむんだけどなふとそんなことを考えた。しかし現実はその簡単なものではない。現にまた足音

が聞こえて来た。それも数え切れなくらいのしかし諦めるわけにはいかない。また戦わないと村人に被害が出る。だが実は、魔法を使うといくら体力を消費する。ほとんどのエネルギー胸のペンダントから消費されるがその起動するためにいくらかのエネルギーを必要とする。むろん魔法が巨大になればなるほど求められるエネルギーが大きくなる。爆発系では、一度に数キロを走るくらいの体力が必要となる。命を取られることはないのだが体力がないと使いたくとも使えないことが多い。

もって後一回くらいだろうか？

ゾクツ、寒気がした。まるで蛇に睨まれた蛙のような・・・あの気配は、鬼！

ドーン、大地が揺れた。上空で爆発し砂埃を吹き飛ばした。急に明るくなり視界が開けた。魔法じゃない。工学兵器だ！！

視界が開けて行き遠くまで敵が見渡せるようになった。しかし近すぎる！敵まで2、30メートルきっていた。魔法を使いすぎて走って逃げたりこれ以上使えない。

”もうだめだ”

そう思ったとき急に後ろの衿を掴まれてうしろに投げ飛ばされた。

「良く持ちこたえた。おまえはもう下がれ」

村人だ。準備がととのい反撃に出た後ろから次々に僕を追い抜いて戦闘を始めた。もう戦うほど体力がない僕は、一旦ここから引くことにした。だが目の前戦争から逃げてていいのだろうか？またラサに笑われる気がした。僕は、そんなどうでもいいプライドのためにしまっていたナイフを鞘からだし戦場へ駆け出した。自分の行為が正しいと思いながら 昼頃戦場が休戦状態になった。トカゲ達が急に撤退を始めたからだ。しかしトカゲにここ以外に住家はない。また、他のところへ行くこともない。今までに何度も逃げ出したくなるようなことを人間がしていたからだ。人間の見よう見真似で始めた畑をトカゲ嫌いな人間が燃やしたり、子供達を殺したり食べたり・

と村長が教えてくれた。敵のことだからおそらく体制を整える間昼休みらしい。

その間僕は、ナイフをまた戦えるように研いだり村の人から配布された食事を食べた。

トカゲが畑を耕したなんて驚きだった。しかし村が多くの水を使いすぎてしまった結果、この遺跡周辺には、水が出なくなった。そのためしばしば食料を奪いに来るそうだ。

もうこの村についてから何体のトカゲを殺したのだろうか？あまりにも殺しすぎて感性が麻痺していた。現に血をたくさん見てもどうってことないし、相手が武器がないからと手加減もしない。しまいには、疲れたので少し寝ることにした。

もし僕が本当の戦場だったらそんなことさえも考えなくなった。

・・・イツマデネテイル？・・・

誰の声？前に聞いたことがあるようなないような？でもここは、なんか温かいな
パチッ、目が覚めた。

遺跡の日が当たるとこり雑草が生えているところで目が覚めた。

「旅人さんは、気配で目が覚めるか」

聞いたことがあるでも夢の声とは全然違う。

かなり上の態度で話していた。確かこの人は、畑の頂上の砦で指揮をしていた。

「参謀さん？」

「名前は違うがまあ覚えていたようだ。どうせ名前を教えたところでもう会うことはないだろう。旅人に話がある。すぐに支度してこい」

「はい」

胸のペンダントの光がゆつくりと消えた。僕にはそのことに気付かなかったがさっきの戦いの疲れが消えていることに気付いた。

支度しろといわれたが別に支度することもないのですぐに追いか

て声をかけた。参謀も始めすぐに来たので驚いていたが翌々考え
みると別旅用の荷物持っていなかったことを考えると早いわけでは
なかった。

「話って何ですか？」

参謀は、少し考えて

「これから行う作戦に参加してもらいたい。」

「ラサの探索ですか？」

参謀は、目付きを鋭くして冷たく言った。

「いや、まだだ。ラサの搜索よりもまずトカゲをこの遺跡から追
出すことのほうが先決だ。」

「何故です。まだどこかに生きて助けを求めているかもしれないの
に」

「どこに？それに生きている保証は一体どこにある？そんな不確定
なものに人を割いていたらトカゲに反撃され村全体が危険な目に会
うかもしれないんだぞ！」

「しかし」

「じゃ貴様一人で探せ！！」

「落ち着け」

村長が見る見兼ねて来た。

「今ここで旅人さんという重要な戦力を失うことは惜しい」

「はあっ何を言ってるんだ戦いたくない人をここに入れても邪魔にな
るだけだ！」

「戦場ならね。しかしここは、弱肉強食だ。少しでも早く勝ちそれ
から探すべきだ。」

「さっきからいつてるだろ！」

「そんなことより凶がここまで来ているらしい。」

「どうしてそんなことがわかる」

「敵の動きがさっきからおかしい。指揮が急に上がっている。」
事態がかわつたらしい。

「キョウって何ですか？」

「トカゲの固体名だ。トカゲのなかで特別変異をお越し周りに比べて人並みの知識を持つてる。しかしやつと出て来たか。」

「じゃ話し合いは出来ないんですか？」

「何を甘いことを言っているんだ！」

「昔に彼に畑と火の使い方を教えたことがある。しかし誰かがふざけて畑を潰したことを気に完全に人間の敵だ。もうどちらかがいなくなるまで戦い続ける。話し合いなんて余地はない」

「そうですか」

「そこでだ。君に凶の討伐をお願いしたい。」

村長がとんでもないことを言い出した。あまり内容を聞いていない周りにいた人もどよめいた。

「正気か貴様は！！」

「君には、このまま私の隊で戦ってもらいたい」

大声ではなす参謀に比べ村長は冷静に続けた。

「旅人にいきなり強敵を頼むのか？昨日今日に来たやつに！」

「旅人さんは、2日前に来たよ。そうだよ旅人さん？」

「ええまあはい」

「日付の問題じゃない。旅人にそんな大役を勤まるのかと聞きたい」
「勿論一人でやれとは頼んでない。3個小隊出来るのであれば5個小隊ほしい」

「そんなこと聞いていないぞ！」

「伝えようと思って探したからな」

「開始時刻は？」

「昼食休憩が終わり次第に凶の搜索し見つけ次第除去だ」

「次から先に伝えてほしいものだ」

「探していたら時間が遅れる。実行していいな？」

「しかたない。決行だ！」

その言葉を合図に慌ただしくなった。

僕あることが気になり村長に尋ねた。何故トカゲと戦争をしているのにのんびり昼休みがあるのかとすると村長は

「ここにいるみんなは、軍人じゃないからだよ」と笑顔で答えた。

「早く終わればその後ラサを探せるからね」

「はいっ！」

そして僕は、村長から作戦について説明された。だがその作戦は名ばかりで凶が見つかるまでトカゲを倒し続けるというものだ。

のんびりしていたら周りをトカゲが囲まれた。そしてジャスト1時間闘が始まった。あたかも時間を合わせたように戦争が始まった。敵は、乱れのない動きをした。おそらく女トカゲがこの近くにいるのか？

それから1時間ぐらい僕は、落ちついて敵を倒し続けた。戦闘はこちらが優位だ。トカゲ達が逃げ出したからだ。いくらトカゲの動きがよくとも武器を持つ人に勝つことができずに次々に逃げ出した。戦いも終わりに近ずいていた。

「やっと終わった」

思わずそんなことを口から漏らした。

「いや、まだだ。凶と蘭がまだ倒してない。」

隣で一緒に戦った狩人が言った。

「ラン？」

「あの女トカゲだよ。蘭の花が好きだったから蘭、もう一匹は凶暴だから凶」

「二人を倒すまでこの戦争は、続きますか？」

「戦争か・・・そうかもしれないな。今まで害獣駆除しかおもってなかったからさ」

「害獣ですか・・・」

「あああいつは、害獣だよ。農作物を奪いここの遺跡を占領しているな。だからさ」

「わかりました」

蘭と凶を倒さないとラサを探せことが出来ないことがわかった。だが僕は、蘭に会いたくはなかった。前に会って敵とは思わないから

だ。

こちら側は昨日襲撃にあい、相手は午前に襲撃にあった。そしてお互いのほうふくが始まった。

戦闘が始まった。戦闘が激しくなるにつれて僕は、前線から離れた。怖いから離れたわけではない。昨日後先を考えずに戦った結果力尽きたのでまた同じことを繰り返さなためだ。しかしやみくもに離れていてはまわりで戦っている大人達に悪いので戦場の周りにいる少数の遊撃部隊を叩いた。敵はさほど強くはない。しかし凶には一抹の不安があった。

敵は、僕に会うたびに怯えたようだ。中には逃げるものさえいた。だが僕に怯えているわけではなく思わない方角から攻められ驚いているようだ。それとなにかに心配してそれが気にかかっているように見えた。

戦闘が始まってしばらくしてまわりが静かになった。どうやら本当に戦場から離れてしまった。本当の戦争だったら戦争逃亡で死刑かもしれない。そんなことを思い出したら急に背筋が凍えて来た。なにか戦果を出せば別かもしれないが、とりあえず来た通を戻ることが先決だ。

「キュー」

トカゲの子供がなく声、放置していたら仲間と呼ばれ大変なことになる。

比較的新しい小さなビルにちょこんとこちらを見ていた。こちらが気付いたことに気付き首を引つ込めた。するとそのビルから別の子供トカゲが足元までやって来た。僕は、ナイフを鞘から出せない。「キュー、キュー」

子供トカゲは、必死に僕の腕を引っ張りなにかを言いたそうだった。子供トカゲ力は以外に強くそのままビルの中へ連れ込まれた。ビルの前に入ったビルに比べ綺麗に掃除され病院のように清潔だった。また子供トカゲは沢山いて僕をもの珍しそうに見ていたが大人は全くないかった。

僕は、成すがままに階段上がって日の当たる部屋に連れられた。その部屋にはまだ小柄な二つ足で立つ大トカゲがいて僕を部屋に入れずに威嚇をした。子供トカゲはそれに目もくれず布団の上で座っているトカゲになにか話した。

「その人を入れさせなさい。」

聞き覚えがあるがラサではない。

若い大トカゲは不安な顔で反対したが布団に座っていたトカゲがなにか「あつたらお願いね」と言い。部屋にはいれた。

そこには前に会った女トカゲが布団の上に座っていた。

「門番さん。外の状況を教えてちょうだい」

その声には以前会ったときと明らかに違った。

門番が女トカゲに近づき耳元になにか囁き、女トカゲが礼を言うと部屋から出ていった。

「あなたは、ただ部隊から離れて道に迷つてようね。だから私を殺すために探して来たわけではない。そうでしょう?」

一瞬女トカゲを殺すかためらった。

「はい」

だが例え殺したところでまわりの門番に勝てる自信はない。現状維持が賢明か・・・

「トカゲは話せるのか?」

唐突に聞いたので女トカゲが驚いたが、落ち着いた声で

「少しだけ、旅人さんには聞こえないかもしれないけど」

「話せたのか」

トカゲ達がここまで進化していたのに驚いた。

「よく私がここにいると気付いたわね。それと門番と戦いもせずはどうやって?」

「・・・・・・」

なんて答えればいいんだ? 子トカゲに連れられてとは言っても信じてくれないだろう。

「キュー」

後ろからすごい期待された眼差しで子トカゲがみていた。

「こいつに連れられた。」

僕は、仕方がないのでつれて着た子トカゲを指で指した。

「なるほど・・・何となく察しが着いた。」

「？」

「私はね。実はもう歳なのよ。多分このままでは明日にはもう」

「えっなぜ、だって前に会ったときあんなに元気だったのに」

「あの時は、あのときで結構大変だったのよ、ゲッホゲッホ、仕方がないことよ。こればかりは、誰にも止められないから」

「どうして」

「・・・・・・」

暫くの沈黙が流れた。

「歳なんだよ。認めたくないけどさ」

小さく淡々としかし、力がこもっている口調で言った。

「本当なの？」

「嘘言つてなんになるのよ。まあ人が信じるとは思わないけどさ」

「前に会った時と・・・」

「時計さつ体のね。生き物はみんな時間が違うんだよ。私の場合トカゲと人間のごちゃまぜだけどトカゲよりの体だから旅人さんみたいに長生きできないんだよ」

言っていることが難しくすぐには理解できないが何が言いたいのかは理解できた。

「だとしてなんで僕がここに呼ばれたのですか？」

「うーん。おそらくあの子トカゲが君を連れてくれば助かると思ってたんだろ、あの強が生まれた時、人間の医者に助けられて無事に産まれたからね。だから、こいつは、誰か人を呼べば私を助けてくれると思ってたんだろ」

蘭は、僕をここまで呼んだ子トカゲを指で差した。

「凶？」

凶の名前を聞いて僕は、凶と蘭を倒さないといけないことを思い出

した。

「私の弟さ強いから強、でも最近は、人間にとって凶器だから凶と呼ばれているけどね。」

「……」

凶は、前に強と呼ばれていたことがわかった。

「ねえ、旅人さん？」

「はいっ」

蘭の声が前に会ったと気のように変わった。

「強には、もう会った？」

「いいえ、まだ……」

「そうならひとつお願いしていい？」

「僕ができることなら」

僕はとんでもない事を言ってしまった。敵であるトカゲに約束をしようとしたのだから

「じゃあ、もし強に会うことができたなら逃げるように伝えてくれない？そうすれば人間の戦いは終わるは」

「えっ？」

「今日は動けない私のために戦おうとしている。だけど、私は長く生きれないから強だけでも逃げて生き延びてほしいの私の願いといえはわかってもらえる。」

口調が変わっていた。今までトカゲたちを束ねている女性から弟思いの優しい女性に変わっていた。

「でも僕が言って信じる？人のことを信じないと思うけど……」

「わかってる。だからこれを持って行って」

蘭は、首につけていた。ペンダントを僕に渡した。それは、古くすんでいたが、かすかに小さな蘭が描かれていた。

「これを見れば強も信じてくれるでしょう。」

「そんな……」

「私が人間だったらお互いにこんな思いなんてしなくてすんだかもしれないのにね」

欄の声がしだいに弱くなった。このわずかな時間にもものすごく年をとっていった。目もしだいに虚ろな感じだ。

「欄さん、大丈夫？」

「凶、これから強になって・私たち・を導いて・・・旅人さん・・・おねがい」

ランは、次第に僕の声が届かなくなっていた。

「ランさんっ！！」

西日が窓から入る。逆行で眩しくなったとき、手が差し出ないと見れなくなっただけとき蘭は静かに息を引き取った。目の前でトカゲが寿命で死んだ。

「ギヤース、ギヤース」

「ギヤアー」

部屋の多くの子トカゲが入り込んできた。このままここにいと自分の危険を感じたので僕は、すぐに建物を出ることにした。

急いで建物を出たとき、部屋は静かに静まり返っていた。

これから僕がすることは、凶が人と戦闘をする前に探して、事情を話して逃げてもらう。それが自分を信頼して蘭が頼んだのだから・

しかし、探す手間はすぐに省けた。凶が、仲間を連れてビル一棟はなれたところにいた。

「なぜ、人間がここにいる？誰がここまで連れてこさせた？蘭をどうした！！」

最後にすごい威圧を感じた。

「君を探していたら、たまたまここに辿りついた。そして、蘭から君へ伝言を頼まれた。」

「ギヤース、ランガ・シンダ」

後ろの建物からトカゲが叫んだ。瞬間的に何かまずい感じがした。あきらかに勘違いされる表現、僕は、蘭の約束を果たせないかもしれない。

「奴を生かして帰すな！！」

周りにいた仲間が一齐に襲い出した。敵に囲まれているにもかかわらず僕は、逃げるか凶に蘭のことを伝えるか迷っていた。

呑気なことを考えているなそんな気がした。

シュツ、敵のハンマーをかわしたが髪に少しかすった。

決心した。僕は、後ろに飛び、すぐに反転し逃げ時折振り向きざまにナイフで風を斬った。このまま話しても伝わらないだろうから逃げて村の人達に合流してから凶が一人になってから蘭の伝言を伝えることにした。

しかし、一つ問題が出た。敵の動きが思っていたより多く動きに統率がとれていたことだ。このままに逃げ切れるか不安になった。前みたいにばてたらまず助かる自信がない。

裏路地に入り敵を撒こうとしたが土地勘のない僕にとって不可能だ。いづれ先回りされ囲まれることが目に見えていた。

だとしても僕は、逃げ続けた。蘭の約束を守るために！

ドンッダーン！、出合い頭に誰かにぶつかった。

「名無三！」

思わず目をつぶった。もう先を読まれた上に囲まれた。どうしよう。

「大丈夫か？！」

運よくぶつかったのは、村人だ。

「ええ、それより凶が出ました。」

「何だって！本当かい？」

「はいっ今その凶の親衛隊に・・・」

「ところで君は、凶にあったことが今までにあるのか？」

「そういえば、今まで聞いたことがあるけどあったことがないのにすぐに凶だとわかった。どうしてっ！！」

ドン！ドスツ、足元に鋭利な槍があった。

「ボサツとするな敵を考え事は後でやれ、」

「すみません・・・」

トカゲ達が次々に目の前に集結していた。

「二人でこの数を相手にするのは無理そうだな。一旦引き上げるぞ。」

「はい」

僕と村人は、仲間のところまで逃げ体勢を立て直すことにした。

「戦闘は、どうになりましたか？」

「急に敵がいなくなつたから残党狩りだ。人数確認したらおまえさんがいないからみんなで手分けして探したんだ。あのビルを右に曲がるぞ」

「はい」

「次はこっちだ。」

「ハアハアハア」

「何とか撒いたようだな。でおまえさんはなにか敵の動きを掴めたのか？」

村人は、全然息を切らしていないのに対し僕は、かなり息を切らしていた。

「ハアハアええ蘭に会いました。」

「本当か？で倒せたのか？」

「会つたんですがその時はもう寿命で・・・」

ピューー、誰かの口笛がビルの合間を駆け抜けた。

トカゲが、目の前で吹いた。

「やばい！集まってくる。逃げるぞ！」

僕は、すかさずトカゲに走り寄り首元を切り倒した。

「ハアハアハア・・・」

「早く行くぞ。この道を行けば仲間に合流出来るぞ」

村人は、僕の腕を引つ張つて走つた。

「君は、トカゲを殺すときに躊躇しているみたいだね。」

「・・・そうかもしれません。」

走りながら答えたがその答えに偽りはなかった。

「そうなら逃げる！それが君の答えだ。自分に嘘をつくな」

「・・・！！」

僕は、走るのをやめた。

「どうした？ 仲間、目の前だぞ。ここにいたらトカゲと戦うことになるぞ」

「僕は、蘭との約束があるから凶に会いに行きます。」

その言葉に村人の顔が歪んだ。

「はあ？ おまえ何を言い出すんだよ。凶に会ったとして何が変わるんだよ。今行ったとしても凶の親衛隊に殺されるのがオチだぞ」

「いえ。行きます。今行けばこの戦闘を終わらせます。」

僕には、蘭のペンダントを凶に見せればこの戦争を終わらせる自信があった。そしてラサにあえると自信があった。

「私は、例え旅人さんを行かせたとしてなにかあったら俺に責任が取れないしこれが後悔になる。」

「自分に偽りを持つなといったのは、あなたです。」

「だとしてもいくな。私は、旅人さんに戦ってほしくないから言うたわけだつて逃亡者だろ」

「はい。戦いたくないから徴兵から逃げました。もし戦争を僕が戦争をやめられるのならば、それを実行するためです。」

「なら行け！！」

村人は、熱くなりついにいつてはいけないことを言ってしまった。

それから人型のトカゲを斬ることはなかった。

そして僕は、凶に会うために来た道に戻った。

1部より 第6幕 「真実」

来た道を戻るとすぐに僕を追って来たトカゲに遭遇した。敵は、僕がラサを殺した張本人だと思い殺気立っていた。数は軽く50を越えていた。

「おいトカゲ共！僕を凶に会わせろ！」

僕の力強い声に押されたのかトカゲ達が身を引いた。

「ギャース」

トカゲの一匹が襲って来たが僕は、すかさずナイフで首元を切り付けた。切られたトカゲは、おびたらしい血を出しながら、叫び地面をはいずり回った。

その光景を目の当たりしてトカゲ達は、身を引いた。中には、一目散で逃げるものもいた。

「早く凶をここに呼べ！」

声が辺りに響き渡ると急に静まりかえった。僕が叫んだんじゃない。やつが来た。

「始めあつたとき逃げたが、次は何する気だ？このラサ殺し」

「僕は、殺してなんかいない。」

「なら、現に貴様の足元に転がっている同族はなんだ」

「！」

さつき襲い掛かったので思わず刺したトカゲは、冷たくなっていた。

「これはなんだ。」

「違う僕は、蘭を殺して何かいない！」

「じゃ貴様は、今までに何人の同族を殺し何人の肉を食った。」

「・・・っ！」

カランっ、僕は、腰にあるナイフを鞘ごと投げた。そして、ポケットから蘭から渡されたペンダントを高々にあげた。

「蘭から伝言がある。凶と二人だけで話がしたい。」

蘭のペンダントを見た途端さつきまで騒いでいたトカゲ達が急に

静かになった。

「貴様は、本当に何がしたい？ 蘭の・・・お姉ちゃんの大切な・・・返せいまずぐ！」

「その前に聞いてほしいことがある。」

「貴様に聞くようなことはない！ 今すぐ返せ！」

「嫌だ！ 聞くまでは」

僕は、出来るだけ冷静でいたが敵は今すぐにも襲うような殺気をだしていた。

「皆共行け！」

今日はとうとう痺れを切らせて仲間 commands させた。

しかし現一体を意図も簡単に殺している僕に対し近づこうとするものはいなかった。

「この腰抜けの役立たず共が！ 敵は、すぐ目の前にいるんだぞ。」

「僕を倒しても蘭は帰ってこないぞ。」

「っ！！」

「ここで提案だ！」

このままでは ranch が開かないので譲渡することにした。

「ペンダントを返す。そのかわりに一つだけ話を聞いてほしい」

「わかった。だが変な真似をしたら命はないぞ。」

「わかってる」

凶も武器を捨てて歩み寄って来た。

「まずペンダントを渡せ」

僕は、素直に渡した。

「何故遠くから蘭のものだとわかった？」

「お姉さんの匂いがしたからな。」

凶は、渡されたペンダントをまじまじとみた。
人とトカゲは本当に血が違うと思った。

「で話したいことはなんだ？」

「君のお姉さんからの最後の伝言・・・今いる仲間と共に逃げて、そして生きて」です。」

「君は本当に殺してないみたいだな。」

「!？」

「ねえさんの血の臭いがペンダントからも君からもしない。」

「においか・・・」

ペンダントで信頼されなかったが匂いで信頼されるとは思っても見なかった。

「何故、お姉さんは死んだんだ？」

「多分寿命で」

凶は、急に目を鋭く尖らせて僕の襟元をねじりあげた。

「寿命だと！そんな不確定なものでお姉さんは死んだのか！」

「寿命は、どんなにも平等に来る」

「ふざけるな！貴様らは、50も70ものうのと生きている癖に私たちは、20年近くで死ななければならいんだ！」

凶の力が、さらに増し僕の首を圧迫した。

「くっ 苦しい」

「それでいて生きるために逃げてください？ふざけるな！」

凶は、力任せに僕を投げ飛ばした。

「私たちはな。好きでここににいるわけじゃないんだぞ。貴様ら人間に追い出されてしまいいは狩りと表して子供達を殺したがる！それでいてどこに行けばいい？貴様と同じ土地を奪い返して何が行けない。」

「いててて・・・」

投げられた痛みが全身に伝わり立ち上がることもできない。

「そういうことだ。逃げたりしない。人間共に屈しない。」

始め僕に対して話していたが次第にトカゲ達全員に話始めた。

「お姉さん、蘭は、そんなことを望んでないぞ。」

「貴様は、まだ自分のことを理解できてないようだな」

ボスッ！凶は、僕のお腹に勢いよく蹴りこんだ。

「うつ!!」

「逃げてください？はあ？そんなことならもうとつくに逃げてるぞ」

凶は、僕の首を持ちあげた。

息が出来ない！

「貴様には、今までに何人もの怪我をした子供たちの同族殺した？今のうちにあじわらせてやる。」

「助けて・・・苦しい・・・」

「ハハハ、泣き叫べ、命ごいをしろ！殺してきた仲間達の分まで！」
「クソッおお！」

僕の胸のペンダントが赤く光出した。！スッピカッ、鋭く眩しい光が辺りを照らした。

「なに？目が・・・」

凶は、光を直視して視界を潰した。そして手の力が抜け凶から離れた。

「何した！貴様？」

「ハアハアハア、今なら命まで取りません。だから逃げてくださいハア」

「ハイそうですかと行くかよ」

「ギヤース、ギヤー」

「ギヤース」

予想外の攻撃に周りが騒ぎ出した。今この数を相手にする余力はない。

「騒ぐなっ！」

凶の一声で急に辺りが静まり返った。

「貴様ら全員こいつに手を出すな俺一人で十分だ！」

凶は、目が見えていないはずなのに僕が投げたナイフのところに飛び鞘を投げ捨て、刃を僕に向けた。

「なぜ？目が見えてないはずなのに・・・」

「フッ、匂いで貴様の場所等すぐにわかる。それにこれくらい出来ないと生きて来れないからな」

負けた。それが今の僕に一番会う言葉だ。何をしても凶を止められない。敵に囲まれ、強敵にナイフを奪われ、そして体力を使い果た

し魔法も自由に使えない。人間ではないから侮っていた。いつそのこと降参するか・・・しかし、僕を捕虜なんかにするだろうか、無残に殺され村人に対し恐怖を植え付ける存在になるか・・・もしくは、最後の抵抗をするべきか、しかし敵が多く強すぎる。

僕が、いろいろ考えといたらとうとう凶の目が開いた。

「サア終わりだと言いたいところだがそうはいかないようだな」

「！」

「みんないったん引くぞ！」

凶の一声で周りにいたトカゲ達が一目散に逃げた。

「どうして逃げる？」

「村人が囲み始めた。次に会ったら貴様を殺す。」

凶が、そういうと僕のナイフを返した。僕は、なにも出来ずに彼等を見えなくなるまで見守った。

「オーイ、大丈夫か？」

村人が大勢で来た。どうやらさつき別れた人が呼んだらしい。

「見たところ大きな怪我はないようだな。」

「全く心配させやがって」

「やつを倒せたのか？」

村人が囲んでいるいろいろ聞いて来た。がやがやしている中、村長が周りの人を掻き分けながら来た。

「その傷は、どうした？」

村長が、指差したところを触ってみると血が出ていた。そこで始めて凶に怪我させられたことを知った。

「凶に飛ばされて・・・」

「凶に会ったんだね。よくこれだけの傷で生き残れたね。他に傷は？」

「別にないです。あと蘭に会いました。」

村長は、さらに驚いた。

「会えたということは、倒してないんだね。」

「凶は逃げましたが、蘭は、あったときには死んでました。」

説明すると長くなる気がしたので嘘をついた。

「そうかわかった。まあ凶には、逃げられたが蘭が死んだから敵の指揮は下がるだろう。よし、みんなこのまま残党狩りを始める。敵は、衰弱しているはずだ！」

「オオ――」

「えっ！今日にトカゲを全滅にさせるのですか？」

「当たり前だ。今狙わずしていつ狙う。」

「・・・」

戦わないという平和が、こんなにも難しいとは思わなかった。どちらがなくなるまで徹底的に終わらない。

例え今日は、帰ったとしてもまた戦いが始まる。だからそれをいつ終わらせるかだ。僕が、自分の力だけで終わらせるなんてむしのいい話でしかなかった。

「キュー――」

みんながざわめき出した。トカゲがすぐ近くにいるからだ。

「キュー――」

「あそこだ！あそこのビルにいるぞ――！」

その人が指した先には、子供トカゲがこちらを見て鳴いていた。

「あそこが奴らの巣だ――」

「やっちまえ――」

「いくぞー！続け――」

一斉にビルに走り出した。しかし村長や一部が「これは罠だ行くな」と言い出した。

そんななか僕は、蘭に頼まれたことを凶に分かってもらつたためにだれより先にビルに入った。

ビルの正面玄関に入るが敵の姿は見つからない。

「おそらく上の階にいる。階段を捜せ！」

集団で階段探すが奇妙な感覚だ。急に地面が揺れ出した。ラサと一緒に入ったビルと同じだ。時期に崩れる。

「やばい罠だ。時期に崩れる。」

誰もがそれを悟り一斉に出口へと走り出した。僕は、前を走り過ぎたのか、他の人に比べて距離が遠い。

揺れが次第に大きくなり、

「あつ」

足元が底に抜けた。バランスが保てない。僕以外の村人が、ビルから出るのを見ながら落ちた。そしてビルが崩れた。

「オーイ大丈夫か？」

「ああ」

「クソ敵の罠だったか。」

「人数確認しろ。」

「足を挟まった。助けてくれ。」

「早く救護班来てくれ。」

ビルの周りでは、砂埃の中様々な声が飛び交った。

「オイ、旅人さん見なかったか？」

「いや見てないけど」

「じゃまだ中か？」

「そうだとしたらもう助からないだろう」

「そうだな、とりあえず周りを警戒しないと敵が集まっているかもしれないからな」

結果、僕は、自力で出るまで誰にも搜索されることはなかった。

ドスツ、落ちただけで崩れたところを滑りながらゆっくり落ち、別に怪我はしなかった。だから気絶もしなかった。

「しかし暗い」

地下深く落ち、辺りが真っ暗でなにも見えなかった。だからここがどれくらい深く落ちたのか検討もつかない。地下道には、二本の鉄レールみたいのが走っている。で前に学校で習った、地下鉄を歩いていた。僕の家周りには、鉄道がないのでここに毎日電車が走っていたなんて知るよしもなかった。

「我に道しるべとなるべく光をとらせ」

ペンダントが明るく輝き辺りを照らした。光りは凶に浴びせたより弱いが辺りを照らすには、十分だ。また酸素を使わないから酸欠の心配もない。前に母さんから魔石への呪文をいくつか教わっていて助かったことを今更になって感じた。

「確か洞窟の脱出の仕方は・・・」

指に唾を付けて、その指を通路にてらし、冷たく感じたらそこが出口に繋がる方角だ。そしてそれはすぐに見つかった。目の前に続く地下道だ。

助けがすぐに来なさそうなので、自力で出ることにした。

歩き始めるなり、後ろから物凄い音と砂煙りが来た。砂埃でよく見えないがおそらく崩れたらしい。もし助けを求めてじっとしていたときを思うと身震いした。しかし今いるところも安全と言えないのですぐに出口へ向かった。

それからしばらく歩き続けた。もし腕時計というものがあればいつでも時間を確認出来たのにと奮発してでも買っとくべきだと思い始めた。

また地下鉄で等間隔に駅があるとしても地上が過去の栄光を忘れるくらい果てているので、駅が地上を繋ぐ唯一の道だとわからなかった。

そして比較的広いところに出た。風の吹くところへたどったが何も段差がない2、3メートルの高さから吹いていた。魔法で下りることが出来ても上がることは出来ない。

「理不尽だ」

絶望的だ。しかしだからといって諦めるわけにはいけないのでこの道を真つすぐ行くことにした。

今の僕に出口に行く最短の方法はないがこの先に出口があるような気がした。

それから10分以上歩いた気がする。時計がないから正確な時間がわからないから何とも言えない。だが今歩いている道とは別に比較的新しい道が横を突き抜けてあった。強引にピッケルで開けたよう

な土が剥き出しの簡単な作りだ。

だけどその道が最も最短な気がした。だからその穴に吸い込まれるように入った。その穴は、段々深く底へ傾斜していた。まるで地獄へ向かっているようだ。しかし、勘では危険を感じていたが何故か引き換えそうとは思わなかった。

「怖物見たさ」

本で読んだ。人は刺激を求め怖さまでも求めることがあると・・・ふと振り返ってみるともう別れた道は見えなくなっていた。ここま

で来るともう入ったこの先を見るまで進みたくなった。

トストス、カツッ

「?!」
床ががらりと代わった。今まで洞窟みたいな土だったのが急にコンクリートになった。

「!」

今度は、すごい寒気がした。人のとは思えない。前にビルであった鬼”。

僕は、思わず物影に隠れた。そして、息を殺してそっと寒気がするほうを見た。

「導きよ。消えろ」

小声で自分のペンダントの光りも消した。光りが見えないにも関わらず鬼の位置がわかった。それほどの殺気を放っていた。

ペタッ、ペタッ、ゆっくり足音が次第に大きくなった。足元に非常灯がありペンダントの光を受けて微かに光っていた。その光の影に鬼がいた。

僕は、恐怖のあまり口を押さえた。そうでもしないと声が出そうだ。前に倒せたが真っ暗道で勝てる自信ないし、いつ見ても恐怖は変わらない。

ヒタッヒタッ、ヒタッヒタッ目の前を通りすぎた。顔は、トカゲに似ているが体は今までに見たことがない。絵本に出てくるような鬼のようだ。

ヒタツヒタツ、鬼は、僕に気付かなかったのか通りすぎていった。

「ハアハア、気付かなかったか」

どっと汗をかいた。危険な目にあつた。もし見つかつていたらどんな目に会つか予想もつかない。だけどこのまま”鬼”をついていけば、上手くすれば”鬼”の住家や生態がわかるかもしれない。急にそんな考えが頭を過ぎった。鬼は、ゆっくりとここから離れていった。

（追わなければ）

そしてあるうことが鬼を追いかけ始めた。

鬼は、僕に気付かなく徐々に深く入っていった。そしてある部屋に入ってしまった。後ろからも複数がこの部屋に向かつていた。幸いにも鬼は、感覚が鈍っていて僕の存在に気付いてないようだ。しかし、通路の反対側からも足音が聞こえて来た。挟み打ちに合い、思わずさつき鬼が入った部屋とは別の部屋に入った。

バタンツ、音がしたが鬼達は、別に気にすることもなく隣の部屋に入っていた。僕は、部屋の机の下で鬼達の足音が過ぎるまでじっとしていた。鬼は、肝っ玉があるのかそれとも鈍感なのかわからないが本当に助かった。そして正しいことは、ここが鬼の巣であることだ。

バタンツ、最後の反対のドアが閉まる音がした。その音を最後に足音がなくなった。

「我に道しるべとなるべく光をとめせ」

そのフリーズで部屋が明るくなった。部屋は見た感じだが学校の理科の教室だ。机の

上にカビが生えたガラス管や古そうな顕微鏡、そして周りは、古い本があつた。壁は、全体は白だが一部だけどす黒い。床を見ると声がでなくなった。白骨した骨が無数に落ちていた。近づいてよく見たが本物のようだ。人なのかそれとも別の生き物なのか見比べたことがないからわからない。

机の上にあつた論文を見ると（新生物生誕実験）とあり、そのうえ

には、斜線が引かれていたが新人類とあった。

思わず手に取り読んだ。文字は、腐食が激しく読めないが横に張ってあった写真には、あの女トカゲに似た写真があった。さらにめくっていくとそこには、鬼の写真もあった。

さらに読んでいくとそれは、日記で最後に「暴動した。」で締め括られていた。

横には、遺書みたいな紙があった。これも腐食していたが辛うじて読むことが出来た。

「89年5月15日

私はとんでもない過ち、危険な生物、”鬼”作り出してしまった。もし鬼達がこの研究所をでたら地上にいる人達へ大変な被害を出すだろう。だが今までの実験で作り出した、やさしいトカゲ人を作ったとしても、いづれは人間の良き奴隷となるだろう。だから私は、今までにない力のある生物を、人間と力で対当した生物作った。しかし、力が有り余り人と話しをしないどころか本能のおもむくままに暴れる、バケモンだ。だから私は、ここで鬼をここに幽閉するしかない。

私は、まだ鬼に見つかってないがいずれ時間の問題だろう。だから私は、今ここで死ぬ。

万が一ここを出るようなことがあれば、望まないがあの話しが出るトカゲ人に駆除してもらおう。たのむから私が作った子供達よここで飢えて死んでくれ。」

遺言に、そう書いてあった。これによるとトカゲ達は、鬼に対抗この地から離れようとはしない。しかし今は、今日達は、鬼とは別に人間たちとも戦っている。なのに僕たちはそれを知らない。もし僕たちが、トカゲ達を滅ぼしたらおそらくここは、鬼の巣になるだろう。

「僕は、本当に無知だ。なにも知らないくせにいろいろやろうとする。でしゃばりすぎた。」

急に今まであった意欲が消えた。地上に鬼のことを伝えたとして、

トカゲ達と共同で倒せたとしても今度は、トカゲ達が殺されるだろう。

後ろに進み、壁にぶつかって腰を降ろすとペンダントの光りが自然に消えた。そしてそのまま目を閉じた。

ボタンツ、絶望と諦めで寝てしまった。鬼がこの部屋に来てこの際どうでもよかった。

・・・アキラメルノカ？ラサノコトドウスル？・・・
すっと目が覚めた。

「そうだ。ラサを探さないと」

辺りは、光りがないから真っ暗でなにも見えない。

「我に道しるべとなるべく光をとらせ」

辺りが光りで見えると立ち上がった。ラサにまた会うためにここまでトカゲを倒しながら来たんだ。そして扉から出て地上に通じる出口を探すために辺りを散策した。

この際鬼にあつてもひたすら倒していく意気込みだ。

それからひたすらに歩き回ったがヘレベータは、電気が無く止まっていて、階段は鬼の侵入を食い止めているのか跡形も無く壊れていた。そしてこの施設を一周してしまった。「ここ前来たな」

寂しい声が辺りに響く、さっきいた部屋の前に戻って来た。一人でくらい所を回っていると気がおかしくなりうだ。後ろには、鬼達はいってつた部屋、僕は、意を決してその部屋を見ることにした。

扉の前に立つが（もし鬼がたくさんいたらどうしよう？）扉を開ける力がなくなった。音を立てずにゆっくり開けた。

すごい腐った臭いが鼻を刺す。部屋にはなにもないようだ。どうやらこの部屋は、食料庫らしい、そしてこの食料が無くなり地上を目指し、今ここには、僕しかない。

仕方がないが来た道に戻ることにした。手作業で開けたような穴は、恐らく鬼達が、飢えて地上を目指したのか・・・僕もまた地上を目指す。

思っていたよりも早くコンクリの壁が見えたきた、来たときに比

べ帰りは短く感じた。そしてかなりの時間を無駄にした。また多くのことをすることが出来た。

「早く行こう」

さっき来たほうと別のコンクリの道を進んだ。それからすぐ近くに非常階段がありそこを出ると白く輝く星星が見えた。出口はすぐそこにあったがちつよとの好奇心のせいで大変な目にあった。

まわりは、怖いぐらい静まり返り、地下施設と同じ鉄の匂いがした。カツツ、なにかを蹴った。拾い上げてみるとペンダントのようだ。トカゲの蘭から凶に渡したものだ。その隣には、トカゲの死体の山があった。

村人は、一旦引くまでの間、結果として積み重なっていた。村人は、とんでもないことをしてしまった。明日には、鬼が群を為して攻めてくるだろう。ラサ探しどころではなくなる。

しかし、どうでもいい僕は、この村の住民ではない。ただの旅人で明日までしかあの村にはいられないのだから・・・

しかし今日の空は、夜なのに明るい。明かりは、村のほうからだ。おそらくトカゲを滅ぼしたから祭でもしているのか、僕も村へ急ぎ足で帰った。

村に近づくたび空の明かりが異様だ。前にキャンプファイヤーで空が明るくなったが、今の明るさはまるで、村自体を燃やしているようだ。

僕は、とうとう不安から走り出した。何か叫び声が聞こえた。

明るい光りがすぐそこまで見える。

「着いた」

自分の予想と同じで絶句した。鬼達が村を襲い、夕飯の準備中の家々は、轟々と燃えていた。人の姿はもうなく鬼達の久々のめしに高らかに吠えていた。

僕は、村に着くなりラサが貸してくれた家に鬼に見つかからないように目指した。家々が、燃えていて道がわからなくなった。前に来たときと本当に変わってしまった。

記憶を思い出しながら走った。

「確かそこを曲がれば・・・」

不運は続く、飛び火で木造の家は、燃えていた。もう入れそうにない。

炎に囲まれる中、鬼の手には、女の子のような腕がぶらさがっていた。残酷で吐きそうになったがそれ以前に怒りが込み上げた。

「クソ」

ナイフを鞘から出して鬼に切り掛かった。

ザシユ、鬼はいとも簡単に切れ、倒れた。

「助けてくれ」

すぐ近くの病院から助けを求める声がした。

僕は、すぐ病院に向かった。病院は、他の家とは違い鉄筋コンクリートで燃えていないが、鬼が入り込んでいた。僕も病院に入った。

燃えてはいないが中は、とにかく熱い。

「来ないでくれ誰かー！」

声のするほうへ走った。

「助けてー！」

「うえか！」

階段を駆け上がり、廊下を走り、病室にはいると、鬼が動けない患者に容赦無く食べていた。

「離せー」

後ろ首から切り付けると下半身から力が抜けたように倒れた。噛まれた男に息はない。

「ヒーやめてくれー助けてー」

隣のベッドにいた村人が叫んだ。

「大丈夫ですか？何があつたんですか？」

「やめてくれー」

ショック状態で僕の言葉が聞こえない。

「来ないでくれー」

「大丈夫です。鬼ならもう倒しましたから」

「ヒ……」

完全に壊れた。無理もない体動かせないに隣で仲間が生きたまま食われものを見て落ち着いてられるわけがない。

「父さん。ネエ父さん」

後ろから少年が入って来た。さつき鬼に噛まれた村人に近寄った。

少年の歳は、おそらく10前後か……

「ネエ起きてよ。お父さん・ねえ……」

「ここは、もうすぐたくさんの鬼が来るから逃げないと」

「うるさい、うるさい、なんで助けてくれなかったんだ！なんで、なんでウエ〜ン」

とうとう泣き出した。

「アヒヤヒヤヒヤ……」

怪我した人は、本当に壊れてしまった。

「黙れ黙らないと本当に鬼が来るぞ」

僕は、必死に少年の口を塞いだ。

この光景を前に見た。病人を皆殺し、部屋にはいった子供さえも殺した。そのことに自分が本当に苛立つ。

回りの炎のせいか病院さえも一部が燃え出した。

「行くぞ！」

僕は、少年の手を引っ張り、病院から出ることにした。

「お父さんが……」

「今は、あきらめろ！ここを出てから後で助ける！」

嘘だ。しかしそうでも言わないと来てくれないからだ。少年の嘘だとわかったが素直に来てくれた。隣にいた患者も肩に手を回し運んだ。重いが見捨てるわけにはいかない。

鬼が集まって来た。僕は、そのたびに怪我人をおろし、速攻で倒した。

「他の村人は？」

「朝に出ていってからまだ帰ってない。」

「医者はい？」

患者を置いて逃げるとは思えない。

「急に鬼の大群が来てそれをやつつけるために出て行ってきり……まだ……」

鬼は、男達が離れている隙を着いたらしい。しかし僕が、もう村に
いるに一体何をしているのだろうか？

「お母さんは？」

「わからない……急に鬼達が襲ってきて、僕は、逃げ出して、
けどお父さんが気になってここに来たら……」
泣きそうな顔になった。

「わかった安心しろところで非難所はどこかわかるかい？」

「多分学校……」

「よし、学校へいこう。」

「うん」

背負っている怪我人は、完全に意識を失っていた。

そしてやつとの思いで病院から出ることが出来た。

辺りの家は、焼け落ちていた。さっきの病室から火の手が上がった。
後ろを振り向くと病院までもが燃えていた。少年は、急に走り出し
たので思わず腕を押さえた。

「お父さん、うええ〜ん」

今まで我慢していたのかとうとう泣き出した。

「なんでお父さんを運ばないでそこのおじさんを助けたんだ」

癪癪にた声でわめいた。僕は、死んでいたから運ばなかったなん
て言えない。

「行くよ」

冷たい言葉だがそれ以外の言葉がない。

「だってお父さんが……まだあの病院に」

「わかってる、だけど今は、助けられない」

「助けるなんて嘘だ。あの中じゃもう……」

少年は、事実を知っているが信じたくはない。

「いくぞ！」

僕は、力一杯に少年を引っ張った。少年は、ひたすら

「お母さんもお父さんも・・・」

とひたすらぶつぶつ言い出した。僕は、出来るだけ早く学校へ目指した。火事の暑さで頭がもうろうとした。このまま歩き続けてもし鬼に遭遇したら勝てる自信がないからだ。

「その道を曲がれば学校だ。あと少しだ。がんばれ」

少年と重い怪我人を運ぶ自分に対して励ました。少年は、何も言わず一緒に怪我人を運んだ。

曲がると事態は最悪だった。学校は、鉄の門が閉まっているのか多くの鬼が門を壊そうとしていた。

僕と少年は、鬼に気付かれないように後ずさりした。だが急に怪我人が暴れ出した。

「ここだ私の家だ。今すぐ下ろしてくれ」

僕の背中から落ちると、はいくつばって焼け落ちた家を目指した。

僕たちは、止めようとしたが家族の名前を叫びながら進んだ。

この声は、飢えた鬼の耳に伝わり、門を壊すことをやめ一斉に襲い掛かって来た。僕と少年は、恐怖のあまりその場を怪我人を助けずに逃げ出した。

振り返るたびに人が鬼の数だけ分けられていた。そして僕と少年は、道を曲がりそれをいくつか繰り返し物影に隠れて走るのをやめた。

ドーン・・・ドーン、鉄に固いもので叩いている音がする。

ドーン、僕たちは、怪我人を置いて自分だけ助かった、だが、後ろめたい気持ちだ。少年も僕と同じ気持ちだ。そして僕は、少年を守り続けることに決心した。ドーン

「行こう。さっきの門以外に学校に入る方法はある？」

「うん」

ドーン、少年は、しばらく考えてある答えを出した。

「ない」

そっけない答えだ。当然かもしれない。ドーン、砦を守るとき複数の門があつては守り手が分散されもし攻められると混乱におちいり

やすい。だが門が少なければ効率的に守りやすくなる。ドーン
しかし、門の外だと話は変わるが・・・

「緊急用とか脱出用は？」

「裏門があるけどいつも閉まっているし、脱出用は、噂でしか聞いたことがないからわからない。」

「そうか、村から逃げるのが得策か」

ドーン、ガツ、ギツ、ドーン、ガツ、ダーン、鉄が固まりが倒れた音がした。

「裏門の方からだ」

少年がそう言うのと走り出した。僕も後を追う。少年は、道の角を曲がり壊れた門に入り姿を消した。僕も同じく裏門に入った。

少年の姿を見つけたがすぐ建物中に入りに見失った。

門は、物凄い力を何度もぶつけて強引に開けたようだ。こんなことが出来るのは鬼しかない。

「見失った」

スツ、後から殺意を感じ前によけた。案の定後ろから鬼が襲い掛かった。ナイフをいあいぎりのごとく切り倒した。

「キヤー」

校舎から叫び声がした。

「鬼はもう中か」

僕は、開いていた扉から学校に入り、一階の廊下を給食室へ目指した。おそらく鬼は、お腹を空かせているからすぐに上を目指さずまず一階から食料のある給食調理室だろう。

「キヤー」

「あそこか!!」

部屋を見ると調理師たちが部屋の端で固まっていて鬼達が調理した給食を貪っていた。数は、全部で四体、勝てる。

部屋に入音を立てずに入る。鬼が僕の存在に気付いていない。ザクツ、ガシャン、ザツ、スツ、3体が倒れ残る一体が僕の存在に気づきよけた。

サツ、体制を整えて勢いに任せてナイフを上から振り落とす。ガンツ、鬼が手を延ばしナイフを受け止めた。今までなら意図も簡単に切り倒せたが力でナイフを受け止めるなんて今までに見たことがない。鬼は、ナイフを力いっぱい引っぱり、思わず僕は、力が抜けナイフを取り上げられた。

「あつ」

スツ、鬼の尻尾がうねり僕を力いっぱい腰に当たった。ドン、ガシャン、僕は飛ばされ、シンクの方にぶつかった。調理師が泡めふためいて部屋から出ていった。中利のおばさんは、一目散に逃げた。

「痛い」

苦痛に耐えながら体をあげると倒したはずの鬼達の3体の内2体が立ち上がった。空腹が満たされているのか傷の治りが早い。僕を投げ飛ばした鬼が僕に向かって宙を飛んだ。僕も、あわてて前に勢いよく飛んだ。

ガスツ、鬼が、落ちたところの床がめり込んだ。

「あぶなっ」

のんびり見ていたら間違いなく死んでいたに違いない。

すぐに倒すつもりが気付けば3対1の劣勢、しかも今までに比べ早く治りも早い。

怪我をした鬼が襲って来た、ガンツ、サツ僕は、かわしながら隙を見て切った。敵の動きは怒りに任せているのでよけやすいが威力は以上に高い。まともに喰らえばひとたまりもない。限に攻撃するたびにこの部屋にあるものは形を変えた。しかし、今ここで負けるわけにはいかない。

「今だ！！」

不意に誰かに言われるままナイフを振ると鬼が倒れた。しかしもう一体が僕の隙を狙って切り付けてきた。

ザクツ、鬼が攻撃するより早く何物かによって切られた。

「君の手柄を横取りしたかな？」

スツ、そういいながら足が床にめり込んで動けない鬼を切り倒した。僕を知っていて面識がある人、村長だ。

「あっ」

「君はてつきり建物に閉じ込められたと思ったが現にまたここで会うとは思わなかったよ。無事で何より」

「今まで村をこんなになるまで何を」

村長が、帰って来たということは、村人達が

「途中で鬼の大群に遭遇してね。でもこの様子だと・・・」

「のんびり状況把握している場合か？現に鬼がここまで来ているのだぞ」

参謀！

「状況把握は大切だぞ」

「村が鬼に襲われて、燃えているそれで十分だ」

そういうとずかずかと部屋から出ていった。

「全くこんな状況にまだ戦う気かよ」

村長なのに予想もしない発言だ。

「そりゃあなたの村ですよ。」

僕は、驚いた。

「烟が鬼達に食い散らかした。もうこの村では生きてはいけない。」

「そんな・・・」

「君がビルに生き埋めされた後、烟が魔物に襲われていると連絡が来てすぐに撤退したんだ。そしてすぐに烟に向かった。しかし罨だった。」

「罨？」

村長は、やけに冷静だ。

「私達が烟に入り陣をしくなり、魔法でもやし始めた。陣の中心にいた私達は、すぐに火に囲まれて動けなくなった。」

「魔法？魔物が？そんなはず」

魔物には、魔法を使って生み出したものもいるが魔法が使えるなんて聞いたことがない。

「君は、鬼のことを知らない。鬼は、ただ強いからじゃない呼ばれているわけじゃない。何しでかすかわからないから畏怖を込めて鬼というのだよ」

「・・・」

鬼は、ただでかいだけと思ったが飯を食うと回復力も上がった。

「話は戻るが畑の火災で多く仲間を失った。それから陣を村に移したが鬼達は、畑よりこの村が目的だ。そして現にここは、もうだめだ。」

あきれた。

「村長なんですよ。こんなことでいいの？」

「さあ今は、村のことより自分だよ。畑が燃え、家が燃えた。普通に考えてこの村に居続けるほうがおかしい。今は逃げることだよ」

「そんなんで・・・」

「君も早くこの村から出る！そして生きろ！村長としてみんなに言うことはそれだけだ。」

「オーイ、村長！まーだ子供がいるぞ！」

参謀が少年を連れて戻って来た。少年は、参謀に首根っこを持たれてじたばたしていた。

「それは、それはここまで来たかいあつたな。」

「はなせ」

パツ、ドン、参謀が手を離し少年はそのまま落ちた。

「いたたた。」

「おいそこの坊主と旅人早くこの村から出る。」

少年も驚いた顔で参謀の顔を見た。

「両親のことなら安心しなさい。おそらく村からは慣れたところで待っているだろ。」

村長の言葉に少年は、信じた。

「さあ早くここから逃げなさい。」

「村長さんたちは？一緒に行かないのですか？」

僕の質問に対してしばらく考えた。

「うーん、今にも逃げたいけど。まだ君達みたいに逃げ遅れた人がいるかもしれないからまだ探すよ」

「そうだ。まだすべての人が避難したという確証もないしな」

参謀が、言葉を付け加えた。何故、村長がすぐに答えを言わなかったのかその時はわからなかった。

「わかりました。またあとで」

「ああ、またあとで、あと君、手ぶらだと何かと大変だから」

参謀は、自分の脇差しを少年に渡した。

「さあ行け！」

「はいっ！」

少年と僕は、軽くお辞儀をして学校を出た。しかし、学校には、鬼が囲んでいた。門が壊れた音を聞いたのかほとんどが集まっていた。「どうしよう。囲まれた。」

少年は、身を縮めた。僕も同じだ。

「万事休すか」

鬼達は、じりじり距離を縮めて来た。

「まだいたのか！」

村長達が後ろから追い付いて来た。

「囲まれました」

「こつちもだ。緊急用の非難口が鬼で埋め尽くされてた。」

「非難口なんてあるのですか？」

「正確には、あった。過去形だ。今は、鬼の巣窟だ。さっきの調理師は、もういない。」

じゃ、少年の母親も・・・僕は声に出さなかった。

「くそっ！」

鬼が20対以上いるのにたいして僕らは、少年を合わせて4人だ。

「君の魔法で薙ぎ倒してくれないか？」

「ああ旅人の魔法ならさつき多くのトカゲを吹き飛ばしたからな」

「こんな広範囲の鬼を倒す魔法なんて、それに短時間では、せめて2、3体なら・・・」

「こんなときに発動できなくて何のための魔法だ！」

村長が、あきれた。鬼達は、僕たちのただならぬ気配ですぐに襲ってかない。

「ここまでか・・・仕方がないよな。」

「止む得ない。君の魔法を使ったあと村長と俺が道を作る。その間に走って逃げろ」

参謀が、急に作戦を提案した。

「珍しいな。私と参謀が同じ意見だとは」

「茶化すな。それと君達は、決して振り返るなよ。」

振り返るなという言葉に重い意味があつた。

「はい」

少年には、振り返るなという意味がわからないらしく、元気に答えた。

「では始めよう」

鬼が、僕たちの行動になにか不安を感じたのか、近づいて来た。

「はいっ、火の粉よ集まりて前方を薙ぎ払え」

ペンダントが、赤く光り、道をふさぐようにいた鬼が3体が吹っ飛んだ。飛ばされた鬼は、表面を火傷した程度で言つたとおりに道を作った。

「さあ行くぞ」

参謀が、腰にあった刀を抜き走った。村長も続き僕も少年の腕をつかんであとを追う。鬼達が逃げる僕たちを逃がすまいと囲む。

参謀が刀を振るたびに囲んだ鬼が倒れていく。そのおかげで鬼の包围もつかるら抜けた。参謀が、体の向きを変えて叫んだ。

「君達は、このまま村から出る。振り返るなよ」

「生きる・・・！」

村長も叫んだ。それが彼等から聞いた最後の言葉になった。僕は、このまま少年の腕を引っ張りながら走り続けた。

100メートルぐらい走ると少年は振り返ろうとした、しかし、走りながら僕が腕を引っ張っていたのでバランスを崩して転んだ。

「何してんだ。振り返るなと言われただろう！」

「だってラサ姉ちゃんのお父ちゃんとダイチ君のお父さんがまだあそこに」

どうやら参謀が、言っていた「振り返るな」という意味をいまいち理解していないらしい。

「いまは、後回しだ。村の外にたくさん大人の達がいるから助けてもらえる。」

ドスドスドス、彼等が倒しそこねたのかそれともやられたのかわからないが鬼達が近づいた。

「逃げ切るまではしるぞ」

「うつつん」

少年は、僕の嘘を信じて走った。家人は、燃え尽きて灰に代わっていた。

そして、村から出た。村全体を眺めたが、瓦礫でところどころ燃えて、鬼の姿は、ない。

「助かったね」

疲れた。朝から魔法を使い続けた。そろそろ寝たい。

「うん・・・お母ちゃんは？」

まだ眠れそうにない。

「早く探さないとね」

しばらく辺りを探した。見つかりそうにない、下手に森深く入れば鬼に遭遇するかも知れない。明日にするかと思いつきながら目を丘に向けてと女性が立っていた。遠くて顔が見えないが服装がラサと同じだ。

「まさか！」

「どうしたの？」

不思議そうに少年は、僕を見た。ここで少年を連れていくべきかでも鬼を避けて村の外周を通っていたらラサは、どこかに行ってしまうかもしれない。

「ここで待ってて！」

「えっ？なんで？」

「捜し物があるから朝まで隠れてて」

「うっうん」

「じゃあとで向かいに行くから」

少年は、不安そうな顔をしていたが、僕は、ラサに会えるかもしれない喜び動悸がした。そして丘に最短距離にあたる村を横切った。通る途中鬼に遭遇したが、走ってまで追いかけて来なかった。

村を出て丘をのぼる。途中息が切れたが走りつづけた。そして丘に途中にある森を抜けて、木のない広場に出た。女性がいた。

「ラサ！」

「あつリュウキ」

月明かりに照らされてラサの顔が見えた。

「無事だったんだ。ラサがいないうちに村が大変なことに」

「いますぐここから消えて」

すごい答えが帰って来た。

「えっ？」

「聞こえなかったの今すぐこの村から消えて」

僕は、ラサに近づいた。僕が近づくと鬼が横から走って来た。そしてラサを庇うように守ろうとした。最初襲うように見えて何かなんだかわからない。

「君こいつをここからつまみ出して」

鬼は、頷いたようなそぶりをするとこちらに近づいた。

「どうして鬼を」

ラサは、軽く笑った。

「さあどうしてでしょ？あなたがこの鬼を倒したら教えてあげる。その鬼今すぐそいつを倒しちゃって」

鬼から急に殺気をかんじた。鬼が飛び掛かってきた。僕は、疲れていたがいつものように軽々しく避けてナイフで鬼の首を切り落とした。さすがに生命力が高くて首を切り落とされては立ち上がれない。

「これで君はいったう何体倒したの？」

ラサが覚めた目でこちらを見ていた。ナイフが血でどす黒い紅に染まっている。

「仕方がなかった。そうでもしないとここまで辿り着けなかった。」

「そう。あつそうだ鞆返すから早くこの村から出て行って、早く鞆持ってきてね、コウ」

コウと呼ばれた鬼が僕の鞆を持ってきた。

「何であの鬼を従えているの？」

僕の言葉にラサが呆れた。

「君は、本当に魔法を知らないね。まあいいやせつかくだから教えてあげる。魔法には、物質を操ることが出来たり魔石に蓄えていた物質を放出させたり吸収が出来るの」

そつえば魔石のことは、使い方だけお母さんから教えてくれただけだ。だからそれ以外には何も知らない。

「君の魔石は、メインが放出系で一部が制御だから遺跡で爆発や羽が出せた。で、私が持っている魔石は、制御と吸収。」

ラサは、胸元から見たことがないペンダントを出した。

「制御もね。練習すれば生物も操れるし、吸収もその生物の情報を引き出すことが出来るのまああなたが最強の矛なら私は、さしずめ最強の盾ね。それと制御している鬼の見えるものを離れていても見ることが出来るのあなたが遺跡で起こした爆発は、すごかったね」

「もしそつだとしたらこの村に鬼を呼んだのは、ラサの力ということ？」

僕の口で言つたが自分の奥底では、否定していた。

「そついうこと、だけどこの魔石だと人みたいな高度の知能を持った生物に制御が出来ないのよね」

「じゃ前にラサがこの村に来たとき鬼の大群が村を攻めたというのは？」

「あーあれは、この村に来る途中に遺跡を通つてね、そつしたらトカゲ達にばつたり会つちやて逃げ回つたのそつしたらたまたま地下

施設に落ちて、鬼達がいたから操ってトカゲ達を追い払ったのそこまでは良かったのにね」

ラサは、自分がしている行動に悪びれることなく、笑いながら話した。

「たくさんの鬼を操っていたら急に暴れ出してそのまま村のほうへ向かって今に至る。」

「あんなだけのことをして、また」

「そりゃたくさんの子供が死んだから謝る気持ちで村にいったけど運がよくこの村に魔法を知る人がいないから、誰も私を攻めなかったわ。まあ魔法なんかみんな信じてないからね」

「そうじゃない。何でそんなことをしたらたくさんの人が死ぬとわかってるに鬼を操ったの？」

僕は、怒りに似た感情をラサに抱いた。

「簡単なことよ。コウを生きて帰れるかわからない戦争に行かせたからよ！」

「それは、そうでもしないとまた鬼が来るから」

「そうね。前の私が鬼を操るなんて馬鹿なことをしなければよかったのに」

「だったら真実をこの村に言えばいい・・・」

ラサがこちらを睨んでいた。そんなことを言ったらこの村で生きてはいけない。それ以前に人殺しだ。

「そうよ。私がこの村に来なければよかった！コウに会わなければ！戦争に行かないでこのうと旅をする君がこの村に来なければ！」

「でもね。コウは、戦場に行く前にトカゲに殺されちゃった。戦場に行くことは諦めていたけど」

「なんでみんなは、鬼がやったてどうしてわかるのその時村にいたじゃないか！」

ラサは、村にいたからそのことがわかるわけない。それは隣にいた自分が知っている。

「ちっ」

ラサが、舌打ちした。

「頭の回転が速いやつなんか大っ嫌い。そうよ、前に村を壊したのは、あの時はまだ使いこなせなかったからお腹を空かせた鬼を食料がたくさんある村に向かった。それにコウだって誰だかわからないやつに殺されるかもしれないのに私は、黙って見てられない、だから前に私が殺したのよ」

「狂ってる……」

「だからこのままみんな死んじやえばいいのよ。全てトカゲのせいにして気付いたときは

もうおしまい。さようなら……これがこの村の歴史の真実よ」

「これ以上村を燃やして何なる？もしかしたらコウは戦場で英雄になれたかもしれないに」

「ふっ英雄なんてお伽話に出てくる主人公だけよ。さあ早く出ていきなさい。私もつとどこか遠くへ旅でもしようかな」

「ふざけるな！！」

僕は、ラサに走り寄りナイフをラサの首元に近づけた。

「君をここまで育ててくれた。村長を殺しておいて、君は……」

「ふっ腰抜けが！！」

ラサも腰にあった剣を振り回した。僕は、何とかナイフで軌道をずらす、もし一歩遅ければ間違いなく斬られていた。

「ちっ避けたか。まあいい村長には、前から武術など強引に教えられたけど、実戦じゃあまり無意味だね」

「！」

「あなたが丘に上がる際に囲まれてやられたわ」

ラサが学校のほうを向きながら軽く笑った。

「きさま・っ！！そんなことをしておいて逃げる気か」

「さあ止めたいなら止めれば、殺してでもね」

「ふざけるな！今までに何人を殺したんだ？」

「あなたは、今まで何人の鬼とトカゲを殺したの？」

「君は、人間だろ」

「トカゲと人間のどこが違うの彼等も仲間で行動して、道具を使い、言葉も使う何も変わらないわ」

「そんなわけない」

「納得がいかないようね。早くここから出ていけばいいのに」

「うるさい、君は、早く……」

こんな状況でラサは、どこへ行けばいいんだ？

「ラストダンスを」

ラサが、切り付けて来た。僕は、思わずナイフで応戦した。カーン、つばぜり合いになった。だが相手は、いくら年上だとしても女性だ。ザン、ザツ、ラサの剣を力で飛ばしてから空きの胴体に突き刺した。しまった……

「あつやられちゃた。でも仕方がないか」

ラサは、力が抜けたように後ろに後退りした。

「コウ今行くよ……あとリュウキに会いたかったな……うっ！」

丘の崖まで行くと自分でナイフを抜いた。

「リュウキ……」

後ろに倒れるように落ちる。僕も無我夢中でラサを支えようとしたが足場が崩れた。落ちながらラサは、笑顔だ。辺りが夜なのに明るく輝く、光りは、急に強くなり目が開けられなくなり、意識がなくなった。

目が覚めた。時間が経ったというよりお腹がすいたからだ。

丘の崖の崖下で倒れていた。服が旅立ちのときと同じで横に鞆が落ちていた。辺りにラサの姿が見つからない。それ以前に町の姿が学校を含めてない。雑草が覆い繁り一部に木がまばらに生えている。

昨日に燃えた感じではない。何年何十年前も過ぎた感じた。

お腹が空いたので携帯食料を食べた。それから辺りを散策した。学校跡に行くと絶望した。お墓が並んでいた。それもおびたたい数

の・・・さつき倒れていたところに行くとき気付かないところの一つだけ綺麗な墓があった。名前には、「ラサ」と書かれていた。さらに死んだ日は、今から30年以上前だ。

寒気がした。確かに昨日までであった町が今日に跡形もなく墓となつて消えていた。今思うと、魔法で辺りを吹き飛ばしや、異様な光で目くらましや、他生物を操るなど並大抵の人ができるわけもない。

「全ては、夢であり幻か」

そして、やっと自分の名前を思いだした。そして、リュウキは、父親の名前だ。

「この村には、何もない」

目が覚めた昼下がりに僕は、村を出た。そこから遺跡を目指した。遺跡も森と同化してわかりにくいが二つの墓を見つけた。そして片方の墓に古いペンダントが置いてある。よく見ると微かに見覚えがある蘭が描かれている。

「ランとキヨウここに眠るか」

もしかしたらラサは、魔法使い・・・魔女かもしれない。しかし、今となってはわからない。

「そあゝて次は、どこへ行こうかな」
村を見ると丘が見える。

サイレント・ヒル 魔女がいた村

1部より 終幕

お昼過ぎの昼下がり

ブルルルッ、丘が見える。私は、姉さんの墓に近づいたのでバギーのエンジンを止めた。今日は姉さんの命日だ。

正直私と姉さんが昔生き別れだと知ったのは、この村を出て5年後だ。証拠はないが、そうなければいろいろつじつまが合う。

しかし、不幸にも姉さんを殺したのは、私だ。このことは、未だに誰にも言えない。しかし、たまにここを訪れた旅人は、私が経験した記憶が悪夢としてみるらしい。

だが未だにその夢を見たことがない。私は、本当に姉さんに嫌われているらしい。

墓の前につき、花を添え、手を添えた

「おとというちの四男が旅に出たよ。もしかしたらここに来たかもしれないが、どうか見守ってくれ」

心でいうと立ち上がりバギーに戻り家に目指した。

軽く1時間で自分の村につき借り物バギーを返した。

「早いですね」

「アクセル全開ですぐさ。いつもありがとう」

「いえいえ、毎年私の故郷を墓参りしてくれるなんてあなただけですよ。今でも行くとあの火事の記憶が疼くのですよ。」

あの村の助けた少年は、今あの火事後、一緒に旅をした仲だ。

そして、軽く話して家に着いた。

「ただいま」

「お帰りなさい。早いね。」

「まあな」

いつも綺麗に墓を拭いているのだが今日に限って雑巾を忘れてしまった。

「お茶」

「はいはい」

ダイニングの机に座り、新聞を見ながらお茶を待つ、しかし見たことがあるなと思うと朝見たものと同じだ。

ポイツ、と投げるとちょうどいいタイミングでお茶がきた。

「熱いですよ」

「アツッ」

「ほら言ったのに」

といいながら妻は、私が投げ捨てた新聞をみた。

「あの子今どこでしょうかね？」

「ただいま」

長女が話を挟むように帰って来た。

「あらあらお帰りなさい。早かったね」

妻が、娘のところへ走って行った。

私は、「さあね」と小声でいって熱いお茶を飲み干した。

息子のことを思うと昔、仲間と友に旅をした思い出が、部屋全体に浮かぶ。

第一章 終わり

1部より 終幕（後書き）

私に”僕”の名前を決める権利はない。なぜなら名前を決めるのは、その親であるからだ。

また、名前は、必要ないかもしれない。実際考えて2、3日しかない彼の名前を聞く人はいるだろうか？困っていて助けたお婆さんやたまたまぶつかった子供、バイトの店員さん・・・おそらく私が、”僕”と出会っても「旅人さん」と呼ぶだろう。例え名前を聞いたとしても数日後には忘れているだろう。極端に言えば私は、「僕のたび」の傍観者でしかないからではまたいつかまた僕のたびで

1部 補足 「ラサの思考」(前書き)

この作品に出てくるヒロインのラサが、僕と出会う。少し前に考えていたことです。

ちなみに作品のネタバレラシに近いので最初に読むことはあまりおススメできません。

お時間があれば読んでください。

1部 補足 「ラサの思考」

わたしの村は、海を越えて森を掻き分けて来た国によって滅ぼされた。別に資源を求めるわけではなく、領土を関係ない。多くの人が、殺された。ただ、10才以下の男の子達をさらうためだった。わたしは、弟の竜騎^{リュウキ}を守るために必死に戦った。だけど力不足でダメだった。竜騎は、その国の奴隷として連れていかれてしまった。

村が、無くなった後、わたしは、何とかそこから生き残り竜騎を助けるために、わたしなりに力を求め、攻めて来た国について調べた。その結果、その国の目的は、幼い男に武道を教えて、ある程度成長したら彼等同士を戦わせて、勝敗で賭をするためだ。

体が、弱かった竜騎には、到底生き残れないかもしれない。だから、助けるために力が必要だ。

そして、わたしはついに家に代々伝わる魔石の力で知能の低い魔物を操る力を入れた。あとは、この魔力の力を上げ、さらに扱いやすく強い魔物を探すだけだ。そして、魔物を見つけた。「鬼」という魔物だ。だが、わたしの力は、不完全で弱いものだった。暴走した「鬼」は、村を襲いたくさんの死者が、出た。それも親達が、畑作業で留守の時、つまり多くの子供達・・・

わたしは、自分の村でされたことを別の村でしてしまった。

わたしは、わたしなりに謝る。殺されても構わないつもりで村に謝りにいった。村では、魔石について全くの知識が、なく放浪に近いわたしを村長が、引き取ってくれた。村長には、わたしより少し若い一人娘が、いた。だがその娘は、わたしが殺してしまった。

いつか本当のことを話そうかと思ったが、怖くなりいうのをやめた。そして1年後、噂を聞いて愕然とした。その攻めて来た国は、たくさん奴隷達が、反乱しクーデターが、おき、地図から無くなってしまった。軍隊と奴隷の衝突で物凄い死者が出たそうだった。多分その死者に竜騎も含まれていたかもしれない。

すべてが、遅かった。そして、わたしは、思った。第2の人生が始まると・・・

今では、この新しい村で、好きの子がいる。年下で無垢な子だ。だが、その子は、明日、村を出て戦場に行かなければならない。俗にいう徴兵だ。どうすれば止められるかが、今の考え事だ。

後もう1つ気になることがある。それは、時たま大きくなった竜騎が出る夢を見る。竜騎が、わたしをサイレント・ヒルで刺し殺す夢を・・・

僕のたび 1章に続く

1部 補足 「ラサの思考」(後書き)

今、第2章を書いています。

出来たら読んでね。

それではまた

2部「アイランド・ルーツ 人魚のいた町」 序幕「黒い羽」(前書き)

僕は、あの魔女のいた村跡から僕の村を近くをかすめながら海に見える町を目指した。

二十歳まであと、4年と11ヶ月と27日・・・

2部「アイランド・ルーツ 人魚のいた町」 序幕「黒い羽」

バサツバサツバサツ、朝日の中に一つ黒い羽が飛ぶ。森から見ると明らかに鳥である。しかし、普通の鳥に比べて明らかにおかしいところがあるのだが森にいる誰もが気付かない。

「急がないと - 急がないと -」

と喋っているにも関わらず・・・

その鳥は、森の中で森にあるはずのないものを見つけ急降下した。それは、森の色にはない黄色いテントだ。

「ねばすけ - 起きる力 -」

反応が全くない。もちろん中に人がいないわけではない。微妙にいびきが聞こえる。

「ねばすけ - 起きる力 -」

しかし、起きる気配は全くない。残念なことにこの鳥には、今寝ている人が起きるまで待つきはない。

「5 - 4 - 3 - に - い - ち -」

またこのカウントダウンの意味を知らない人が起きるわけもない。

ザクッ、

「イタッ - !! -」

鳥は、何と中で寝ている人に自分の口羽しを刺した。痛くてテントの中で暴れ三角形のテントが真後ろに倒れた。

「全く僕が、人喰いの魔物だったらこの旅人は、どうするの力 -」

どうやら中で寝ている人は旅人らしい。

テントは、しばらくバタバタと暴れた後、バタンツと前に倒れた折れる前と同じ向きに戻った。

「やれやれ力 -」

鳥は、旅人に呆れるしかない。

ジジジッ、テントのドアが開き、人の顔が出て来た。不思議そ

うにこちらを見ている。

「何だただのカラスか」

こちらを見ながらそういうとまたテントの中に戻った。

「起きろカ」

戻りかけた顔が、驚いたように出て来てこちらを見た。

「誰かいるの？」

「早く起きないと日が昇ぞカ」

「！ッ、カラスが喋っている・・・」

当然といえば当然かもしれない。朝起こされてたのは、話す力
ラスなのだから・・・だがあまりにもベターな展開なので呆れた。

「早く起きろカ」

「まっ魔物？」

「もし魔物ならゆうちよに起こさないで寝ている間に食べてるカ
！」

「じゃいやがらせ？」

だと思うのかと言いたいが、くだらないから言わない。だが代
わりに言わなければいけないことがある。

「足に妹から手紙があるからそれを読め！」

確かに紙みたいのが足に巻き付けられている。旅人は、それを
足から取り、延ばして読んだ。

「・・・わかった。」

その手紙には、妹の字で誕生日おめでとうと書き始めて最後に
頑張つてね。と書いてあった。

「わかった」

僕は、手紙をカラスに返そうとした。だがカラスは、足で手紙
を受けとらない。

「いや、いい。手紙は、妹さんから君へ渡すものだから君が持つ
ているといいカ」

「そう。名前を決めないと・・・カラスだから・・・レイブン！君
名前は、これからレイブンね」

「レイブンか、残念だか名前はもう決められている。コクハ、黒い羽で黒羽だ力-。」

「名前がもう付いている??」

「ああっ箱を開けたときに君の妹君に名付けられた力-」

「なるほどね」

「早くいくぞ-!」

語尾を延ばすことが口癖だが稀に延ばさなくてもいいらしい。

「これからよろしく」

僕は、握手しようとして手を延ばした。するとコクハも羽を僕に延ばした。

「こちらこそよろしく力-」

そして僕たちは、握手をした。それから僕たちは、長い間時間を共有するようになるだろう。うるさいかもしれないが、この4、5日誰とも話さず来たのだからいい話し相手になる気がした。

「サア早く支度をしろ力-」

気が着けば日が昇り始めていた。

「早くしないとお日様が沈むぞ力-」

僕は、慌ててテントを片付く旅の支度をした。

「早く早く力-」

「喋ってないで手伝ってよ」

「この手でどうやれというんだ力-」

コクハは、羽を差し出した。これで物を持つこと等出来そうにない。本当にただだるさいかもしれない。そんな気がした。

「これからどこに行くの力-」

「海の見える町」

前の町で食料を補給する予定だったが、地図にない町で名前通りに実在してなく何も買うことが出来なかった。そこで次の町へ急ぎ足で向かい。携帯食料などを買うことにした。

「翡翠村力-」

「名前が綺麗だからまた行きたくなくて」

「前にいったことあるのか？」

「一度だけ、お母さんが魚が食べたいというから父さんと誕生日に遠いから一度しか行ったことないよ」

「遠回りじゃないのか？ 普通はよらないか？」

「確かに大陸の突き出した岬にあるえけど、僕のたびは、まだ決まってるじゃないしそれに」

「それに？」

「最短で国を回っても5年たたないと思うから」

「そうなのか？」

最初から気になったのだが見た目がカラスだけに語尾が「か」とつくらしく。正直うざいが、例え言ったとしても直るとはとうてい思わない。壊れるまでうるさい思いをしないとけないみたいだ。なんて考えていると目の前に小柄のチーターがいた。魔物一種かいつからいたのかは、わからない。だが毛皮は、それなりの値段で売れる。旅をする僕にとってこれらを村で売る以外に収入源はない。

「刈るのか？」

「当然」

チーターは、僕に気付き歯を剥き出しにして威嚇をした。僕はあまりそれを気にしないでナイフで切り付けた。魔物は、油断していると思ったからだ。

しかし、ターン、チーターは、軽々と僕の頭を抜けた。ナイフ空気だけを切った。

「油断したか？」

そのままチーターは、僕の背中に飛び付き首を噛み付こうとした。

バサッバサッ、カラスがチーターの頭に飛び掛かり足で目を潰した。

「ガーッ」

予想外の攻撃で目を潰された、チーターは、暴れ出した。

「今のうちだ。とどめをさすカー」

だが僕は、この時夢で見ていた時より格段弱くなっている。

「……………」

「どうした！？早くしろ敵が目を見えていない今がチャンスだ！」

僕は、我に戻り、目が見えなくなつたチャーターを倒した。

「何してる。早く剥がないと腐つて売り物にならないぞ。」

「あつうん」

「動物の皮の剥ぎ方は、知ってんの力。」

「うん、学校で教わつたから」

学校で教わつたことを思い出しながら毛皮を剥いだ。

「なんか下手だ力。」

思っていたより僅かに少ししか毛皮は残らなかつた。

「村を出てから魔物を倒したことあるの力。」

僕は、首を横に降つた。

「やれやれ力、早くに肉も剥がないと腐つて食べれなくなる力。」

「わかつてる」

思っていたより難しく手間取つた。所々骨や内蔵があり、思うように肉がない。残酷かもしれないがそれでもしないと肉に食いつけない。

「諦めろ。こいつにもう食べられるような肉はない力。」

辺りを真つ赤に染めたが、敵は、お腹を空かせてたらしく痩せ細り食べれそうな肉はない。ナイフが血に染まる。

「くそっ」

この前に村で見た夢の記憶がよみがえる。

「収穫は、皮だけか。」

「うるさい。仕方がなかつたんだ。あれは！！」

「何をだ？何が仕方がないんだ？」

「なんでもない」

もし前の村で見た夢が、本当に夢ならいいのだが、あまりにも現実味帯びた。

「まあ、初めて生き物を剥ぐのは、気がいいもんじゃないな。まあ旅人なんだからあきらめろ力。」

コクハのことを半分無視しながら、あれは、すべてが夢であり忘れようと思った。

「しかし、服は血で真っ赤じゃない力。」

「ナイフもね」

「それは、早く拭かないと錆びて使い物にならない力。」

「そうだね」

自分の青いフープで血を拭き取った。

「どこかでその服を綺麗に血を落とさないと怪しまれて村に入れない力」

「本当？」

「当然力」

「ハ」

僕は、知らないことが多い。家を旅にする前にいろいろ調べべきだった。

鞆を背負い、僕は、村へ向かった。

「確かこの辺に川が流れている。そこで服を軽く洗うといい。それにここ最近体も洗ってないだろ力」

「この辺で来たことあるの？」

「あると思う力。少しだがこの辺りの地図がインプットされている力」

「わかった。でその川には、どう行けば近いの？」

「そこまでは自分で調べる力」

怒られた。僕は、鞆からコンパスと地図を出した。最近のコンパスは、方位と別に緯度経度も調べることが出来る。しかも太陽電池搭載だから光りがあればいつでも使える。だが地図までは表示されない。そこで地図が活躍する。

「西に3キロに川があるね」

「方位だけなら教えてあげたのに力」

聞かない僕が悪いが何だかムカついた。

それから川に着くまでの間、いくつもの魔物に会った。だけどクロハの適切なアドバイスとフォローのおかげで大きな怪我をせずにすんだ。

「重い」

魔物を倒すたびに毛皮や爪や骨を剥ぎ取ったのでそれらが鞆をはみ出し今では、重りとなった。

「本当に魔物のことを知らないカー」

「うつ・・・」

「それに今までに魔物を倒したことがないなんてこれからどうするだカー」

「うるさい。んっ？・・・なんか臭い、川に臭いかな？」

「そうかもしれないカー鼻がないからわからないカー」

森が開け川に着いた。川は思ったより濁っていて独特の臭いがした。川を覗くと濁りで自分の顔が写った。

「飲むなよカー」

「ニオイで飲む気にもなれない」

「洗うなよ」

僕がさつき収穫した皮を出したらすぐにそれを止めた。

「こんなところで洗ったら、臭いがついてさらに売れなくなるカー」

「じゃわざわざ川に向かった意味は無くなった？」

「そういうことになるカー」

僕は、クロハを睨んだ。クロハは、川下を見た。

「村は近くにあるの？」

「川を下って海が見えたらすぐ近くだカー」

クロハは、そういうと羽を広げ羽ばたいた。僕も慌てて荷物をまとめ後を追う。

「待つて・・・」

後になって思うと別に急ぐ必要は、なかったかもしれない。

2部「アイランド・ルーツ 人魚のいた町」 序幕「黒い羽」(後書き)

たびたび、題名が変わってしまい申し訳ございませんでした。

以後この題名で次回作を書けたらなと思いながら、人生の暇をつぶそうかなと思います。

あと、読者アップには、ブログがオススメとあったのでブログを始めました。たまに時間があれば更新しています。

見たい人は、Yahoo!のトップページをクリック、そこで「crocusの咲きどころ」で検索していただければ、crocus | shiromaでヒットすると思うでそちらもあわせてよしく
それでは

また今度

2部より 第1幕「海の臨む町」

旅をして5日目

川を下ると次第に塩のかおりがした。

「塩のかおりがする」

「海が近いからだカー」

「なんで塩なの？」

「それは、海には沢山の塩が入っているからカー」

「どうして海に塩が沢山あるの？」

コクハは、あまり常識を知らない旅人に不安を感じた。

「それは、岩石に含まれている岩塩が雨が降って水に溶けそれが集まり君の横に流れている川となり、最後に海に永遠と流れて次第に濃くなったカー」

「そういえば前に学校でそんなことを言っていたけな。海の近くだと塩のかおりがするからその辺は塩だと」

「なんか漢字間違っているカー」

クロハ、地面に立ち足で字を書いた。「潮」

「この字を書くカー」

「えっ？しよっぱい塩だと」

「違うカー」

コクハは、これから世間で恥をかくのではないか不安になった。

「あつ村だ。」

そんな心配をよそに二人は、村に着いた。村に着くなりコクハは、僕の肩に乗った。コクハが言うには、このほうが絵になると言った。

この村の建物は、木と石（多分コンクリート）の半々だ。また、前に来たより村は、大きくなっていた。時間は、ちょうど正午を過ぎていた。

「ネーもしかして今は、昼休みだから毛皮を買ってくれる店なんか

ないよ」

今日取った毛皮を指した。

「そうかもしれないカーでもこのお金を持っているか？なんでもいいからお金にしないと何も食べないカー」

そうだ。例えば同じ国の村だとしても文化が違ったり、その村の通貨が違うこともある。ただ魔法は使わず機械を使うこと、それらが同じだけだ。

「じゃ昼休みが終わるまでここで待てということ？」

「そういうことになるカー」

「えー――」

これが初めての村でそこで昼休みが終わるまで待たされる。今までの疲れがどつと出た。

「仕方ないカー」

コクハは、慰めなのか明るく言った。僕は、疲れた目でコクハを見続けた。

「じゃもしかしたらまだ営業しているかもしれないから一様、店だけ行ってみるカー？」

「そうしよう」

疲れて重くなった鞆を背負いながら村を歩き回った。

”質”という大きな看板を見つけた。僕たち旅人は、ギルドと呼んでいる。ギルドは、魔物の毛皮や骨等を専門に買い取ってくれる。昔は、お金がないときものを預けお金をもらい。返してもらったとき預かり料と一緒にお金を返すところだったらしいが、最近では、工場等に資材提供場所となっている。

門の前で愕然とした。PM2:00からPM3:00間で昼休み

「ねえ今何時かわかる？」

「時計持っていないのカー？」

「うん」

「・・・いま2時5分カー」

つまり村に来てすぐに話さず探せば間に合ったわけだ。

「昼休み遅いね。」

「そういう店もあるカー」

「あーくそー」

「時間が来るまでどこかで待つしないカー」

疲れている僕に対して、コクハは、いつでも冷静だ。

「何だね！やかましい」

店の中から人が出て来た。店員でかなり地位の高い人、店主かな？

「えつまっ？」

いきなり店から人が出て来たので声がでない。

「なんだ。旅人かなにか売りに来たのか？」

「はい、そうです。」

「そうか、早く入れ」

店の人が手招きした。

あたふたしている僕の横でコクハが、答えた。それも語尾の「カー」を忘れて

「さあ早く皮を売るカー」

「あ、うん」

店は、外同様豪華な作りだ。」

「さっ早く売りたいものをだしな、鑑定するから」

店主が、カウンターの奥に座り言った。見た限り頑固ものだ。

「はいっ」

僕は、慌てて鞆から皮を出した。

「きたないな」

店主が呆れたように言った。

「初めてなもので」

何も言えないで僕の代わりにコクハが答えた。

「言葉を使うカラスか、珍しいな」

店主が、眉をひそめた。

そっかやつぱり話すカラスは、珍しいんだ。

「早く他の物もだしな」

「あつはい」

ここに来るまで集めた、骨や肉、皮を出した。

「まあ、こんなものか。全部で3500銅だな」

この国の金の単価は、高い額からゝ金、ゝ銀、ゝ銅という。

最後にもらったお小遣の3ヶ月分か

店主やコクハに聞こえないようにいった。

「安い！もつと上げろ」

コクハが、叫んだ。

「何をいう？それでもこんな血まみれな毛皮を高く買うとってんだよ」

「隣の村で最近毛皮不足で単価が上がってんだろ？」

「ッ！！」

「何で知ってんの？」

店主の代わりに僕が聞いた。

「君は、新聞を読んだほうがいい」

「わかったよ。倍の7000銅だ」

「まだ低い」

「7500」

コクハが、目を鋭くした。

「8000」

「骨や肉の分は？」

「このカラスは、なんでもお見通しか」

「2銀だ！それ以上は、無理だ」

「わかった。それで手を打とう」

1万銅は、1銀だ。

そして店を出た。

「すごいね！コクハ最初の金額から僅かな交渉で6倍近く上げて」

「君が世間を知らなさすぎなんだよカー」

コクハが、誇らしげにいった。もう少し粘れたがそうすると店

の出入り禁止になるから

止めた。と付け加えた。

「これで何処に泊まるうか？コクハ？」

「いや無理だカー」

「えっ？」

「宿に泊まるには、最低でもあとこれの倍4銀が必要だカー」

「本当に？・・・」

「なら恥をかくつもりで聴きに行くカー？」

「ハー・・・世界は、そんなに楽じゃないか」

「旅は、そんなものだカー」

「でもコクハがいればギルドは大丈夫だね」

「そんなことないカー」

「なんで？」

「本来は、君に世界を知るために黙っているつもりだが店の店主があまりにも横暴だから少し言っただけカーそれに・・・」

「それに？」

「何でもないカーまた後で話すカー」

「・・・気になる」

「そんなことより早く森にいつて魔物を刈るカー早くしないと夜になるまでにギルドが閉まるカー」

「わかった」

僕たちは、森に戻り魔物を倒しに行くことにした。

だがあることを忘れていた。ドスツ、僕は、倒れた。

「どうしたカー？」

「お腹空いた」

「働かざる者食う可からず力」

「鬼」

「なんでも言うカー生きたければがんばるカー」

僕は、それから飢えという地獄を見た。

森にはいるなりチーターの群れに遭遇した。というより群れを

作らない彼等に運よく立て続けに遭遇した。

始めは、戦闘に没頭してお腹空いていることを忘れていたが、それが続くに連れ空腹の度がました。

「そろそろ村に戻ろうよ」

「何言っているカーまだ3匹しか倒してないカー」

「もう十分じゃない？」

「このまま村に戻ったらまた野宿カー」

「~~~~ッ！」

確かに野宿はやだ。だけどお腹空いた体に狩った革や肉の重みは、体にこたえた。

「仕方ないカーあと、3匹倒したら村に帰るカー」

「そんなに」

「これでも村の宿に泊まれるかどうかわからないぎりぎりカー」

世界は厳しいと思った。夢に逃げたくなつた。この前の村跡で見た夢で目が覚める。

「さあ、新たにまた来たカー」

今までに見た中で大きい。2Mを越えていた。

「なんか強そうなんだけど・・・」

「うん。この辺のボスかもしれないカー」

「じゃこいつを倒せば3匹分かな？」

コクハは、急に怯えていた。

「何をのんきな事を言っている！」

「えっ!？」

「あれは、この辺の主が突然変移だ。すぐに逃げるカー」

サツ、僕は、背を向けて走り出した。

チーターも飛び軽々と僕の前に飛んだ。僕は、思わず尻餅を着いた。チーターは、僕に対しなにか哀れんだ目を見た。

「君が弱いから哀れんでいるカー」

「なんで!」

「君が弱いからカーとりあえずどこでもいいから逃げて」

「うん」

走った。だが逃げるたびに僕を飛び越えて数メートル先におりた。

「遊ばれているカー」

「――ッ！」

「よし照明弾を打ち込むカー」

「なんで？」

「いいから」

何か策があるみたいだ。

「うん」

腰に下げている。緊急用の救難信号を打つことが出来る。小型大砲から救難信号用の球を取り出しすぐに照明弾を装填した。

チーターは、僕の不振な動きに気付き威嚇した。だが僕は、それに気がつかなく弾を変える作業を続けた。

「よし出来た」

「早く打つカー」

チーターは、威嚇しても無駄だとわかり飛び込んで来た。

「わかってる」

ダーンッ、銃から放たれた弾丸は、チーターの頭に当たり眩しい光をはなった。

チーターは、ともに光を見てしまい目を押さえて騒いでいる。「よし効いているカー今のうちに逃げるカー」

「いや今、目をやられたから倒すのは、今がチャンスだ」

「まて今は逃げることに優先だ！」

「大丈夫だって」

「まつ待て」

僕は、ナイフで首を切り、意図も簡単にボスのチーターを狩った。そしてすぐに絶命した。

「すごいカー」

「危なかった」

「革を剥ぐならすぐしたほうがいいカーここには」
「大丈夫、僕ならどんな敵でも負けないよ」

コクハの言葉を遮った。僕は、そのまま革やらを剥ぐことにした。

「いいやそういうことではなくてここには、」

フオオオ、フオオオ、不気味な泣き声がした。

「剥ぐなら早くしろカー」

「何の声？」

フオオオ、フオオオ、ざわざわなにかが近くにいます。

「ハイエナだなカー」

「ハイエナ？ハイエナは、サバンナじゃないの」

「種は違うけど似たような動物だカー」

フオオ、フオオオ、数が増えている。

「逃げるカー」

「まだ剥ぎ終わってない」

「今は、そんなことをしている場合ではないカー」

「あれ？」

「どうしたカー？」

「こいつ僕が、刺したところと別のところを怪我してる」

腰に小さな（菌形）があり、その辺りが紫に変色していた。

「ハイエナの菌形カー雑菌が入った見たいカー」

ガサガサ、目の前の草が揺れた。

「もしかして目の前まできてる？」

「そう考えるのが賢明カー」

「逃げないと」

「さっきからいつてるカー」

僕は、チーターも担いだ。

「死骸をもつな」

コクハが、叫ぶなりハイエナ達が一斉草から出て来た。グルル
ル、グルルル、明らかに威嚇していた。

「囲まれた」

「落ち着け数は、たかが7匹、肉を投げればみんな気を取られ逃げるカー」

「せつかくこの森の主をやっつけたのに？」

「死ぬ気カー？今この森の主は、ハイエナに代わったカーここは、落ち着いて肉を置いて逃げるべきカー」

「・・・そうだね」

コクハのいうことに一理あった。僕は、チーターの死骸を置き、そのまま後づ去りした。

「そうだカー背を向けたら君もやられるカー」

ハイエナは、下ろした死骸にたかり出した。

「そのまま、そのまま後ずさりして全てのハイエナが、肉に食らい付いたらすぐに全速力で逃げるカー」

ガサガサ、ガサガサ、後ろから音がした。

「後ろからもなにか音がするんですけど・・・」

後ずさりしているから後ろが見えない。

「だから早くしろといったカー」

「ワンツ！」

思わず腰が抜けた。

「おやおやこの辺は、ハイエナではなく狼でしたカー」

「えっ夜行性じゃないの？」

そういえばまだ日がある。

「何故夜行性の動物がこの時間活動しているか判らないカーたが一つだけ言えることがあるカー」

「僕たちの命が危ないということ？・・・」

「僕たちではないカー」

「えっ？」

「僕は、羽があるから万が一のときは、真上に飛べばいいカーでも君は、出来ない。だから君だけ危ないカー」

「そんな」

「だから早く逃げようといったカー」

「そんな」

「まだ諦めるなだからこそ落ち着けカー」

「うっうん」

後ろを振り向くとハイエナ達も狼を威嚇して前は、狼も威嚇した。

「ここは、まず・・・」

「うんっわかった。炎で吹き飛ばす」

あの夢でトカゲを吹き飛ばしたように

「えっ何を」

「吹き飛ばっ！」

僕は、狼に手のひりを見せ唱えた。胸のペンダントが光るとたちまち辺りが暑くなり、砂漠のような風が吹き、

「あちっ」

止んだ。

「ばかったいして使えもしない魔法を使うな！」

狼とハイエナは、僕の行動かたずと見ていた。

「前の村だと・・・」

ワンワンワンツ、ワンワン、一斉に狼がほえだした。ハイエナも負けないといわんばかりに吠える。

僕の魔法は、辺りを温かくして自分の手を軽く火傷しておわった。

「逃げるカー発光弾で目くらましするカー」

「わかった」

僕は、腰から照明弾を装填して狼に向けた。

「おいそれは、照明弾じゃないカー」

ダンッ、弾は、狼の横にそれ木に当たり破裂した。小さく光ると異様な音を出した。

音が止んだ。やけに静かだ。何の音もしない静寂だ。
「静かだ」

目の前には、狼が倒れている。中には、盛んに口を開けたり閉じたりしてまるで吠えているようだ。振り向く前にカラスが、僕の袖を引っ張っている。

「コクハ！大丈夫だったんだ」

「・・・・・・・・」

コクハも盛んに口を開けたり閉じたりしている。

「なにかいいたいの？」

コクハは、また僕の袖を引っ張った。

「えっ何？」

僕は、コクハに引っ張られながらその場を後にした。そこには、もうハイエナの姿はない。

「ねえどうしたの？」

コクハは、飛び僕もその後を追った。いつもと違うことに気付いた。

「ねえコクハ・・・なにも・何も聞こえない。どうして」

僕は、走るのをやめた。

「コクハ・・・」

コクハは、すぐに旋回して戻って来た。

「コクハどうしよう。何も聞こえないんだ」

コクハは、頷いた。

「これからどうしよう。どうすればいいんだ？」

コクハは、翼を広げ足で自分の指した。

「え何？」

コクハ、軽く飛び僕を突き飛ばした。僕は、後ろに倒れた。そしてコクハは、僕の胸の上で何かを言った。繰り返し言った。僕は、何となくその意味がわかった。

「オ・チ・ツ・ケ・・・オ・チ・ツ・ケ・・・」（落ち着け）

「わかった」

コクハは、僕の上から下りた。そして、コクハは、また飛び僕は、それを追いかけた。

「ガヤ・ガヤガヤ・ギャ・ギャ・
「あつ」

次第に音が聞こえるようになった。・タツ・タツ・タツ・タツ・タツ、自分の足音も聞こえる。しかし辺りがやけに騒がしい。

「コクハ」

コクハは、また反転して下りた。そして、目の前で逃げるそぶりを見せた。ギャギャ、ギャ・ス鳥の泣き声がする。

「なんか周りが騒がしいど」

「騒がしいカー？あつ！聞こえるようになったカー」
「うん」

コクハは、急に悩んだ。

「ん・やつぱり同様してパニック状態カーとりあえず村に戻るカー」
「なんでこんなに騒がしいの？」

「君が、間違つて使った音響弾で今寝ていた動物がみんな起きたみたいだカー」

「みんな？」

「この辺の動物はみんな夜行性だカー」

「だってこの辺のチータは起きてたよ」

「それは、君の気配を感じてたまたま起きたただけだカー」

「じゃあの音響弾でどれぐらいの動物が起きたかな」

「細かい数はさすがにわからないカーだけど音が聞こえたところまでは、起きたカー」

「何でそんなことがわかるの」

「辺りが騒がしいカー」

ウォーンウォーン、狼かな？聴力が、どこまで戻ったかわからないが鳥の泣き声や狼の遠吠えで辺りが騒がしい。

「さあ村に逃げるカー」

「うんっ」

バサッバサッ、バサッ、異様な数の鳥が集まって来た。
「鳥が」

「ハゲタカ！止まるなカー」

「わかってるけど」

コクハは、僕が追いつけるように行ったり戻ったりしながら飛んでくれた。だけど一斉に集まって来たハゲタカから逃げるなんて走っては無理だ。

「コクハ！コクハだけでも先に逃げて！」

コクハは、反転して僕の肩に留まった。

「私は、どこまでも君と友に行動するカー」

「命が危険にさらされても？」

「当たり前カー」

僕は、少しその言葉に感動した。

「そうするように私は、インプットされているカー」

「そう」

僕は、今の一言を聞きたくはなかった。辺りが黄昏に染まる。早く村に行かないとギルドが閉まりおそらく野宿になるかもしれない。

「あとどれぐらいで村に着く？」

「えっ何いつてるカー？」

「だって村に向かって走ってんじゃないの？」

「私に今の位置がわかるようなGPSとか地図が入っていると勘違いしてないカー」

僕は、走るのをやめた。

「ハアハアハア、だって村の位置がわかるからそれに近いほうへ逃げたんじゃ」

「違うカーただ単に逃げやすい方角に向かっただけカー」

「でここどの辺」

「そんなことわかる訳無いカー」

「エーッ」

すごく騙された感じた。音が聞こえないときにコクハのアドバイスが頼りだ。だけど今まで何も考えないでここまで来たことはか

なり堪える。

「かがめ。」

僕は、コクハに言われるがままに頭を下げた。

バサッバサッバサッ、サッサッ、頭の上をハゲタカが通りすぎた。

「危なかった」

「うーんおかしいカー」

「バケタカが今ハゲタカが頭を過ぎと追ったよ」

「普通のハゲタカは、死体にしか襲わないはずカー」

「そうだよ」

「もしかしてこの辺の魔物は、君の使った音響弾で怒ってるのカー」

「どうしようか？」

「村に逃げ込むことが賢明だけど村への方角わからないカー」

「コクハが、高く飛べば村の方角だけでもわからない？」

「そうだけど今は、ハゲタカがいるから飛んだらすぐに狙い撃ちされるカー」

「今ある装備で村に向かうしかないか」

今の自分に今日も野宿する考えはなかった。

「また来たカー」

僕は、ハゲタカの滑空攻撃を交わした。実際に当たっていないのでどれくらい痛いのかはわからないが、避けることが賢明だ。

「海に向かうカー海からなら真つすぐ町の方角がわかるカー」

「海の位置がわかるの」

「わからないカー」

「無茶苦茶だ」

「でも南の方角がわかればそこには海が広がっているカー」

「そりゃそうだけど南の方角が」

「コンパスを持ってるカー」

「あっそうか」

村を出るときに地図とコンパスを鞆に入れてきたことを思い出

した。

「伏せるカー」

また、ハゲタカが、僕の頭スレスレを通り過ぎた。どうやら複数体飛んでいる中で僕に襲っているのは、1体だけだ。

「コクハ！僕に襲ってくるハゲタカはあの大きな1体だけだ」

「そりや当然カー」

「えっ？」

「あのハゲタカは、ボスが仲間を守るために戦うカー」

「そうなのじゃ倒せば」

「無意味無意味カーたとえ倒しても今度はあの群れのナンバー2がボスになり今度はそいつが襲ってくるカー」

「じゃハゲタカの場合どうすればいいの？」

「逃げ回ればいいカーさすがに村までは襲ってこないカー」

ハゲタカのボスは、また急降下の構えをした。僕は、鞆からコンパスを探した。

「また来るカー」

シュツザンツ、またも滑降攻撃だ。僕は、ナイフ鞘から出し、

ハゲタカをよけながら切った。

「うああ」

ハゲタカは、ナイフに向かって飛んで来た。僕は、出来るだけ力を込めて押さえたが速度がナイフを体に刺さったまま体を持って行かれた。

「しまった！」

そして、大きな翼を羽ばたかせてこのまま上昇した。予想外の力に負けて鞘から手が離れた。

「おいっナイフを持っていかれるカー」

思わない深手を受けたハゲタカは、そのままここから離れようとした。

「逃がすか」

手のひらをハゲタカに向けた。胸のペンダントが光り白い光と

猛烈に鋭い風がハゲタカに向かって吹いた。

ギャー、白い光が当たると痺れたように落ち、風で翼の一部を切り落とした。

「すごい。高魔法・・・」

コクハが、物凄く驚いた。周りで見ていた小さいハゲタカも一斉に逃げ出した。

「ハアハアハアもうだめだ」

飢えと今までの疲れ、そして魔法の使用で立てないぐらい疲れた。

「あの電撃と風切り・・・普通に今まで見たことがない・・・君は魔法使いカー」

「ハアハアハア」

呼吸が落ち着かない。目の前に痺れたハゲタカがいるからナイフを無くさないで済みそうだ。

「すごいすごいハゲタカは、村でかなり高く売れるカー」

「ハアハアうんっ行こう。村へ」

コクハは、僕の目の焦点が合っていないことに気付いた。

「今から私は、高く飛んで村への最短距離を探してくるから君はここにじっとしているカー」

僕は、返事を返さなかった。コクハは、すぐに辺りを飛んだ。

そこですぐに村を見つける、また別に違うものを見つけた。さっき音響弾で逃げた狼の群れで先ほどより数が多い。コクハは、その群れに向かって飛んでいった。その後、その群れは、僕に会うことはなかった。

「あっコクハもぐもぐ」

「まだあったのか食料・・・」

僕は、最後の携帯食料をたべていた。コクハは、何故かはわからないが疲れていた。

「コクハ村の方角は、わかった」

「すぐにな」

コクハが、少し怒っている。

「どうしたのなんか怒っているみたいだけど」

「風が、少し荒れていたカーで村の方角はあっちカー」

コクハは、僕をてつきりお腹を空かせて、滅多に使わない魔法を使い疲れ果ていると思っていたが、携帯食料を食べたのかかなりの疲れが取れていたようだ。翼を村の方角に上げた。

「村の方角は、こっカー」

「さつきから村から離れるように走って来たわけか」

「あの時は、仕方がなかったカーもしあの時すぐに逃げなければ食べられていたかもしれないカー」

「でもこれで夜までには村に戻るね」

「大変カー」

「どこが？」

「早く村に戻って、さつき狩ったのをお金にしないとホテルにチツエクインしないと今日も野宿カー」

「大丈夫じゃないの？」

「何いつてるカーあの村のたいていのお店は、日が沈んだらお店も閉まっちゃうカー」

「今何時？」

「わかるカー何で時計を待ってないカー」

腕時計は、買うべきだった。本当に時間がわからないと不便なことが多すぎる。あれっ？

「だってさつきギルドに着くとき時間を教えてくれたじゃないか」

「覚えていたカー」

「教えてよ」

「仕方がない。これが最後だ。次からは、自分で腕時計をかってそれを見るカー・・・5時15分」

もう村を出て3時間以上たつたみたいだ。

「ねえコクハ、さつきのギルドの営業時間は、夜の5時までだった

よね」

「記憶力は、あるようだな、その通りだもう終わってしまったカー」
「えー今日も野宿？」

「諦めるな今から村まで、はしれば間に合うかもしれないカー」

無茶苦茶なことを言われているような気がする。

「村までの距離は、どれくらい？」

「そこまでは、自分のGPSと地図で調べるカー早くしないと日が沈んで本格的に魔物が動き出す。時間だカー」

面倒だな〜と小声で言いながら村へと走る。ザバーン、ザバーン、波の音をする。

「波の音をする。村まで近くだね」

「海に近ければどこだって波の音をするカー」

そういわれればそうだ。自分で変なことをいった気がした。

「町まで後どれくらい？」

「多分このまま走ってあと5分カー」

「5分！！ついて」

「！？、どうしたカー？」

「舌嚙んだ」

「走りながらしゃべらないカー」

僕は、町まで走った。

走りながら日が沈むなりすぐに村が見えた。

「ハアハアハア、もうダメ息がハアハア」

さつきから走りっぱなしだ。明日は、のんびりしたい。

「早くしないと今日も野宿」

コクハが、歌った。もう野宿はしたくない。それに食料も今さっき全部食べてしまった。さらにここ最近風呂にも入ることが出来ないから、食堂にも行く気にもなれない。

「わかったよ」

空を軽々と飛んでいく、コクハを追い掛けた。そしてようやく、

ギルドに着いた。案の定、閉まっていた。

「何だこのギルドは、こんなに早く閉まるとこなんて聞いたことがないカー」

先回りしたコクハは、騒いでいた。

「やっと追い付いた」

「うるさい。さっきの旅人が用が、あるなら明日にしてくれ」

店主が、出て来た。

「さっきハゲタカのボスを倒したカーその新鮮な死骸があるカー」

「ほーハゲタカが珍しいな。一体どうやって仕留めた？」

「それは、間違っても魔法でたたき落とした」とは言えない。もし言ってしまったら北の人と勘違いされてここのほとんどの店から出入り禁止になる。

「企業秘密カー」

僕は、鞆からハゲタカの死骸を出した。

「うーんいや明日にしてくれ、まあ、ただで置いていくならば歓迎だけだな」

「帰るカー」

そういうとコクハは、いつてしまった。

「待つてどこ行くの？すみません。」

僕は、店長さんを怒らせたので謝りそして、コクハを追い掛けた。

「ああ明日、朝早く来いよ」

店長は、そういうながら別に怒っていなかった。僕は、コクハが道を曲がったのでそれを追い掛けた。

「おい何であの店長に謝るようなことをした？」

「いやだつて怒らせるようなことを」

「何を言つてんだ？ハゲタカは、普通、警戒心が高く空高く飛んでいるからなかなか市場には出回らないんだぞ。」

「・・・・・・」

「それをただで置いていけなんて普通に考えられることじゃないぞ」

コクハは、語尾にカーを付け忘れている。こっちのほうで、店主より怒っていた。

「これからどうするの？」

「今日泊まる場所を探すの！」

「お金足りないのに」

「君は、自分の村の宿舎の値段を知らないのか？」

「自分の家があるのに何でわざわざ宿に停まるのさ？」

「それもそうカーとりあえず安いところを探すカー」

「オーツ」

疲れていたので軽い気持ちで手を上げた。

「とりあえずその宿に行くカー」

コクハが、指した宿舎は見た目がかなりぼろい。

「あそこにするの？」

出来ればもう少しいいところをしたい。

「贅沢いうなカー」

「じゃ一回だけ料金を見るだけでも別の所に」

「例えばどこカー？」

村の中に、複数の宿舎があるのは、都会ぐらいだ。とコクハは、言いたいような目でいった。

「探さないでないと判断するのは」

「うん。確かにそうカーだが、もし見つからないとチェックイン出来なくて寝るところがふかふかのベッドか、冷たい土の上かもしれないカー」

「うつ・・・」

その一言で、反論することが出来ない。

「諦めてそこに泊まるカー」

僕は、コクハのいう明らかにぼろくて古く言いたくはないが汚い宿に泊まることになった。

「早く入るカー」

「わかつてる」

そこ宿は、自動ドアではなく、両開きの片方が締切でもう片方が片開きだ。別に珍しい

わけではない。だが僕の村では、自動ドアで近くなり開いてしまうのでなかなか近づくけない建物の一つと思っていた。

「いらっしやいませ」

コクハは、フロントにめがけて飛んだ。

「空き部屋を一つ開いていないカー？」

「カラスが喋った!!」

フロントの人は、当然といえば当然のような対応をした。

「すみませんね。勝手にフロントの上ののってしまつて、コクハ」

「何カー」

「そこに、机の上ののちゃダメだよ。僕の肩にのつて」

僕が、そういうと僕の肩に飛び乗った。フロントの人は、ここまで利口なカラスを見て動揺している。

「すみませんが、まだ空き部屋は、ありませんか？1番安い部屋でいいので」

「後予約されていますか？」

「いいえ今日たまたまこの村についたので」

「そうですか？ご年齢は、15歳ですか？」

「ええ、今月に」

コクハが、何かを言つたみたいだが聞こえなかった。

「では、3泊4日でよろしいですか？」

「いや、長い2泊3日だカー」

「3日は短くない？」

「ええお客様が言う通りたいていの放浪人は、この村に4日ほど滞在しますが」

コクハは、料金表を見ながら答えた。

「いやこれであと部屋は、1番安くいいカー」

値段を見たが、1泊高い部屋から順番に1銀、7500銅、4000銅だ。

「せめて少しランクを上げても・・・」

「文句を言わないカー」

「では、お名前をここに」

僕は、フロントマンに言われたとおり、記入欄に名前を書いた。そして鍵をもらいその鍵に書いてある数字の部屋に向かった。

そのこの部屋は、2階で1部屋だけの部屋だ。そとは、すぐに隣の家があり、海の波音しか聞こえない。ユニットバスがついていたことは、せめての救いだ。

「ふうゝ着いた」

「早く明日の準備をするカー」

「所でなんで3泊にしないで2泊にしたの？」

「それは、はじに小さく3泊以上の方は、特別にクリーニング料金をいただくと書いてあるカー」

「ふーん」

ギュルルル、お腹空いた。さっき携帯食料を食べたが少なくあきらかに足りない。

「どこかに食べに行くカー」

「そうだね」

僕は、財布があるかどうか確認した。

「いやその前に」

「？」

「部屋を出る前にシャワーを浴びて出来るなら服をあるなら着替えたほうがいいカー」

僕は、それをあまり思い出したくはなかった。

「コクハ、ニオイわかるの？」

「少しなら」

それから近くの食堂で海鮮料理を食べた。それは、コクハの提案だった。だけど生で食べることに抵抗が、あったので天ぷらにし

た。

食事もすぐに終わり、また部屋に戻った。

「シャワーも浴びたし、ご飯も食べた♪今日は、いろいろあったからまだ早いけどもう寝よう」

「寝るのは、まだ早いカー」

「へっ？」

一瞬夢の中だったがすぐに起こされた。

「今日に狩った、獲物を洗わないと商品価値落ちるカー出来ればすぐしたかったが食事の猶予をあげた分ありがたく思えカー」

「もう寝てたのに」

「諦めるカー」

「うー……zzz」

ガツツ、コクハのくちばしが、炸裂した。

「早くしろカー」

「ん……zzz」

スッ、コクハが次の攻撃を構えた。

「……起きてるよ……zzz」

ザシュ！、コクハは、うつぶせの僕に翼で服を払いのけて口橋で指すのではなく、えぐり取るように背中を指した。

「ツツツツツ……！」

言葉で表現できないような死に至るような痛みが走る。ガサガサガサガサ、声が、出ずはいずり回る。息が、出来ない。今までで一番強烈であり、外であればその攻撃を受けただけで死を感じたかもしれない。

「普通であれば、突いて起こしたが何せここは、建物中でましては夜だカー諦めるカー」

僕は、コクハを睨んだ。初めて殺意が浮かんた。ペンダントが、強烈に光る。空より濃い青い光、

「聖霊の御加護を」

それが、今言えた唯一の言葉だ。光は、さらに光を増し、部屋

を埋め尽くした。

「まっ眩しい」

コクハは、光に包まれる僕を直視できていない。その時光の中心で一人の男が、仁王立ちしていた。

光が、弱まりドスッ、と倒れた音がした。

「ゼ・ハッ、ゼ・ハッ、ゼ・ハッ」

僕は、普通に立つことが出来ず四つん這いになっていた。そして、さっきの傷は、全くといっていいほどに痕がない。ただ服の一部を血で染まっていた。

「回復出来るんだカー」

「今の普通の人なら死んでるよ・ゼ・ハッ、ゼ・ハッ」

「普通ならよけるカー」

体が、重い足の指の爪先から頭の髪に至るまで全てが疲れる。

おそらく、さっき傷は、背中を3cmをえぐっていただろう。それをあつという間に治すそれなりの代価だろう。この魔法は、お母さんから教えてもらった。それは、まず自分の体のことを知りその傷の程度から治し方までそれを一通り浮かんだら魔石の力を放出する。そのためには、例え見えなくともその傷の具合を知る。また、イメージが強ければ強いほど力を放出出来る魔石は、生命の危険のときにとっても力強く使えるが代価が大きい。

現に30分ぐらいして漸く立てるぐらいになった。

「疲れた」

「普通の人ならあんなに強い光は出さないカー」

「僕は、北の人じゃない。ハーフだ」

「ハーフね・とりあえず動けるなら早く肉等を洗うカー」

「わかったカー」

「真似するなカー」

ザクッ、

「痛――！」

鮑からいろいろと取り出しコクハの熱い指導の元、今日の獲物を洗っていった。まず最初は、チーターの

「ねえコクハ」

「なんだカー？」

「なんか死骸とか血を洗つてるとまるでサスペンスにある死体を洗つてみたいだね」

「それは、違うカー」

「どこが？」

「君の行為が本物カーサスペンスが、君の行為を真似しているカー」

「昔から人は、他の生物を狩っているか」

「そういうことカー」

次は、ハゲタカだ。

「ねえ解体するの？」

「冷凍保存が出来なければ解体するカー」

「は - もう見たくない」

「旅人なら諦めるカー」

そして、コクハの言われるようにナイフを刺していく。

すると胃袋からブレスレット見たいのが出て来た。

「なんだこれ？」

「桜の・・・」

「桜？」

「いやこれは、人魚のカー」

「人魚？」

ブレスレットには、桜という文字が刻まれていた。

「こんな小さな文字を見るなんて目がいいね」

「当然カー」

「でなんで人魚なの？」

「明日説明するカー早くしないと夜終わるカー」

「えっ？」

部屋の壁掛けをみると夜の12時を指そうとした。

「もう夜中じゃん」

「早くするカー」

「うわーっ」

「雑にやらないないカー」

それから夜の1時頃に全ての作業が終わった。

「疲れたー」

僕は、最後にその言葉を残し布団の上について長い眠りについた。

2部より 第1幕「海の臨む町」（後書き）

次回「僕のたび」

昨日の夜遅くまで起きていて寝不足の僕にコクハの策略で僕だけが、漁師体験をすることに

だけど、策略が思うようにはいかずコクハも行くことにかなり嫌がつていたけどなんか海であるのかな？

そのまま楽しい漁師体験と思っているとなんと僕が、海のまものを釣りあわや命の危機に
どうなることやら

第2部2幕「海の見える風景」

・・・余り期待しないでください。

それではまた、このネットの世界で

2部より 第2幕「海の見える風景」

なんか気配がする。サクツ、

「いっ！フガフガ」

思わず叫びそうになったが、コクハの羽が口を塞ぎ話せなくなつた。

「フーフーガー」

「わかつた。わかつたから放すカー」

「ハアハア、苦しかった」

目が覚めた。

「早く起きないからカー」

時計を見た。針は、まだ朝の4：30だ。

「コクハ、いくらなんでも起こすのが早いよ」

「旅人は、あまり寝ないカー」

「それは、そうだけどこんな朝早くから何をするの？」

「早朝トレーニングカー」

「早朝？」

僕にとって早朝は、好きになれない言葉だ。

「まだ3時間ちよつとしかねてないじゃん」

「古代文化のナポレオンは、3時間しかねなかつたそうだよ」

「ナポレオンなんて何千年前の偉人だよ。昔の人みたいに短時間の睡眠で疲れは、取れない」

「じゃわかつた。これに名前を書いてカー書いたならば寝ていい力
ー」

「なにそれ？」

「起きたら教えてあげるカー」

「う」

紙には、体験という文字が見えた。

「はいペンカー」

なんとなく名前という欄が見えた。

「契約書？」

「違うカー申込書カー」

「なんの -」

「自分で見ればいいカー」

よく見るとそれには、漁師体験とあった。

「漁師？ なんてまた -、昨日いろいろあったから今日は、休みたい」

「それは、良くないカー一日休むとそれを補うのにどれくらいの努力が、必要かわかってないカー」

「？」

「毎日の鍛練が、最強肉体を生むカー」

「最強じゃなくていい」

「とりあえず書くカー」

「書いたよ」

名前の欄には、僕名前があった。

「もう寝てていいね」

「あ、あー」

「じゃお休み」

僕は、再びベッドに入った。

「君は、騙されやすいカー」

その言葉にたいして小さないびき声が帰って来た。

「まあいいか、予定通りカー」

「と書いたじゃないカー」

朝食をとりながらコクハがはなした。あのあと6時半に朝食の時間ということでまたコクハに起こされた。口には、体験書の受領所を加えていた。

「覚えてないよ」

「でも君は、それに名前を書いたカーしっかり参加するカー」

「だけど参加するかは、本人の自由だよな」

「残念カーこれで釣った魚は、そのまま食べられるのにカー」

「でも生魚は・・・」

「釣ったばかりは、大丈夫カー」

「船は、結構揺れるから初めてはきついと聞くけど」

「何世紀前のことをいつてるカー？」

「海を泳いだことないんだけど・・・」

「川なら泳げるから大丈夫カー」

「何で知ってんの？この前あつたばかりじゃないか？」

「泳げないほうが珍しいカー」

「荷物や鞆は、ホテルに置いとけばいいカー」

「誰が見るの」

僕は、行きたくないからあれこれと理由をつけた。

「それなら大丈夫カーコクハが、留守番して見守るカー」

だが一つだけ問題が、起きた。

「だってこの受領書、コクハの名前も書いてあるよ」

「何だって？本当カー」

「ほら、僕の名前の横に」

しつかりとコクハと書かれていた。勿論コクハ、ペンを持つことが出来なく誰かに書かれてしまった。

「謀られた・・・何でコクハの名前を書いたカー？」

「だってなんかたくらんでいたし騙されなくなかったから、僕たちは、運命共同体だろ」

こんなはずでは、こんなはずではとコクハは、唱え始めた。

「コクハが、行くなら僕も行くよ」

「予定が・・・」

「なんか問題でも、僕は、行ったこともないところでしたこともない漁師をしないといけないんだよ。しかもそれを決めたのは、コクハだよ」

「わかったカーコクハも行くカー」

「途中でとんで逃げるなんて無しだよ」

「と、当然カー」

「約束だよ」

「すみませんがその皿をお下げしてもよろしいでしょうか？」

ウェイターが、皿を下げようとした。どうやら長く話し込んでしまったようだ。

「ええ、お願いします」

「どうしようカーどうしようカー」

コクハは、逆にとんでもない約束をしてしまったようだ。

そして今日の話し合いがやっとまとまった。まず、ギルドで昨日の戦利品を換金してそのお金をホテルに預けて11:00からの漁師体験をすることになった。

また、普通漁師は、朝はやくに漁に出掛けるが、観光用は、全く別扱いで昼頃に出るらしい。

そして鞆を持ちギルドに向かった。

「ねえやつぱりあそこに行くの」

僕は、あまりあの店主が好きなれない。出来れば別のところに行きたかった。したらコクハは、

「隣のギルドに持つて行くことだねカー」と言われた。

そして、ギルドの前まで着いた。

「足が重い」

「文句言わないカー」

ガランッ、カランッカランッ、扉を開けるに連動してまた鐘がなった。

「いらっしやい、君達かさあ昨日言ったハゲタカを見せてくれ」

「機嫌がいいね」

「ハゲタカの値段がここ最近でかなり値上がりしたカー」

「またボツタくる口実か」

「聞こえるカー」

僕は、鞆から売れるものを全て出した。品を見るたびに店主は、悩んだ。

「これらは、全てそのカラスの仕業かい？」

「カラス？仕業？」

「あー骨とか皮とか」

僕は、コクハを見た。

「ええまあそうですけど」

「いや、ねえなんか結構高く売れるように手入れたみたいだから、まあ昨日とは全然違うからね質とか手入れとかね」

「全部でどれくらいになりますか？」

「うーん6銀が、だとうかな？」

「それは、ハゲタカの羽だけカー？」

「いやいや冗談ですよ。ハゲタカの骨で13銀かなあともろもろで15銀だな」

「ハゲタカは、妥当だがチーターは、こんなに大きいのは、そう見ないカー」

「そこなんだが、皮も結構傷だらけだし、骨もボロボロだ。せめて綺麗に倒してくれたら・・・」

「16銀」

僕が、少し言ってみた。

「こんなものを買うといってたんだ。15銀5000銅だ」
「16銀カー」

コクハも言った。

「それなら買い取らないぞ」

「君は、どう思う？」

コクハが、僕に聞いて来た。

「もういいんじゃない？船の時間近いみたいだし」

「そうカーわかったその値段で」

「まいどうも」

店主は、疲れたように答えた。

「では行くカー」

「そうだね」

店主からお金をもらい店を出た。ホテルに向かうまで「私なら17銀といった」とコクハが、つぶやいた。

携帯食料もついでに買いに行くことにした。1日分が、8000銅した。僕の村より10倍近く高い。種類ない上に数も少ない。店員のおばさんに聞いてみると、いつものことと言われた。コクハは耳元で買う人が少ない上に最近、魔物の肉が不足して仕入が停まりがちだからだそうだと。損するかもしれないが、飢えたくないので10分買った。

そのあとコクハは、宿に向かうさい寄りたところがあると言い出した。そこは、時計屋だ。

旅をしているからといって時間にルーズになつてはいけない。だから君には、腕時計が必要だ。というコクハの案だ。僕もそれに共感することがあり、店に入った。店は、時計だけの専門店僕らの電気店より多くの種類がある。

「よくこんなお店を知っているね。」

と聞いたら

「この国でも有名なお店カー」

といわれた。

商品を物色しているとあまり無駄使いしてはいけないと思い。

安いのを手に取った。だがコクハは、

「せっかくまとまったお金が、手に入ったのだから丈夫でいいのを買いえカー」

といわれた。さらに探してソーラーパネルが組み込まれて、電池切れ知らずのをさした。だが洞窟に入ればすぐに止まってしまうといわれ別のをさらに探した。

「ないね」

といったら、コクハは、

「探す気あるのか？」

とまた強く言われてしまった。

「時計には、全く興味がなかったからどんな種類があるのか、値段の違いが全くわからないよ。ねえこの1銀と60銀の違いは？形は、ほぼ一緒だけだ」

「ブランドカー有名なブランドほど大きな国で作られているから高いカー」

確かにエジプト文字や聞いたことがある名前の時計は、高く、逆に聞いたこともない名前は、安かった。

「お客さんどんなのを希望ですか？」

店員が、声をかけて来た。まだ若い30すぎだろうか？

「ちょうどいいカーせっかくだから聞いてみるカー」

「そうだね・・・でどんな時計がいいの？」

「根本的な問題カー」

「お土産でしたらこちらがいいかと」

店員は、綺麗に飾られた時計を見せた。値段も10銀を超えていた。

「お土産じゃないんだけど」

「ではどんなのでしょうか？」

「旅で使いたいから出来れば、丈夫なのを」

「旅ですか？あれ徴兵は？いやご年齢は？」

「15です」

コクハは、何も言わずただ僕らの会話を見ていた。

「そうですか。では取って置きのを」

「えっ！あまりお金ないんですけど」

店員は、僕の声聞かずに店の裏に言ってしまった。

しばらくして戻って来た。

「これは、どうでしょう？」

形は、どこにでもあるようなアナログな時計だ。

「これは、ライトもついていて暗いところ洞窟のなかでも使うこと

ができるんですよ」

いろいろな説明を始めた。だが一つだけ気になることがあった。普通の時計は、小さくとも会社のロゴや名前がある。だけどこの時計には、それらしいものはない。

「あとこれは、」

店員の説明は、さらに熱を帯びた。時計を裏に返した。

「見てください。裏もチタンを使用しました。そのため強度もなみたいていな……」

裏の鉄板には、名前みたいなもの刻印があった。岸崎精巧……？キシザキはどこかで見たことがあった。

「すみません。これは、どのメーカーですか？」

「あっ……説明するのが、遅くなりましたね。これを作ったのは、私の父です」

「お父さんの？」

「はい、そうです。父は、時計を売りながら自分でも少し作っていたそうです。これは、その最後の品になります」

「高いんですか」

自作と聞いてとても高い気がした。

「お客様はどれくらいのを希望ですか？」

「えっ、えーと」

思いもしない答えが、帰って来た。考えてなかったのだからといえればいいのか答えた。

「5 銀カーそれ以上は、むりカー」

コクハが、代わりに答えた。

「わかりました。その値段で売りましょう」

「本当カー？君の父が作る時計は、どれも車が買えるような額カー」

「ええかまいませんよ」

「？」

僕には、その価値は、全然わからなかった。

「どうしてそんなに安いカー？」

「実は、この時計は、もともと父が私にくれたもなんです。ですが、最後にこれを作ったあと魔物に襲われて命を落しました」

「いいんですか？せつかくの父からプレゼントを・・・」

「はいっ、実は私は、徴兵には参加せずにあなたと同じ旅をしようと思いました。そして、世界を周り父と同じように多くの時計について勉強をしようと思ってました。ですが・・・」

「あの津波カー」

「その機会仕掛けのカラスさんは、詳しいみたいです」
「少しならな」

コクハが、語尾を延ばさない。

「私が、旅立つ2日前に津波がやって来てそれを起こした魔物にやられてしまいました。」

働き手がいなくなつたわが家では、私が徴兵に行かねば、ならなくなりまして」

「その魔物は、そのあとどうなつたんですか？」

津波を起こす魔物なんて聞いたことがなかった。

「一人の旅人と一人の人魚によつて討ち取つた。ときいています」

「すごい話だな・・・で人魚とは、実在するんですか？」

「ええ、そうみたいです」

「みたいって？」

「私も聞いただけなのででも漁師が、ここ最近よく見ると聞いてますよ」

「へえ」

僕は、本やアニメでしか見たことがない人魚が、実在するとは思えない。

「そのカラスさんは、聞いたことないですか？」

「そんなの知らないカー」

「そうでしたか、あつ」

見せていた腕時計の針が止まっていた。

「売る前に止まっている腕時計なんて初めてカー」

「・・・・・・」

僕は、何も言えなくなった。

「多分電池切れです。たびたび調整は、していたつもりなのですが」
「この時計は、何年前に作られたのですか？」

「もうかれこれ30年前です。でも大丈夫です。よく部品を新しくしたり、掃除しているので、まあ電池さえ変えればあとまた10年止まりませんから」

定員は、笑いながら答えた。そして悲しい顔でいった。

「本来これは、旅をするものに与えるはずなんですが、結局私は、旅が出来ませんでした。ですから旅をしているあなたに似合うと思うんです」

コクハは、さりげなく別の時計を見た。船がでるまで30分を切った。

「おいそろそろ時間カー早く決めるカー」

「これにします」

僕は、この時計なんか惹かれた。

「では、サイズを合わせるので腕を出してください」

僕は、言われるままに腕を出した。

店員は、腕時計をつけたままサイズを変えてしまった。

「では、サイズを調整しましたので電池を替えますね」

僕の腕から手早く時計を外した。

「おい、もうすぐで船の時間カー」

「そうだね」

「船ということは、この村をあとにするのですか？」

「いや、ただの漁体験カー」

「なるほど、では電池を変えましたらお泊りのところに預けましょ
うか？」

「そうしてくれカーお金も今すぐ払うカー」

「わかった」

僕は、慌てながらお金をだし渡した。

「ありがとうございます。お泊りの所は、といつても1ヶ所しかありませんね」

「お願いします」

「コクハ、急いで宿にもどるよ。急いで」

「私は、もう少し店を見ていくカー先に戻ってほしいカー」

「わかった」

僕は、店を出て急いで宿舎に戻った。

「あなたは、機械じゃないですね」

僕が、店を出たのを見張らかつて店員がコクハに聞いた。

「機械じゃなければ何カー」

「人の化身、もしくは召喚獣」

「何故そうだと言えるカー」

「私も機械いじりをしているので何となくあなたは、出来過ぎてる。もしここが田舎ならいい見せ物だ。都会でも」

コクハは、呆れた。

「君は、父親に似て洞察力があるな」

「父を知っているのですか？」

「洞察力ある君に期待して一つだけ頼み事がある。いいかい？」

「はい。なんででしょう」

僕は、店でそんな会話を知らず走っていた。部屋に全速力でもどるとさっき買った携帯食料を置き、そのまま全速力で港を目指した。

「なんかここ最近、走りっぱなしだな」

港までの道程は、部屋から海が見えて、港も見えたので道に迷うことはなかった。

だけど一つ問題があった。海を目の前にして集合場所は、どこだろう。

辺りを見回しても30隻以上の船が停まっていた。その中から一つを探さなければならぬ。

「集合場所を決めとけばよかった」

とりあえず端から端まで走ることにした。

目の前にコクハが、いた。

「オーイ、コクハー」

コクハと呼ばれたカラスは、カーカーと叫びながら飛んでいった。僕は、端から端まで走った。というよりは恥ずかしく逃げたかった。

その頃、コクハは、今日乗るはずの船の近くで出されたお菓子をクチバシでつまんでいた。

「もう時間だがおたくの連れは、来るのかい？」

今日乗るはずの船の船長が話して来た。コクハは、お菓子をつまむのをやめた。

「もう少ししたら走ってきますカー」

「本当だろうね」

「本当カー」

タッタッ、タッタッ、タッタッ、僕が、走ってくるのが見えた。
「ほら」

「本当だ。走って来た」

タッタッタッタッ、だが僕は、コクハを見たけれどお菓子をつまむ普通のカラスだと思い素通りした。

「あれ？」

「本当におまえさんの連れかい？」

「すぐに戻ってくるカー」

「じー」

「本当カー」

それから5分もしないうちに戻って来た。

「オーイここだよ」

タッタッタッタッタッ・・・また素通りしてしまった。

「・・・・・・・・」

「……………」

「本当におまえさんの連れかい？」

「すみません。すぐに呼んでくるカーその間これを預かってカー」

「コクハは、買ったばかりの時計を船長に預け僕を呼びにいった。」

「どこに行くカー」叫びながら

結局20分近く約束の時間を遅れてしまった。

「本当にすみません」

僕たちは、謝った。

「時計屋の言ったとおりだな」

と言われた。そして、船長からあずかりものの袋と救命ジャケツトを渡された。袋の中からさつき買ったばかりの腕時計が、入っていて時を刻んでいる。

「思っていたよりも電池交換早かったね」

「あの時計屋の腕は、最高カー」

僕は、すぐに腕時計を付けた。さつきサイズを合わせたのでピッタリだ。そして、船長から渡されたもう一つの物を手に取った。

「救命ジャケツト？」

「海に落ちてもこれを着れば浮いてられるカー」

「着方は、わかるか？ボウズ？」

「ボウズって……」

「そういわれても仕方がないカーわからないならすぐに聞いたほうがいいカー」

「これどうやって着ればいいんですか？」

「どうやって普通に上から着ればいいんだよ」

「なるほど」

「しっかり締めるんだぞ。じゃないと船から落ちたら大変だからな。それに船は、かなり揺れるからな」

「えっ？」

「当然だろ。海なんだから」

僕は、コクハ睨んだ。

「朝と話が違う」

「船は、揺れて当然力」

「……コクハも乗るんだよね？」

「と、当然力」

「途中で飛んだり逃げたりしないよね？」

「……」

コクツ、首を僅かに縦に振った。コクハが、逃げないようにヒモかなにかで縛ろうか本当に考えた。

「そろそろ船を出したいんだかい？……て大丈夫みたいだな」

「すみません」

「なんだ？」

「酔い止めの薬ありますか？」

村を出る前に学校の先生からもらった薬には、よい止め等なかった。

「そんなのないよ」

「……」

「まだ昼飯食べてないんだろ？」

「ええまだ」

「なら大丈夫だ。腹の中は、からっぽだからもし酔っても吐きたくても吐けないからな、ガハッハッハッ」

船長は、笑い出した。僕は、頭から血が引いた。コクハも僕を睨んでいた。

「……」

「さあぼちぼち出るぞ」

船長が船に向かって叫んだ。

「了解、船長」

船長の一声で周りにいた2人のクルーが答えた。周りが忙しく動き出す。

ちなみに僕は、さっきから話していた人が船長だと今更知った。

「さあボウズ早くのりな」

船長に促されるまま僕達は、船に乗った。都会なら見たこともないジェットコースターに乗るような感じだろうか？

船の大きさは、多分15Mぐらいでやく30年ぐらい前に作られた船で形は、1000年近く変わらない。と僕より5才上の船員が、教えてくれた。

そして、僕は、5分もたたないうちに

「うえ気持ち悪い」

酔った。コクハは、酔いもせずに船頭で海を見ている。波は、穏やかで、白波もない。だが船は、異様に速い速度でやたらに揺れた。僕にたいするなんか怨みでもあるような感じだ。また、吐きたくても吐くことが出来ない。

「あーうー」

僕が、出来ることは唸ることぐらいしかない。それが延々と10分ぐらい続いた。別に時計を見ていたつもりはない。見る気にもなれないが・・・

ガタンッ、船が大きく揺れた。すぐに船は、停まり揺れもおさまった。

「よし、始めるぞー」

船長が、叫ぶどうやら漁場に着いたらしい。

「うー」

バサッバサッ、コクハが、飛んで来た。

「大丈夫カー？」

もちろん大丈夫ではない。

「うー」

「ほらボウズしっかりしろ、今日は、おまえのためにこの時間に来たんだからな。まあ、時間を守ってくれたらもつとゆっくり来れたんだかな、ガハッハッハッ」

「せつ、船長ー」

さつきいろいろ教えてもらった船員も酔っていた。

「おまえらだらしがないな」

「・・・・・・」

「おいみるこのカラス！元氣だぞ！なあ」

「当然力ー」

「仕方がないか」

船長は、そういうと操縦席からよい止めの薬を持ってきて飲ませてくれた。5分もしないうちによりから覚めた。

「では漁を始める！総員配置につけ」

号令で船の上が慌ただしくなった。というより船員の2人と船長が作業を始めた。僕は、邪魔にならないようにそれを見ていた。

この漁船は、広げると300Mを越える網を広げそれを引っ張りながら進み沢山の魚を捕まえられる、と説明された。

僕の作業は、よく魚が、釣れるポイントでの一本釣だ。つまり釣りをするまで僕が、することはない。手伝うことも出来るが、手慣れてない人がやっても邪魔なだけだ、と船長に言われ作業を見ていた。

「船長！網を出します」

「了解」

船が、再び走り出した。走りながら300Mの網をだし続けた。

それが延々と続く、網をだし終わると次に船と繋ぐロープをだし始めた。

「網を出したら終わりじゃないのですか？」

思わず僕は、船員に聞いてみた。

「網を出したらロープで船との距離を開けて深く広範囲の魚を捕まえるんだよ」

「へえ」

海にいくことすら少ない僕にとって全てが新鮮に見えた。

「オイ、ボウズ！釣り道具は、持ってきてないのか？」

事前に聞かされなかったので、待つてくる以前に知らない。

「いいえ」

「わかった」

そう船長が、いうとどこかに消えてしまった。

「あれ？」

「そういえば、旅人さんは、釣りしたことあるの？」

ここで僕が、名前で言われることは、まずないだろう。それ以前にこの船長は、僕の名前がなんだか覚えてもないかもしれない。

「川でなら何回かありますが」

友達や兄弟で何かいったことがある。毎回妹が、溺れて釣り所ではなくなるが・・・

「川なら餌は、ミミズとか？」

「いえルアーです」

「じゃ生きたものを餌に使わないんだ」

「そうですね。授業で作ってそれで遊ぶ感じですから」

「そうですか」

その後、船長から釣り道具を借りたが生きている虫を餌にしたので驚いた。

コクハは、しきりに辺りを警戒していた。時たま波音に驚いている。船は、再び停まった。ここが、釣りに最適なポイントらしい。

「じゃ始めましょう」

船員の掛け声の後ようやく針に餌を通しおわり、餌を垂らした。

「網をそのままにしてせつかく入った魚が逃げないのか？」

と聞いたら、船長は笑いながら

「入ったら逃げられないように構造なんだよ」と笑いながら答えた。と話していたら

「きたー」

隣で同じく釣りをしている船員の餌になにか食いついたらしい。1人では無理らしく別のところで後ろで釣りをしている船員も助け

にきた。僕は、海を覗いたが、暗くて何が釣れているかわからない。2人でもてこずり船長も手伝う。しだいに魚が見えてきた。2Mぐらいの大きさだ。

「サメか」

僕が、叫ぶ

「いやカジキマグロだ。ボウズ！モリをとって来てくれ」
「はいっ」

ハジャン、マグロが空を舞い太陽を覆い隠した。思わずそれに見取れ、またその大きさに腰が抜けた。

「大きい」

「何してんだ。早く持ってこい」

「はいっ」

船長の言葉で我に戻りモリを探した。探しているとコクハが、ふらふらと抱えながら持ってきた。

「早くこれを使うカー」

僕は、それを船長渡そうとしたが手を離せない。僕は、船から体を半分乗り出し、モリを投げれるように構えた。

「危ないカー」

「大丈夫」

マグロの動きが、止まるのを見張らかい投げた。モリは、うまくマグロの頭に当たりさらに暴れ始めた。また、僕の目の前で大きく飛んだ。その勢いで2人の船員が、吹き飛ばされ、船長一人で釣竿を押さえていた。

「もう一度だ。おまえなら出来る」

船長が、叫んだ。だが僕は、モリを使わず別の方法で仕留めることにした。

「オイヤめろ。今ここで使うな」

コクハが、気付き止めようとした。だが、もう遅い。
「流れに導きに従い、流れろ！雷！」

僕は、小声で言った。胸のペンダントが黄色く光る。電気が、ペ

ンダントから、指先に集まりモリに伝わり、マグロに流れた。マグロは、大きくしなるとひっくり返り動かなくなってしまった。電気の光は、僅かですぐだったので普通の人には、まず見えない。

「あっあれ？ボウズがやったのか？」

僕は、首を横に振った。

「いやこいつ、さっきなんか唱えた。するとなんか電気みたいのが・・」

「はやくマグロを引き上げないと、また暴れ出しますよ」

「ああ、そうだな。よし、引き上げるぞ」

船長の言葉で、マグロの引き上げ作業が、始まった。かなり大きくと船員が、いった。マグロの引き上げ作業が、一段落すると今度は、僕に対する尋問みたいなことが始まった。村を出るさいにお母さんから渡された。フープと三角帽子を待ってこなくて正解だ。

「ヤレヤレ」

コクハは、呆れながら行き先を見ていた。この国で魔法を使う人は、敵国のスパイぐらいだ。そのためお母さんから魔法を教わったなどNGワードだ。

「ボウズは、魔法使えるのか？」

「いいえ、北の人ではないから無理です」

「だってさっき何か唱えていただろ。導けとかなんとか」

「そんなこといつてませんよ。ただでかいなあとかですよ」

船長は、すぐにごまかせるかもしれないが、船員には、呪文みたいな精神統一文（魔法を想像しやすくする分）を聞かれたので難しい。

「じゃなんでこのモリ焼けてるんだ」

モリに電気が、通ったので黒く焦げた。

「雷だと思えます」

「こんなに晴れているのか？」

「はいっ晴れていても空気中にあるごく僅かな水分で雷が起きると本で読んだことがあります」

嘘のかたまりだが、自信満々で言っていたらなんか信憑性が、出てきた。

「雷カー」

それで全ての話が、まとまった。また、僕を疑ったのも一人の船員で他は、疑いなど毛頭にもない感じた。

北のスパイが、わざわざここまで来て漁師体験など馬鹿げているので疑う以前の問題かもしれない。

「危なかったカーでも嘘を着くのがうまくなったカー」とコクハに耳元で言われた。

それからしばらく時間が、流れたが何も釣れない。船長が、僕の釣りを見て

「ここから餌が見えるな、その深さだと釣れないぞもつと餌を深くしないと」

僕は、川と同じかんじなので餌を浅いところで釣りをしていた。

「はい」

どれくらい深くすればいいのかわからないのでひたすら深くまで沈めてみた。ガツツ、釣り糸の限界まで延ばした。

クイッククイツ、早くも反応だ。クルクル、糸を引くとそれなりの反応だ。

「釣ったー」

思わず声を上げた。それから1分以上リールを回した。家の釣竿は、電動だから楽だったが借りたのは、手動だ。餌を沈めるのは、楽だが引き上げるのは、しんどい。

しばらく引き続けていると急に反応が、強くなった。
「持つて行かれる」

僕は、釣竿ごと海に落とされそうになった。寸前で村長に支えられ海に落ちずにすんだ。

「おい、タカシ金具で固定しろ。かなりの大物みたいだ」
タカシは、さっきからいろいろ教えてくれた人だ。

「わかった」

船長も釣竿を押さえた。これで釣竿を海に落とす心配はないが、糸を巻くどころか逆に海底引つ張られている。手早く金具の台を釣竿の下に置くと船長は、それに固定した。そして、力強く釣竿を回し始めた。ピッパーン、糸が切れて、釣竿が、空に向けてのけ反る。反動で船までもが大きく揺れた。

「糸が、切れた」

川で魚に糸を切られることはまずない。海底にぶつけたのか？それもない、手応えでわかる。じゃ・・・

「おい、ボウズ俺が、餌を沈めるといつてからどこまで沈めた？」

船長は、急に険しい顔に変わった。

「出来るかぎり深くの海底まで」

「早く船を走らせる。ボウズが、クラーケンを引き当てやがった」
バササツ、コクハが、クラーケンと聞いた途端飛んだ。

「コクハ、どこ行くの？」

「逃げるんだバカー」

どこか遠く（おそらく島のほう）に飛んで逃げた。船では、みんなが慌ただしく走り回る。

ギョーン、モーターの回転音が高鳴ると共に船が、走りだした。

「ワッ」

僕は、反動で海に落とされまいと船にしがみついた。海を見ると黒い丸が、二つ平行しながら近ずいている。周りをうつすら影が見える。次第に赤く斑模様が、見てきた。

「イカだ・・・」

ぽつりといった。本には、透明になって姿を消したり体の色も変えることが、出来る。そして、足が10本、僕は、今までに干からびたイカしか見たことがない。イカは、徐々に船に近ずいてきた。そしてあることに気がついた。

「明らかに船より大きい・・・」

「君は、すごいな」

タカシと呼ばれた人が、抱腹前進しながらきた。

「どこが！」

エンジン音と波を切る音でまともに聞こえない。

「初めての釣りでクラーケンを釣る人などそういないよ。」

釣ろうとしたイカは、クラーケンと言われていた。クラーケンは、昔に船を沈めたきた化け物で巨大イカではないかと昔から言われている。

「これからどうするの？」

「逃げるに決まってるんだろ」

だが、一つだけ気になることがある。コクハは、大陸に向かって飛んだが、この船は、その反対に向かって進んでいる。

「この船は、どこに向かうの？」

タカシは、少し驚いた。

「君は、方向感覚あるね！」

「連れのカラスが、飛んだ向きの逆に進んでるから」

「島と反対に進んでる」

「なんで」

「今島に向かったらクラーケンに村の全ての船が沈められるかもしれないからね！」

ザーツ、辺りが、急に暗くなった。後ろに突如、大きな塔が、出来た。形は、今までに見たことあるが信じられない・・・イカの一番大きな足だ。

「イカの足が、来るぞ・・・！」

船が、大きく進路を変えた。塔が、船の横ぎりぎりに倒れてきた。その衝撃の波で船が大きく揺らぐ。

「よっしゃー」

回りが騒ぐが僕は、疲れた。命拾いしたような、危険にさらされたような・・・海を見ると黒い二つの丸が見えた。クラーケンも船に合わせて進路を変えて追い掛けている。

「まだいるよ」

僕は、顔を引つ込めた。

「多分網に引つ掛かったな・・・」

船長が、つぶやいた。そういえば、さっきから網を広げたまま進んでいる。釣竿も途中まで引き上がっていたが、海面近くで急に重くなり糸が、切れた。船の上で誰もが無口になった。

「いつそのこと引き上げるか？網の中は、イカでいっぱいだろうか・・・」

僕は、心のそこから網を切り落としたかった。僕は、あることを思い出した。

「あつ・・・」

「どうしたの」

タカシが、聞いてきた。

「いや、なんでもないです」

イカの足を切り落とそうと思ったが、肝心の切り落す物、ナイフを宿に置いて来て持ってこなかった・しまった・・・

「おい、網を引き上げるぞ」

「了解」

網を引き上げた、重くてゆっくりとワイヤーが、引き上がる。

船員は、口々に網が上がるのが遅いといった。クラーケンは、それほどに重いらしい。網が見えると次第巻き上がる速度が速くなった。そして色鮮やかな魚が次々に船に上がった。だがクラーケンは、網の半分が引き上がったがイカなどの見る影もない。

「擦り抜けたか」

船長が、小声で漏らしたが自分でもその言葉を信じることが出来ない。

網は、なんとか指3本ぐらい入る間隔あるが普通の魚では、まず通り抜けられない。タコは、骨が小さく例え自分より穴でも用意に抜けられるがイカでは、聞いたことがない。例えできたとし小さな骨が、あるから無理だ。

「おいつ前!!」

船の前にイカの足が、無数見えた。そして、それらが一斉に船に巻き付いた。

「重みで船を沈める気だ」

船長が叫ぶなり船がクラーケンの重さで前に傾き出した。僕は、海に落ちないように船のふちにしがみついた。

「やられてたまるかー」

船長が、モリを持ってクラーケンに飛び込んだ。モリは、クラーケンの足に刺さったが抜けない。力いっぱい引つ張るが

「あぶないよけて」

タカシが、叫ぶが船長が、気付いたときには別の足で大きく吹き飛ばされていた。

「船長」

「オヤジ」

船長は、高く飛んでそのまま海にたたき落とされた。クラーケンは、足にさらに力を増し船が軋む音だした。

「オヤジ」

タカシが、すかさず海に飛び込もうとした。

「まて今飛び込むな」

「止めるな、兄さん」

もう一人の船員は、タカシのお兄さんだ。

「クラーケンの餌になるぞ」

ミシミシ、船の悲鳴だ。このままでは、船が沈む。もうやばい、僕に力があれば、ナイフを宿に置いてこなければ・・・

「つかまれ」

お兄さんは、浮輪を船長に向かって投げた。だが船長は、うみで顔を浮かべて反応がない。気絶しているかもしれない。

「ハアハアハア」

僕は、ただ船にしがみついて見ているしかない。お兄さんは、すぐに浮輪を手繰りよせてまた、船長に目掛けて投げた。

「だめだよ。行かなきゃ」

タカシが、海に飛び込んだ。

「やめろ。戻ってこーい」

お兄さんが、叫んだ。するとタカシが、視界から消えた。クラーケンの足がタカシに絡め海に引きずり落とした。このままでは、みんな死ぬ。

「オーイ、戻ってこーい」

「ハアハアハア！僕に力を！最強の矛を！」

ペンダントが、海より青く光出した。そして、クラーケンに走りだし手には、透明な刀みたいな物が現れた。

「船から離れろ！」

その刀で船にからみつく足を次々に切り落とし、クラーケンの胴体へ飛んだ。足を切られたクラーケンは、残る足を僕にたたき付けた。

「くらうかー」

刀でその足を切り落とした。

「これで吹き飛べー」

片手にある刀で胴体を突き刺し、もう一つの盾をなくし、素手で突き刺した刀ごと殴り、傷を広げた。その時ペンダントは、黄色く光っていた。すぐに傷口から物凄い海水が吹き出した。

「うわー」

僕は、船に叩き戻された。

「ごへっ」

背中から当たってとても痛かった。空に飛ぶようにクラーケンは、物凄い音を出しながら海水をだし続けた。辺り一面に嵐のような雨が、降り注ぐ。

トスツ、しばらくして海水をだし終わったイカが空から船の上に落ちてきた。

「小さっ」

海水をだし終え、数十Mあった体は、30cmほどになった。その後すぐ、タカシと船長が、自力で船に戻ってきた。

「危なかった。」

2人が言った言葉だ。そして、船長から「倒してもこれくらいにしか残らないから戦いたくはなかったんだよね」と言われた。僕は、かなりの力を消費してまともに立つことも出来ない。

「さっきのクラーケンは、大きかったな」

「これも人魚様のお力かな？」

タカシが、つぶやいた。

「人魚？」

思わず聞いてみた。

「この町には、人魚がいるんですよ。そのおかげでこの辺りは、豊富に魚が集まるんです」

「これ以上しゃべるな」

タカシの兄が途中遮った。

「えっ？」

「人魚は、町の宝だ。だからあまり見ず知らずの人にいうな！、すみませんね旅人さん人魚は、繊細な人ですからあまり手を出さないでくださいね」

「はい」

僕は、人魚がこの町の宝であり、また、実在することがわかった。

「あっ・・・」

僕は、思わず身震いした。

「どうしましたか？」

「なんかやばい。沢山の気配がする」

「たくさんって何の？」

「・・・」

僕には、その気配が何かだとわからない。

「すぐに戻るぞ」

船長が、きた。なにか慌てている。

「どうしたの？」

タカシが、聞いた。

「漁郡探知器に物凄い数のクラーケンだ」

「なんだって数は？」

お兄さんが、驚いた顔で聞いた。僕は、頭から血がひいた。

「30を越えている」

「さ、30!!」

「ああっすぐに戻るぞ」

ドンッ、船底になにかあたり大きく揺れる。

「飛ばすゾなにかにつかまれ」

ドンッ、再び何かがあたり、大きく揺れる。

「なにかって何？」

船が、後ろに傾きすすむ。

「あっ！」

さっきの魔法で体力をほとんど使い果たし、手に力が入らず僕は、海に落ちた。船長は、船の操縦に没頭していてほかの二人もしがみついて僕の存在に気付いていない。

バシャン、僕は、海の中から船が、遠ざかるのを見た。いつまでも潜れない僕は、全力で海面を目指した。途中でなにか見えない壁にぶつかった。ぶつかった衝撃で色を帯始めた。

クラーケン、足元を見たらたくさんさんのクラーケンが、うごめいている。何とかここから逃れようと泳いだが全く進めない。

障害も僕の進行に合わせて進んでいる。魔法を使いたくても水の中では、言葉を出せないから使えない。

「うっ、息が」

.....

「それ以上行くなよ」

「また溺れる気かよ」

「大丈夫よ何回この川で溺れたと思うの？」

「毎回・・・」

「アハハ・・・」

双子のお兄さんが、笑った。

「私だつて学校のプール25M、泳げるもん」

妹は、むきになって怒る。お兄さん達は、高らかに笑う

「早く戻つて釣りできない」

「もう少し、だつてまだ暑いもん」

「釣りするから下流に行かないでね」

「わかった」

「今日は、何が釣れるかな？」

「川の主今こそ」

「お兄さん同じところで釣るのをやめて」

「やだ」

「自分がどけ」

「来た」

僕の釣竿に早速反応があった。

「早っ」「何!」

「ぎゃー」

妹の姿がもうない。

「あの野郎もう溺れやがった」

「えっ!あっ!」

「もう少し粘れよ」

「行くぞ」

「諦めろ」

川の主が、目の前を跳ねた。まだ誰も捕まえたことがない。

「ぎゃー」

「ワァー」

「えっ!」

妹に駆け寄つた兄達が、姿を消した。僕の釣竿に食らいついた川

の主は、暴れた。

「助けて」

僕は、釣竿を投げて川に飛び込み、溺れかかっている妹を掬い上

げた。お兄さん達は、自力ではい上がって来た。

「助かった」

「ルアーと釣竿が・・・昨日出来たばかりの自信作が・・・」

「はぁ、死ぬかと思った」

「おぼれた」

僕は、川下を見たがもう自分の釣竿と自作のルアーは、もうない。

「ありがとう。いつも助けてくれて」

妹は、僕の頬にキスをした。だが、僕は、大切な物を逃した。目の前にルアーが、外れて喜んだのか川の主が、飛んだ。

こんなんで諦めてたまるもんか！！

目の前にクラーケンが、いる。

「ここで諦めてたまるもんか！」

水中で刃を作り真上にいるクラーケンを真つ二つにきりわけた。だが、切れたと同時に物凄い水压で海深く沈められた。クラーケンの溜め込んだ海水だ。さらに口を開けてしまい海水が、体に流れ込んでくる。意識が、保てない。もうだめだ・・・

「グハッ」

港では、二つの話題が、持ち切りだ。一つは、魔法が使える旅人が漁師体験中に海に落ちて消えたことと、と森に物凄い数の魔物の死骸が発見されたことだ。旅人は、丸で紙を切り落とすかのように足を切り落とし、自在にカミナリも扱えた。森では、どれもが刃みたいので無残に切り裂かれている。これらが、共に北から来たスパイではないかという話だ。

また、そのスパイが手名付けていた。言葉を使うペットは、そのスパイが泊まっている、宿のバルコニーでご主人のお帰りを待ち望んでいる。

尚、この件についてそのペットは、「ノーコメントカー」と話し

ている。

僕は、なにかに引つ張られる感じがある。僕は、ひたすら海深く沈められている。どうすることが、出来ない。それに以前に体が、全く動かない。僕は、深い眠りについた。

コクハは、ひたすら海を見続けた。波の少しの動きも逃さないように、海は、いつも繰り返す同じ音と一定の波の永遠に繰り返した。時より港につく船にも気を配る。だが、どれも魚と疲れた表情をした漁師だけだ。魔法が、使えるだけで誰も探そうとはしない。ただの旅人が、野垂れ死んだ。ただそれだけである。だが、コクハは、諦めない。ひたすら海を見続けた。

コクハは、海が怖くて近づけないわけではない。ただこの海にいる”人魚”に会いたくない。それだけである。コクハは、信じた、いや願った。その”人魚”が、一人のまだ幼い旅人を助けてくれることを

2部より 第2幕「海の見える風景」(後書き)

次回「僕のたび」

第3幕「海の祠」

人魚に助けられ生きていた僕は、助けてくれたお礼を言うために人魚を探すことにした。

しかし、コクハは人魚を探すことに消極的

だけど村人のおかげで何とか人魚がいるという祠の入り口を教えてくれた。

しかし、祠まで大迷宮と未確認の魔物にあって戦闘戦闘の繰り返し・

そして、僕は祠の果てで月を見る人魚に・・・

それではまた、

2部より 第3幕「海の祠」

僕は、浮かんでいた。いや、浮かばされていたと今いる船の漁師に教えられた。なんでも人魚が抱えて近くを通る、今いる船まで運んでくれたらしい。僕は、かなりの海水を飲んだが、その人魚による救命処置で難を逃れた。また、僕を抱えて8時間近く抱えていたと人魚が言ったそうだが、僕は、気絶していたのでわからない。

さらに、たくさんいたイカも追い払ってくれたさうだ。

つまり僕は、その人魚に命を救われたそうだ。その後、船は、翌朝港についた。船に拾われたのは、夜の10時なのだがあまり疲れてないこととこれから漁をするそうなので手伝わされた。さんざんコキつかわされたが、最後に取ったばかりの魚で新鮮なまかない食を食べたのでまあいい思い出になった。

港に着くなり周りでは騒然とした。北から来た民が、あの人魚に助けられたのだ。普通その人魚は、魔法を使う人を嫌います助けないそうさ。だが、僕は、助けられた。つまり僕は、北ではなく南の人ということだ。このことは、漁師間から噂で広がり僕の北のスパイ説は、あつという間に払拭されてしまった。

僕は、宿に戻るとコクハがすやすやとベッドの上で寝ていた。僕も疲れたので起こす気にもなれずそのうえに覆いかぶさるように寝た。

「重いカー」

コクハは、跳び起きた。

目が覚めたら午後12時を過ぎている・・・そしたら、チエクアウトの時間に遅れてもう一泊することになった。コクハも

「まあ仕方がないカーこういうこともあるカー」

と笑いながらいった。

「さて、これからどうするカー本来なら村を出て別の村を目指しているのだが昨日いろいろあり今にいたるわけだがカー」

今の時間は、午前の１２時で、パスタ専門店でシーフードパスタを食べている僕に聞いて来た。

「人魚に会いたい」

「な、何を言い出す！！」

コクハは、語尾のカーを忘れるぐらいに驚いた。

「昨日助けられたみたいだから、この村にいるうちにお礼をいいい」

「それは、無茶苦茶カー」

「そうかな？」

「人魚は、この村の守護神みたいな存在カーそう簡単に会える存在じゃないカー」

「僕は、昨日あつたよ」

「でも記憶がないカー」

「うっ」

「おとなしくまた森で、資金稼ぎカー」

「もしかしてコクハは、海が嫌なの？」

「そ、そんなことないカー」

「じゃ決まりだね」

「わ、わかったカーそのかわり私は、なんも口だししないカー」
「？」

僕は、その意味があまり理解できないまま、パスタを食べた。

そして、食べ終わり自力で人魚に着いて情報を集めることになった。

だが、多くなの人に聞いても軽くあしらえ中には、僕の顔を見るなりに逃げ出すものさえいた。そして、わかったことはこの村では人魚が魚を呼び、この村の宝であることだ。たがらよそ者である僕になにも教えようとしな。で村を一周した。

子供にも聞いてみたが、「知らない」「わからない」「知らない
おじさんと話してはいけない」などいつて逃げられた。

「僕は、まだ15何だけどな。」

コクハが笑いを堪えながら見ている。

「あーもうどうすれば人魚に会えるんだ！」

「諦めて森にいくカー」

コクハから諦めるという間の言葉が聞こえて来た。

「いや、まだ頑張る」

「それは威勢のいいことカーでも早く森に行き稼がないと有り金使
い果たして旅できなくなるカー」

「うっ」

「人魚探しも諦めるカーそれにこの村では買い取り主なんかない力

」

「僕は、人魚を殺さない。ただ、お礼をいいたただけだ」

「本当カー？この村では売れなくとも別の村ならそれなり売れる力

」

「人魚は、僕の命の恩人だ！」

コクハは、僕の目の前で大きい声で言った。

「君は、いくらそう思うが、周りはそんなことちつとも信じない。

逆に私が、言ったそのことを誰もが、思っている。ぶが悪いここは
もう諦めるカー」

僕は、コクハの言う通かもしれない。

「僕は、ただ・・・」

「しっかり言わない。君は、心の底で人魚は、高く売れる。だから
あつて捕まえないただそれだけ何だろ？会って御礼がいいたいでも
それは、単なる表立てだ。人魚が売ればこの先の旅が楽になるか
らな」

「僕は、そんなつもりない！！」

コクハが、強い口調で言うので僕も強い口調でい返してしまった。
「！」

僕たちが、声を荒げて話すものだからまわりにギャラリィが形成した。

「君は、本当に儲けなど考えずに人魚を探すんだな」

「そのつもりだ!!」

「勝手にするカ」

コクハは、どこかに飛んだ。

「あつ、まつて」

僕の声も聞かずに建物を越えて僕の視界から消えた。

「まつて・・・」

僕の声は、コクハに聞こえない。やはり探すのをやめるべきだろうか?・・・でもあれだけ大口を叩いたのだからここで引き下がるわけにもいかない。

まわりのギャラリィは、しゃべるカラスが飛び去るのを見て去り始めた。

どうしよう・・・おそらくだれも僕に人魚の情報をくれないだろう。コクハも行ってしまうにも聞くことが、出来ない。自力で探すとは、言ってもこの町に来たばかりなのだからわからない。だからといっていつまでもこの町にいる気はさらさらしない。

「どうしました?」

振り向くとそこには、昨日いろいろ教えてくれた、漁師のタカシだ。

「いやそれが・・・コクハと喧嘩してしまいました」

多分見られたのだからごまかすのが面倒になった。

「それは、大変ですね。追い掛けなくていいの?」

確かに追い掛けるべきなのだがそれは、つまり人魚にお礼をいうことを諦めるようだよだ。

「コクハは、早くて僕では追いつけないんで・・・」

「何で喧嘩してたの?」

「人魚探しを諦めると」

「なるほど、確かにこの村では、前に話しましたが、人魚はこの海域に魚を集める神ですからね」

「神ですか・・・」

人魚に会えない気がする。昨日会えたのは単なる気まぐれだったのか・・・

「それに人魚に会うことが、出来るのはこの村でもほんの一部の人だけですからね。それに会ったのは、たまたま海面に顔を出しているときですから」

「つまり・・・」

「滅多に会えませんが、アハハハ」

「そうですか」

この村の人達が、人魚のことについてなにも言わないことがわかった気がする。滅多に会えないつまりどこかにいるかわからないわけだ。コクハに謝りに行くべきかな？

「でもおおよそですが、どこにいるかはわかります」

「ッー!!」

「確か向こうに大分前に作られた洞窟があるけど」

町の端の方角を指した。

「そこは、本来古代遺跡から海に繋がる水道だったんだけど最近では海に繋がる道が地盤沈下など別に出来てあってその先に海の祠があるんだけど」

「人魚の住家」

海の祠に人魚が、いる誰からも聞いたことがないけど何となくそう思う。

「その通り、だくどかなり強い魔物が住み着いて普通の人では近づけないよ」

「チーターよりも？」

「正確にいうとほとんどか水に浸かっていて泳ぎ回る魔物が、多いんだ」

「つまり水中で息継ぎが出来ない。僕たちには、通り抜けることが

難しいこと？」

「そう、だけどこの村の神の使い、神主さんは、別に安全な方法で祠に向かうらしんだがそれは、関係者以外全くわからないんだ」

「別の道？」

「魔物に全く襲われずに行くことが出来るんだ」

「それ、知りたい」

「それは、僕でもわからない。何せいつ向かうかは、ランダムで全く法則がないし、それに船でも行くことが出来ない」

「でその神主に会えば言い訳だね」

「それは無理だね」

「なんで」

「神主さんは、10年前に亡くなってるし、その法則を知る人は誰もいないし、子もいない」

「八方塞がりか」

「人魚に会うことや助けてもらえるなんて普通に滅多にあることじゃないからな」

「その遺跡は、ここから近いの？」

でもその遺跡に興味があった。魔物が強いことからギルドもそれなりの報酬がもらえるからだ。

「いちよう入口を教えるけど危ないから無理だと思っただけに引き換えして」

「わかった」

その遺跡は、村の中に森の方角から後ろに海が繋がっている。大きさは3Mぐらいで今でちよろちよると川幅15センチくらいの水が流れている。そしてなんか臭い。

「ここは、古代遺跡からの下水の出口だからね。今では遺跡だけでもまだ二オイは、あるよ」

下水道か・・・それだけで帰りたくなった。

「ここを真つすぐいってすぐに右に穴があるからそこから祠に繋ぐ道があるから」

「わかった」

「あとそれと・・・」

「何？」

「なかは、当然電気も太陽もないから、真っ暗だからなんか明かりになるものを持っていくといいよ」

「ありがとう」

僕は、魔石の明かりがあるから別にいらない。

「じゃ私は、次の漁があるから、人魚に会えるといいね」
「うん」

お礼を言つとタカシは、自分の家に帰った。

「さて、行くか」

僕は、穴を見ながらいった。

「君は、少しも疑いを持たないみたいカー」

バササツと、羽音を立てながら、真後ろに下りて来た。

「あつコクハ」

普通にコクハがいた。

「昨日のおまえを見捨てた漁師が、今日は道案内カー」

「コクハは、宿で一人で待つてて祠には、僕一人で行くから」

「本当に行くのカー、中には強い魔物がたくさんいるカー」

「当然」

「今の君じゃボコボコにされるだけカー」

「うらさいな。僕の自由にさせてよ」

コクハが、ぼくの目の前に立ちとおせんぼをした。

「もしかしたら、かえつて来れないかもしれないカーそれにさつき
の漁師がいやこの町全体の罾かもしれないカー」

「コクハは、人を信じなさすぎ」

「じゃなんで漁師は、無償でこのことを教えたのカー」

僕は、少し悩んで答えを出した。

「昨日見捨てて逃げた。詫びかな」

「カーもしかしたらこの村全員で君を罾にかけるためかもしれない

カー」

僕は、コクハがここまで止めようとしたのかわからない。別に人魚を捕まえたり食べたりするわけではない。それに道が海に沈んで進めないのなら引き換えして諦めればいいだけの話だと思う。なのにどうしてそこまで・・・

「僕を罫にはめる意味あるの？」

「着てるもの剥がされるカー」

「コクハは、心配すぎ」

僕は、穴に入った。

「まあいいカーあと、どうやらあの三文芝居はそれなりに効果あったみたいカー」

「ん？」

「さつき君に本当に人魚を殺す気があるのか？強く聞いたカー」

「僕は、そんな気はない」

「当然知ってるカーでもあの時大声でいったから多くの町人が、足を止めて聞いたカー」

「ギャラリー多かったね」

「そのおかげで多くの人が君のことを信じてくれ見たいカーおかげでこのことも知ることが出来たカー」

「じゃなに？さっきのわざと？」

「当然カー」

「ところでランプはどうするカー？」

「大丈夫、持ってるから」

「？」

「早く行くよ」

「待ってカー鳥は、暗いところ見えないカー」

コクハが、僕の肩に乗った。

歩き出して、すぐに暗くなった。

「これからどうするカーなにも見えないカー」

「何も見えないね」

「当然カー」

水が、流れる音がする。そして、なによりも臭い。

「我に道しるべとなるべく光をともせ」

目の前が、明るくなり出した。

「君には驚かされることが多いカー」

夢で見た通りの呪文をいうとペンダントが、緑色の光出して辺りが明るくなった。

「これでランプはいらない」

僕は、さらに奥を指した。すると臭い理由が、わかった。目の前に骨と腐っている肉が、散乱している。

「いけにえカー」

「すべて人魚が食べたの？」

「すべてかどうかわからないカーでも人魚へのお供え物ということ
は確かカー」

「もしかしたらこの先の魔物かも・・・」

「そうかもしれないカーどうするカー？」

ここで引き下がる気なんかない。

「行くさ」

「さすがカーでも無理は、ほどほどカー」

「無理なんかしてない」

僕は、そこを強く強調して穴の奥深くを指した。

「オイ横道が、あるカー」

「・・・」

ニオイと歩きにくい骨ですぐに気付かなかった。今通っている穴に比べると半分ぐらいの大きさしかない。

「早く行くカーのんびりしていたら日が沈むカー」

「わかってる」

それから道は、ひたすらに深く傾斜していた。

「何でこんな道があるのかな、コクハ？」

「聞かれてもわからないカー特に昔の人が作った物は意味わからないカー」

「コクハもわからないの」

「何でも知ってるて大間違いカー」

「ところでここが大昔に作られたって何でわかるの？もしかしたらつい最近に作られたかもしれないのに」

「・・・・・・」

「それにさっき全く知らないで矛盾してない」

さっきからなにか知っているような気がする。横の抜け穴も普通初めてではわかりにくいところにあつた。

「・・・・・・さて先に行くカー」

「ここについてなんか知ってるんの？」

「何も知らないカー」

コクハは、飛んだ。

「まって、なんか知ってるでしょう？」

「知らないカー」

コクハをおいかけるために僕は、走った。

ボスツバサツ、コクハが、なにかに当たった。

「カー」

「大丈夫？」

「頭がクラクラするカー」

「高く飛ぼうとするからだよ」

どうやら天井にぶつかつたらしい。僕は、コクハを広い上げ腰にある鞆に詰め込んだ。顔だけ外に出した。

「頭が、クラクラするカー」

「静かにしててね」

僕は、さらに穴の奥へ突き進んだ。

急に辺りが、開けた。ものすごく
「広い」

さっきまで魔石の光で見えていた、天井が見えない。光が、行き届かない。壁も見当たらない。

「大きな体育館……」

「それは、違うカー」

コクハが、目を覚まし辺りを見回す。

「ここはなんだかわかる？」

「うーん、このまま真っすぐ行けばわかるかもしれないカー」

「真っすぐね」

辺りは、ぼくの光を除いて真っ暗だ。前に本で人が目をつぶった、真っ暗な道を歩くと以外と聞き手のほうに曲がり真っすぐ歩くことは出来ない。そんなことを本で読んだ気がする。

「そうだ！コクハ」

「何カー？」

「とりあえず高く飛んでどれだけ高いか調べて来てよ」

「それはように死んでこいとカー？」

「そんなことは言っていないよ」

「カラスは、くらいと目が利かないカーもし飛んだらどれだけ高い天井にぶつかって落ちるカー」

「大丈夫だよまた拾うから」

「高いところから落ちたらそれに比例して重くなるカー君には、無理カー」

「そうか」

「とりあえず真っすぐ進むカー」

「道なき道を突き進めか」

そして歩くとすぐに建物が見えて来た。何かの小屋みたいだ。

「何の小屋かな」

「誰もいなそうだカー横を見てカー」

「えっ」

「畑カー」

「本当だ」

小屋に集中して気付かなかった。辺り一面が、畦道のある畑の跡だ。

「こんな暗いところで植物が育つの」

「どうかなカーもし天井にかなり明るい光を出す蛍光灯があれば、少しは、自家栽培出来るかもしれないカー」

「だけどここは真っ暗だよ」

「今は、誰もいないからついていないだけカーここで栽培するより外で栽培したほうが、コスト安いカー」

「じゃ何でこんな施設が・・・」

「君は、ここについていくらか教わってるカー」

「コクハは、やっぱりここについて何か知ってるの」

「知るも知らないもここについては、大まかに有名カー」

「??」

「古代大戦カー」

「指令部？」

「違うカー、この辺りは、昔古代文化のとき巨大工業遺跡カーそのことは、学校でたのなら誰もが知ってる常識カー」

「じゃここは、核シエルター？」

「そういうことになるカー」

「だけど古代大戦なんて10世紀以上昔の話じゃんそれが何でまだあるの？」

「再利用されたかもしれないカー」

「再利用？」

「今は、そのことについてとやかくいうべきじゃないカー人魚に会うことが優先カー違うカー？」

「うん、そうだね」

ちなみにここは、話が変わるが以前ここで新人類プロジェクトというふざけたがあり、その飼育として戦争直前まで使われていたがそれはまた別の話である。

それからいくつもの畑を越えて反対側の壁に行き着いた。何もな
いただのコンクリート
で出来ている壁である。

「壁だね」

「壁カー」

左右見ても光が、弱く遠くまで見えない。同じ壁が続いてる。

「もっと光を強く出来ないカー」

「少しなら出来るけどかなり疲れる。帰りの分までに体力を使い渡
すよ」

「体力ないカー引きこもりが」

最後を小声でいった。

「なんか言った？」

「何もいつてないカー」

「疲れた」

僕は、壁に背もたれながら座った。

「重いカー」

腰にいるコクハのことをすっかり忘れて、コクハを押し潰すよう
に座った。

コクハは、あばれながら鞆から抜け出た。

「体は精密なんだからもっと丁寧に扱ってほしいカー」

「次から気をつけるよ」

そついうと辺りが、急に暗くなった。

「あつ、少し休んでもいい？」

「本当に体力ないカー」

「光りよ消えよ」

本当に何も見えなくなった。

「こんなペースだと今日中には、会えないカー」

「仕方ないさ」

真つ暗なのに声だけが、聞こえる。一昨日の全く聞こえないの逆
だ。全く見えない。

「ねえ何で聞こえたり、見えたりするのかな？」

「何をぶつきらばうにカー」

「だって最初から見えたり聞こえなければ、例え見えなくなっても聞こえなくとも困ることはなかったにね」

「それは違うカー見えたから聞こえたから生まれたものがあるカー

もし何も見えずに聞こえなかったらここまで何も感じなかったカー」

「そうすれば戦争もなかったかもしれないだよ」

「もし人間更なる感覚が、あればそれが無ければ機械と科学で戦争しなかったかもしれないカー」

「何がしたいの？更なる感覚って何？」

暗闇で何も見えないはずなのにコクハが笑ったように見えた。

「それは、自分で考えるカー」

「・・・・・・」

考えたそして、一つの答えがでた。

「何かわかったカー」

「例えそれがあるうがなかりうが、また別の感覚で同じことを話さるう」

「そういうことカーさあまた進むカー」

「なんか考えて余計に疲れた気がする」

「なら早く帰るカー」

「断る。我に道しるべとなるべく光をともせ」

さっきの光りより明るい。

「それでも光りは、弱いカー」

「これでも200%増量なんだけどな」

また、光が弱まりさっきと同じ光りになった。

「もっと強い光を出すカー」

「疲れるカー」

「真似するなカー」

「いてっ」

コクハのクチバシが、僕のすねに当たり、急に光が弱くなり暗く

なった。

「早く行くカー」

「行くつてどっちだよ」

「君は、右利きか左利きカー」

「右利きだけど」

僕は、すねを押さえながら答えた。イテテッ

「ならここから左君の右に進むカー」

「真っすぐ歩いていても体が自然と利き手のほうに向かう性質か」

「そういうことカー」

ガツガツ、コクハは、クチバシでその場に穴を掘り出した。

「？何しているの？」

「万が一戻って来ても元に戻るように目印を作っているカー」

「ふーん」

「君もいつかこれが役に立つとき来るカー」

「それがないといいけど」

それから、コクハの言われたとおりに壁に沿って歩いた。

またこの目印は、使うことはなかった。

「ここカーこれが、ここの出口カー」

「・・・・・・」

僕は、光りという魔法を使い続けているから疲れて声がでない。

ちなみにコクハは、この施設の入口と出口が一直線上にあるということについて何で知っているのかと僕は、何も疑いを持たなかった。

「次に進むカー」

コクハは、腰の鞆に飛び乗った。多分これも疲れの原因かもしれない。

扉を開けるとそこは、下りの階段がある。

「もつと地下深く目指すの？」

「嫌ならすぐに引き返すカー」

時計を見ると午後の3時を指していた。

「行くよ。祠に着くまで」

それからぐるぐると階段を下り、迷路みたいな道をコクハの道案内に従い進んだ。であることに気がついた。

「次の道は、左に進むカー」

「コクハは」

「何カー？」

「やっぱりもしかしてここに来たことあるんじゃない？」

「そんなことないカー」

コクハは、別に動揺する事なく答えた。

「じゃなんでこの道だと言えるの？」

「それは、適当だからカー」

「適当？じゃもしかして道迷ってる？」

「それは、大丈夫カー道は、しっかり覚えてるカー」

「じゃなんでこの道だと言えるのさつきから上がったたり下がったり、右にいったり左にいったり」

「それは、安全通路だからカー」

「安全？」

「でも次は、無理カー」

「無理って何が、この先の道にはすべてに魔物の気配がするカー」

「魔物？」

「今まで出来るだけ会わない道を探してたけど次ばかりは、無理力」

「コクハに魔物の気配わかるの？」

さつきから魔物に遭遇しないのは、コクハのおかげだ。

「当たり前カーそれがないと生きてここから抜けられないカー」

「すごいな」

「褒めてもダメカー次の道には、どこにも魔物だらけカー右には、2体、左には、1体カー」

本当にいるのか確かめたかったけど、左に曲がった、真つすぐの

道には、何体いるか気になるが・・・

「なんじゃこりゃ」

足元に黒い物体が、うねうねと動いている。

「ナマコカー」

「でかくない？」

大きさは、ゆうに1Mを超えて、芋虫みたいにモゾモゾ動いている。

「気味ワル」

僕は、後退りした。

「こいつは、動き遅いしあまり強くないカーそれにナイフで簡単に切れるカー」

「そうなら」

僕は、ナイフを出した。

「まて、切るなカー」

コクハの警告より先にナマコを輪切りにした。バシユ、何か血みtainなものが僕のかかった。

「どんなもんだい」

「バカ、どこか直接皮膚にかからなかったカー？」

「少し腕に」

少し右腕にかかった。

「すぐに拭き取るカー」

「クサ」

辺りが、急に臭くなった。

「ナマコの消化液カーすぐにこの場を離れるカー」

「わかった」

僕は、ナイフを待ったままナマコを飛び越えて走った。

「痛い」

右腕に痛みが走った。魔石でかざすとかかったところが赤くなっている。

「服で拭き取るカーそれは、タンパク質だけを溶かすから服までは、

溶けないカー」

服で拭き取ると次第に痛みが、納まった。

「何なの？さっきのあれは」

「昔、特殊な液体を作る生物で作られたカーちなみにあの液体を飲むと痺れて1週間は動けなくなるカー」

「1週間も」

こんなところで1週間もいたら餓えて死ぬか、溶けるなと思って身震いした。

「次にあつたら何もしないですぐ逃げるカー！」

「なんか皮とか皮膚みたいの村で売れないの？」

「あのナマコを・・・体液なら売れるカーだけど今の君ならそれをもって帰る術が、ないカー」

「諦めるしかないのか」

「！ッカー」

コクハが、急に辺りをキョロキョロ見回し動揺した。そして何かに怯え出した。

「どうしたの？」

「奴ら思っていたよりも智恵があるカー」

「智恵？」

「前からも後ろからも数をなして集まってきたるカー」

「何で・・・つまり囲まれたいうこと」

「そういうとカーそれに殺気があるカー」

「ナマコって下等な生き物じゃないの？」

「自然界のは、下等でもここにいるもの人間によって進化させられた。魔物カー」

「普通じゃないのか・・・これからどうしよう・・・」

「逃げるカー例え智恵があってもあまり強くないカー」

「わかったそうする。うっ」

また、右手に激痛が走った。僕は、痛さに堪えられなくてナイフを落とした。

「どうしたカー？」

「右腕が痛い。それとなんか痺れる」

「よく見せるカー」

「しみる・・・」

袖をめくり上げてコクハに見やすいように見せた。

「はれているカーさっきの毒カー」

「拭けば痛いみが納まるんじゃないの？」

「そんなに毒が強いなんて聞いたことないカー」

「あれ？」

何故か痛みが、納まった。

「大丈夫カー？」

「痛くなくなった」

「心配させるなカー」

僕は、落としたナイフをまた広い上げようとした。

「痛い」

力を入れようとしたらまた痛みが、強くなった。僕は、このナイフにのろいがかけられたような気がした。だが、左手で拾ったが別に変化がなかった。

「痛いカー？」

「今は、痛くないけど右腕に力をいれるとかなり痛い」

右腕が赤く腫れている。だが急いで病院に行くまでではない。

「仕方ないカーナイフは利き手じゃないけど左手で持つしかない力

」

「うん」

ナイフを軽く振るが、いつもと少し違う感覚だ。

「集まって来たカー」

僕は、コクハの言う先に魔石の光を強めて照らした。さっきのナマコが、6匹見える。

「たくさんいる・・・」

「ここにいるとさらに数が集まってくるカー」

生唾を飲み込んだ。これ以上体液をかけられないように抜けなければいけない。もし誤って体液を飲むようなことがあれば、動けない僕を溶かされながら食べられるに違いない。

「怖いカー？」

コクリ、僕は、首を上下に動かした。

「大丈夫カー相手は、おそらく倒した仲間に向かうカー」

「魔物の性質を本当に知っているねコクハは」

「そんなこと当然で常識カーさあ走って通り過ぎるカー」

「わかった」

僕は、コクハに言われたとおり刺激をしないようにナマコの魔物を抜けた。ぐにゃ・・・

「あつ・・・」

3匹目を飛び越えて4匹目の影にいた5匹目を何もためらわずに踏んだ。

「~~~~~ッ!」

ナマコは、声にもならないようにないた。口を向けて消化液をかけてきた。僕は、慌てて服でよけた。背中から強烈に臭い匂いがする。

「何もたまたしているカー早く逃げるカー」

「わかつてる」

ナマコの仲間も消化液を一斉に僕たちにかけてきた。僕たちに向かって追い掛けた。ただどかなり遅いので容易に逃げ切れた。

「ハアハアハアハ、疲れた」

「もう村に戻るカーこれ以上進むのは、危ないカー」

「いやまだ戻らない」

「なら諦めるまで進むカー」

さらに廊下を歩き続けると部屋がある。だが鍵がかかって入れない。

「開かない」

「鍵を探さないと入れないみたいカー」

僕は、ドアをよく見た。

「なんか電気式みたいだから軽く電気を流せば開くかもしれない」

「君が電気を使う魔法が出来たとして、細かく調節出来るのカーもし壊したら帰るしなくなるカー」

「鍵あつても開くの？」

「鍵があれば手動で開くカーこんなこと常識カー」

「僕の村にそんなハイテクな製品なんかないよ」

「君の村は、田舎カー」

僕は、何のためらいもなく左手のナイフでドアに指した。

「我に力を」

左でナイフを持ち突き刺した。一度ではダメで何度の突きたてた。

「何するカー」

「道がないなら作ればいい。B^{バイ}Yだれか」

ナイフの先端が扉の隙間に刺さった。僕は、見えないナイフでこじ開けた。

「どんなもんだい」

「無茶するカー」

「あー疲れた」

僕は、死んだ目をしながら次の部屋に進んだ。

「右手は、痛くないカー？」

「大丈夫、左手だし大丈夫だよあと・・・」

「あと？」

「僕は、大丈夫ここまで来て引き下らないよ」

僕は、親指を上立ててガッツポーズをした。だがコクハは、すぐ隣の部屋に鍵がかけられていることが多いと言いきびれた。また、こういうように頑丈に閉じられている扉の奥には、かなり強い魔物がうようよいることを・・・

「待ってカー」

コクハは、飛んで追い掛けた。つまり言わなかった。

「さて次は」

「まだこの先あるの？」

「当然カーすぐには人魚に会えないカー」

僕は、かなり疲れていた。正直このまま帰る余力があるのか不安だ。

「この後何があるの？」

「この先には、一本橋があるカー」

「一本橋？ここ地下の施設だよ。それになんてわかるの？」

「目の前にあるカー」

目の前に広い施設と狭い通路があり、回りには一面海だ。潮の匂いがするだけだが・・・

「ここは、何だ」

「ドッグカー」

「ドッグ？」

「船、特に潜水艦専用カー」

2隻の上半分が丸い船が見える。町で見たものと全く違う。

「潜水艦？」

「海に潜ることが、出来る船カー」

「そんなこと出来るの？」

回りを木に囲まれた村で育った僕には、昔に46cmもの大砲を詰んだ戦艦や戦闘機が飛ぶための滑走路がある潜水艦があるなどしるはずもない。

「そんなこと出来るのじゃ村にもって帰れば高く売れない？」

「だいぶ昔の船カー動くかわからないカーそれに一人で動くものでもないカー」

「じゃみんなで」

「数世紀前カー穴が開いてないほうがおかしいカー」

「ふーん」

だが困った。ここは、もう行き止まりだ。ドッグしかない。これ
といって村で売れそうなものもない。

「祠はどこだ？」

僕は、コクハを睨んだ。

「そんなこと言われても困るカー」

「そうだよ。知るわけないよね」

「諦めて帰るカー？」

腕時計をみると夕方の6時を指している。

「そうだね」

計画制がなく失敗した。

「んっ！」

「どうしたのコクハ？」

「なんかさっきと違う気配がするカー」

「どんなの？」

「さっきと比べものにならないくらい早いカー」

「さっきは、かなり遅かったよ」

「さっきより村の外にいた魔物より早いカー」

「どこから？」

「気配を消しているからわからないカー」

「じゃどうやって近づいているのがわかるの？」

「君に気付いて気配を隠したカー」

「じゃどこかに僕を狙って隠れてるの？」

「そういうことカー」

僕は、ナイフを力強く持った。さらに僕たちは、来た道からはな
れて出来るだけ海を背にして来る魔物に備えた。

「光を消すカー」

「そんなことしたら全く見えないよ」

「今は、姿をさらけ出しているようなものカー自ら狙ってください
といっているようなもんカー」

「だけど」

「いいから消すカー」

「わかった。導きよ消えよ」

光が、消えたとたん後ろから気配がした。

「後ろからカーすぐによけるカー」

「わかつてる」

僕は、コクハが言うより先に前に逃げた。

なにか物凄い気配だ。殺気に近い。

「私の導き」

「光を出すな！狙われるぞ！」

コクハの語尾のカーがない。絶対やってはいけない。

ギャルルル、この世のものではない泣き声だ。海にすむ魔物だろうか？

バサササツ、ギャ、ギャル、カー、光が、全くなく全然見えないがコクハと得体の知れない魔物が戦っているのが何となくわかる。

「今だカー切るカー」

「切るってどこを？」

「横にナイフを振り切れカー」

僕は、言われたとおりナイフを力いっぱい横に切った。ザクツ、！！なんか当たった。

「喰らえ」

そのままナイフでギリ口を開いた。

「ギャー……」

物凄い叫び声が、部屋全体に響く。僕は、さらにナイフで切り付けた。ザクツ、

「よしっ」

うまく刺さったが抜けなくなった。

「やったカー？」

「喰らえ焰」

魔隻が赤く光、魔物を照らしながら顔を焼いた。得体の知れない鱗があつて足が二つ体は、銀光りしてなんか人間の出来損ないだ。

「ギャー」

魔物は、顔を焼かれながら叫び海に飛び込んだ。腰にナイフが刺さったままだ。

「まてっ」

火は、海に飛び込むとまた、辺りが暗くなった。

「我を導く光を照らせ！」

魔石が光り辺りを照らしたが、腰にナイフが、刺さっていて顔が焼けた魔物がいない。そのかわり、あたりに複数の魔物が、こちらを黙ってみている。

「ナイフが」

「一旦戻るカーこんな数相手にしないほうがいいカー」

「だけどナイフが・・・」

「こんな数相手に出来ないカー相手がなんだかわからないカー」

「うつつん」

僕達は、急いでその場逃げ出した。魔物達もその背中を追いかけるようとして海からはいでて来た。

僕は、さっきドアをぶち壊さなければと後悔した。道を曲がっても後ろから追いかけてくる。

「焼き払うよ」

「君の体力を考えるカー力を使い果たしたら逃げることも出来なくなるカー」

僕は、道を曲がり階段を上りさらに別の階段を下がり、通路をひたすらにジグザグに逃げた。

「なんか最近逃げっぱなし」

「仕方ないカー無傷だけでも運がいいカー」

通路を曲がりようやく足を止めた。

「ハアハア、走ったり戦ったり今日は、一段と疲れる。ナイフを奪われたし」

来た道を少し見て魔物から逃げ切ったかを確認した。どうやらうまく逃げれたようだ。

「何である時、ナイフを抜かなかったカー？」

「固くて動かなかった」

「力不足カー」

「そうかもねハアハア」

「今は、ナイフのことを諦めてここから出ることを優先にするカー」

「うん、そうしよう。で出口はどっち？」

「君が、ジグザグに逃げたからどうやって来たのかどこが出口なのかわからないカー」

「えっじゃ道に迷った」

「道に迷う以前に道なんかないカー」

「まあそうだけど」

つまり手当たり次第歩き回って出口に向かうしかない。それ以前に今日中に出られるかも不安だ。

僕は、その場に座ると魔石の光が消えた。

「どうしたカー」

コクハの問い掛けに小さいびき声が出た。

「疲れたカー？」

返答がない。

「仕方がないカー」

コクハは、僕を起こそうかと思ったがやめた。そのかわり目を使えない代わりに耳をすませて、魔物が近づいていないかに気を配った。

それから30分ぐらいしてたたき起こした。その時5、6回近く僕は、寝ていないといったらしい。

ザクツ、

「いってー」

コクハのクチバシが僕の足を刺した。

「起きたカー？」

「体が、重いし暗くて何も見えない」

「光が、ないから当然カー」

「今日は、ここで一泊留まろう」

「水と食料あるのカー？」

「・・・早く村に帰ろう」

「そのいきカー」

「我を導く光よ出る」

魔石が、辺りを照らす。

「さつきと魔法の呪文が違うカー」

「なんか慣れた。本当は、もっと長い呪文だけど慣れれば短くていいんだよ」

「魔法はそんなもんカー？」

「お母さんなんて何も言っていないのに魔法が使えるからね」

「北の人でもそういう人あまりいないというカー」

「コクハは、北の国にいったことあるの？」

「行ったことないカーでも有名カー」

「じゃ僕のお母さんはすごいの」

「見たことがないからわからないカーそれより早く移動するカー魔物が近づいているカー」

「たくさん？」

「多分1匹カーまだ君に気付いてないカーだけど来た道は、使えないカー別路で地上に出るしかないカー」

「わかってる。行くよ」

コクハは、僕の肩に乗りさらにこの遺跡を探索した。ある程度進むと道の雰囲気、がらりとかわった。今までは、大分前に作られたが施設だがこの先は、明らかに掘られたばかりの洞窟だ。村とは、正反対の方角だが明らかにこの先に祠がありそうだ。

「戻らないカー」

「気がかわった」

「いうと思ったカー」

「会いに行こう人魚のいるところで」

「もう引き換えせないカー」

「当然」

なんか気配がする。

「わかるカー」

「知ってた？」

「起こす少し前からカー」

僕は、また走った。その気配も僕が走るのに合わせ走り出した。

この速度は、さっきのナマコじゃない。魚人？だ。

「行き止まりだったらどうするカー？」

「本当に行き止まりだった戦う」

「いい心掛けカー」

走ると目の前の道が、海水に浸かっている。だが、まだ進むことが出来そうだ。

「引き返すカー」

「目の前にまだ道があるのに？」

この先に人魚が、いる気がした。

「海水では不利カー」

数が、さっきより増えている気がする。このまま戦うべきかそれとも先に進むか？戦うにしても武器のナイフがない。たとえ氷のナイフを作ったとしても体力をかなり消費するから全員を相手に出来ない。微かに足音がする。

「すべてを相手に出来ないから先に進む」

「もう任せるカー」

最初靴より低かった海水が、奥に進に連れ膝辺りまで深くなった。歩きにくい」

「急ぐカーあいつら泳いでくるカー」

腰に信号用の銃があるが閃光弾や音響弾を買っのを忘れた。

「今更だよな」

「？なんかいったカー」

「なんでもない。この通路から早くでないと」

先が、薄暗く見える。

「出口だ」

「もうすぐカー」

出口の先で少し陸の上に人魚がいた。も少しで会える。だが、人魚は、こちらを見ると驚いて奥に消えた。

「待つて」

通路から出た。だがそこは、岩のドームになっていて、上が吹き抜けでそこから月が見えドーム全体を照らしている。

人魚の姿は、見えないが足元にさつきナイフを刺した人魚が、仰向けに息絶えている。人魚が、看病していたのか？

「囲まれたカー」

周りが、深く海水に浸っていてそこに人魚が、ぐるぐる泳いでいる。どんな数が増えてる。

「コクハは、あの吹き抜けから外に出て助けを呼んで来て」

「こんな数どうするカー？」

僕は、ナイフが刺さっている人魚の腹に足を乗せて力いっぱいナイフを抜いた。

「ナイフがあるから大丈夫」

「わかったすぐに呼んでくるカー無理するなカー」

コクハは、吹き抜けに向かって飛んだ。

「無理をしないほうが無理だよ」

人魚の動きが次第に速くなっている。

「光よ消えよ。我に力を」

魔石が、月夜より明るく光る。僕は、海水に手を突っ込みなにか見えないものを取り出した。その二つを高々く上げて、月に照らされた。左手には、父からもらったナイフで右手には、海水を魔石で凍らした即席のナイフ、空気を固めるより比較的簡単だ。そういえば一番上のお兄ちゃんも刀とバスタードブレイドの二つの剣を使う軍人だと思い出した。その時、戦うときは、複数を相手にしないで

単体を倒すと教えてくれた。

「来るなら来い。まとめてぶった切ってやる!!」

それに反応したように一斉に集まって来た。

「かつぱしから相手にしてやるぞ!」

もうやけだ。だけどそれぐらいの気持ちでまなければ心が勝てない。

その頃、コクハは、吹き抜け出ると少し前に入った遺跡の入口を見つけた。吹き抜けから入口まで100Mも離れていない。また、すぐに人を集めることが出来た。僕が、なかなか戻らないので漁師のタカシを中心に軽く装備をした町人が、遺跡の出口近くに集まっていた。

そして、すぐに事情を説明して、何人かにロープをとって来てもらい。他の大人数で吹き抜けに来てもらった。この数が、いればまず負ける気がしない。

吹き抜けを覗くと僕が、複数の魚人と戦っていた。だが、吹き抜けから僕のところまで10Mぐらいあり、すぐに助けに迎えない。

「ここから離れる。足場が、持たない」

ドームは、たくさんの町人の重さに耐え切れず揺れ出した。みんな慌てて逃げ出した。そこから離れると、揺れと地盤沈下が激しくなった。

「おい、今すぐ逃げるカー」

僕は、上を見ると天井が近づいて来た。助けが来たと思ったがそれより先に崩れるようだ。ドーン、うしろに天井の一部が、落ちて来てそこにいた魚人の姿が消えた。またここにはいった入口が、塞がれた。次は、自分だと悟った。次第に天井が下りてくる。僕は、思わず人魚が飛び込んで消えた方に飛び込んだ。そこから海に繋がっている気がした。周りにいた魚人も我先に人魚が出た入口に群がる。

僕が飛び込んでドームが、崩れて物凄い水圧が背中から来た。だ

が、まだ意識を保って泳いだ。昨日のクラーケンより弱い。だが、このトンネルは、思ったより長い。周りにいた魚人は、次々に先に進む。僕は、魔石を光らせて後を追うが追いつけない。

- 息が続かない -

魔石の光が消えるのを見て意識を失った。

昨日の大雨で水かさが、増しているけど新しく作ったルアーで絶対、川の主を釣れる。

ただ一つの不安は、今日も懲りずにまた妹とお兄ちゃんが、きたことだ。

昨日と少し違うとつこを目掛けて仕掛けを投げた。

また、妹が川に近づこうとした。

「待っていくな」

僕は、釣竿を投げて妹に向かった。お兄ちゃん達が先に近づいたが姿が消えた。妹もそれに近づき姿を消した。

「いったそばから」

僕は、飛び込んだ。水かさが、昨日の2倍近くで濁ってて見えない。手探りで泳いだ。

手になんか掴んだ。でかい魚だ。だがするりと手から逃げた。

- 川の主 -

いた。川の主の泳ぐ先に妹がいた。体を押さえて何とか外に出た。そして、死に物狂いで岸についた。

息をしていない。お兄ちゃん達もまだ川から出て来てない。木陰からお母さんがでてきた。

「どうしよう。息をしてない。お兄ちゃん達もまだ川から出てきてないよ」

「今日は、川にいつちゃダメだといったでしょう」
こんな状況なのに冷静だ。

「お母さん!!」

「わかってるわよ」

お母さんは、川に向かって掌を出した。 なにか念じているよう
だ。

「なにをしているの」

「うるさい気が散る」

「・・・・・・」

「いた」

なにか釣りをするような仕種をした。すると川から二つの塊が
超に浮いた。お兄ちゃん達だ。

「・・・・・・」

なにがなんだか理解できない。お母さんは、こちらに手招きを
する仕種をするとお兄ちゃん達が、中に浮かびながらこちらに来て
下ろした。二人とも息をしてない。

「みんな息をしてないよ」

「そんなこと知ってるわよ」

宙でなにかを取り出す仕種をするとみんな水を吹き出した。

「・・・・」

「よしっ。さて次は」

木に向かって指を鳴らすと木が妹に目掛けて切れて倒れてきた。

「危ない」

「はいっ」

だけど、ぶつかる直前木は、粉々に砕けて枝みたいになった。

「???」

「これを並べて」

砕けた木は、倒れている3人の中心に置かれた。まるでキャン
プファイヤ-の土台のようだ。

「お母さんってもしかして」

「燃えちゃえ」

お母さんの言葉に答えて急に木が、燃え出した。

「どうして」

お母さんは、僕に口に一差し指をつけていった。

「今見たことを誰かに言ったら燃やしちゃうからね」

僕は、頷くことしか出来ない。

「指すが我が子、じゃ帰ったら川に行ったことについて折檻ね」

そういうと木陰にはいるなり姿を消した。僕も後を追おうとしたら妹が唸った。別に大丈夫みたいだ。振り向くとお母さんの姿は、もうない。

僕は、お母さんが魔女だと初めて知った。周りは、もうみんなもう知っていたらしい。

2部より 第3幕「海の祠」(後書き)

次回僕のたび

旅人の「僕」と人魚の「桜」の幕が開く。

第4幕「島に見える風景」

それではまた

2部より 第4幕「島の見える風景」

僕は、僅かに目を覚ました。とてもくらい部屋でここは、わからない。体が、異様に重い。前に学校でひたすら長い距離を走らされたよりも重いし痛い。僕は、その疲れのせいでまた眠ってしまった。

「うっ！」

それからどれくらいの間が経ったのかわからない。ただペンダントがやけに重くてまた目が覚めた。

「いっつつ、夢を見た」

体を起こすと全身に痛みが、走る。ペンダントが、薄暗く赤く光るので体に何らかの異常だ。

「魔法を使いすぎた」

昔どこかの魔術士が強力な魔法の使い、体中が「痛い痛い」と叫びながら死んだそうだ。ここが、死後の世界かもしれない。

「いや僕は、大丈夫」

声が、虚しくこだまする。体に痛みがあることは、まだ生きている。しかし、暗過ぎる。目の前にあるであろう自分の手すら見えない。指を顔に付けるが、別に眼帯や包帯をつけていない。

「ここは、どこだ？」

魔石を使って辺りを照らそうかと思ったが、今の自分の体力を考えるとやめた。腕にしてある時計をいじってみた。時計が、明るく光った。

「5時57分・・・早っ！」

目が覚めたらもう次の日だ。

さつきから息苦しい。それ以前に少し痛い。筋肉痛とは、別の痛さだ。時計の光で辺りが、照らされる。辺り一面金属で出来ている。港には、木の船しかなかったから別の船だろう。

「そうだとしても暗過ぎる」

天井も見えなければ、壁も見えない。いつまで移動できない。こんなに暗いところにいたら気がおかしくなりそうだ。目をつむったが、人の声など聞こえない。手探りで壁を目指し、壁のところに耳を付けて耳をすました。サーッ、水の流れる音がする。

「我に道しるべとなるべく光をとらせ」

疲れている体にむちを打つ形だが仕方がない。

「腕時計のあとは、携帯ライトが必要なのかも知れないな」

お金と愛・・・物欲は、いくらあっても足りない。そんなことをお兄さんが、言っていたことを思い出した。確かにそうだ、ほしいものは、たくさんありすぎる。だけど本当に必要かは、また別だ。辺りは、白い部屋だ。前の夢で見た病院に近い。机が、ありそこに包帯やら消毒液が、かなりの埃を被つてある。

僕は、もとは足のあつたベッドに寝かされたようだ。だももう足はなく普通の布団のようだ。立ち上がり布団をたたむと辺りが、白く視界が悪くなった。思わず窓を開けようとしたが窓がない。僕は、咳込みながら部屋を後にした。目の前に階段がある。下を除くとそこは、一面海水で近づくことも出来ない。

僕は、辺りを周り散策した。ほとんどの部屋は、明かりがない。

外の光を入れる窓もない。ここは、どこなんだ？全くわからない謎だ。

「どうなつてんだー」

思わずつぶやくが、僕の声が辺りに反響した。何の反応もない。誰もいない。

ほとんどの部屋にしっかりと鍵がかけられていて入れないし、人一人いない。時計も午前7時を指しているにも関わらず真っ暗だ。まだ太陽が出ていないわけではない。

僕は、自力ではなく誰かにここに連れて来れた。なぜなら溺れてからここまで気絶していたのだからわからない。だが誰なんだ。魔物に連れられたのか？ならもう食われてる。

非常食か??

ザッアヒタ、なんか音がした。水からなにかでてきた音だ。僕は、音のするほうへ向かった。ヒタヒタ、なんかはいずれの音が聞こえる。ピツ、急に辺りが、明るくなった。通路の蛍光灯が、光出した。僕は、てつきり電気が、なくつかないと思って操作してなかった。

カチャガタンツ、扉が開いて閉じる音がする。僕は、そのはいずる音が何なのかわからないので出来るだけ音を立たないようにした。その通路の階段を下りたところからだ。

「どこ――? リユウキ――」

女性の声がした。名前を呼んでいるのだが、リユウキは僕の名前ではない。リユウキは、僕のお父さんの名前だ。

「リユウキ - 隠れないで出て来てよ - 」

僕は、その女性が、気になり階段を降りて扉を少しあけて覗こうとした。扉を開けよとしたらいきよく開いた。中からも開けようとしたらしい。

「あっリユウキ - もう起きてたんだ」

そこには、僕より腰ぐらいの女性がいた。なぜかＴシャツを着ている。

「あ、足が」

その女性には、人のような足はなかった。だけど魚いや、イルカのような尾ビレが、あった。

「会いたかったよ。リユウキ - もう会えないと思ったよ - 」

その女性は、急に抱き着いた。

「に、人魚」

僕は、腰が抜けた。その時、この前に助けてくれたことに御礼をいいそこねた。

「あっええと」

どうやらあの祠からここまで連れてこられたらしい。だが何故この人魚が、僕の顔を見るなりお父さんの名前を読んだのかわからない。

「今とつて来たから食べよう。火がないから刺身だけど大丈夫だよね」

人魚の手には、3匹の魚が跳ねている。まさに今そこでとつて来た感じだ。

「刺身か・・・」

「そう刺身、じゃ軽く鱗を取ってくるね」

そういうと体をばたつかせながら別の部屋に入った。

「出来れば御飯もほしいな」とつぶやいた。が、もう聞こえない。

人魚は、見るからに魔物に見える。だけど僕を食べる気ではないようなので一安心だ。

さて、どうやって僕が、リュウキではないと誤解をとくかだ。

「出来たよ」

古いさらにほぼ骨しか残っていない、さっきの魚の残骸が出て来た。

「・・・・・・・・」

「リュウキは、骨嫌いだから小さい骨を全部取ってあげたよ」

ここまで来るとなんか怨みがあるとは思えない。

「いただきます」

「召し上げ」

明らかに量が、少ない。これだけならあと10匹近くほしい。もしくは、自分でさばいたほうがたくさん食べれたかもしれない。

「昨日助けてくれてありがとうございます」

昨日のことを御礼をいうのを忘れていた。

「なによ急にかしこまっちゃて、まああのまま私が、戻らなければリュウキは、どざえもんね」

「どざえもん？」

「溺れてて死んだ死体のことよ」

人魚は、笑いながら答えた。

「昨日あそこで何してたの？」

「地中ドーム？」

「うん」

「月見てた」

「月？」

そういえば、あのドームから見た月は綺麗だった。

「あそこの月は、一番綺麗だよ。そしたら剣に指された魔物が来て、そのあとたくさんの魔物とあなたが来たから驚いて逃げちゃたよ」

あの魚人が魔物ならおまえは、何だ。と思った。

「そのあと大きな揺れがあつて戻って見たら光る石が、見えて消えたと思つたらあなたがいたから私の家に連れて帰つたのよ」

「ありがとうございます。ところでここは？」

「昔の潜水艦という船かれこれ300年以上前に廃られたみたい。でも動力が動いているから現役よ」

「・・・300年」

「私は、あまり地上にいられないからこの船の設備は、あまり使つてないけどね」

「そうなんだ」

「ところでリュウキは、ここに何しにきたの？」

「あつえと」

僕は、どこから話そうか迷った。

「僕は、リュウキじゃないよ」

「うそよ。剣も同じのものだし顔だつて見間違いないよ。あつもしかして記憶を失つた？」

僕は、前の村みたいに名前を忘れてない。

「リュウキは、僕の父さんの名前です。そして、村を出ていくとき父さんからこのナイフをもらいました」

「じゃもしかしてリュウキの子？」

「あなたの言うリュウキと父が同一人物かわかりませんが」

「まあ30年近くたっているからそりゃ年取つて顔ぐらい変わるよね・・・」

「30年」

この人魚は、今何歳か気になったが一樣女性なのでいうのをやめた。

「あの野郎、すぐ戻るっていつまで私を待たせやがる」

人魚が暴走した。

「多分いつか戻ってくると思いますよ」

僕は、人魚を取り押さえたが人魚の握力で中に飛んだ。 I c a

n f l y

「ぐわっ」

「あつ大丈夫？」

ようやく落ち着いた。そのリュウキも人魚から逃げた理由がわかった。

その頃、コクハは、昨日の崩れたドームの上で村人による救助活動を見守った。自分は、なにも出来ないで見ているだけだが、村人達は、自分達の重みで崩れて潰したのでいくらか責任は、あるようだ。

「カー」

やっと1割程度除去できたようだ。でも作業はまだまだだ。みんな生きてなくてもせめて、骨だけでも助けようと思っている気持ちだ。

コクハは、内心生きているとは思えない。だけど自分がみんなを僕を生き埋めにした。後悔で謝れるなら謝りたい。死んでも死に切れない。後悔で一杯だ。

「カー」

もはやため息しかでない。

「どうか生きて帰ってくれカー」

それでもどうしても生きていることを願ってしまう。

「カー」

コクハは、一度ホテルに戻ることにした。問題は、まだある、旅

費だ。こんなにのはすのだからそろそろ宿泊費を払わないとまずい。だけどコクハの提案で有り金は、自分に持つようにいつてしまった。つまりお金がない。

「早く戻ってくるカー」

コクハは、借りているベッドで寝た。

その頃、僕は、コクハの心配をよそに人魚と世間話をしていた。というよりリュウキと人魚の旅の話、武勇伝に近いものだ。巨人を倒したとか、食料不足の村に漁を教えて、救ったとかだ。そして、いくつかお父さんが、話したことに類似するものがあつた。

だからといってお父さん〃リュウキと断定できない。それ以前にリュウキが、結婚したというと暴走して殺されるかもしれない。

・これからどうしよう・

それが今の本音だ。

「あの・」

「どうしたの？」

「実は、町に仲間が待つてるので多分心配しているからそろそろ町に帰りたくて」

「帰るのは、自由だけどここ島まで結構離れてるわよ」

「どれくらい？」

「5、6キロかな多分」

「・・・・・・」

全く泳げないわけではないが、1キロ以上泳いだことがない。水着なら出来るかもしれないけど服を来て装備がある。

「あとここ水深40Mくらいあるから簡単には、無理かもね」

「潜水道具とかありませんか？」

「ないね。ここ昔の船員が脱出するときに全部使ったみたい」
使ったことがない人が使える分けないけどと付け加えた。

「僕は、ここにどうやって来たの？」

「私が、酸素を口渡しで調整しながらね」

普通ならおいしい話かもしれないが、相手が魔物なのであまり喜べない。

「じゃここに来た要領で僕を」

「嫌だ。あなたをここに運ぶのにどれだけ大変だったかわかる？」

「いや助けてくれて感謝しているのですがいつまでもここに」

「じゃ感謝の気持ちを見せてほしいな」

「何かしろと」

「そういうこと」

人魚は、笑顔を見せた。御礼を言いに来るんじゃないかと後悔した。すぐにでもこの村を出るべきだったのか……

「何をすればいいのですか？」

「よく聞いてくれた。さすがにあなたも私の旅話もあきたでしょ」

「いやそんなつもりではないんですが……」

「うそ顔に出てる。リュウキそっくり嘘が下手」

「……」

正直、旅話は、参考になるのもあるが会話のほとんどがリュウキとののろけ話で飽きて来た。

「簡単な話よ。私と一緒に鬼ヶ島へ鬼退治をしてほしいの」

「鬼ですか……」

なんか前で見た夢ににている。

「鬼といっても実は、蟻なんだけどね」

「蟻？」

「そうだけどサイズが大きい上に泳げて、大きくても60cmくらいかな」

人魚は、手で大きさを見せた。あきらかに1Mを越えているが……

「なんなんですか？蟻に近い新種ですか？」

「蟻と人の配合種だけど知能が低く幼児ぐらいしかない。だけど本能に近い動きをするの」

「強いのですか？」

「強いという定義が、わからないから一概には言えないけど昨日あなたが倒した人の出来損ないより弱いかもしれないね」

「魚人が人の出来損ないなら、人魚のおまえは、なんだ。」と言いたくなつたがいうのをやめた。

「だけど適応力と繁殖力が高いね。もし陸に出たらあつという間に島は、蟻の国になるかもね」

「そんな魔物が、いたなんて」

「でも大丈夫よ。私がクラーケンにねこそぎ食べるように仕向けるもん」

「じゃ僕が、一昨日に会つたのは・・・」

「あーあんたが釣りをしていた底に蟻の巣があるのよ」

「知らなかった」

「当然よ。私が、根絶やしにしているからね」

つまりあの村が、平和なのはこの人魚のおかげかな？

「でもね。奴らの女王蟻は、地下奥でなかなか近づけないのよね」

「蟻の巣ごと壊せないんですか？」

「少しづつは、壊してるけど案外頑丈でね。巣を一力所に出来たけどほとんど地下深く掘るもんだからなかなかね」

「どれくらい続けてるんですか？」

「そうねかれこれ30年と半年ぐらいかな。リュウキと別れてからだし」

「さ、30年、リュウキと一緒に倒さなかったんですか？」

さっきの会話にもリュウキが、いくつかの蟻の巣を壊したと聞いた。

「生き別れの姉がこの近くにいるかもしれないから探すって、すぐに戻るから言い残してね」

「それからリュウキは、」

人魚の目付きが、変わった。

「あの野郎、自分の姉だから私から離れることを許したがいつになつたら帰るんだ・・・」

人魚は、また暴れ僕は、空を飛び地面につくと一面に花畑が広がった。

コクハは、悩んでいた。いくら、ホテルの人が気を使い。旅人が見つかるまで宿泊費を後にしていいといわれたが、もし見つかったもお金が足りるか不安になった。財布は、原型を留めているのか・

いや、それ以前に僕を探すことのほうが優先だ。何となく僕が、生きている気配は感じるのだが口ではあまり説明できない。だが漁師達が、いつまでも探してもらうわけにはいかない。それになにか御礼が、必要だ。御礼をするには、お金が必要だ。僕の両親を呼ぶのが早いがかかなり心配をさせるだろう。僕のお母さんに話したら倒れて寝込むかもしれない。

「よし、しかたない。行くか」

コクハは、森へ飛び立った。

「起きて――」

僕は、人魚に力加減せずに殴られながら目を覚ました。目を覚ましたほうが、体力が低いことが多い気がした。

「痛い」

「よかった」

普通照れるが、限度を考えないで抱き着かれたので苦しく、まるでプロレスの技だ。

「くっ 苦しい」

そのあと、顔がひどく熱い。かなり熱を持っている。鏡を見て自分だとわかるだろうか不安になった。

とりあえずこの人魚の前でこれ以上リュウキのことを言わないほうが無難だ。さもないとこの人魚に殺されるかもしれない。

「さあ君も起きたみたいだし、行きますか鬼ヶ島」

「はい」

これ以上ここにいたくないと切実に思った。そういえば人魚の名前を聞いてないことに気がついた。

「名前なんていうのですか？」

「人食い蟻」

「いえあなたの」

「私の？」

僕は、首を縦に降った。

「コード、F-3、人魚形雌プロトタイプ、昔はね。今名前は、桜。よろしくね」

桜、そういえばどこかで聞いたことがあるような・・・

「桜・・・いい名前ですね」

「そう思う。リュウキが付けてくれたんだよ。桜が舞うところで」

どうでもいい話だが、リュウキと人魚の桜は、春にあつたらしい。

「僕の名前は」

「いいよ。言わなくて君名前を覚える気さらさらないから」

「えっ」

「私もね。もう250年くらい生きてるけどいろいろ覚えんのめんどくさいから。だから言わなくていいよ」

少しシヨックだが、250年も生きているなら仕方がないかなと思えた。

「わかった」

「じゃ行くわよ」

そういうと人魚船底の穴から出ていった。僕は、海深く泳いだことがないから追うか迷った。

「僕は・・・」

すぐに桜は、戻って来た。

「すぐに行くわよ」

桜は、僕の手を掴むなり外に連れられた。物凄い水圧の中を連れられた。本来ならダイバーでさえ呼吸を調節しながら泳ぐといわれるが、桜は、僕にそんなことをお構いなしで泳いだ。当然、僕は、

息が続かなく気絶した。あまりからだに良くないことはわかる。だけどこれを拒否する権利もない。奴隷扱いだ。そんなことを考えながら僕は、蟻の巣に連れられた。

「ゴヘツゴヘツ」

席をしながら目が覚めた。正確には、飲んだ海水を桜によって強制的はかされた。辺りは、くらいだけど僅かに壁が光って辺りが見える。辺りに鉄の二オイが鼻をつく。

「やっと起きた。海水を飲んだら意識を失うのわからない？」

「ゴヘツゴヘツ、息が続かないんでゴヘツもう少しゆっくり来れないんですか？」

話すことが辛い状態だ。だけど桜が泳ぐ速度は、かなり早く水压に負けて飲み込んだ。

「呆れるわ。もしゆっくり泳いだらまだあんたは、海の中よ」

気を使ったみたいが僕にとってどちらもありからだに良くない。
- 逃げたい -

「それにしてもここの周りの鉄みたいな二オイはなんですか？」

「蟻の血よ」

「へっ・・・光よ我を導け」

辺りを照らすと赤で染めている。

「へえあなたは、魔法を使えるのね。リュウキと大違い」

「リュウキは、使えないのですか？」

「あなたは、リュウキを呼び捨てしてはいけない。ちゃんと『さん』を使わないと」

「・・・はい」

僕は、小声で答えた。

「南の人だから魔法は、使えない。だけど格闘が得くてだけどあなたと同じ刀を腰にさしていたよ」

「そうですか」

「そう。で、この辺りは、門兵の蟻を倒したからあなたは、奥にい

る女王蟻をさつさと倒して来て」

「はい」

僕に拒否件はない。

「私は、外で暴れるから出来るだけ子蟻を集めるね」

「桜さんは、私と来ないのですか？」

「私は、あなたと違って尾ビレよ。もし行くことが、出来たらあなたに頼まないで自分で行くは」

「・・・・・・」

僕が、見える範囲まで蟻の死骸が続く。はいずりながら追い掛けて殺したに違いない。つまり一人でも十分に倒せるようだ。だけれど怖くて言える訳無い。

「あと魔法は、禁止ね」

「えっ！」

「ここは、壁に生えている光苔が光を出して、足元や蟻に寄生している植物が酸素を作ってるの細かいことは、学校で習ったでしょ」

足元に草が生えていた。

「えエ習いました」

「それであなたが、火を使ったりしたら光が、消えて草々が光合成出来なくなつて窒息するから気をつけてね」

「わかりました。行つてきます」

逝つてきます。の間違いかもしれないと思った。

「GO！GO！レッツゴ－負けるな！！ GO！GO！レッツゴ－負けるな！！ GO！GO！レッツゴ－負けるな！！」

桜の応援を受けながら僕は、奥に進む。途中水になにか飛び込む音がして振り返るともうそこに桜の姿はもうない。どうやってここから抜け出すか考える必要がありそうだ。

多分この洞窟は、この町にある中で一番歩きやすいかもしれない。今までは、暗く自分で明かりを点ける必要があるが、周りの光ゴケのおかげでそんな心配ない。思わずその光ゴケを手に取った。ちぎるとたちまち引き抜いた辺りが暗くなり出した。

「死んだのか？」

5、6 Mぐらいの光ゴケが消えた。よく見ると一斉に枯れている。桜の気をつけて戦えという意味が要約理解できた。

「つまりあまり壁に傷つけないように戦えか・・・言われて初めてそれが難しいことに気がつく」

誰かが、そんなことを言っていたかな？

カサカサ、カサカサ、足音だ。恐らく桜の言う最強の蟻、とりあえず女王を倒せばすぐに終わる。

「その前に女王は、どこにいるんだか？」

遠ざかろうとしていた蟻の足音が、急に近づき出した。どうやら蟻の耳は、かなりいいらしい。

「私語は、慎んでか」

小声で自分に言い聞かせながら出合い頭に目の前の蟻に向かってナイフを下ろした。ナイフは、蟻の頭と胴体の間にはいりたやすく切れた。

「ギャ」

古く錆びた歯車を久々に動かしたような泣き声を出した。

「ッ！」

カサカサ、カサカサ、カサカサ、道のあちらこちらから一斉に蟻の足音がした。どうやら仲間を呼ばれたらしい。僕は、恐らくすべてを相手に出来ないのもその場から足音を立てないように離れた。

その頃、人魚の桜は、ひたすら岩を巣に向かって投げていた。拾っては、投げて拾っては投げてその繰り返しで、稀に巣の周りが、落盤する。そうすると蟻達が、怒って一斉に出てくる。ちなみに後ろには、お腹を空かせた蟻好きのクラーケンが待ち構えている。今まで毎日繰り返し返して来た。何もしないよりは、かなり成果を残したが、浅く広く巣を作る彼等にとって隣の小さな巣が壊れただけに過ぎない。

あとさっきの旅人とは、離れているところで、巣を壊しているか

ら旅人を生き埋めにする心配はない。

「さて、中は、どうかしら？」

ただ問題は、お互いに何をしているか全くわからないことである。ガザザツ、巢の一部が、壊されて蟻達が一斉にでてきた。毎日しているはずなのに知能が低く学習力ナシ、つまり彼等は本能が思うがままの行為だ。

「さあ、行きなさい。大きなイカさん」

桜の合図より先にクラーケンは、蟻を食べ始めた。クラーケンは、岩が崩れるなり食料が、出てくるのがわかるので我先に食べ始める。「みなさん飢えていること」

蟻達が、いつものように巢が壊されてパニックに陥る中、僕も慌てていた。蟻達に包囲される寸前に大きな揺れが起きた。恐らく地核変動が起きたようだ（桜が起こしているとは、思いうけがない）。すぐさま蟻達は、地核変動がするほうへ向かい辺りが静まりかえった。あの蟻達を相手にしなくてもすむ。

「助かった」

それから僕は、初めて来て法則も何もないただ編み目に作られた巢を延々と女王のいるところを探した。

気がついたらどこから来たのかわからなくなった。今までひたすらに歩いて来てすべての道が同じ作りで・・・つまり僕は、道を迷ったようだ。どの辺に女王がいるかでもわかればそこに向かうのだが・・・

ガサツガサツ、なにか作業がしている音がする。そつと覗くと崩れた道を蟻達がせつせつと直している。恐らくさつき崩れて埋まっている場所を直しているみたいだ。

僕は、見つからないように壁に寄り添って覗いた。だが壁に触れると光が急に消えた。触れたところが、次々に死んでいる。次第に暗くなり蟻達がこちらを見た。だが、壁から離れて蟻に見つかった。「ギイ・ギイ」

？、蟻達は、すぐに近づかないでなにか音をだし始めた。

「ギイギイ・ギイ」

僅かに辺りが、揺れ出した。それと、カサカサと蟻の足音も「仲間を呼ぶきか」

僕は、来た道走って引き換えした。音を出している蟻達は、追いつけないがまわりから足音が一斉に近づいている。

だが、それは、桜が巣を壊しなくなった兵士の蟻の増援が、たまたま音で集まっていることは、その時の僕は知らなかった。

目の前に蟻だ。僕は、腰にあるナイフに手を延ばした。だが、後ろからぞろぞろ見えたので戦いたくないから来た道を引き返した。それから蟻の足音に気を取られて結局さつき巣を直している蟻のところまで戻ったとこれで囲まれた。

流石にナイフを抜いて、バサツバサツと倒していく自信がない。

蟻達もすぐには、襲ってこない。もし、僕が、この前見た夢に出てくるリュウキなら魔法で辺りいちめんを火と血の海に変えたかかもしれないが……

なんて考えている場合では、ない。通路を前後を見たことがない。巨大な蟻に囲まれて少しでも油断すれば一斉に襲われるだろう。それに、桜から魔法を使うなどいわれたばかりだ。

ドンツ……ドンツ……ドンツ……ドンツ、静寂を断ち切るかのように等間隔で揺れた。もちろんこの揺れの原因は、桜が、脆い地盤目掛けて岩を投げて巣を壊しているのだが、どうせ一人巣の中のんびりしているのに違いない。と思い込んでいる僕は、そう思わない。きっと、がたいのでかい蟻が、近づいているのかと考えていた。

謝って命だけでも助けられないのか考え出した。だが、いろいろ考えてまともな案が、浮かばない。出来るのなら僕の周りだけ巣が壊れて助からないのか……だけどその後どうしよう……ガンツ「えっ！」

巣の壊れたところから僕に向かって一本のヒビが走った。ガンツ、

「うわっ！」

足場が、壊れた。僕は、下に落ちそれと同時に天井も崩れた。

「あっ……」

巣が崩れて一番驚いたのは、桜のほうだった。てっきりまた一部が崩れるかと思ったが辺り一面に亀裂が入り、あっという間に砂煙で前が見えなくなってしまった。桜は、エラ呼吸をするのだが、流石に砂の中では出来ない。海面まで浮かび顔を出した。

「あーあ、こりゃひどい」

いつもなら海底まで見えるのだが、巣の一斉陥没で茶色く濁って全く見えない。いずれは、巣を壊すことを繰り返していれば今みたいに起きることは、わかっていた。何せあちらこちら壊していて今回がその中心に当たるところだからだ。だが

「大丈夫かしらあの旅人さん」

だがそれと、クラーケンも心配した。

「恐らく一斉に蟻が出るからどちらもいてほしんだけどね」

空は、青いが海は、黒かった。そして、視界には、島が見える。

2部より 第4幕「島に見える風景」(後書き)

次回「僕のたび」

ただ僕は、生きるために蟻を殺し、

ただ桜は、リユウキとの約束のために蟻を殺し、

そして、僕はついに蟻の女王に対峙する。

時同じくして、コクハは、宿にいた・・・

第5幕「太陽のない世界」

それではまた

2部より 第5幕「太陽のない世界」

「イテテテッ」

本当に何があつたかわからないが僕は、助かったみたいだ。ちょうど足場が崩れて、僕は、下の階に落ちて周りにいた蟻は、崩れてきた天井に潰され、はい終了。

さらにそう高くない高さから、足場と一緒に落ちたためほとんど無傷だ。だが、その衝撃のためか辺りの光ゴケが死滅して光が、全くなかった。

「我に道しるべとなるべく光をともせ」

魔法を使うことは、疲れるが暗くて何も見えないよりましだ。もし僕が、ここにいたら太陽のある外に出たがるかもしれない。

辺りを見ると体中の毛が逆立ちするような気持ちになった。辺り一面に卵がおかれて、中には還つてはいずれ回っている白い芋虫がいる。広さは、学校の体育館ぐらいだろうか。何匹か僕の存在気付いた大人の蟻がいるが、卵達の世話をし始め、今すぐ襲ってくる気配はなかった。

僕は、出来るだけ叫ばないようにするのが精一杯だ。暫く動けなくじつとして壁が、光だし辺りを照らした。

ここにいたらいずれ蟻に見つかる。僕は、今いる部屋を出た。

「気持ち悪い」

虫、昆虫は、嫌いではないが自分の顔より一回り大きい卵と腕ぐらの蟻が歩き回るのを見ると、思いもなかった。

早くここから抜けたかった。これ以上ここにいたら夢で蟻が出てきそうだ。

カサカサ、蟻が、どこからか卵をくわえて僕に気付いていないようにさっきの卵部屋に入った。すぐに卵を置いて出て来た。僕と鉢合わせだがこれといって興味がないかのように横を過ぎていった。

どうやら、この蟻は、自分のすること以外全くといっていいほど

興味がないようだ。また、卵をくわえて今いた部屋にということはこの蟻を追いかけていけば自然と女王のいるところまで連れていってもらうわけだ。僕は、ある程度間隔を開けてその蟻を追いかけた。

「はぁーこまったわー」

中で僕が、女王蟻のところまで行く手掛かりを見つけた時、海面で浮かんでいる人魚の桜は、困っていた。

今までにないほど巣が壊れたまでは良かったが、それに動揺した蟻は、今までにないほどの数が出て来た。

戦争なら最終決戦のところだ。だが頼みの綱のクラーケンが、数に翻弄されもう食べ切れないものや中には、逆に蟻達に囲まれて噛み切られているものさえいた。

さらに桜もこれといって蟻達を倒す方法がない。それに旅人も気になる。半ば強引に女王蟻の討伐に向かわせたが、ここで生き埋めになっては、なんか後味が悪い。現にこのようなことをしたのは、私なのだから・・・

「今ここに留まって、クラーケンを指揮するか、中にはいつて旅人を助け出すか・・・二者択一よね」

人魚が、知らない人のために助けたりすることは、少ない。けど、好きになった人のためには、身を粉にしてもがんばるそれが桜の考えた方だ。

それと付け加えておくが、桜は、クラーケンと一緒に蟻達と戦う気等さらさらしない。クラーケン達が、勝手に餌を食べるそのためのお膳立てをしているようなものだ。

バシャン、巨大な水しぶきを桜は、もろに浴び、桜は、驚いた。耳にエラみたいなものと口呼吸できる桜は、水の中でも外でも問題ないが、その水しぶきを上げたのがクラーケンのボス的な地位で仲間ないでは威張り散らし、中でも多くの餌を食べていた存在だったが、今では、全身に蟻が噛み付きたた防戦一方だ。中には、この海域から逃げたそうとするクラーケンもいるが、それを上回る海域が

ら蟻が集まっている。

「袋の中のネズミか」

そのネズミは、クラーケンだけではなく、桜も入る。

内陸には、一瞬にたくさんの下等な魔物を操るものもいるそうだが、今の私には出来ない。

巢の大規模な陥没で発生した砂煙は、大分落ち着いたが再び大量の蟻の行進で濁り出した。

「綺麗な海が・・・」

その原因の半分が自分なのだが・・・

「仕方がない。クラーケンも旅人も助けるか」

桜は、歌い出した。よくお母さんが、自分の子供をあやして寝させる歌だ。だがもうかなり昔の歌なのでそれが何とう曲なのかわからない。ただ、桜の歌が、聞こえる範囲の魔物、生き物は、次々に活動をやめ急に寝始めた。

そして、海が静かになった。海面には、力を失ったように浮かんでいる蟻が、ごまんといる。別に気を失っているわけではないが、ただ眠くて寝ているようだ。

「さて行きますか」

桜が、歌い終わったときは、寝ている蟻達で浮島を形成した。中央は、押し潰されて死んでいるかもしれない。

桜は、海に飛び込み僕を探し始めた。もし行き埋めならば即死で、仮に海に漂っていたら、もう40分以上立っているからドゼエモンだろう。だけど桜は、僕を探した。面影が、リュウキに似ていたからだ。

僕は、驚きを隠しながら蟻の巢を歩き続けた。隠れながら進んだが、卵をくわえた蟻にすれ違った。だが、明らかに僕が侵入者に気付いているのかわからないのか、それとも畏なのか、蟻に攻撃することもなく、されることもなく、戦闘無しで別の部屋についた。

僕は、部屋にはいるなり、すぐに部屋から出た。中には、他のと

比べものにならないくらい大きな蟻が、いた。僕は、直感で女王蟻だと思った。恐る恐る部屋を覗き込むと複数の蟻が、女王を囲みお尻から卵をもらい部屋から出ていく。この時、僕の横を通り抜けていくが気にならないようだ。

トスツ、後ろになんかたたかれた感じがした。

「うわっ！」

驚いて、部屋には入り込んだ。叩いたのは、どうやら卵を運んでいる蟻のようだ。

「びつくりした」

ガサガサ、それにさらに驚いたのは、女王蟻のほうだ。蟻が、叫んだ。急に辺りが慌ただしくなる。本来なら決してはいることはない、蟻の部屋に人が、入り込んだ。驚かないわけがない。何匹が一斉に通って来た。普通に考えるなら親衛隊と呼ばれるものだ。数は、5匹少なくとも多くない数だ。さっきの大群を相手にするよりかなりました。

「さーで、どうくる？」

相手が、自分より弱いのがわかると何だか楽しくなってきた。右にナイフを抜いて構えた。パスツ、急に力が抜けてた。なんか電気が走ったように痺れる。

- もしかして、昨日の毒がまだ抜け切ってない？ -

蟻達は、ナイフを見て急に身構えたがナイフを落としたのを見て、襲って来た。

僕は、右手が痺れてすぐには歩けない。

「来るなッ」

魔石が、光出した。

見えないなにかが、同心円状に広がり蟻の触角や胴体中には、顔を切り落とし、壁に当たり暗くなった。

「もしかして」

僕は、ペンダントを取り出すと緑色の風を使うときの光を帯びている。つまり、風の魔法を使えるわけだ。僕が、新たな魔法を使う

には、使える人から教わるか、自分で編み出すかの二つだ。教わるには、コードとイントネーションが必要だが自分で編み出した場合は、それをいらない。しかし、我流故に教わって使うと教わるよりかなり体力を無駄にする。僕は、そのことを思いだし、すぐに左手でナイフを持ち、唱えた。

「我に道しるべとなるべく光をともせ」

ペンダントが、光だしその光を浴びた蟻に向かってナイフを切り付けた。目の前に動く蟻が、いなくなつた後、壁全体の光ゴケが、光始めた。

どんなときも油断大敵で冷静を保てなければ負ける。女王蟻は、もう姿がない。

「逃げたのか？仲間を置いて・・・」

僕は、それが信じられない。この蟻の世界の上に君臨して、かつ自分の生んだ子供達を置いてなんか・・・だが、所詮蟻だ。時分の命が、惜しくて逃げたに違いない。僕は、さらに巢の奥を目指した。ここからは、どの蟻もが、僕に会ったびに襲ってくる。時分の役割しかしらない、この蟻にとって侵入者を倒すことが、役割なのだろう。蟻を次々に倒し続けた。

ようやく女王蟻を追い詰めた。蟻は、もうこの先が、ないのがわかるのに奥に急ぐ、僕は、いつでも思えば倒せるので後を追ってみた。

その頃コクハは、

「お支払いは、あなたの飼い主が、見つかるまで待ってもらって構いませんよ」

「いえ、後で足りない困るもので」

「あなた一人ですので割引しますよ」

「いいえ、延長料が嵩むと後先大変になりますので」

外から見れば、普通では考えられない光景が広がっている。

机の上には、町に2、3枚しか出回らないという1金貨（100

0 銀) が、置いてあり。都心部ならすぐにお釣りを支払うのだろうが、ここは、都市から離れた田舎、普通なら2、3 年分も部屋を借りられるかもしれない、困るホテルマン。普通ならば、偽物と疑うのだが、その持ってきたお客様(?) の羽が、どす黒く染まっている。おそらくどこかで帰り血を浴びたのだろうか? だが、このホテルマンは、その理由がわかってる。

ホテルの外が、騒がしい。それもそのはずだ。目の前にいるお客様が、この周りにいるありったけの魔物を倒し、到底一人で回収出来ないで町の人達に頼んで回収している。また、その魔物を倒した、報酬とその魔物の皮などの売る権利をギルドに渡し、その代金なのだ。そのため、この町にいる漁師から子供まで森に入っては、魔物を持ち帰り、ギルドに売りさばいている。

「あと1 週間分払うからさ。」

高級のスイートルームを貸したとしてもお釣りを払えない。

「1 週間とは言わずに1 年間でも」

「私は、そんなに泊まらないけど」

お金を払ってもらうのは、結構なことなのだが、お釣りが、払えませんなどいったら、とんだ笑いぐさだ。

「それが。」

「早くお釣り」

どうやら、お客も自分の立場を理解しているようだ。それを面白がって今こうしているのだろう。それにしても今日の午前中に出ていって、午後の3 時ごろに帰ってこんなに稼ぐなんて普通では考えられない。

以前旅をしていた身では、自分も早く森にいつて狩りに行きたかった。

「早く。」

「……ッ!!」 - 助けて -

その頃ギルドでは、

「あー忙しい」

この世には、悪いこともあれば良いこともある。人生塞翁が馬と言われるゆえんだ。

「はいっこれ」

漁師の手には、物凄い量の魔物の肉と皮だ。

「あー並べといてくれ」

「お金払ってくれや」

「悪いが、今これらを持っていく、業者に電話するから、ほらそこに置いて」

「後でしっかり払ってくださいね」

「勿論だ。アーもしもし、こちら翡翠村の・・・あっそうそう」

「お互い忙しいや」と漁師は、出ていった。

「じゃお願いしますね」

いきなり、血に染まった。カラスが、来たかと思うと「すぐそこに魔物の死骸を買わないか？」と話を持ち掛けられ、そこにいつてみると物凄い数の魔物が、息絶えていた。他にもこの山があり、その権利を売ると持ち掛けられ、もしすべてを売ったならと考えたらすぐに大事にしていた1金貨を渡した。そしたらこの有様だ。腐らすと価値が、下がるから町人全員に協力を頼んだ。

そして、今かなり忙しい。買い取りで忙しいのは、初めてだ。今のうちに出来るだけ働かないと今度いつたくさん売れるからわからない。

「ウイース、今いいですか？」

別の漁師がたくさん毛皮を抱えてやって来た。

「あーいらっしゃい」

また、お客だ。ここに待っているだけで、商品の仲介でお金が、もらえる。ホントに楽だ。それにこれを全部売ればおそらく金華5、6枚に相当する。確かにカラスから金貨1枚でいい買い物をした。

その頃桜は、

「あーあの旅人どこまで行ったー」

今までのすぐ地下までしか巣がないと思ってたら2層3層に作られていてすぐ上は、海に水没していたが地下は、全くといっていいほど無傷だ。

「今まで女王が死なない謎が、やっと解けた」

バンッ、壁を殴るとヒビが入り、天井に達して崩れた。

「えっウソッ!!」

今まで無傷で海水を侵入させたことがない地下2階が、水没した。

その頃僕は、

僕は、やっと女王蟻を行き止まりまで追い詰めた。さっきの風の模倣で触覚の片方を切り落としたみたいだ。

ダーンッ、ガラガラ、大きな揺れだ。もしかして、上の階で崩れたのか・・・もしそうなら急がないと僕は、今度こそ生き埋めに「ウワッ」

女王蟻は、急に僕を押し倒した。急な反撃で僕は、そのまま後ろに倒れた。

「イタッ」

頭をぶつけは、しなかったが、背中から倒れた。蟻は、そのまま逃げた。どうやら僕を倒す気はさらさらなく、ただ逃げるのが優先のようなのだ。僕は、このまま黙って逃がすわけにはいかない。すぐに立ち上がり追いかけた。

蟻は、全速力で（思っていたより早い）目の前の道を曲がり、僕が曲がった頃には、姿を消した。

一直線の道なのでもう先に行ったとは、思えない。おそらくどこかの部屋に入ったらしい。もうこれ以上、蟻との鬼ごっこは、ごめんだ。少しでも早く抜け出したい。だから、もう次あったときが、最後だ。

手当たり次第に部屋を見たが、何もなし。予想するにどうやら兵隊蟻が常駐しているようだ、姿がない。おそらく、さっきからの

自信だと思っただが、物的な証拠がないうえ、ここの部屋が何なのかわからない。トスツ、声を上げて振り向くとそこに何か餌を加えた蟻が僕にぶつかつたみたいだ。その蟻は、僕に何も恐れも謝りもしないで僕が次に入ろうとした部屋に入った。

その部屋は、さっき見た蟻の卵よりも2、3割大きなものが転がっている。そして、さっき見た、女王蟻より少し小さな蟻達が集まっている。僕は、直感でこの巢の女王蟻の集まりだと思った。このすべてを倒さなければならない。それが、僕の使命でここに来た理由だ。僕は、左手でナイフを取り出した。今まで何ももってないにも関わらず逃げ出した。だが、この部屋に來ると女王蟻の雰囲気、変わった。

1匹の片方の触角しかない女王蟻が、僕の前に達その後ろにまだ若い女王がいる。もし彼等が、地上に進出したらとんでもないことになる。だから、僕がそれを止める。

蟻は、なにか僕に言っているのだろうか、声が小さくて聞こえない。例え聞こえたとしても・・・いや、僕は、人で目の前にいる女王は、蟻だ。お互いに共存の道はない、決してそれは、前の村で見たトカゲの生物と同じだ。

「だからなんだ？何を言っているのかわからない」

僕は、そう言つと急に態度を変えて、飛び込んで来た。

「同じ手は、引つ掛からないよ」

ナイフを蟻の頭に目掛けて振り下ろす、しかし、固くて弾かれた。今まで僕のナイフをはじいたものはない。蟻は、少し怯んだが戦う気は、ありさすが女王の風格だ。

「疲れたよ」

僕は、そういいながらナイフを横に振り、触角を完全に切り落とした。蟻は、もがいた。人間でいうならほとんどの器官を失つたのに等しい。僕は、すぐにナイフを蟻の口に向かって刺し、ナイフを振り上げた。思ったより軽く蟻の顔が裂け、すぐに動かなくなった。他の新女王蟻も女王が倒れたのを目の当たりにして襲ってきた。僕

は、ナイフを蟻の頭を目掛けて切るとたやすく切れ、どうやら固い体を持つのは、女王蟻だけのようだ。3、4体倒したところで、残る蟻達は僕が、出口の前に陣取ったため蟻達は、ただ身を寄せ合って震えている。

「もし君達が、人間だったら見逃すけどね」

僕は、蟻に歩み寄りナイフを振り回し、この部屋にいるすべての蟻達を二度と動けないようにした。

「やっともうこれで蟻を見なくてすむ」

一人つぶやいた。他の蟻達は、決して繁殖能力を持たず、2、3ヶ月すれば1匹もいなくなるだろう。

僕は、部屋を出た。別の蟻が、魚みたいな餌を加えてすれ違った。もし僕なら女王蟻を殺されたのを見たら驚き、今すれ違った僕を追い掛けて殺すだろう。背後から襲われるかもしれないので餌を加えてきた蟻も倒すことにした。

蟻は、顔が裂けて、動かなくなった女王蟻の口に一生懸命餌を押し込んでいる。普通なら死んでいるとわかるのだがこの蟻は、そのことがわからないらしい。少しづつ少しづつ餌を押し込んでいる。

僕は、これ以上見ていられないのでこの場を後にした。

さて、どうやって戻るか、それが、今僕が考えなければいけないことだ。出口がわからない上に例え出たとしても外は、海の中だ、人魚に運んでもらえなければゲームオーバーだ。ボスを倒したのにそれだけは、避けたい。それにさっきからの近く変動の地震も気になる。だから長々と探しているわけにもいかない。たまに蟻を見かけるのだが出口を教えてもらう以前に言葉が伝わらない。

「さて、どうしようかな？」

その頃桜は、パート2

「あーもうどこに行ったー」

桜は、延々と地下の大迷宮を旅人に会うためにさまよっている。かれこれ、2時間近く太陽ない世界にいる。壁を壊しながら次々に

部屋が海水に沈む。

「全く」

桜が床を殴ると海底に引き込まれた。

「何これ」

だが、この経験は、初めてではない。

「もしかしてまだ下の階があるの？」

桜は、流れに身を任せて流れることにした。しかし、あることに気がついた。

「真っ暗だったら見えないけどどうしよう」

今まで、驚異の視力で微かに見えたがさすがにこれ以上深いと見えない。ちなみに今の桜は、髪の毛程度しか目を開いていない。

中は、思っていたより見えた。桜の視力が、ものすごくいいわけではない。蟻の死骸に光ゴケが寄生して微かに光って辺りが、見えるわけだ。この光ゴケは、自然に発生したのかそれとも蟻同様に人間の手によって作られたのかわからないけど驚異的な生命力は、あるみたいだ。

「真っ暗じゃなくてよかった」ところで旅人はどこにいるのよ」

そんでもって僕は、

再び洞窟（迷宮）が揺れた。それもあまり遠くないところだ。この洞窟も長くは、もたないかもしれない。出口が、見つからないから酸欠か、崩れて圧迫死になっってしまう。

「ハアツ」何でこうなっちゃうんだろ」

それとも僕は、桜に騙された。僕に蟻を倒させておいて自分は、それをただ見物しているだけかも？実は、蟻と人魚に協定みたいなものがあって、僕は、蟻の餌で運ばれて来た？

でももしそうだとしたら、魔法を禁止しないで、武器ナイフの使用も禁止するはずだ。そもそも町の人に頼まないで旅人の僕に蟻退治に向かわせることもおかしい。今思うと、人魚のすべてが怪しく思えた。ザーツ、水が、流れる音がする。目の前の道の光が次々に消えて

いる。光ゴケになにかあったみたいだ。

「我に道しるべとなるべく光をとらせ」

周りが、真つ暗になっても僕の周りだけ光が点る。これでよしと思つたのもつかの間目の前から水が、流れて来た。

「圧死より先に水死かな」

僕は、ボソツと話した。だが、それは、誰にも聞こえない。

そして、僕は、水の流れるほうに向かって歩いた。外から海水が流れてくるのだからそこが、入口だと思つたからだ。

そのさきは、考えない。というより考えられないくらい疲れた。そういえば、せめて女王蟻の体だけでももって帰るべきだと思えた。けどもどこからどのように来たのか覚えてない。

「ハア―疲れた。骨折り損のくたびれ儲け」

とぶつくさいいながら歩いた。

ザア、ザア、始めるぶしほどの深さしかない深さが、膝ほどに達した。時計を見て後どれくらい生き残れるのか計ろうかと思つたが、最初から計ろうとしなかったので諦めた。

そしてコクハは、

「すみません。お客様！すぐにお釣りが、ご用意できませんのでお支払いは、明日まで待ってもらえませんか」

「ないのは、仕方ないとしてどうやって払うの」

「銀行に口座がありますのでそこで・・・」

「銀行といつてももう閉まっているよ」

「えっ・・・あっ！」

時計は、もう5時を指している。この村の銀行の営業時間は、午後の5時きっかりで閉まる。

「どうするの？」

どうやらこのホテルマンは、カラスに2時間近くいじめられているようだ。

「申し訳ございません」

「どうするの？」

「もつ申し訳ございません。今すぐにお釣りを用意できないので少々お待ちしていただませんか？」

とうとうホテルマンは、頭を床に付けて土下座を始めた。コクハは、いくらかこのようなことを予想していたが、急に土下座するなど予想もしなかった。

「お釣りは、用意できないのでそのかわりなのですが、お客様の追加の宿泊費を免除しますので、それとお連れの方が見つかるまで特別に無料にしますので・・・」

ここまで来ると、コクハも少し罪圧感が残った、ちなみに今このホテルにいるお客は、コクハしかいなかった。

「仕方ないカー頭を上げるカー」

ホテルマンは、コクハの言葉で頭を上げた。

「そうですか、実は、私も持ち合わせが少なくて」

羽から、いくらか銀銀貨をだした。つまり、追加料には、届かないが本来予定通り町を出るまでに十分な額を出した。

コクハは、この数時間この交渉を引き出すために長々と話続けていたわけだ。

ホテルマンは、後悔したが、これ以上、コクハと話続けると今度は、無料にしかねないのでとりあえず安堵の顔を見せた。

コクハも納得して部屋に戻った。

ホテルマンは、連れが生き埋めになっているのにこんなに元気なことに気にかかった。

「あの連れの方は」

だがコクハの姿は、もういない。

「あの鳥は、一体なんだんだ」

そして僕は、

僕は、疲れた上に完全に詰みだ。水死しなくなかった僕は、出来るだけ上を目指し、水が流れて来るほうに向かって歩き続けた。そ

して一時は、腰の高さまで深くなつたが次第に水が、流れてない方向に向かい多分さつきより高い位置ですぐには、死ななくてすむところについた。だけどそのかわりかなり疲れた。歩き続けたこともあるがそれよりもこの先が、また水に浸かっている。どれくらい深いか気になつて進んだが、すぐに深く頭まで濡れてしまった。行き止まり、袋小路、袋の鼠・・・表現は、いろいろあるがどの言葉も自分にあてはまりそれが、僕をさらに疲れさせる。

もし、僕が助かるには、水中でも呼吸をする魔法をひらめくか、それともこの上すぐが地上かだ。

「つつかれた」

ひらめきたいのだが、魔法の乱用と食事を全くしていないことがわざわいだ。そもそも閃きたいということが閃きにくくしているようなものだ。

「詰めか」

僕は、大の字になつて床になつてころがる。

「光よ消えよ・・・」

辺りが、真つ暗で何も見えなくなる。それと同時に僕は、目を閉じた。

そして、少しの間寝た。

ドーンッ、ガラガラ、ミシッ

僕は、すぐに身を起こした。すぐに声を出さず辺りを警戒した。

こここのそう長くないことを思い出した。振動で水面が、波を立てている。周りは、崩れてなく無事のようなうだ。

「あれっ？」

僕は、魔石の光を全く使っていないのに辺りが、見える。光ゴケの光でもないようだ。

魔法でも覚醒したかな僕は、いや辺りの壁から光が出ている。どうやらこれが、光ゴケの性質かもしれない。魔法は、覚醒しないが僕が助かるには、あと人魚が助けに来てくれることだ。だが、あの人魚が、ここまでピンポイントに来てくれるとは、到底考えられない

い。

「イタ……ッ!」

水からなにか出るかと思うと叫び声に近い声がした。

「あっ」

「探したのよ」

「えっ」

来るはずもない人魚が目の前にいた。

「全く前にみたいに水の中でぶかぶか浮いているかと思えば、こんなとこにいるなんてね」

「あっうん」

暗くて顔が、見えないが人魚みたいだ。

「我に道しるべとなるべく光をともせ」

僕は、人魚の顔がみたいくて明かりを付けた。

「きや眩しい」

人魚は、僕を摩石ごと吹き飛ばした。僕は、吹き飛ばされて床にたたき落とされた。その衝撃で少し意識が、遠退いて摩石の光が消えた。

「急に光を照らさないでよ。眩しいじゃない」

桜は、怒りながら話したが、正直僕は手加減をしてほしいところからそう思った。

「少し手加減して」

桜から驚異な殺気を感じた。

「なんか言った？」

僕は、この時この人魚に対して決して勝てないことを悟った。

「いえなんでも」

「あらそう。さて、蟻も全滅しただろうし私たちもここから出ますか」

桜は、ここ数十年近く、蟻に戦い続けてようやく終わったにもかかわらずそっけなく話し、そのことが、僕に気にかかった。

「あまり嬉しくなさそうですね」

「そんなことない・・・よ」

桜は、寂し声で答えた。そして、「帰ろうか」と笑いながら答え、心の中で「いつの日かきつと戻って来てくれる彼がいないから」と答えた。

「ところでここまで来る道を覚えていますか？」

僕は、水の中で長く呼吸が出来ない。

「覚えてなんかないよ。一樣あなたも連れていくけど手探りで出口探すからね」

僕は、頭から血が引いた。

「えつと僕は、水の中にそう長く潜れないから、出来ればここに待っている」

「つまり私は、一回外に出たらまたここまで戻らないと行けないわけ？」

「出来れば・・・」

僕は、申し訳なさそうにいった。

「いやよ。ここを出たとしてまた、ここにも度度つて来られる保証ないのよ。もしかしたら、次にここに戻れたときはあなたは、おじいさんかもよ」

「えっ？」

「だから、早く深呼吸しなさい」

「もう行くの」

「当たり前でしょ。いつまでもここにいたくないでしょ」

桜は、そういうと僕の手を力強く引つ張り海に飛び込んだ。それから物凄い力で引つ張られている。僕は、それから間もなくして意識を失った。出来るだけ早く水上に着くことを祈りながら・・・

僕が、桜に引つ張られること数分して宿のバルコニーにいたコクハが、浜辺を目指して空へ飛んだ。

何か「歌」が聞こえる。それ以外全く聞こえない。何も見えない。目を開けているのかどこに寝ているのかさえわからない。ただなにも感じない。夢でないこともわかる。走馬灯でもない。何時までも何も感じない。何も考えられない。

僕は、これが死後の世界かもしれないと思うようになったのは、これからずっと先のことだ。

「！」

口になにか嫌な感触がする。肺から何かが込み上げるような感覚だ。

急にからだ全体が、重くなった。今までが宙に浮かんでいたのが重力に引き攣られたみたいだ。周りが、うるさく煩わしい。

ここで僕は、何とかあの蟻の巣から抜け出したことがわかった。それがわかると体全身の痛み伝わる。

目をうつすら声のするほうに向けると、そこには、人魚とカラスが戦っているのが見えた。僕は、異様な雰囲気なので驚きすぐに起き上がると、そこには、コクハが桜に対してしきりに足で攻撃していた。

「止めさせなきゃ」途端に僕は、体を起こした。コクハが、宙に飛び、桜の頭目掛けて後急降下した。

「やめて」

思うように声がでない。桜は、まともによけられなく直撃だ。ソシテ、よろめきながら海に飛び込んだ。

「待って」

ザーッ、波が僕の声を掻き消した。

コクハが、下りて来た。

「ふーっ、やっといったか」

「コクハ！桜に何するんだ！」

僕は、怒鳴った。

「やっと起きたカー私は、魔物を蹴散らしただけカー」

「桜違う。桜は、魔物なんかじゃない！」

「あの魔物は、頭は、人間でも体はまるであしかだ。人魚ですらないカー」

「違う違うちがうちガウ・・・魔物でも、あしかの出来損ないでもない！」

「君があの人魚にどんな感情があるかわからないけど君は、あの魔物と一緒にいちやダメカー」

「なんで」

「それが現実カー歩けるカーホテルに戻るカーさお早く」

コクハが、ホテルに向かって飛び去った。

僕は、しばらくして立ち上がった。

「御礼をいいそこねたな」

そう呟いてコクハの後を追う。足元の砂浜が、少し濡れていたが波がすべて流し去った。

翌日、旅の支度をし、宿を後にした。辺りが騒がしい。

「辺りが、騒がしいみたいだけどどうしたのですか？」

「いや、それが見たことがない魔物が出沒しまして」

「どんなのですか？」

「ああ、あれは、出来損ないの人魚みたいなものだ」

「！！ッ」

「それもかなり数でどうやら地下研究所で作られたみたいなんだ」

僕とコクハは、顔を見合わせた。

「どこにいるカー？」

「数は、わからない。だけど何体かギルドに行けばわかるかも」

「わかりました。それと代金は」

「それならそのカラスさんからいただきました」

「コクハ、お金持ってんの？」

コクハは、僕が振り向くより先に宿から出た。

「待つてよ。コクハ」

「ご利用ありがとうございました。またのお越しを」

僕は、宿をあとにした。外には、仕留められた桜に会う前に追いかけていた、見たことがない魔物の死体が、漁師によって運ばれていた。どうやら桜のことではないようだ。

僕は、安堵の顔をし、それにたいしコクハは、青ざめた。

「地下施設にいたやつカー」

「そうみたいだね」

「ヤバイカー君が、封印していた扉を壊し、天敵の蟻を全滅したから出て来たカー」

その言葉を聞いて僕も青ざめた。

「早くこの町から出よう」

「当たり前カー」

案の定、ギルドの前では、魔物の山が作られていた。

「すごいな」

「・・・・・・」

コクハは、何故か目を合わせなかった。

「よおお、旅人あんたらのおかげで儲かったよ」

「あっええ」

僕は、軽く頭を下げた。何のことかさっぱりわからない。コクハは、あいかわらず視線を合わせようとしない。

「あとそれと森に気をつけろよ」

「えっ？」

「未確認の新種の魔物が、出没しているから気をつけろ」

「森がダメならどこを通ればいいのカー？」

「浜辺だ。奴ら夜行性で日のあるときは、物影が少ない浜辺には、いないらしい」

「わかりました」

僕達は、少し遠回りだが、海に沿って別の村を目指した。

今日も空は、海に近い色だ。

旅人を見送る町人だけではなく海からもいた。人魚の桜だ。

「そっかあ、あれからもう30年近くか・・・彼には、愛する人が出来てもう子供もいる・・・私も別の世界に行こう。そして、素敵な彼を見つけよう」

明るくいったが、目から落ちる雫は止まることはなかった。

「さーで、どこに行こうかな」

桜は、この大きな島の根っこから旅立った。

アイランド・ルーツ 人魚のいた町

P's 気がつけば、桜のブレスレットがなくなっていた。桜のところに届いていればいいのだけど・・・

2部より 第5幕「太陽のない世界」(後書き)

1部書くのに3年近くかかり、2部は、4ヶ月かかりました。でも投稿するのに2ヶ月かかり今にいたります。今私は、大学生なのですが、工学部で実験のレポートなど追われ、今も試験前で次回作を書いているところではありませんが、中途半端は嫌いなので時間を見つけては投稿しました。

気まぐれで「次回作」を書いて見ましたが書かないほうが良かったかな？アニメのように短く文書をまとめるのが下手だと痛感しました。

また、時間を見つけては次回作を囲うかと思っています。

次回「終幕」

「僕」は、全く出てきませんがよろしく

それではまた

2部より 終幕

僕が生まれた村にて

「ねえ、わたくしが書いた手紙知らない？」

「見てないわね」

お母さんが答えた。

「お兄ちゃんの誕生日プレゼントの手紙なのに」

「誰の？」

わたくしには、お兄ちゃんが4人いる。

「先週の」

今月に兄弟で唯一旅に出たお兄ちゃんことだ。この作品の僕にあたる。

「何で今更」

「だって昨日出来たばかりなんだもん」

新たにお守りが出来たので送ろうとした。

「それに手紙をどうやって渡すつもり？」

「それは・・・」

「移動し続けるものに送るなんて無理よ」

わたくしは、考えた。

「また魔法でパパッと渡して来てよ」

「いやよ。めんどくさい。それに手紙は？」

「見つからない」

「もう一度探してきなさい」

「探したよ」

「あなたもあと3年後に15才なんだからしっかりしなさい」
「うゝ」

ガラン、家の裏ドアが開いた。

「ただいま」

お父さんが畑仕事から帰って来た。

「おかえりなさい」

「ふ・疲れた」

そういうと、机の上にある新聞を読み始めた。家は、何故か新聞を3紙もとっている。煙草もお酒もギャンブルもしないけど新聞を読むそれが父さんの趣味であり、癖みたいなものだ。

「ね・わたくしの昨日書いた手紙知らない？」

「知らないな」

眉の上が、少し動いた。お父さんは、嘘をつくと眉の上が少し動く。

「眉の上が動いた」

「知らないものは、しらない。つ・・・」

机の上にとでもいいそうになったのかな？

「なんか言った」

「何も言っていない。それに手紙のことなどしらない。それ以前に部屋にはいつてないな」

「間違えて捨てたかもしくは、もう送ったんじゃないのか？」

「捨てたりしない。それにまだお守りもまだ家にある」

お母さんの言葉にわたくしは、頭にきた。

「ならどんなお守りなの？」

「もつてくる」

わたくしは、自分の部屋に駆け込んだ。

「ねえあなた、娘の部屋にはいったの？」

「お茶」

「ねえあなた！」

「お茶」

「わかりました」

お父さんは、新聞を見ながら、「チーターの毛皮の値段が、上がったんだ」とか、ぶつくさ言っている。

「はい、とうぞ」

机の上に熱いお茶が置かれた。

「出来れば冷たいほうがいいんだけど」

「何言ってるの、季節は、まだ冬よ」

「そうでした。ありがとう」

タツタツタツ、わたくしは、リビングに戻った。

「大変大変、お守りもない」

「それは、大変ねえ、せつかく作つたのに」

「ねえお父さん、知らない？」

「知らないな」

「う」

「もう送つたんじゃないのか？今日の朝は、見たのか？」

わたくしは、首を横に降った。

「寝坊したからね」

お母さんが、一言付け加えた。

「どうしよう」

「安心しなさい。もし送つたとして運がよければ届いているし、そうでもなければ、宛先不明で家に帰ってくるか、探していたらそのうちでくるさ」

わたくしは、納得できないまま部屋に戻った。

「ねえあなた本当に知らないの？」

お母さんの問いかけに対しお父さんは、お茶を飲んでいた。

「アツ」

お母さんも見兼ねて娘の部屋に向かった。

「あゝ入らないで」と娘の叫び声に近い声が聞こえる。

「さあね」

誰も自分を除いて聞こえてない。熱いお茶を飲み干しながら、お父さんは、壁にかけている時計をチラッと見た。

「・・・いま2時5分カ」

とボソツと言った。お父さんのポケットに入っている石が、少し赤く輝いている。

その日、僕とコクハは、翡翠村についた。
2章 終わり

2部より 終幕（後書き）

そのうち次回作書きます。

そのときはまた読んでください。

それではまた

2部 補足「桜とコクハ」（前書き）

2部5幕で主人公の僕が、気絶して倒れているとき桜とコクハの会話です。

あの倒した蟻はいつたいたんだったのか？
なぜリュウキが桜をだまして離れたのか？
なぜコクハが桜を攻撃したのか？
ブレスレットの行くへは？

読めばわかる（たぶん）

2部 補足「桜とコクハ」

翡翠村からそう離れない海岸にて、宿の2階の部屋のバルコニーからカラスが飛び立ったとき

「重い -」

人魚の桜にとって仕事後の労働は体に一番応えた。手には、15歳くらいの少年が、引きずられている。その少年は、溺れて海水を飲んだせいか、息をしていない。

「そつ、れー」

握力が、水中で人の数倍の握力がある人魚の桜でも地上となれば足（？）に力が入らないため人一人運ぶのにてこずる。

「生きてる - ?」

時折振り返つては、旅人に声をかけるが返事がこない。そろそろ蘇生をしないと旅人は、ドザエモンになる。

「オーイ、生きてる - ?」

返事がない。

「水飲みこんでるか -、人口呼吸しますか - でも、力加減難しいんだよね」

握力以外にも肺活量も人を遙かに越える、桜は、以前にも今みたいな事があり、焦ったあまり呼吸が多すぎて人一人殺しそうになったことがある。だが、このまま考えていると旅人は、本当にやばそうだ。

「仕方ない」

桜が、決心して、人口呼吸することにした。息を軽く吸い込むと旅人の口に向かって吹き込んだ。だが

「起きてよ -」

いくらなんでも弱すぎだ。もし起きていたら肺所か口先に軽く風が吹いた程度だ。桜は、胸に耳を当てると、心臓の音がしない。

「もしかして、心臓も止まってる」

気付くのが少し遅いかもれないが、桜をあせらすのに十分だ。

「あゝもう」

桜は、深呼吸して、旅人に人口呼吸することにした。

「やめろ」

声の後すぐに羽の音がして、桜が振り向くとそこには、一羽の力ラスがいた。

「何このカラス、今忙しの後にして」

「落ち着け！また、桜は、人を殺す気か？」

「あんたなんかと討論する暇ないの！この旅人の命がかかっているんだから」

「なら息の吸い過ぎだ。さっき半分でいい。そうでなければ肺を破裂させるぞ！！」

桜は、そのカラスに言われたとおりにさっきより手加減して人口呼吸した。

旅人は、むせながら海水を吐き出した。そして、ゆっくりと呼吸を始めた。

「よかった」

桜に安堵の顔をした。

「やれば出来るのに・・・」

カラスは、呟いた。桜は、両手を重ねて旅人にあてた。

「次は、何をする気だ？」

「心臓マッサージよ。心臓が止まっているもの」

「呼吸しているのに心臓は止まるのか？」

桜は、あわてて旅人の胸に耳をあてた。波の音しかない。

「聞こえないよ」

「首の頸動脈を触ってみろ」

「ここ？」

桜は、喉仏を指した。

「違っここだ」

「えっ？どこよ」

「ここだ」

「？」

「だから、ここだ」

試行錯誤しながらようやく旅人が、生きていることがわかった。

「さて、これからどうするべきかだ」

「この子起きないよ？」

桜は、不安な顔をして聞いた。

「おそらく魔法の使いすぎだろう。魔法を使う分からだを休めないといけないからな、それに」

「それに」

「なんでもない」

「？」

「人魚さん、息子をご迷惑おかけしました。おかげで我が子が無事帰って来られました」

カラスは、頭を下げて御礼の仕種をした。

「何言ってるのあなたは、カラスよ。この子の親な訳無い」

桜は、目を丸くして言った。カラスは、自分の身を見た。

「ああそうか」

「何が？」

「なんでもないカー」

カラスは、語尾に「カー」をいれた。

「あんた、一体何物？」

桜は、カラスに疑いをもった。

「単なるお守りロボットのカラスカー」

「そんなわけない。ロボットが、語尾の「カー」を忘れる訳無い」

「急なときは、会話を迅速にするために省略するカー」

「都合のいいこと・・・もしあんたが、ロボットならロボットの証拠を見せなさいよ」

「内部構造は、企業ヒミツカー」

桜は、素手でカラスを掴もうとしたがカラスはたやすく飛んでかわした。

「本当に都合がいい体だな」

地を這う桜が、空から見下ろすカラスに悪態をいった。カラスは、桜から少しはなれたところに舞い降りた。

「まるで陸に上がった河童だな」

カラスは、小声でいった。桜は、波音で何を言ったのか聞き取れない。

「なんか言った？」

「何も言ってないカー」

「うそっトーンが、少し変わってる。うそついてるでしょ？」

桜は、地獄耳で耳が良かったなとカラスは、思い出したがもう遅い。

「これからどうするカー？」

「これから？私？」

「そうっ、桜のここでの仕事は、もう終わったカーこれからどうするカー」

「そーね。考えもしなかったわ。これからどうしようかな？」

「ここに居るといつても聞かないんだろっな」

桜は、単調なことを嫌うのは、このカラスは、十分に知っている。『そうだ。この旅人とまた旅でもしようかな』

カラスは、急に目付きを鋭くした。

「こいつと旅をして、一体なんの得がある？」

「えっ？だってここにいても退屈なだけだし、どこか遠くに行きたいし、それにリュウキにも会いたいし」

「だめだ。桜は、ここから離れてはいけない！」

カラスは、強い口調でいった。

「なんでよ？どこ行こうが、私の勝手じゃない」

「この村をどうする気だ？」

「ここ？いいじゃん別にこの村なんて私に関係ないし」

「は？何でこの付近の海は、周りに海に比べて魚が取れるか知ってるか？」

「あーあれでしょ。蟻の巣から出すフェロモンが、海に溶け出してそれで辺りの海から魚が集まって来るんですよ」

「知ってて自分のしたことがわかるのか？」

「もちろん。化け物退治」

「違う。蟻が全滅したということは、この海に周りの海から魚達が集まらなくなるんだぞ」

「そんな事今の私に関係ないよ・・・っ！何であんたがこの海の事知ってんのよ？巨大な蟻の巣があることは、私とこの旅人それにリュウキしか知らないはずよ。村人だってこの事は、知らないのに」

「そっそれは」

思いもしないツツコミにカラスが動揺した。

「それになんで私の名前を知っているのよ？バカカラスのくせに」

「私は、バカカラスではない。私の名前は、コクハだ」

「じゃ聞きますけど、何であなたは、私の名前を知っているのですか？それにこの海にいた蟻のことを知っているの？」

コクハは、少し考えていった。

「リュウキから聞いたから」

「あなたリュウキのことを知っているの？」

「桜のいうリュウキと私の知っているリュウキが、同じとは限らないがな」

「ねえねえ、今リュウキは、今どこにいるの？お姉さんに会えたの？」

カラスにコクハが、リュウキのことを知っていると聞くなり、急に桜の態度が変わった。

「姉さんには、会えた。だが気付くのが遅かった」

「今どこにいるの？」

「姉さんがいた村の近くに住んでいる。多分そこからはなれないと

思う」

「まさか、リュウキに私以外の変な女がいるんじゃないでしょうね？」

コクハは、すぐに答えようか迷った。

「そこに倒れている旅人がいるだろう」

コクハは、魔法の使い過ぎで倒れている15歳くらいの旅人を指した。

「うんそれが」

桜は、平然と答えた。どうやら勘は、鈍いらしい。

「だれかに似ているとは思わないのか？」

「そうね、リュウキに似ているような似ていないような。あつもしかして彼が、リュウキ？」

コクハは、呆れた。

「ハ、あほらしい。桜と別れたのは、もう30年近く前の話だよ。なのになんでまだ子供なのさ」

桜の顔が曇り出した。桜にとっては、最悪の結果になるからだ。

「もしかしてリュウキの従兄弟」

「こいつは、5人兄弟の4男だ」

「嘘よ。そんなはずない。そんな訳無い」

桜もいい加減に気付き始めた。

「仕方ないさ」

「嘘よ。リュウキが、私を置いて・・・誰だかわからない女と・・・」

「例えリュウキが、桜から離れなかったとしても君と結ばれる事はないよ」

「？」

桜は、コクハの意味がわからなく頭を傾けた。

「桜は、魔物でリュウキは、人間だ。決して結婚なんか出来やしない」

「愛があれば！」

「無理なのは無理、現に君は、歳を取らないのに対し、私は、もう45だよ」

「何言つてんのこのカラス？もしかして」

「私は、メカカラス」

「語尾に「カー」を忘れてるし」

コクハは、慌てた。

「そういう仕様カー」

「うそ」

桜は、体をバネのように縮ませ、戻ろうとする反動でコクハを捕まえた。

「はっ 離すカー」

「いやよ。あなたは、一体何もの？リュウキとは、どんな関係？」

コクハは、暴れたが桜の体が動かない。

「仕方ない。話すから離して」

「いやよ。たいていそう言つて何もいわないで逃げるのでしょ？」

「・・・」

コクハは、暫く黙つて考えた。そして、長い沈黙の中、波音だけが聞きこえた。

「久しぶり桜、私は、リュウキだよ。わかるか？今は、この子を見守るためにこんな姿だけどね」

「はあ？何言つてんの自分のことをロボットやコクハカーでしまいは、リュウキだよ？からかうのもいい加減に」

「本当だよ。君とあつたのは、砂浜に生えている桜の木下で最初は、珍しい木を言つたのに君は勘違いして自分の名前だとかいいはじめたのにな」

桜の言葉を遮つて、リュウキ（コクハ）は、話した。

「何で知っているの？リュウキは、そんな事も話したの？」

「そういえばもしかしたら、まだこのこのポケットの中に君にあげたブレスレットがあるはずだよ。探してみな」

桜は、リュウキに言われるがまま、旅人のポケットに手を突っ込

んだ。

「何もないわよ？」

「じゃ反対かもしれないな」

もしかしたら海に流されたかも？リュウキが付け加えた。

「あつた」

旅人のポケットからハゲタカを倒したて剥いでるときに手に入れた、人魚のブレスレットがあつた。”桜”と刻まれていた。

「もう戻ってこないと思ったのに・・・」

「確かそれは、この町に来る前の町で君とであつて1年目を記念してあげたものだったよね」

「何でそんな事も知って・るの・・・」

桜の言葉が、小さくなり途切れた。そこには、もうカラスの姿はなく、代わりに桜の見知らない男が立っていた。

「リュウキ？どうやって？」

「今の魔法は、かなり便利だね。ある魔石に自分の思う物体をあたかもそこにいるように存在することが出来るんだよ」

「えっ？」

魔法や魔石など聞き覚えのない言葉を言われ桜は、混乱した。

「親つてさ、木に立って見ると書くんだよ。だから、姿を変えてこの子を見守っているんだよ」

「この子つて、やっぱりあなたは、もう・・・」

桜の言葉が続かない。

「もう結婚したよ。子供も5人いるよ」

「嘘よ。そんなのある訳無い」

リュウキは、出来ればその事を言いたくはなかった。しかし、嘘を言い通す自信はなく、本当の事をいった。

「・・・・・・・・」

「なぜ、お姉さんに会ったらすぐここに帰るっていったじゃん」

リュウキは、桜が涙を流したのがわかった。

「君と別れてから考えたんだ。これからどうしようかとね。それで

やっぱり私は、君と旅を続けられないと思ったんだよ」

「なぜ？」

リュウキは、その理由が多分言っではいけない言葉とわかっていった。しかし、ここで言わないわけにはいかない。

「確か君は、移動サーカスの見世物だったね。そして、自由を得るためにサーカスの飼育員を殺した？違う？」

「そこであなたに会った」

「だけど私も自由になるために多くの人を殺し傷つけて来た。だから、君、桜のした行為をどうこう言う権利はあの時はなかった」

「じゃ今は？」

桜は、恐る恐る聞いた。

「君は、魔物だからだよ」

「っ!!」

桜は、言葉を失った。

「上半身は、人間そのものだけどしたは、明らかに魚、これから一緒に旅なんか出来ない。君は、ここでいつまでも蟻と戦い続けるし、例え一人では駄目だと気付いても人間嫌いだから、町の人には、絶対助けを求めないからね。いつまでもここからはなれないからね」

「.....」

「現に君は、息子が来るまで一人で戦っていたからね」

「なぜ？」

「んっ？」

「何故あなたは、変わってしまったの？私とあったときあなたは、魔物じゃないっていったじゃないの？」

「.....」

「私が、魔物じゃないからこの町まで一緒に旅をして着たんじゃないの.....なぜ？」

「.....若気のいたりさ」

桜は、泣き出した。

「仕方がないことだ。人と魔物は、合間入れない。それが、どんな

にも知識を持ったとしても」

桜は、泣き続ける中、リュウキは、しゃべり続けた。

「泣くな――！これからだ！これからどうする？？」

桜を思わず泣くのをやめた。

「・・・・・・・・」

「顔を上げて、ここから離れるんだ。そして、人のいない島に行け――！」

「えっ！？」

「だって君は、人殺しだ。もし仮に人なら場裁判で裁かれるが魔物は、焼却処分しかない。だからここから遠くへ」

「嫌よ。わたしは、この旅人と旅をしたいの！昔みたいなまだ行つたことがない世界に行きたいの！」

「なら一人で行け。息子を巻き込むな」

「何で行けないのよ」

「何故なら人と魔物は、決して交じらない。結婚できないからだ」
リュウキは、急に黒い羽に包まれたかと思うとカラスの姿になつて桜を攻撃した。

「何するのよ。やめて！」

「早く行け！息子が目覚める前に――！」

「止めさせなきゃ」途端に僕は、体を起こした。コクハが、宙に飛び、桜の頭目掛けて後急降下した。

「ギャ」

「コクハヤメテ」

息子が、虚ろな瞳でこちらになにか言っている。だがやめるわけにはいかない。

「最後だ」

「あつクソツ覚えてろ」

勝ち目がないと見た桜は、海に飛び込んだ。

「やめて」

僕は、思うように声がでない。桜は、まともによけられなく直撃

だ。ソシテ、よろめきながら海に飛び込んだ。

「待って」

ザーッ、波が僕の声を掻き消した。

コクハが、下りて来た。

「ふーっ、よし！ やつといったか」

「コクハ！ 桜に何するんだ！」

息子が一生懸命に体を起こしてこちらを見た。

「何で？」

かすれた声で聞いた。

僕は、怒鳴った。

「やっと起きたカー 私は、魔物を蹴散らしただけカー」

そして、「仕方がないこと・・・カー」と小声で付け加えた。

僕の家にて

「痛ッ」

「どうしたの」

妻が駆け寄って来た。手の甲から血が出ていた。どうやら桜に――
撃喰らったみたいだ。

「なんでもないよ。どこかで切った見たいだ」

「どこってどこよ？」

遠隔に召喚して、コクハをそれを自由に扱えさらにその視覚や聴覚など5
感を感じさらに、光や電波の類でもないからこの星の中であれば例
え室内でも地下でも制御できる。しかし、その物体のダメージは、
自分に降りかかる。現にコクハのダメージが、自分に帰って来た。

これが、どんな仕組みで動いているのかわからない。蛍光灯、テ
レビ、冷蔵庫・・・それら、同様に一体どんな構造でどんな仕組み
なのかわからないが十分使える。

「紙で切ったのかな？」

「早く塞がないと雑菌はいるよ」

「魔法で直してよ」

妻は、多くの種類の魔法を使うことが出来る。

「いやよ、面倒だし疲れる」

確かに、これくらいの傷を直すとなるとかなり厄介だ。

「わかった。救急箱どこだっけ？」

「取ってくるわ」

妻は、席を立ち救急箱を探した。

「ありがとう」

私は、部屋に残された。桜に厳しくいったつもりだけど思いは、届くだろうか？

「思いは、正しく伝わらない・・・か」

「何？」

「なんでもないよ」

私も、新聞を畳んで一緒に救急箱を探した。

そして、桜のたびが始まる。

2部 補足「桜とコクハ」（後書き）

僕が気絶していたときに聞いた歌は、走馬灯で聴いたのかもしれない。

続編は、完成のめどが立ち次第ブログで報告します。

3部 「ハイ・ノオウ 師と呼べる人」 (前書き)

久しぶりの投稿です。

お時間あればぜひ読んでください。

3部 「ハイ・ノウ 師と呼べる人」

今から、何世紀いや何十世紀先だかわからないくらい先の時代、人類は、何度も発展と滅びを繰り返した。そんな時代のお話・・・

僕は、逃亡兵であり、旅人である。

この世界では、僕が住む機械（物理学）の国と、魔法（化学）の国が、長い間、戦争していて、年齢が15歳から20歳の男の子は、徴兵で戦争に参加しないとイケない。15歳になって自分の生まれた村にいと半ば強制に戦場へと駆り出される。

しかし、戦争に行かなくてすむ方法がある。それは、簡単である。徴兵にきた軍人が来る前に逃げればいいのである。

わざわざ戦いたくない人を軍人にすることは、一苦労だし、国中を逃げ回る人を捕まえるほど、軍もヒマではない。ただある一定の場所に長くいると徴兵されるかもしれないが・・・

普通の町では、たいていの人が戦場に行き、行かない人を脱走兵とよぶ。しかし、僕の村では、脱走兵と呼ばないで旅人と呼んだ。だから、僕は、逃亡兵であり、旅人である。

今僕は、喋るカラスのコクハと一緒に国中を旅している。まだ始まったばかりだけど

「コクハ - 今どこ歩いているの？」

深い森の中を先に飛び回るカラスを旅人が、追い掛けている。

「何を言っているカー？それを決めるのは、君カー」

カラスは、語尾に「カー」を付け加えていった。

「えっ?! てつきり、先に飛ぶから道案内しているかと・・・」

「私は、ただ君が進むかなと思っただ道の先を飛んでいるに過ぎない

カー」

「そうなの・・・？」

旅人は、困惑した。

「今は、君の旅だから行き先は、君が決めるべきカー」

「そうだよね」

今まで無駄に歩いているようで少し疲れた。僕は、背中にリュックサックからGPSと地図を取り出した。これで今の位置と一番近い町までの距離がわかる。

「すぐに取り出せないと旅人失格カー」

「そんなことわかってるよ」

コクハは、僕のことを君や旅人と呼ぶ。それ以前に僕の名前を知っているかどうか知らない。

「あつたあつた」

鞆からGPSと地図を取り出した。GPSは、高性能のアンテナとソーラー・パネルが、着いているハイテクなものだ。周りに木がおおい繁つていても誤差の少なく、光がある限り電池切れがないスグレモノだ。

「ようやく見つけたみたいカー」

「コクハうるさい」

僕は、手慣れた作業でGPSに電源を入れるとその表示した数値から地図で今現在いる場所を見つけた。前にいた村から西へ3キロ歩いたところだ。

「これからの行き先は、決まったカー」

「今探しているところ！」

僕が、強くいうとコクハは、すねたように僕から離れた。これでも辺りを見回り始めたようだ。

「それにしてもどこへ行こう」

小声でつぶやいた。国中を回ろうと考えたが、どのように進むかは、全く考えていなかった。

3キロ続く岬の町を目指して、進みそして、引き換えした。コク

ハの進む先には、森があつて何もない。岬の次に近い町は、僕の村で今帰ったら村中の笑い者だ。そして、直ぐさまに戦場行きだ。それこそゲームオーバーだ。

「ど、れ、に、し、よ、う、か、な、か、み、さ、ま、の、い、う、と、お、り」

別に行きたいところがない。それに、まだ食料と飲み水がある。そうとなれば、近くの村を指で指しながらそれが止まったところにした。

「よし、いや待てよ・・・」

最後に指が止まったのは、ここから一番遠いところになった。半径30キロもある地図の端から端までを横断する勢いだ。

「・・・」

「決まったカー？」

「一樣・・・」

いくら神様の言う通だといえ、さすがに1週間分の食料と3日分の水で約60キロを走破するきには、なれない。それに他にも町や村は、あった。

「ッ！」

何かの気配がした。

「いまさら気付いたカー」

コクハが、ここに戻って来たのがわかった。獣に追われてきたようだ。

「なに、何がきているの？」

「それは、まだわからないカーただ準備は、したほうがいいみたいカー」

僕は、GPSと地図を乱暴に鞆にしまつと腰から刃渡り40センチ近いナイフを取り出した。

「数は？」

「それくらい自分で見極めるカー」

「そんな〜先に見つけたのは、コクハなの？」

僕が、弱気になるのを見てコクハは、ため息をした。

「数は、5、匂いと声でここに来ている」

コクハの語尾に「カー」が、きえた。そろそろ来るのだらう。僕は、そんなことを考えながら気が抜けた。

「いつも通り、いつも通りにすれば大丈夫カー」

いつも通りは、どんな感じまだ僕は、まだ旅を初めて月日が、たつてないよ。言おうとして気を緩めた瞬間目の前の草が、僅かに動いた。

来る！と思い体が、固まった。目の前から大きな獣が飛び込んで来た。

「うわっ」

幸にも身を固めたときナイフを顔の位置まで上げて飛んで来た獣を勢いよく弾いた。

もしナイフで視界を防ぐように上げなければ今頃顔に獣傷がついていたかもしれない。

「また次が来るカー」

僕は、今弾き飛ばした獣を見るのをやめてすぐに突きさせるように構えた。すると次に来た獣が、慌てたように飛び込むのをやめた。次々に獣が草むらから出て来て足を止めた。そして、お互いに対峙してようやくその獣が、何なのかわかった。

「オオカミ！？」

「そのようカー」

僕は、オオカミに囲まれて動揺しているが、それに比べコクハは、冷静を保っていた。

「どうすればいい？コクハ……」

「どうすればいいって、逃げようにも追い掛けるから逃げ切れる相手ではないカー」

これで相手が、逃げてくれるか、倒すしか選択権がなくなった。

後ろには、ナイフで飛ばしたオオカミが、牙を出して威嚇した。
逃げ帰ることは、なさそうだ。

それ以前にオオカミに囲まれることが、珍しい。

「動物は、火に弱い。火の魔法だ！」

僕は、思い出したように口走った。

「あれか？あれをやるのか？やめておいたほうがいいカ！」

「今なら出来る気がする！！」

僕は、ナイフを腰の鞘にしまい、なにかを唱えた。途中で、コクハは、首を傾けたが僕には、気がつかなかった。

僕は、両手を前と後ろに開いて叫んだ。

「焼き尽くせ！」

空間が、僅かに歪み始めまだ、2月上旬で気温が、20度以下の気温が、勢いよく上がり始めた。

グルグルッ、グルグルッ、周りのオオカミが、一斉に唸り出した。
何かの違和感、感じたようだ。気温がみるみる上がり

「アツっっ」

周りの気温が下がり始めた。

「またカーだからやめとけと言ったカー」

「痛、ててて・・・」

両手にやけどの痣が、出来た。炎系の魔法をしようとして失敗した。以前にも同じことをしようとして失敗したことがある。

目の前のオオカミが、急に飛び込んで来た。

「ワ・・・！」

オオカミは、首を噛んで塞ごうとするのにたいして僕は、両手で押さえた。鋭い牙が、指に刺さり血がにじんだ。痛くて離れそうだが、そんなことをしたら首を塞がれてしまう。

「大丈夫カ！」

コクハは、慌てて僕を助けようとしたが他のオオカミに邪魔されて近づけない。

別のオオカミが、僕の足に噛み付いた。痛さで、叫んで手を離しそうになったが何とか持ちこたえた。

急にオオカミの噛む力が、弱まり離れた。その時、また噛み付いてくると思った瞬間！

「凍れ」

思わずつぶやいた。僕には、炎の魔法以外にもう一つの魔法が、使えたことを思い出した。

また、噛み付こうとしたオオカミの動きが、止まった。そして、力を無くしたように倒れた。頭には、2本の穴が開いていて、そこから勢いよく血がでてきた。

僕は、すぐに体を上げ2本の針みたいのを足に噛み付いているオオカミの首に刺した。急に何が起きたのかわからないオオカミは、痛みを感じながらはいずり回った。

「危なかった・・・ハアハア」

もう一つの力は、液体を一瞬に鋭い固体に変える魔法だ。オオカミが、離れた瞬間に手から流れる血を固体の2本の針に変えた。

「ぐわっ」

2匹のオオカミを倒して油断した瞬間に後ろから別のオオカミから首を噛まれた。その噛まれた勢いで僕は、地面に四つん這いになった。コクハは、別のオオカミと戦っていて助けてくれない。もうダメだ、食われるのかと感じた。

「動かないで！！」

女の人の声が、した途端背中になにか強烈ななにかが、通った。

それは、そのままコクハと残りの2匹のオオカミに飛んで行き、コクハの片羽とオオカミの耳と別のオオカミの尻尾を切り落とした。
「カアアアア」

コクハは、羽が切られた途端叫びながら飛び去った。尻尾と耳を切り落とされたオオカミ達も慌てて逃げ出した。

僕の首に噛み付いているオオカミは、今田に噛み付いたままだ。首筋になにか垂れていた汗ではない。ふと噛みつく力が弱くなって

来た。

「大丈夫？えいつ」

女の人が、僕の横で軽く蹴るとオオカミの顔がゴロンッと転がった。

「うわっ」

僕は、慌てて立ち上がると背中のおオカミの胴体が反対に現れた。

「・・・・・・」

思わず声を無くした。

「風で切り落としたのよ。でも惜しかったな。うまくすればあのしやべるカラスも落とせたのに」

動揺して何も話せない僕のためにいろいろ説明した。

「魔法？」

風で切り落とすなんて武器を、聞いたことがない。出来るとしたら空間を圧縮して送り出す風系統と称される魔法くらいだ。

「何でわかったの？」

女の人が、急に鋭い目付きに代わった。

「うっっ」

普通なら睨まれたら何かそわそわするものだが、僕は、急な眠気に襲われた。

「どうした？大丈夫？」

女の人声よりも怪我をしたコクハのことが、気になった。だが、それを上回る眠気にどうすることも出来ずに意識を失った。

3部 「ハイ・ノオウ 師と呼べる人」(後書き)

約1年ぶりの投稿です。

半年前の書いた内容を投稿します。

1年近く前にブログやめましたw

変な書き込み(出会い系)を毎日毎日消すのが面倒なので

あと、出会い系サイトが嫌いになりました。

しかしまあ書き込みするのも仕事なのかね

2部最後まで読みきった人が140人になりました。

(2009/04/22現在)

少年(僕)の旅をここまで付き合っていたいただきありがとうございます。

本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

と一応書いておきます。

それにしてもこんな旅話をここまでよく読んだなw
もし自分だったらまず読まないな(笑)

どんな人が読んでいるのか気になったりします。

3部 1幕 「出会い」(前書き)

失礼

3章序章と3章1部を入れ間違えました。

申し訳ないのですが、読み直してください(笑)

ミスは、誰にもあるということ。。

3部 1幕 「出会い」

「うっ！」

身震いがして目が覚めた。というよりトイレに行きたくて目が覚めた。

「ようやく起きた？ネボスケさん」

「ええはい」

状況が、あまり把握できないので辺りを見回した。

目の前の女性が、たき火でさっきまでオオカミだった肉を焼いていた。焦げないように骨についた肉を転がしている。空を見上げるとさっきまで暖かい太陽だったのが、詰めたい月に変わっていた。首筋に痛みが走り、思わず手を当てた。

首には、包帯のようなものが巻かれていた。

「あんま触らないでね。さっきオオカミに噛まれていたからキズグスリ塗ったから」

「・・・・・・」

僕は、包帯を触るのをやめた。手を離れたとたん手をなにか巻き付いているのが気になった。前の村で買った腕時計だ。時刻は、9時を指していた。

僕は、あることを思い出して跳び起きた。

「どうしたの？」

急に跳び起きた僕に女性が、少し驚いた。

「ト、トイレ」

僕は、それだけを言って茂みに入った。

「世話しないね」

女性は、そういいながら火の上の肉を転がした。

しばらくしてたき火で焼いている肉に誘われて僕が帰って来た。

「あつ、お帰り」

女性の声に思わず僕は、

「ただいま」

と思わず答えた。

「肉焼けたよ。味付けは、こしょうだけしかないけどいいかい？」

「は、はい」

言っている意味が、あまり出来ずに曖昧な返事をした。

そのことがわかつているのかどうかわからないまま、腰にある袋から少量のこしょうを肉にまぶした。

3部 1幕 「出会い」（後書き）

決して死んだり病気で書けなくなったわけではありません。

他に書いていたり、投稿用に書き直しているわけでもありません。

ただ、この旅を見続けることに飽きただけです。

今思えば、どこかの出版社に出しておけばなと後悔しています。

最後に気が向いたらこのネットのどこかでまた会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5651c/>

僕のたび 第1章 -I go alone-

2010年10月22日01時49分発行